

食戟のソーマ—愚才の料理人—

fukayu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠月学園。

この学校を卒業することは料理人にとって至上の名誉であり、その後の栄誉を約束されたも同じである。

そして、それは同時に入学することすら困難な料理絶対主義の少数精銳教育の中で高等部の3年間を生き抜くことを意味する。

これは幸平創真達^{きょく}玉の世代と呼ばれる第92期生と入れ違いでこの学園を卒業した一人の料理人の話。

注意) この物語は料理シーンが殆どありません。

番外編 食戟ファイターARC—V あらすじ

料理人達が極めた技術で競い合う食戟次元。

しかし、そこでは黒咲が大活躍していた!!

※番外編は前書きなどで書いているので気に入らない人は読み飛ばしてください。

宿泊研修 前編
目次

宿泊研修 前編	1																				
間違った居場所	1																				
第一の課題	1																				
公開処刑	1																				
浴場のソーマ	1																				
ラーメンは男のロマン	1																				
神の舌、不正案件	1																				
されど、火花は散りゆく	1																				
嵐の前触れ	1																				
男には意地がある	1																				
必敗の戦場へ	1																				
レギュムの魔術師ＶＳ魔女の後継者	1																				
模倣の天才	1																				
魔法は終わり、呪いが始まる	1																				
料理人としての役目	1																				
抑えられぬ思い	1																				
極の世代編	1																				
出会いは必然に	1																				
一番近くの天才	1																				
宣戦布告	1																				
全ては手の上で	1																				
遠月の怪物	1																				
たつた一つ必要な条件	1																				
創り上げるは至高のレシピ	1																				
128	119	113	109	101	96	87	80	74	68	63	54	48	43	38	32	27	21	16	11	6	1

二人の怪物	
渦巻く陰謀	
料理人としての責務	
苦渋の選択	
神の舌を持つもの	
戦う意味	
動き出す陰謀	
『F』の悲劇 開演	
『F』の悲劇 序章	
『F』の悲劇 来客	
『F』の悲劇 潜入	
『F』の悲劇 決意	
『F』の悲劇 宣戦布告	
『F』の悲劇 思惑	
お嬢様は効率厨 その一	
『F』の悲劇 戰場	
『F』の悲劇 強敵	
宿泊研修 後編	
夢の続きへ	
魔女の傷跡、女神の微笑み	
足りない卵は、あと何個？	

300 290 283 277 266 253 248 241 231 224 212 205 197 187 178 170 161 153 145 135

宿泊研修 前編

間違つた居場所

自分は何故ここにいるのか。

一体こんな場所に呼ばれる自分はなんなのか。
四六時中考えて、それでも答えは出なかつた。

『多忙の中、今回のために集まつてくれた遠月学園の卒業生たちだ』
壇上でマイクを持つて笑わないことで有名な講師シャペル氏が言葉を発する。

「卒業生!？」

「到達率一桁を勝ち抜いた天才たちイイイーーー!!!!」

改めて聞くとむちやくちやな確率に頭が痛くなる。

在籍していただけで料理人として泊がつくとはいえ、心を折られ料理の道を諦めたもの達にとつては箔ではなく『中卒』という重い学歴ハシマデが付く。

大広間でこちらを見上げる新一年生たちの羨望と憧れ、そして畏怖の視線が同じようにステージに並ぶ俺にも少なからず注ぎ、嫌な汗が背中を伝う。

この場にいるのは皆若いながらも食の第一線で活躍している精銳たち。

在学中は第一席で日本人で初めてフランス『プルスポール勲章』を受賞し、今もパリでフランス料理店「SHINO, S」を構える四宮さんを筆頭に、イタリア料理店「リストランテ エフ」の“かわいい”水原さん。細目の関森さん、壇上から降りて在校生をナンパし始めるドナートさんと日向子さんまで、解説役っぽいメガネの少年が丁寧に説明してくれる。

彼らは皆、料理人を志す者なら誰もが知っている程の有名人できつと現在その後を歩いている彼らにとつては紛れもない憧れなのだろう。

「本当、どうして俺ここにいるんだろう」

俺といえば彼らと比べれる事などおこがましい弱小料理人であり、去年なんとか卒業したものの結局定職にありつけてはいない。シヤベル先生の言つた『多忙の中』という条件も俺だけは満たしてないのだ。

「ふ、ちやけえりなちやんとかここにいる何人かにはもう抜かれてるんだろうなあ…………」

「なに弱気になつてんの？」

目に見えて落ち込んでいたのだろうか。

隣りで立っていた水原さんが小声で話しかけてくる。

「…………みさお 水原さんっ！俺ここにいる自信がないんですけども一応この学園を卒業したんだからもうちょっと自信を

の店で貫禄を見せてたよ」

多分、クールな水原さんなりの励ましだろう。

童顔でかわいくて在校生と並ぶと区別がつかないくらい背が低いが、俺よりも十年程人生経験豊富なこの先輩はこうやつて気を使ってくれる。

…………思い出すなあ 三年前のアタシ
めてもらつた後夜の厨房で

「そのような事実は一切ない」

冗談があまり通じないのもこのひとの特徴だった。

「ふう、ありがとうございます。この榊奴操、完全復活しました。ひいてはこの合宿が終わつたあと、「エフ」で雇つて――」

「操、今何件目だつけ?」

「…………」昨日、三つ目の職場を追い出されたところです

「（）もつともです……」

上げて、落とす。

きつと下の人間を育てることに必要なことだとは思うが、何も大切な後輩にまで使わなくていいと思う。

この年、六年間苦憎を共にした学び舎を巣立つたばかりの俺、榊奴操は合宿の講師という大役を仰せつかつた。

合宿の講師というとフリーの専門家やその学校専属の職人が務めるものだと思えるが、この遠月学園では代々卒業生がその役を担う。ある日届いた招待状に他の卒業生たちとは違い、自分の戦場を見つけられず割と暇だった俺は軽い気持ちでOKをした。

だが、講師用のバスに一步踏み込んだ瞬間にその甘い考えは一瞬にして吹き込んだ。

——そもそも、三年前自分達が合宿を受ける立場だつたとき俺のような新米がその席に一人でもいたんだろうか？

答えは、否だ。

あの時、必死に生き残った合宿で俺たちが少しでも比べられるような弱点を持っている講師は存在しなかった。

だからこそ、抗いようのない存在だつたこそ死に物狂いで食らいついていったのだ。この合宿に招待され、それを受けた人間は現役の学生が食らいつく隙を持つてゐるほど甘い人間ではない。そもそもが、一%の敗因すら想像し、確実に排除できるという自信を持った傑物たちなのだ。卒業一年やそこらでこの場に立つ資格を持つものなどそういうは存在しない。

「きっと、これは卒業後、ラブラブと過ごしてゐた俺への神様からの罰なんだ。ハツ、もしかしてこの合宿でミスつたら遠月の歴史から抹消されるとか？…………有り得る」

この学園の現総帥「薙切仙左衛門」は日本の料理界を牛耳る首領だ。もし、あの化物に睨まれでもしたら少なくともこの国で包丁を握ることすら許されなくなるだろう。

「嗚呼、どうすればアアアアアアア———!!」

「どうやら困っているようですね？」

「あ、あなたは日本料理店「霧のや」女将乾日向子さん！もう、担当生徒と一緒に試験会場へ向かつたはずでは!?」

「ふふ、これを忘れたのです」

日向子さんの手に握られていたのはコンビニで売っているような市販の柿の種。試験にでも使うんだろうか？

「榊奴くんは今年が初めてでしたね」

「は、はい」

若くに見えるが、これでも水原さんと同じ時代を生き、在学中は「霧の女帝」とまで言われた女傑だ。あの俺じや怖くて近づけない四宮さんにギヤグパートで絡むような人間であり、俺にとつてはそれだけで雲の上の存在である。

「緊張しているのですね？」

「ええ、まあ」

「私にもそういう時期がありました」

（すみませんが、全く想像できません！）

少なくとも俺の中でこの人は歴代の第一席である堂島さんや四宮さんと同レベルの偉人だ。そんな人間が緊張する場面などちょっと想像がつかない。

でも、嘘でもいい。俺一人じゃなかつたという言葉を聞けただけでさつきまでの萎縮していた感覚は消え、代わりに挑戦感に似た感情が生まれる。

「そうですね。俺もまだまだ若輩者。在学していた頃と比べれば三年のハンデをもらつてているようなものだと考えれば気が楽つてもんです」

「うん、いい顔になりましたね。では、これを」

「———これは？」

手渡されたのは一冊のノート。

手書きで「日向子日記」と書かれたそれはずつしりと重みがあつた。「前に私がこの合宿に参加した時のものです。走り書きでよければ榊

奴くんに差し上げますよ」

「そ、そんな、大事なものを!?」

「いいんですよ、少しでも役に立てば」

料理人にとって自分が得て素直に感じたものを書き留めておくメモはどんなレシピよりも重要なものだ。

それを困っている後輩にこんなにも簡単に渡すなんてやはりこの人只者じやない。

「…………わかりました。ただ、貰うだけでは忍びないのでなにかお礼はできないでしようか?」

「本ですか!? それじゃあ、恵さんの担当になるとになつたら私のことをよろしく言っておいてください!!」

「よろしく言う? そんな事でいいんですか?」

「恵さん」というのは確か開会式の時、日向子さん達がナンパしていた女の子だったと思う。遠月の卒業生であるこの人が目を掛けるほどの少女。確かにドナートさんも注目していましたし、そんなすごい料理人が今年の一年生にいるのか?

「…………わかりました」

正直言つて怖い。

こんな時期から彼らに注目されるような新世代の料理人の担当なんでしたくない。

「それではよろしくお願ひしますよ。また今夜」

「はい。日向子さんもお気を付けて…………」

どつと、疲れがたまつた身体を動かしそろそろ試験会場に向かう事にする。

ここからが地獄だ。毎年、怪物というのはこの時期から既に頭角を現している。えりなちゃん然り、アリスちゃん然り、葉山くん然りだ。せめてこういったメンバーと先程話題に出た「恵さん」とやらとだけは同じ組み合わせにはなりたくないものだ。

「それにしても、今夜? 確か初日の今日は夜の行事はなかつたはずだけど…………俺の居た時と変わったのかなあ? あとで予定表確認しよう」

第一の課題

この宿泊研修の課題は最終日以外講師役となつた卒業生達に全て一任されている。

ここ、遠月リゾートは普通に泊まろうとすれば俺なんかではとてもじゃないが手が出ないほど高い。

が、今日この日に限れば殆どタダ同然で満喫することができる。食材費も全て遠月が賄ってくれるという最高の環境で来るこの場所は学生時代に来た時とは百八十度違つて見えた。

あの時は生き残るので必死だったなあ、と思い起こしながらあの青春時代に出来なかつたことをやり返すため、荷物に水着や浮き輪を入れたりして浮かれていた。

あわよくば水原さんや日向子さん達と水着デート等も出来るかと思ひ、ここ数日体を鍛えたりもした。

さて、もう一度言おう。

この宿泊研修では課題の全ては講師達に一任されて~~いる~~いる。
(食材注文するの忘れたああああああああああああああ!!!!)

浮かれすぎていたのだ。

氣を抜き過ぎていたのだ。

自分の課題会場に入つて、あれ食材がまだ届いてないなあ、などと小首を傾げ講師用に配られたマニュアルを見直した所、「課題に必要なものは事前に申告せよ」との記載を発見した。

「こういう行事はいつも参加する側だつたからなあおやつの金額くらいしか確認したことなかつた……」

「あのう」

「え?」

遠慮しがちに一緒にこの会場までやつてきた生徒が話しかけてくる。

気付けば他の生徒も皆自分が何をすればいいのかわからない様子だつた。

無理もない。

課題をやりに来たというのにそこに食材もなければ調理器具ですら必要最低限しかないので。

不安にもなるだろう。

実際、俺だつて不安だ。

(どうする?このまま今日はオリエンテーションです。みんなでお話ししよう。とでも言つてみるか?料理人としての心構えを聞けばそれっぽく――ダメだ。どう考えたつて無職の俺が一番ふわふわしてる!)

この課題は遠月の名を背負う由緒正しいものだ。

講師は生徒たちを実際のスタッフだと思い接し、料理人としての裁量がなければ独断で退学にすることもできる。もし、そんな重大な課題を何も準備してなかつたからなんて言つて有耶無耶にすれば――

(殺される。四宮さんに――「レギュムの魔術師」に殺され
るうううううう!!!)

必死にこの状況を生き残る術を探す。

(そうだ!日向子さんの日記!!!)

先程託されたアレを使うときがどうやら來たようだ。

手書きで記された膨大な情報の中から彼女が課題を取り仕切った時の記述を探し出す。

「あつた!」

人間の集中力は窮地において輝くものだ。

遠月で培つたそれは伊達ではない。お目当てのページを探し出し、希望を込めてゆっくりとその中身を読み込む。

『こここの食材はどれもおいしかつたです』

「ツ、ただの感想じやねえかあああああああ!!!!」

その時、俺の中で本当の窮地に陥つた時はちゃんと自分の力で解決できるようにするか日向子さんじやなく水原さんや堂島さんに頼むことにしてようと決まつた。

まずは手始めだ。

この状況をどうにかしてやろう。

「…………みなさああん」

「「「つひ!」」

突如として発狂し出して日記のようなものにツッコミを入れだした情緒不安定気味な講師の不気味な笑みに生徒達の何人かは腰を抜かす。

「見ての通りここには食材がありません。ですが、ここは仮にも遠月が誇る高級リゾート。食材や器具などいくらでも転がっています。そして、食の世界は食うか食われるか。…………後はわかりますね？制限時間は今から三時間。どこからでもいい、食材を誰かから奪つてでも自分の信じる料理を完成させろオオオオ!!!」

「「「はいいイイイイイ!!!!」」

生徒達が一斉に教室から飛び出していく。

その恐ろしい剣幕はリゾート内に響き渡り、きっと他の組や客に迷惑だろうなどと思いながらひとまず去つた危機に対し安堵する。

「…………凄いな。これが若さか」

誰もいなくなつた教室でこの後どうしようかと日向子日記に再び目を通す。

「相変わらず無茶をしますね。榊奴先輩」

「アレ、まだ残つてる生徒が…………つて、秘書子ちゃん!?」

「緋沙子です。新戸緋沙子」

学園総帥の孫娘にして現遠月第十席薙切えりなの秘書を務める少女がそこにいた。

少女は何事もなかつたかのように調理に入つており、鼻覚を刺激するような香りが既に立ち上つていた。

「漢方類ならいくらか手持ちがあつたので、その他はこの部屋の中にあつたものを少々――――

「この部屋にあつたもの?」

言われて氣づく。

貸し与えられた部屋がただの調理室ではないことに。

他の生徒たちやほかならぬ講師である俺ですら見落としていたこ

とだが、普通に落ち着いて考えれば引き出しに調味料はあるし、それらは一般家庭にあるようなものではなく、高級ホテルに相応しい選び抜かれた一品だ。

調味料など職人の腕しだいで善し悪はどうにでもなるというが、いいものを使うに越したことはない。そして、この部屋にはそのいいものが大量にある。これらと少しの食材があれば一流の職人ならば舌を唸らせるほどの作品を作り出せるだろう。

(えりなちゃんがえりなちやんだから只者ではないと思つていたけど、やつぱり遠月を背負うにふさわしい料理人だつたわけか)

一応在学中は彼女たちは中等部にいたのだけれど、神の舌ゴッドタンを持つえりなちゃんはその時点で高等部にも出入りしていて知り合う機会もいくつかあつた。その隣をいつもついて歩いていた彼女が凡才なはずはない。

「うん。秘書子ちゃん文句なしで合格!!」

「だから、緋沙子です」

出来上がった料理も非常に美味しかつた。きっと彼女はいいお嫁さんになる。

講師用の評価用紙にその手の旨を書き、満足げに次の生徒を待つ。この様子なら他の生徒たちも十分期待できるだろう。

「はい、申し訳ありませんでした!!」

三時間後、大量に掛かってきたお怒りの電話に対応する俺がいた。
何でも他の組に食材を求め、強奪しに侵入した生徒が複数いたらし
い。

うん、そりやそうだよね。

講師の言葉が絶対なこの状況で奪つてでも料理を作れなんて言つ
たらそうするよね。でも、君たちの料理、美味しかったZE。

改めて、この合宿での自身の立場の重みを理解する。そして、今後
の自分の立場を心配し、死にそうになりながら帰路に着いた。

公開処刑

すつかり忘れていたことがある。

今日の晩の予定がないと言っていたが、あれは嘘だ。

どうやら最終日の記憶がキツ過ぎて頭から抜け落ちていたらしい。この宿泊研修には遠月学園の関係者その他に様々な来賓が招かれており、彼らの夕食作りも生徒たちの仕事の一つだ。

本日は規定のメニューを腹ペこのスポーツマン五十人分。

そして、この課題に何故か俺も参加していた。

「あの、先輩方？この光景三年前にも見た気がするのですが？」

「私達には別メニューでよろしく」

「久々だな。あの時よりどれだけ成長したか見せてもらおう」

見張り役の水原さんと関守さんに睨まれながら、昼の課題の罰として強制参加することになつた俺はいよいよ持つてダメかもしれない。この二人を唸らせるような料理を五十食片手に作れというのが無理な話だ。

それも、この学生たちの中でである。

「あのー、やっぱりやめにしませんか？こんな見せしめみたいな事」

「今更何を言つてるの？」

「期待しているぞ？」

遠巻きに注目される中の提案はいとも容易く跳ね除けられる。

課題の件は結果的に生徒たちの料理に対する執念をはかるもの等と誤魔化し、事実アリスちゃんの付き人の黒木場くん等は非常に高評価を残したので俺の準備不足に対する呵責は無かつたものの、実際の被害を被つた先輩達の目は笑つていなかつた。

オーダーはステーキ定食五十食分とイタリア料理と寿司から各一品。後半になるにつれて鬼畜になつていてるようで、そもそも何故この二人は自分の得意料理を作らせようというのか。

「俺、こういうメニューに無い料理作るのが一番苦手なんですけど

……」

「口を動かしていないで手を動かせ!!」

関守さんのキツい活が入る。水原さんは水原さんで後ろの方で間に合わなかつたら片付け等と呟いており、恐ろしい。

(確か今年の参加人数六百人くらいだつけ…………しんだな、これ)

生と死の境目について今一度論じたい。

どこまでが生きていて、どこからが死んでいるのか。

身体が動き、意識があるということなら今俺は生きている。

だが、未来への希望が見いだせず「とりあえず」と呟く事がクセに貼っているこの人間は死に体だ。

先達からの執拗な新人いびり^{いびり}を潜り抜け、既にこの合宿に参加している中でもひと握りの最上位陣が調理を終え、次々と自由行動に入つていく中、この課題が文句や愚痴を言つても一向に終わらないことを実体験として身に染みている俺は遠月卒業生という僅かばかりに残つたプライドを振り絞り、上位陣よりは早くこなし終わつた。

先輩方も鬼ではなかつたので残りの生徒の監督を引き受けてくれ、一足早い自由を得ることはできた。

「生き残ると聞こえはいいが、この状況で遠月学園名物『食戟』

なんぞ挑まれたらリングに立つことすら困難だぞつて、こんな場所で食戟なんか挑む奴も受ける奴もいるわけないかっ！！…………はあ、

一人でボケて一人でツッコムのは虚しいな。もう、年かな？」

遠月で過ごす高等部の三年というのは体感時間にして一瞬と言えるのはごく一部の人間だけであり、俺のような凡人からしてみれば生きている間に死後の地獄めぐりを済ませてしまつたくらいの疲労感があつた。

まあ、地獄を巡った分経験にはなつたわけでこうしていま自分が学生時代得た経験を元にとある場所に向かつて直進中である。

「あ、秘書子ちゃんだ。昼ぶりだね？」

「紺沙子です。随分とお疲れのようですね」

「まあーね」

進行上に出現した美少女についてい声をかけてしまふ。

本来時間的余裕はあまりないが、リゾートに来ている筈なのに食事は各自で自炊というこの半サバイバル空間ではこういつた出会いは大切にしたほうがいい。特にこの場にいるということは彼女も既にあの課題を終えた紛れもない猛者であることを表している。

難切えりなの側近なだけあつて彼女の実力も既に一年生でも上位に達している。あの程度の課題は別段問題ないようだ。

彼女が手にしているトランプやUNO等のこういつた行事でお馴染みのパーティゲームを見る限り、今さつき終わつたどころの話ではないだろう。そして、そのどれもが二人以上でやれるものである以上既に彼女の主も課題を終え——————つと、これは当たり前か。

実力のあるものはこの合宿を楽しむだけの余裕を持ち、それが伴わないものは寝る間すら与えられずいつ退学になるかもしれない地獄の中へと突き進む事になる。それがこの遠月の恐ろしい部分だ。

「相変わらずえりなちゃんとにくすねえ。自分だつて疲れているだろうに」

「この程度で普段の業務を疎かにするレベルではえりな様の秘書は務まりません」

高校生で既に自分の仕事に責任を持つてゐる。現在無職の俺とは

真逆な程の责任感を持つ彼女はきっとこの合宿では脱落することはないだろう。

「…………因みに、こここのフロントでは頬み込めば花火セットまで貸してもらえる」

「——本当にですか!?」

「経験済みだからね。多分、えりなちゃん家の行事や十傑の仕事とかでこういつた友達と一緒に外泊する行事は殆ど初めてだろうから、火傷しない程度に火遊びするといい。さつき関森さんも言つていただろう？」課題が終わつたものから各自自由行動だつてな」

「……………」応お礼は言つておきます」

「あはは、（やつぱり微妙に嫌われてるなー）」
俺と彼女の主は何かと気が合わないらしい。

凡人でありますながら遠用を卒業した俺と天才

凡人でありながら遠月を卒業した俺と天才だからこそ1年生のこの時期で既に遠月十傑である彼女では話もあまり合わない。それでも、一応後輩なので積極的に話しかけに話つてはいるのだが中々上手くいかずじまい。そうなれば側近の秘書子ちゃんからの印象が優れないのも無理はない。

「一応今のは昼間のお礼つてことでえりなちゃんには内緒で頼むね。多分俺の名前出したら不機嫌になるから」

「わかつて います
(わかつてるんだ!?)」

少々引っかかる部分はあるが、実は彼女の得意とする薬膳料理には非常にお世話になった。課題を出した手前、出てきた料理を食べないわけにも行かない立場では受け持つた生徒の数十作り直しの分を結局試食したので最初に食べた彼女の料理がなければここまで元気で

はないだろう。

「ありがとうございます」

彼女と別れながらふと、ひとつ不安が思い浮かぶ。

薙切れりなは確かに料理に関しては天才だ。火の扱いに関しても文句はないだろう。だが、

「流石に、ベランダとかで花火はやらないよな？いくら箱入り娘でも
——いや、考えるのはやめよう。今は心と体の洗濯だ！」

浴場のソーマ

もう四捨五入すれば二十年近く生きてきたが、現実にサービスシーンなんてものは存在しない。

実際にそんな場面に出会える確率など殆ど無いし、夢を探しに出なければ普通に通報される。この世に男たちが求めた楽園などはなく、辛い現実と向き合つていかなければいけない。

そう、この遠月においてそんな期待をする余裕などありはしないのだ。よつて大浴場の前で赤と青に分かれている入口の内、迷わず青へと足を進める。

あの五十食の課題が終われば解放された若人たちが続々集まつてくるわけだが、この時間まで掛かっている彼らがこの楽園に気づくまでが勝負だ。人間死ぬ気になれば限界を超えることができる。しかし、その限界を超えるには制限時間ギリギリまで粘らねばならず、そうした人間は精氣を失った屍の如く命の湯へと突進してくる。そうなればリフレッシュ^{休_タ息}どころではなく、リセッショウが必要な状況へと瞬く間に追い込まれることだろう。

何を隠そう俺が三年前この地獄を生き残れたのもこの事実にいち早く気づけたからに他ならない。

「流石に先客が居るか…………」

大浴場と称されるだけあつて脱衣所には先に進んだものの痕跡があり、若干の出遅れ感が否めない。そこら辺は秘書子ちゃんとお話を来たことによる精神的な癒しでなんとか譲歩することにしよう。先輩方は可愛くても怖いのでああいつた癒やしにはなりにくいのが難点だ。

服を脱ぎ、備え付けられていたタオルを腰に巻いて大浴場への扉に手を掛ける。

「なん、だ？」

そして、ここに来てようやく違和感に気づく。

日頃から背筋が凍るような思いはしているが、今回のものはもつと深刻な何かだと、料理人としてではなく男として、動物的な本能が必

死に呼びかけてくる。

——その扉を開けてはナラナイ。後悔したくなケレバ、
すぐに部屋へモドレ。

俺の頭の中で何かが必死に警鐘を鳴らしている。

怯えよりもこの先にあるものに対するどうしようもないほどの危機感を俺は確かに知っていた。

「——、この感覺は三年前と同じ——つ!?」

ずっと記憶のそこに封印した何かがこの奥にある。失ったものを取り戻すことは難しい。だが、どうしてだ俺の体よ。取り戻さなくてもいいものもあると俺は思うぞ?だから、どうして取つ手から手を離さずに開けようとしているんだ?

全く、こういう時ばかり少年の心が蘇つて困る。

諦めながら開いた扉の先にいたのは——。

堂島銀。
遠月学園第69期卒業生にして、遠月リゾート総料理長兼取締役会役員。

在学時は「遠月十傑評議会」の第一席であり、卒業試験を歴代最高得点で突破した正真正銘の傑物。

「むつ、来たか」

「だから、そんなサービスシーンはいらねえええええって言つてんだろ!!!」

扉の先で待ち構えていたのは桜色に火照った美女――では無く、鬼剃りの筋骨隆々の男が一糸纏わぬ姿で待ち構えていた。

「榊奴か。ここで会うのは三年ぶりだな」

「アンタ毎年こんな事してるのか!! クソ、マトモに視ちまつた……折角記憶から消してたのに」

「本来なら生徒たちが来る前に上がる予定だつたのだがな。どうやら、先発とはここで語り合^{クビ}うジンクスでも出来つつあるようだ」

恥じる場所など何一つないというようにタオル一つ巻かずに豪快に笑う堂島さん。

「語り合うつて…………俺の時は記憶が消えるくらいのトラウマが生まれただけでしたけど」

「だが、去年の一色くんは最初こそ驚いていたが、すぐに順応したぞ？」

「一色くんねえ…………」

二つ下の後輩の顔を思い浮かべる。

脱ぎ癖のある奴で気付いたら輝一丁になつてゐるような男での飄々とした態度ならばそう言う事もあるだろう。

そして、残念な事に今年もこの不条理な状況に巻き込まれ順応してしまつた猛者が居るらしい。

堂島さんと共に浴槽に入つてゐる少年。確かに最初の時に四宮さんがダサいとかで退学^{クビ}にした非常にかわいそうな犠牲者の隣にいたはずだ。

赤い髪と眉の近くの傷が特徴という所か。期間中に担当になる可能性もあるので一応知り合つた相手の特徴くらいは頭に叩き込んでおく。

彼は湯船に入つてきた俺を温かく迎え入れてくれ、手を差し出してくる。

「幸平創真っす」

「ああ、榊奴操だよ。よろしく、創真くん」

互いに立ち上がりつて握手を交わす。

年の近い料理人の新たな出会いに堂島さんもご満悦のようで力強

く領いている。

…………場所が場所なだけに仕方のない事だと思うが、裸の男たちが握手を交わしている場面とは客観的に見なくてもむさ苦しい。先程の秘書子ちゃんとの会話による癒しパワーが無ければむせ死んでいたところだ。

「榊奴先輩も遠月の卒業生なんすよね？」

「ん？まあ、一応はね」

現在この遠月リゾートに来ている他の方々と同格にされると世知辛いものがあるが、別に間違っている訳では無いので創真君の質問を肯定する。

「じゃあ、手っ取り早く十傑の人と食戦をする方法とか知りません?」「ごほつ!?

出てきた言葉に思わず浴槽の湯を飲み込んでしまう。

一体何を言い出すのだこの少年は。冗談か何かだと思ったが、その眼差しは真剣そのものでまだ見ぬ強敵との戦いにワクワクしている様子だ。

「堂島さん。この子何なんですか?」

「向上心が強いようでな。ある種無謀ではあるが、どうやら勘と運はいいらしい。そうだろう?」

「…………創真君さ、一応聞くけどこんな質問他の卒業生にはしてないよね?」

「そうですね。まだ他の人にはこうやつて話す機会が無いんで」

(この眼は機会さえあれば聞く気満々っていう眼だ)

闘志が燃え盛っているようなその眼を見て、即座に危険だと察知する。

こういう輩と関わると碌な事にならないという経験則からの確かな心当たりがある。

「堂島さん。助けてくださいー」

「すまんな。そろそろ後続が来る頃合いだ。俺はそろそろ上がらせてもらう」

「見捨てるんですか? 可愛い後輩を!」

「明日は遅れんようにな！」

必死の呼び止めにも変わらず、堂島さんはさつさと湯船から上がつてしまい、同時に脱衣所から新たな来訪者が現れる。

「幸平あ、ここにいたのか！」

「クソ、また鬭争心？き出しの奴が来やがった！ここは安息の地では無かつたのか！」

ラーメンは男の口マン

食戦。

遠月学園における特殊且つ絶対的な決闘制度であらゆる争いを料理によつて決めるという遠月の少數精銳教育の最たるものである。

食戦によつて決まつた事項は絶対であり、互いに掛けた「対価」は勝者へ全て差し出される。料理人としての地位や権限を掛けていき、最終的には数人にそれらが集中していく様は無数の石ころの中から一粒の玉を見つけ出す遠月の理念の象徴とも言えるだろう。

「誰にもバレていしないな？」

「大丈夫だと思いますけど。なんでこんな事になつてているか説明してもらつてもいいですか？」

既に大浴場から上がつた俺は創真君と後から来たタクミ・アルディー二くんとその弟のイサミ・アルディー二君を引き連れ、夜の遠月リゾートから脱出を図つていた。

「だから、ラーメン奢つてやるからさつきの話は無かつたことにしてくれつて言つているだろ!?」

食戦というのは兎に角面倒だ。

食戦を実施するためには「正式な勝負であることを証明する認定員」「奇数名の判定者」「対戦者両名の勝負条件に関する合意」等などが必要になつてくる。

認定員なんてのは本当に不思議だが、呼べばどこからでも生えてくるように現れるので大した問題にはならないが、現在の立場上俺が判定員として選ばれることも考えられる。そうなれば、当然他の判定員も卒業生の中から選ばれるわけで食戦の原因の一端が俺だなんてバレればリンクにされる。特にシャペル先生のいるこの研修期間では絶対に起こしたくない案件だ。

「兄ちゃん、なんで僕たちこんなところにいるの？」

「知らん！だが、幸平が行く以上オレが行かない訳にはいかない。抜け駆けされるかも知れないからな！」

大きい黒髪の方が弟で、金髪の創真君にあからさまなライバル意識

を飛ばしている方が兄のようだ。タクミくんは顔立ちも整つていてモテそうだけど、同じくらい馬鹿そうだね。

「で、なんでラーメンなんすか？」

「なんだよわからないのか？宿泊研修と言えばホテルを抜け出してラーメンってのは昔からの定番だろう」

「兄ちゃん、日本の文化つて変なんだね。ホテルにも食事するところはあるのにわざわざ歩いてこんなところまで来るなんて」

「大体俺たちは料理人だ。夕食くらいは自分たちで作ればいい」

「ツフ、所詮イタリア育ちのガキか。この行動の重要性に気付かないとは」

「聞き捨てなりませんね。それはオレ達兄弟だけじやなく、俺達が背負う「トラットリア・アルディーニ」に対する侮辱と言う事ですか？」

「あ、いや…………違うよ？そこまで大げさなものじやない。お店の名前とか看板とかそういうシャレにならるのは現在無職のお兄さんには効果抜群だから。就活中の身としてはそういうのは聞きたくないから——」

可能性は低いとは言え、将来的にもしそこでお世話になるかもしれないときに今の会話は失言として何らかの形で残っている可能性はゼロじやない。実はそんな可能性すら氣にするほどデリケートな時期で、特に店とか権力にはとことん弱い人間なのだ。

それにもしても、国が違うだけで土地勘の無い地をチャルメラの音を頼りにラーメンを求め歩くというロマンがわからないというのは実際に寂しい事だ。同じ日本人の創真君なら分かつてくれるよね？

「やつぱり、こういう時に食べるラーメンはうまいなあ」

やつとの事で砂漠の中にオアシスの如く、遠月の敷地内を横断する屋台を見つけた俺達は今日一日の疲れと空腹を癒していた。

「悔しいが、美味しいな」

「なんだよ、タクミ。お前自分で作るんじゃなかつたのか？」

「う、うるさい！」こういう事も経験だ。必ず今日得たものでお前と決着をつけてやるからな！」

「ぶぶぶ、兄ちゃん。幸平も一緒に食べてる時点で多分差になつていいよ？」

どうやら、後輩たちも満足してくれたみたいだ。

ロマンを追い求めた先にある御馳走は美味しく感じるものだが、遠月リゾートの敷地内で商売するだけあつてこの店も相当腕がいい。ちよつと狭い事が難点で、勇実君の身体が半分くらい屋台から飛び出しているが、詰めると必然的に反対側にいる俺が完全に屋台から追い出される形になるので彼には申し訳ないが黙つておこう。

どうやら、アルディー二兄弟と創真くんは何れ食戦を交わす約束をするほどのライバル関係らしく、少々タクミくんが空回りしている印象があるが互いに高め合つていけるようないい関係だと思う。学生時代そう言つた相手が居なかつた俺からすれば非常に羨ましい限りだ。

「さて、食べ終わつたことだしそろそろ戻るか」「どこへ戻るつてえ？」

「いや、勿論ホテルにだよ。帰りも見つからないようにね。一応ここまでの外出は禁止なんだから」

「ほうほう、研修中の後輩を連れ出してラーメンとは随分偉くなつた

みたいだなア?」

「へ?」

突如として顔面を容赦なく蹴られる。

一体何が起こつたのか理解できないまま延々と小さい足で踏まれ
続け、ようやく自分が何者かに襲撃されたのだと気付く。

「ごほつ!」、この容赦のない連撃————まさか、「

「折角スケジュールに空きが出来て夜からでも来てみたら、まさかこんなことになつてはなア?どうやら、調教のやり直しが必要みた
いだゼ」

「つ、角崎先輩……」

角崎タキ。

遠月学園第88期卒業生——つまりは、俺の一つ上の先輩にして
スペイン料理店『タキ・マリアージュ』という自分の城を既に手に入
れている成功者である。

在学時には十傑第二席という地位についていたので当然この場に
呼ばれていたはずだが、都合が着かず欠席だと聞いていたが、俺の
眼が正しければ何故か今ここにいて現在進行形で調教という名のシ
ゴキを加えてきてる。

「つたく、三年前のお前の様子を園果から聞いていてよかつたぜ。偶

にはあの無駄な脂肪も役に立つ！」

「いやー、これはですね？自分にとつて、ひいては他の卒業生の方々にとつての面倒事を有耶無耶にする為に必要な投資でしてね？別に俺が遊びたいからってわけじゃ――――

「ああ、いいよ。わかつてゐるわかつてる。お前の性格はよくわかつてる。頭じやなくて身体に教えて欲しいんだよな？」

「いや、それ全然わかつてない！というかタキちゃん、その言い方なんかエロイ！」

タクミくん達が啞然とする中、小柄な少女による折檻は続く。因みに創真くんは屋台のおじさんにスープの事で気になる事でもあつたのか熱心に質問をしている。向上心がある事はいいことだが、出来ればそろそろ助けてほしい。

「お前らも何見てんだ？この私が来たからには明日以降はさらに厳しくなると思え。最も、こんなところでサボつているようじや、もうこの時点で退学かも知れねえけどな」

「お言葉ですが、オレ達はこの宿泊研修を只生き残るために來てゐるんじやない。自分の糧にするためなら一見どんな無意味そうなことでこなすのが俺達兄弟だ」

た、タクミくん――――!!無意味そうなのは余計だけど、ありがとう。君の事は忘れないよ。でも、ひとつ言うとこのヒト、水原さんとか自分が上と認めた相手以外には基本的に噛みつくんだ。

それから先、明日から参加予定という事で角崎先輩はオレ達をリ

ゾートの近くまで引きずつてくるとあいさつ回りに出かけてしまった。

俺はと言えば、半泣きのタクミくんを慰めつつ、後ろで爆笑するイサミくんと何か新メニューでも思いついたのか満面の笑みの創真くんと共に満腹感と引き換えたものの痛みに耐えながら帰路に就くのだった。

神の舌、不正案件

ラーメンを食いに行つたら、なんか小さくて氣性の荒い先輩にボコられた。

今夜の出来事を簡単にまとめればこうなるのだが、実はこの夜に起きた出来事はこれで終わりではない。

「酷い目にあつた。タクミくん達はホテルの近くまで来るとすぐ帰つちやうし、身体は痛いし——」

「で、どうやつたら十傑の人とやり合えんの？ 何ならさつきの角崎タキ先輩だつけ？ あの人でもいいぜ？」

「——なんか後輩は急にフランクになつてさつきより無茶苦茶な事言いだすし」

向上心があるところはいいことだと思うのだが、流石に相手を選ぶべきだと思う。先の角崎先輩とて在校中は第二席まで上り詰めたスペイン料理の申し子だ。口は悪いが、それは実力の裏付けでもあり、実際問題彼女と食戦をやれば俺を含め相当数の料理人は勝つどころかストレート負けにしないことすら困難だろう。

「そもそも、創真くんが理解しているかどうか怪しいから説明するけど、食戦には双方が納得する対価が必要なんだよ。学生時代ならいざ知らず、卒業生相手にやらかすなら相応のリスクを負う必要がある。だつて、君にとつての大切なものが相手にとつて同じくらい魅力的かなんて聞かれると大体の場合違うしね」

「じゃあ、先輩ならどうすりや受けてくれんの？」

「俺!? え、まさか俺まで君の獲物の中に入つてんの？ ラーメン奢つてあげたのに？」

「それは、それ。これは、これつて事で」

全く恐ろしい後輩だ。

しかし、改めてそう言われるとこの少年と勝負して得られるであろうものに魅力的なものは何があるだろうか？

学生時代、それなりの回数の食戦はこなしたとはいえ、自分から挑もうと思つた頃はあまり無いし受けたとしても常勝というわけでも

なかつた。あくまで卒業に必要な部分は勝利していただけであり、他の卒業生と比べると負けの経験は多いと思われる。

決して他を寄せ付けないような実力ではなく、敗北するリスクを常に負っていた状態でも食戟を受けた理由はなんだろうか？

「…………今から言うことは例え話だから聞き逃してね？」

「例え話？」

「もし、挑戦者から食戟を挑まれる側に受ける理由がない状態でどうしても食戟に持ち込まなければいけない状況に陥った場合。食戟でしか逆転不可能な窮地に追い込まれた場合は挑発してみるといい。…………その後に自分の覚悟を示せば多分、相手は受ける。」

この方法は相手と自分の差が大きいほど有効だ。

料理人という生き物は実力や地位が上がるほどプライドが際限なく増大していく。それはそのステージに至るためにそれだけの努力を積み重ねてきた証であり、明らかに自分よりも劣る道筋しか歩いていられない相手に侮辱されれば正常な判断が出来なくなるほどに料理への誇りは高い。

「要は、どんなやり方であれ挑発して買わせたら勝ちつていう喧嘩師の流儀だが、もしどうしようもなくなつたら将来使うといい。ただ、挑発する時は一度自分にも当てはめてみてね？」

一体全体自分がどうしてこんな事を言っているのかもはや理解出来無い。

こんな事彼に教えたことで俺にとつては百害あって一利なしだし、どうかしているとしか思えない。

「大博打は生きてる者の特権、か」

昔、尊敬していた人が言つた言葉を思い出す。

俺つて色々影響されやすい人間だから、創真くんの生き方も有りかと無意識のうちに思つていたのかもしれないな。

「たまには、こう言う近くで見る花火もいいものね」

「流石です、えりな様！料理だけではなく、花火を持つている瞬間すら絵になる姿……！感服です！」

「どうかしら、緋沙子。私はこの線香花火というものを克服しました！いいですか、先程はまだ慣れていなかつただけです。決してこういう物だと知らなかつたわけではありません！」

「流石です、えりな様！どんな事柄でも勝者であろうという意志……！感服です！」

ホテルの玄関付近で予想はしていたとはいえ、二人組の珍客？を発見する。

うん、やつぱり浴衣姿の女の子が花火をやつてるのはいいものだね。例え、ここが地獄の合宿所としても心が癒される。

俺も学生時代には明日も早いから寝たいと宣う木久知を連れ出し、どちらが集中力が上か線香花火片手に朝方まで修練に励んだ記憶がある。次の日は辛かつたが、こういう行事つて基本寝ないものだろ？

「よう、薙切じやん！さつきぶりか？」

「ゆ、幸平くん！？どうしてここに！それに一緒にいるのは——」

「あ、久しぶりえりなちゃん。元気してた？」

先に創真くんが話しかけに行つてしまつたので仕方なく、本つつつ当に仕方なく話しかけることにする。

「…………何故、講師役であるアナタが彼と一緒にいるのですか？」

「俺としては君が創真くんと知り合いな事の方が、驚きだけどね。言っちゃなんだけど、普通に火と油だろ？君たち」

「別に知り合いというわけではありません。彼の編入試験の時、私が担当だつただけです」

〔編入試験〕

言われた言葉を頭の中で反芻する。

遠月学園は中高一貫性で殆どの生徒が中学の時から食についての知識と技術を学んだ者達だ。子供の物事に対する吸収速度から過ご

した環境によつて例え才能は同じでもかなりの差ができると言われる通り、遠月で幼い頃から過ごした者と余所からやつて来る者ではレベルというよりランクが違う。

つい最近まで実家の定食屋を手伝つていたと言つていた創真くんはやはり編入組だったというわけか。

三年の差がある状況での編入というのは非常に難しく、彼のような人間は珍しい部類に入る。

そして、なにより、

「へー、じゃ、あのえりなちゃんが認めるほどの料理を出したってわけか」

目の前の少女、薙切えりなには神の舌ゴッドタンと呼ばれる絶対的な味覚がある。

完全実力社会の遠月の編入試験は筆記などよりも実技が優先されるはすだから彼がここにいるということはその舌を喰らせるものを作出したということだ。

「あ、それは――――！」

「いやー、俺もいけると思つたんだけどさー。ダメだつたみたいでさ」「どゆこと？」

えりなちゃんが何かを言う前に創真くんが頭を搔きながら笑う。

「高等部の編入試験くらいなら遠月十傑評議会の活動範囲の範疇だつたと思うけど…………内容にしたつてえりなちゃんが居れば他の試験管なんていらないはずだし」

「でも俺コイツに直接不合格つて言われたぜ？途中まで美味しそうに食べてたのに」

神の舌ゴッドタンに判定間違はない。

薙切えりなノーといえば誰も逆らうことが出来ないほどの強制力を持つてゐる。だが、創真くんの話が正しいとすればおかしな事になつてくる。

「参考までに何作つたか教えてくれる？」

「ふりかけご飯だけど」

「ふりかけ？ふりかけつてあのふりかけ？」

「そうだよ。テーマは確か卵を使った料理だったよな、雑切」
「…………知りません！」

創真くんの問いかけにそっぽを向くえりなちゃん。

もし、本当に合格レベルに達していなかつた場合当然ここに創真くんはない。しかし、この宿泊研修一日目を生き残り、あまつさえあの堂島銀に期待を寄せられるような料理人がたかだか編入試験で落とされるとは考えにくい。

と、なると。

「あれあれー？えりなちゃんもしかしてー」

「え、えりな様は正しい判断を下されました！それは一緒にいた私が証明します！」

「秘書子ちゃん…………」

主を庇うように秘書子ちゃんが前に出る。

素晴らしい忠義心にお兄さんも感動なのだ。でも、君のご主人様さつきから動搖して持つてた線香花火落としてるんだけど…………。

されど、火花は散りゆく

薙切えりなという少女と初めて会つたのは確かお互に中等部と高等部に入つたばかりの事だつた。

遠月学園総帥の孫娘であり、天から与えられた神の舌を持つたこの少女は正しく食の神に愛された存在であり、自身が置かれた環境と才覚から来るプライドの高さからごく当たり前のように学園から孤立していた。

世界有数の食の学園とはいゝ、別に聖人君子を養成しているわけではない。思春期真つ盛りの学生たちが彼女の生まれや才能、更には美貌にまで嫉妬するのはある意味では当然かも知れない。

当時、中等部に進級したばかりであり、まだ薙切えりなという怪物の恐ろしさが知れ渡つていなかつた時期に俺は彼女と運命的な出会いをする。が、ここでは割愛しよう。ただ、あれ以上に恐ろしい思いをしたのは後にも先にもないとだけ言つておこう。

「えりなちゃん、もしかして…………」

「わ、私は遠月第十席として正しい判断をしました！」

「でも、美味しかつたんでしょう？」

「いいえ、あいんなふりかけご飯は遠月に相応しくありません」

「いや、それ否定になつてないし――。つていうか、えりなちゃ
んつてプライドが高すぎて素直になれないタイプだよねー」

「なつ!？」

秘書子から余つた線香花火を貰い、約四十五度に傾けながら火をつける。

先端に付けられた火薬が小さな火の玉になり、やがて弾けるように火花を飛ばし出す。

「線香花火はいいよね。心が落ち着く」

「話はまだ終わつていません！私の判断が間違つていると思われるの
は癪です！」

「いやいや、いいよ。そんな事この火花を見たらどうでもよくなつて
きた」

「まさか、私の話よりもそんなものが大切だと？」

「ほう、俺の前でこれをそんなものの呼ばわりするか」

火花を散らす玉が落ちないよう、違う意味でこちらに火花を散らすえりなちゃんに向き直る。

そういえばさつき、線香花火をマスターしたとか言っていたな……。

「君は、線香花火が何のためにあるか知っているのか？」

「娯楽でしよう？ 最も本来私たち料理人には関係ないのですが」「はたしてそうかな？」

「？」

どうやら彼女には教えてやらなければならぬようだ。
現実の厳しさというものを――。

「元々この線香花火には料理に通ずるものがある」

牡丹、松葉、柳、散り菊と名付けられた燃え方の順を説明しながら、不可解そうな顔をするえりなちゃんに新しいものを渡す。

「極限まで神経を研ぎ澄ませ、肉体と精神を一体と化さなければ消える直前の最後の輝きである散り菊には辿り着けない。だが、俺達料理人は元来その域に到達することを一つの目標にしている節がある。つまりは、遠月の料理人の頂点である十傑の面々は当然その域に――散り菊に到達していることになる」

「あ、あの何を言つてゐるんですか!?」

「秘書子ちゃん。頂点に立つものには同じくらいの者同士でしか成り立たない話というものがある。これはそういう話なんだ。わかるね？」

「い、いえですが――そんな話聞いたことも」

「いいから、君は創真くんと普通の花火でもやつていてくれ」

普段なら秘書子ちゃんの話なら例え調理中でも耳をから向けるが、こと線香花火については譲ることは出来無い。

それだけ、俺とえりなちゃんには重要な話だつた。

「いいかい、一流の料理人ならばこの程度のこと造作もないんだ。事実、君は先程散り菊に到達していた！だが、高々気を紛らわせたくらいで柳にも至らない状態で火花を落とすとは少し抜けているんじやないのかな？」

「…………話はわかりました。どうやら、少々甘く見ていたようですね。つまりは、これは私に対する挑戦だと――？」

現在手のついてない花火を各々一つずつ持っている状態で、えりなちゃんはそれを俺からの挑戦と受け取つたようだ。

「いやいや、流石にそんな事はしないよ。初心者に対して、挑戦だなんてそれじゃ余りにも”大人げない”」

「いいでしよう。その挑発、薙切への挑戦として認めましょ。さあ、火を付けなさい。私を馬鹿にしたこと公開させてあげます！」

(うわー、やっぱチョロイなあ、この娘)

料理に関係したことならば老若男女全て跪かせるカリスマ性を發揮するものの、それ以外は非常に初心だ。

ステータスを一方向に極振りしすぎているというか、本当薙切の人つてどうしてこう極端なんだろ？

「どうしました？何なら私が先に火を付けても構いませんよ？」

「いやいや、そこは一応先輩だから譲れないよ。――どっちにしたつて負けるつもりはないしね」

先程から秘書子ちゃんが凄い形相で睨んできて一緒に普通の手持ち花火をしている創真くんに凄い精度で火花が命中しているが、その程度で地区花火大会二連覇中であり、学生時代に新作料理の研究と称

して趣味で花火師の免許まで取った俺の集中力が途切れるることはない。

(フフフ、さあ見せてもらおうか！現遠月第十席の実力とやらを！)

「またえりな様に余計なことを吹き込んで！」

「おーい、花火は人に向けて遊んじゃダメって教わらなかつたのか？」

「うるさい！幸平創真、大体お前があの人を連れてきたから――――

!!」

薙切れりなの秘書子こと新戸緋沙子は普段からは考えられない主の姿に頭を悩ませる。

勿論、どんな状況であれ常に勝者であろうとするその姿は感服するばかりだが、今回は少々相手が悪い。現在えりなど面と向かっているあの遠月の卒業生は料理は勿論ある程度のことならジャンルを問わず卒なく熟す究極の器用貧乏だ。

料理ならば兎も角、こういった遊びについては緋沙子の知る限り右に出るものはいない。

「なあ、薙切れの様子が俺が知っているのと結構違うと思うんだけど、先輩と何かあったのか？」

「…………まさかとは思うが、本当に何も知らずに連れてきたのか？」

「いや、偶々知り合つて食戯でも挑めないかなあ、と」

呆れた。

初めて会つた時から思つていたが、この男の神経はどこか壊れてい
るのではないか？遠月に通う学生にとつてこの学園の卒業生は憧れ
の象徴だ。その一人と知り合つただけという理由でこんな時間まで
行動を共にして尚且つ食戦を挑もうとしていたとは。

「いいか、幸平創真。あの人———榊奴操の在学時の渾名は
栄光の落日、魔女の後継者と呼ばれた元遠月十傑評議会第十席。
つまりは、えりな様の前任者だ！」

おまけ

「あ、リヨウくん。えりなと秘書子がいるわ。それにあれはミーくん
かしら」

「…………みたいですね」

「もう、どれだけ探してもいなと思つたらこんなところにいるなんて！何してゐのかしら？」

「花火、ですかね」

雑切アリスと黒木場リョウ。

えりなや創真達と同じくこの宿泊研修の参加者である彼らはたまたま通りがかつた廊下で階下にいるえりな達を発見する。

「花火？花火は空に上がるものでしよう？」

「金持ちのお嬢にはそうでしようけど、俺達にとつてはあつちが花火です」

「ふうん、でもなんか地味ね」

赤髪の少年と秘書子が持つてある手持ちの花火はまだ華やかさがわかる。

が、えりなと講師役として呼ばれたとある卒業生がしゃがみながら行つてゐるそれはあまりに華がなかつた。

しとやかさよりも派手さを求めるアリスにとつては複数あると思われる花火の中から何故あれを選んだのかは理解しがたいものだつた。

「でも、これはチャンスね！あの我侭なえりながあんなもので満足しているんですもの。私がもつと派手なものを選べば自慢できるわ！」

「行くんですか？」

「いいえ、もう遅いわ。外でやるのはやめましょう！」

「じゃあ、どこでやるんです？」

「馬鹿ね！火なら厨房に行けばあるじゃない！」

嵐の前触れ

「クソ、眠イ」

睡眠を殆ど取っていない寝ぼけ眼で新しい服に袖を通す。

結局あの後、線香花火対決の最中えりなちゃんが調理中にも見たことがないほどの謎の集中力でゾーンに突入し、互いに一步も譲らず対決は朝方近くまで続いた。

使用できる花火がないことに気づいた時には秘書子ちゃんと創真くんはその場で眠つてしまつており、仕方なく今回の対戦はドローにする他無くなつてしまつた。

「流石、現十席。まさか花火対決で俺に並ぶとはな」

次はけん玉か金魚すくいか。

在学中に取つた資格はまだまだあり、適当に料理に必要な事とでも言えば今回引き分けたこともあり、あの負けず嫌いの少女は簡単に乗つてくるだろう。最近現八席の久我くん対策に公式ジャッジの資格を取ろうとしているカードゲームでもいいかもしれない。

「さ、榊奴シエフ！」

次の作戦を考えていると遠くから遠月リゾートのスタッフと思われる女性が走つてくる。

普段呼ばれることがないのでこの“シエフ”という呼び方は何かと歯がゆいものがあるが、言われて嫌な気分になるものでもない。「何ですか？」一応昨日のうちに使う食材とレシピは伝えたはずですが……

「そ、それがですね——」

「よし、レシピは行き渡つたな！」

「すみませーん、こつちまだまわつてきてませーん」

「はいはいはい、ちょっと待つてねえ!!!」

片手を上げた生徒のところへと数枚に印刷された今回の課題のレシピを届ける。

パエジヤ——日本でも比較的おなじみのパエリアでトマトが味のベースのスペイン風の焼き込みご飯だ。但し、当然ただのパエリアではなく所々でスペイン料理の達人である角崎タキ風のアレンジが加えられている。

「お前等にはこれから二時間以内に私が満足するモノを作つてもらう！」

「――三時間ですよ。一応それくらいの時間は余裕あるでしょ、というかそれくらいないとこの人数を捌ききれないし」

「ハ、時間内に試食させることも出来無い時点でこの遠月でやついくことは出来ないね!!」

現在この厨房には角崎先輩ことタキちゃんと、俺が今日受け持つ筈だつた生徒が集結している。

今回の課題用に与えられた部屋だが、流石にこの人数を収容し切る程のスペースはなく課題用のレシピすら満足に回りきらないほどだ。
「はあ、試食は一応俺も受け持つんで出来次第持つてきてください」
隣りでタキちゃんが何か言つているが、人数が多いせいできく聞き

取れないことにしておこう。そのうち直接攻撃を仕掛けてくるが、在学中に対策として、流れる水が如き『静』の鼓動で攻撃を受け流す「流水制空圏」を会得しているので三時間程度なら防ぎきる自信がある。

(まさか使おうとしていた厨房が夜中に原因不明のボヤ騒ぎで使えないくなるとはな。運び込んでた食材もなんか燻製みたいになつてて使い物にならないし、タキちゃんの所に混せてもらつたはいいけど人使いが荒いし。あーあ、水原さんか日向子さんのどこが良かつたなあ)
「……オイ、何か言つたか？」

ギロリ、と少女がしていい様なものではない三白眼が俺の身体を蛇に睨まれたネズミのように固定する。

「い、いえ、ナンデモゴザイマセン」

前言撤回、「流水制空権」でも五分と持たないかもしね。

まさか、眼力だけで卒業後の実力の上がり幅が見えないほど圧倒されるとは——やはり、天才か。

「ダメだな、ご飯にトマトの味がしつかり染みてない。もう時間もねえし、クビ退学——」

「ちよつと、待つたあああああ!!まだ時間あるから!二〇分くらいあるから!」

今まさに生徒に対し死の宣告を行おうとしていた毒舌少女の持つていた料理を横から搔つ攫い一気に喉奥へとかき込む。

「うつぶ。た、確かにちょっと合格点には足りないけどいい線いつて
るよ！あまり時間はないけどもう一度作り直してみて…………」

「は、はい！」

もはや詰め込む場所のない胃袋は今にも爆発しそうになるが、必死
に耐えながら生徒を優しく追い返す。

「——— オイ、これで何回目だ？」

「別に折角ホテル側が多めに食材を用意してくれたんだし、制限時間
内ならチャンスは与えるべきだと思うだけ、だけ、ど…………うわ、
吐きそう」

「———を仕切つてんのは私だ！」

「それを言うなら俺も副料理長くらいの権限はあると思うぜ？」

同じ遠月の卒業生だが、やはり意見が食い違うときはトコトンまで
食い違う。

遠月のレベルを知っているからこそ、角崎タキはそのレベルに見合
わないものをふるい落とそうとする。

遠月のある種の理不尽さを知っているからこそ、俺は出来うる限り
のチャンスを与えてやりたい。

「一応、出来た料理は残さず食べてるわけだし。タキちゃんの相手
じやなく俺の相手ということにすれば問題ないはずだろ？あ、でもた
くさん食べないとタキちゃんも大きくなれないかあ

「今どこ見ていった？今どこ見て言いやがったあああああああ！！」

「ツフ、あの頃の俺と同じだと思うなよ？」

昨日は遅れを取つたが、面と向かつての勝負なら充分こちらに分が
ある。

(さあ、若人たちよ。今のうちに調理するのだ！そして出来ることな
らもう誰も脱落せずこの研修を———)

わかりきつていたことだつた。

例年大量の退学者が出るこの合宿において、都合がよく全員が乗り切れるという保証などどこにもない。

だが、それはあまりにあつさりと告げられた。

一瞬何を言つているのかわからないほど平坦な声で、理解するのに時間がかかる。しかし、どれだけ時間をかけても告げられた事実は変わらない。

「田所恵、^{クビ}退学だ」

「え、」

泣いてしまえばいいのか、憤ればいいのか。それすらわからないまま膝が崩れ落ちる。

諦めずら浮かばない程の喪失感が体を突き抜け、気付けば視界が涙で覆い尽くされていた。

(やつぱり私なんかじや、ダメだつたんだ)

「納得いかないっすね」

だからその声が聞こえた時、正直に言えば安心した。

また、あの人が助けてくれる、とそう思つてしまつた私にすぐに嫌悪感が募る。

ダメ、ここで巻き込んでしまつたら――。

「食戟――。食戟であんたを負かしたら、田所の退学取り消してもらいます。俺が負けたら当然^{クビ}退学にしてもらつて結構です。――

――それと、俺が勝つたらあなたの店の名前「SHINO, SKITCHIN」にしてもらいますから!」

(ダメ、創真くん! つて、あれ? 最期おかしな言葉が聞こえたような――

――)

男には意地がある

結局あのあと数度リバースしかけるのを耐え、なんとか全員課題を通過させることに成功した。

タキちゃんは心底不満そうだったが、自分にも他人にも厳しいだけで別に悪い人間ではないので今度夢の国辺りにでも連れて行つてやれば機嫌は治るだろう。

生徒の何人かから、胃薬をもらつたが未だ整わない体調で不吉な噂を耳にする。

「食戟？」

「そう！おもしろそうじゃない!?」

どうやら、何処かのグループで発生した事件を聞きつけたらしいアリスちゃんが実に楽しそうに話してくれる。

難切アリス。

えりなちゃんと同じ『難切』でりながら性格は真逆でえりなちゃんが負けず嫌いの子供であるとすれば、アリスちゃんは楽しいことが大好きな子供。つまりは、比較的絡みやすい方だ。

午後の課題が終わり、生徒達が使つた食器や道具をホテルのスタッフ達と片付けつつ、片手間で余つた食材でまかないを彼らに振舞つていたときにやつてきた彼女は自らの得意分野である最新の調理機器というより科学の実験で使うと言つたほうが信憑性のありそうな機器を取り出した時は流石に何をやつているのかわからなかつたが、終わつてみればその場にいた全員にその素晴らしい料理の腕を披露していた。

どうしてイキナリそんな事をしたのかは検討は付かないが、初めて会つた時からこういう部分のある子だつたので気になつたら負けだ。悪意や敵意がないだけマシだと考えよう。

「でもなあ、噂で聞いた話じゃその食戟つてのは非公式のものなんだろう？そんなもののシャベル先生にバレたら――――考えるだけで恐ろしい！」

誰だか知らないが、合宿中に行うほど体力が有り余つてゐるならア

リスちゃんのよう手伝いをしてもらいたいものだ。

「でも、気にならない？」

「いいや、気にならないね。大体、食戦つてのにはいい思い出がないんだ。精々、気になるとしても明日の課題に集中できないくらいだ！」
「…………それって十分気になってるって事じゃ無いんすか？」

アリスちゃんと一緒に来た黒木場くんから辛辣なツッコミは断じて認めるわけにはいかなかつた。だつて、食戦が行われるのを知つていて報告しないと俺もシャペル先生にこつてり絞られちゃうじやん。豆乳を絞り尽くして出来たおからみたいになつてしまふ。

「どうか、今日はテンション低いというかダウナー気味なんだね？」
「ああ、リョウくんはいつもこうよ？料理の時以外はねつ！」

アリスちゃんの話を聞いて納得する。
いるよね、そういう子。

えりなちゃんとはまた違つた形の料理に全振りタイプだ。

「ま、確かに対岸の火は自分に関係ないからこそ多少は気になるわけで、この地獄の合宿でそんな醉狂な真似をする輩には多少は興味あるかな？」

「もう、ミーくんは素直じゃないのね。気になるなら最初から言えばいいのに!!」

「その呼び方はやめてくれ……」

「いいじやない！減るものでもないし。知り合い同士は碎けた呼び名を使つたほうが好印象なのよ？」

「え、それ誰に対する？」

まさか、君の一族の誰かじやないよね？全く事実無根なのに変な勘違いされて酷い目には合いたくないよ！

大体、そういう事なら君も従姉妹であるえりなちゃんを“えりちゃん”とでも呼んでみろつて話だ。あの子なら、絶対挑発されてると思ふから。

「それに、関係ないつて昨日一緒にいたじやない」

「何が？」

「えつと。その食戦を挑んだのは幸平とかいう奴ですね」

前言撤回。

思いつきり、聞き覚えのある名前だった。

ホテル遠月離宮の別館。

ここは今回の合宿で使用されないはずの場所、地下への階段を下りた先の厨房は部外者の立ち入りを拒むようにその扉を閉めていた。隙間から漏れるかすかな光がなかに誰かがいることを感じながらゆっくりと扉を開く。

「むつ」

室内に入りました飛び込んできたのは、既にここに来るまでの足音で俺の存在に気づいていたのか堂島さんの鋭い視線。そして、なぜか椅子に縛り付けられている日向子さんに既にテーブルの上に乗せられた二皿を食し終わっている三人の先輩シェフ。

食戦を行っていたと思われる四宮先輩と田所さんと創真くんは状況から調理はもう終わっていたのだろう。

「よくここがわかつたな」

「あれだけ噂になっていたのに上層部に知られないように情報規制が掛けられていてめぼしいシェフ達が全員行方不明となれば流石に気づきますよ。後は、犯罪心理学などを利用して使っていない厨房でも可能性の高い場所を当たつただけの事。日本のプロファイリング

技術をあまり舐めないほうがいいですよ?」

「…………お前、本当に料理人か?」

普段はどんな状況でも落ち着いている堂島さんの若干の引き顔を横目になしながら、テーブルの両端に置かれた片方に三枚のコインが乗せられているコインを見る。

「なんだ、お前も来たのか」

「――四宮さん」

食戦を行つた一人、四宮小次郎はまるで何事もなかつたかのように笑みを浮かべる。

既に勝敗は決定した。いや、そもそもそんな事は最初から問題ではない。この食戦において最初からこれ以外のエンターテイningなど存在しなかつた。

「悪いな、来るとわかつてればお前の分くらい用意してやつたのに」「いや、いいです。さて、と。創真くん、言い忘れたけど十傑って大体の人が料理の天才なんだよ?しかも、一番厄介な努力する天才で元第一席に挑むとはなかなか無茶したね?」

四宮さんを軽くスルーし、表面上は負けたことに納得しているような創真くんに話しかける。

「ま。大体の事情はここに来るまでに聞いているし、そこまで責める気はないけど…………いや、本当凄いね。俺ならそう簡単に誰かを守るために覚悟なんて決められないわ」

「あ、あの――――創真くんは悪くないんです!だから、」

「田所さんだね?言いたいことはわかるけど、これは非公式とは言え食戦だろ?判定を覆すことはできないし、無理に押し通したつてここにいるのはこの合宿の講師たちだ。この状況で明日からの課題を生き残ることは難しいだろう。それに、ね」

創真くんの頭に手を乗せる。

その身体に触れてみて初めてわかる。悔しさと憤りで小刻みに震えるその身。それらは全て未熟な自分に向けられているくせに後悔はない。本当、初めて会った時の印象通りの少年だ。

「男の子つてのは女の子を守るときは喜々として行動するくせに、そ

の逆は嫌がるんだ。面倒な生き物だろ?」

だから、あとは任せろ。

「四宮さん。ここに現在フランス近辺にいると思われる俺の知り合い
計百人程の名簿があります。政治家から映画監督、スポーツ選手は勿
論。^{デュエリスト}決闘者からストリートファイターまで各界で影響力のある人物
たちです」

—— 体どうしたんだ？ それ

「はい、これが俺の対価です。求めるのは、そうですねえ。今の食戦の判定のやり直し。これは勝敗に関係なくやつてもらいたい。ま、流石にストレート負けってなんなら諦めますが」

「いやね、ここまで言つたら日本人なら流石にわかると思うんですねが、外国暮らしが長いとこうなのかな? つまり、」

す

「俺と食戟してくださいって、言つてるんですよ。おしゃれメガネ」

必敗の戦場へ

「全く、今日は懐かしい言葉を何回も聞くな」

「受けてくれますか？」

「ま、そこのガキよりは魅力的な提案だな。たつた數十分でそれだけの客が手に入るなら、受けないほうがおかしい」

四宮さんの態度は変わらず。

先程よりは多少勝負になるだろうが、勝敗は揺るぎないと完全に直感している。

それはそうだろう。

一応同じ元十傑とは言え、第一席と第十席だ。その差は間に挟まる八人という数以上に広い。

「勝てるとは思ってはいませんよ。俺は精々第十席の座を高々“二年間”守り続ける事で限界だつた。“上”を目指せなかつた人間が卒業したからつて頂点に叶うはずが無い。だから、一応俺が勝てば創真くんの目的である田所さんの退学の取り消しを求めますが、ハンデは貰いたい」

「判定のやり直しだつけか？別に構わねえよ。何度もやつたつて同じだ。料理を作る時間がもつたといいほどにな」

「いえ、別に食戟をやり直せつて言つているわけじゃない。ただ、お三方にこの食戟が終わつた後四宮さんと田所さん、どちらが作った料理が魅力的だつたか。改めて判定してもらえればいい」

「…………どういうことだ？まさかこいつらが同情で票を入れ直すとでも思つているのか？」

料理人として、先輩として後輩達の判定を否定されたと感じたのか四宮さんの視線が鋭くなる。

でも、残念ながらここで引くわけにはいかない。

「さあ？でも料理人なら、皿で語るものでしよう？」

「フン、いいだろう」

先輩に対しても非常に失礼な物言いだが、この食戟に関しては全力と行かないまでも完全なナメラをされても困るので調子に乗つた格下

を潰すくらいの感覚で来てもらわなければいけない。

「あ、あの！」

「ん、恵さ――――つ、田所さんだつたかな？」

「はい！あの、どうして四宮さんに食戦を――――

当然の疑問だろう。

絶体絶命のピンチに全く接点のない先輩が突然自分の為に強敵に立ち向かってくれた。

改めて彼女の視点から考えるどこの都合主義もいいところだが、自分から「私の為に――――」とは言わない奥ゆかしさは好感に価するよ。日向子さんやドナートさんが気に入るだけのことはある。

「ま、ひとつはそこで縛られている日向子さんに君によろしくって言われてたことかな。君が知らぬ間に理不尽な理由で退学してたら気分が悪いだろ？後は、そこの創真くんがラーメン奢つてあげたのにその借りを返される前に勝手に学園からいなくななりそうだつたから咄嗟についてのもあるかも――――

「そ、それだけですか？」

「それだけとは酷いな。これでもあの怖い四宮^{先輩}さんに勇気を振り絞つたのに。時期的にも被つてないから殆ど絡んだことなかつたんだぜ？」

「す、すみません！でも、」

『言いたいことはわかる。

それでも、それ以上は彼女の口から言わせてはならない。

「これは俺からの投資だ。君は勘違いしているようだけど創真くんは勿論、田所さんも遠月の未来には必要な才能だよ？少なくとも俺はそういう思っているから…………。そんな大切な芽をここで潰すわけにはいかない」

「榊奴さん――――

「お礼も謝罪も創真くんに言うんだね。彼がいなければ俺はここに来ていないし、第一俺は別にこの食戦に彼ほどのものは賭けてない。基本的にギャンブルは向いてないらしくてね、万が一負けても知り合いに連絡を掛けるだけでいい。…………問題は携帯を持つてない連中

が多すぎるってことだけど

この戦いは必敗の食戟。

四宮さんと俺と料理人としても社会人としても十年の差がある。それは容易に埋めることはできないし、才能の差的に俺では一生使っても追い抜くことは不可能だろう。

「それでも、まずは一時的にも追い付かないよね。田所さん、課題で使つたつていうレシピってまだ持つてる？」

「え？」

凡人が天才に追い付くにはそれ相応の切り札が必要になる。まずはそれを用意することにしよう。

『才能ですか？』

様々な花が咲き乱れるいつもの庭園で、俺はあの人の言葉に首をかしげる。

『そうですよ。みーくんはもう少し自分の才能を誇ったほうがいいんです』

『…………センパイがそう言うなら俺はそうしますけど、実際この学園には俺なんかよりも才能のある奴なんて山ほどいますよ？』

実際問題、秋の選抜で予選落ちした俺には他人に言われるまでもな

くよくわかっていることだつた。

上には上がいる。

凡人が一生を使って辿り着く場所は天才にとつての通過点でしかない。

凡人必死に努力して九十八点を取つたとしても、天才は用意に百二十点を叩き出してくるのだ。そんな相手の存在を知つて誇れるほど俺の心は強くない。

『それでも、です！みーくんにはみーくんの才能がある。実際、私はそれで助けられますし。人間生きてる内は日々ギヤンブルですよ？』

『このお嬢様、無茶苦茶を言いやがる…………』

この庭園で日傘を差しながら優雅に紅茶を飲むだけで絵になるような外見の癖に無類の賭け好きとは、俺や木久知、タキちゃんと言う灰汁の強いメンバーを束ねるだけある。

『私は信じてますよ。みーくんの才能を。だから、みーくんはその才能を極めればいいんです。その結果、誰がなんと言おうと私だけは貴方の味方です』

不意に、その柔らかな両手で手を包まれて身体が熱くなる。そのまま耳まで赤くなりそうになり、もうすぐ木久知がここにやつてくることを思い出し焦る。

いつもはこちらがからかう側だが、最近身体のどこか一部が急成長中のあのほんわかにこの光景が見つかれば強烈な反撃に見舞われるだろう。

『わかりましたよ。でも、俺は自分より才能がある奴を見つけたらそつちを優先しますからね』

『ええ、それでこそ私のみーくんです！』

『全く、この人たらしの魔女は――』

「レディースエーンジエントルメーン！今宵集まつて下さつた皆様にはこれより『レギュムの魔術師』四宮小次郎様と私『魔女の後継者』こと榊奴操の世紀の食戟決闘^{バトル}をご覧に入れます」

「わあーい!!」

「——これは、乾様。声援感謝致します。尚、不肖^{わたくし}私にはもう一つ忌名がございますが、この場でに相応しくないものですのでご了承願います！」

地下に位置する暗い厨房に二筋の光が差し、俺と四宮さんの双方を照らす。

四宮さんのそれは舞台で挨拶するある種の役者のように、俺は張り合つてもしようがないのでサークスに出てくるピエロでも演じることにする。

「この食戟は先程と同じく、この堂島銀が預からせてもらう！」
「堂島先輩、ありがとうございます！これで何かあつても心置きなく先輩の名前を出して逃れられますね！」

「うむ、存分にやるといい」

堂島さんの宣言により最後にして最大の憂いはなくなつた。

後は、この食戟に己の魂をかけるだけだ。

「四宮さん、手は抜かないでくださいね？」

「当たり前だ。俺も同じ道を歩いてきた後輩にそこまで失礼な真似はしねえよ」

「安心しました、それでは声を揃えてえ
決闘！！！」

レギュムの魔術師ＶＳ魔女の後継者

遠月学園地獄の宿泊研修も二日目の予定を終了し、早くも三桁にも及ぶ脱落者を出した頃。一年生ながら遠月十傑が十席に位置する天才——薙切りなど行動と共にしていた新戸緋沙子は主の体調に気を配りながら自室への道を歩いていた。

「えりな様、今日は早めにお休みになられた方がよろしいかと」

「そう、ね。昨日は少し体力を使いすぎました」

無論、えりな様が疲れているのは合宿の日程ゆえ——等ではない。緋沙子にとつては油断ならない課題も多いが、彼女にとつてこの程度の合宿のどちら辺に脱落する要素があるのか疑うレベルとの事だ。

えりなが、そして緋沙子自身が焦燥しているのは昨夜課題後に行つたとある勝負事のせいである。

(結局あの男の口車に乗せられて一睡も出来なかつた。これでは私が何のためにえりな様の体調管理まで任せられているのかわからん!) 実際には緋沙子の方は睡魔に耐え切れず一時睡眠を取つてしまつたのだが、えりな様の方はとある困つた先人のせいで本当に睡眠が殆ど取れていない。

「あ、いたいたく、やつほー秘書子!」

「こ、この声は——」

今この状況で最も現れてはいけない声に動搖する。

最近なぜか『秘書子』呼びが定着しだした緋沙子だが、ここまでハツキリと言つてくる人物には数える程しか憶えはない。その殆ど全てがこの状況では絶対に出会いたくない存在だが、彼女はその中でも特大級の地雷だつた。

「……アリス様、何度も申し上げるようですが、私は秘書子ではありません。緋沙子です」

「えー、秘書子は秘書子じゃない! あ、それよりもえりな!」
マズイ。

今の疲弊している主に彼女という劇物を近づけてはならない。

「アリス様！」

アリス様を引き止めようとする緋沙子の前にアリス様と共に歩いた黒木場リヨウが立ちふさがる。

「下がれよ」

「番犬風情が、貴様こそそこのどけ！」

同じ難切の従者同士、引けない戦いというのがある。

緋沙子と黒木場の間に火花が飛ぶ。体格差はあるものの従者としての気位では負けるつもりはなかつた。

「…………緋沙子、いいわ。——さてと、アリス、どうしたの？」

「えりな、ミーくん知らない？」

ミーくん？

ペットの名前だろうか？

「誰？」

当然の疑問をえりな様も持つたようだ。

アリスお嬢様は感情に素直に生き過ぎてゐる為いつも言葉が足りない。そういつた所ではやはりえりな様が一番だと改めて緋沙子は認識する。

「あー、確か榊奴操つて野郎です」

「つぶ!!」

黒木場の説明に思わず吹き出す。

全く持つて似合わない。昨夜えりな様と並々ならぬ気迫で一粒の火球を制して いた男を思い出す。

「そうよ。『みさお』でミーくん。せりかお姉様もよくそう呼んでいたわ」

「…………まあいいでしょう。アリスお嬢様はどうしてあの方を探しているのですか？」

「だつて昨日一緒にいたじゃない！」

「——へ？」

再びおかしな声が出る。

まさか、見られて いた？ 昨日のあの光景を？

「お嬢——それ以上は止しといた方がいいんじや」

「え、そう？あー、そうね。それはここでは重要な事ではないわ！私はえりなに会いに来ればミーくんを捕まえられると思ったのよ！」

「捕まえるつて、そんな虫みたいな扱いは流石にかわいそんなんじゃ

——

「いいのよ。別に怒りはしないわ」

「それはそうでしようけど」

遠月の卒業生である榎奴は比較的温厚というか事勿れ主義なことがある。他人をからかいはするが、逆をされても決して感情が爆発しないというかそもそも紺沙子やアリスお嬢様では喧嘩相手などには見られていなかろう。

「うーん、でも貴女達が知らないとなるとやっぱリアツチに行つたのかしら？ま、それならそれでいいか！」

「アツチ？何を言つて——

「秘書子には関係ないことよ！それよりえりな。ミーくんの代わりに私と遊びましょ？」

あつ、と声が漏れそうになる。

アリスお嬢様はえりな様の地雷を踏む事にかけては右に出るものはないほどの人間だが、今回のものは紺沙子でなくともマズイと気づくものだつた。

「…………今、私があの男の代わりと言つたのですか？アリス」

「え、ええ。どうしたの、えりな。顔色が悪いわよ？」

あのアリスお嬢様が怯えている！

当然だ。紺沙子ですらここまで怒り心頭になつたえりな様を見たのは数える程しか無い。それはつまり、今の言葉が史上稀に見るレベルの超えてはならない一線だつたことを示す。

「いいでしよう。一体私が何の代わりなのか聞いてあげます！」

「よ、よくわからないけどやる気のようね！今回はこれよ！古今東西のローカルルールを集めた大富豪に王様ゲームの要素を足した新感覚ゲーム！その名も——なんだつたかしら、リヨウくん？」

「…………あの野郎はハイパー大富豪とか言つてましたね」

「そう、それよ！」

こういう時この二人の物怖じのしなさにはある種の尊敬すら憶える。

「わかりました。ルールを教えなさい。誰が真の女王か教えて差し上げます！」

「ま、待つてください！えりな様、その勝負を受けてしまえば下手をするとまた徹夜になってしまいます！」

「勝てばいいのです。それともあなたは私が負けるとでも？」

違う、そうじやない。

二人の口ぶりから言つてこのゲームを考案した人物が緋沙子の想像通りだとすれば一度や二度勝敗が決したところで終わるとは思えない。そもそも、勝敗がつくのかも怪しい代物だ。

「…………随分と弱気なんだな」

「なにつ!?」

「仮にも秘書なんだから主人より率先して危険に飛び込むべきなんじゃねえのか？」

「言わせておけば！」

黒木場の言葉に緋沙子の雑切えりなお付としてのプライドにビビが入る。

「そこまで言うならば受けて立つ！但し、結果は最初からえりな様がトップで私が一番だ！」

「――最初から勝つ気のねえ奴がよく言うぜ。ぶつ潰されるのがどちらか、教えてやるよ！」

臨戦態勢に入つた緋沙子に対し、黒木場も氣だるげな雰囲気から一変バンダナを頭に巻き全てを食い殺さんと狂犬モードへ移行する。

「どうやら人數は揃つたようね。アリス、最初に言つておくけど私は手加減しませんからね？」

「勿論よ。これでミーくんとせりかお姉様がいれば完璧だけど、今は仕方ないわ！さ、始めましょう？」

今ここに雑切えりなど新戸緋沙子の地獄の宿泊研修での二徹が確定した。

「そうだ、まだこの食戟のテーマを決めてなかつたですね。通例通りだと挑まれた側に決定権がありますが——」

「俺はさつきのと同じでいいと思うぜ？ 丁度材料も揃っていることだしな」

四宮さんの視線が食材置き場に注がれる。

レギュムの魔術師の戦場とだけあつて野菜関係は豊富でフランス料理らしく肉類も充実している。これだけの食材があれば余程無茶なものを作ろうと思わない限り新たに用意が必要なものはないだろう。

第一、食戟には「素材の調達も料理人としての技量のうち」という理由から、必要なものは予め各々で用意していなければならぬ。

今ここで何かが無いと喚いても何も準備せずに挑んだこちらに非があるので。

「なら、ひとつ提案があるんですけど、コイツで勝負しません？」

だから、仕掛けるのならばこの場にある範囲で最大限の効果を発揮するものでなければならぬ。

「俺のルセツト？それも今日の課題で使ったテリースか」

「ええ、これなら俺の腕が多少未熟でも作れないことはないですし」

「お前、自分が言つてることの意味わかつてんの？」

「ええ、勿論」

四宮さんの不可解そうな顔に満面の笑みで返す。

食戟においてテーマだけでなく作る料理ですらも限定することは必ずどちらかに票が傾くことを意味する。同じ料理というのはそれだけで間違え探しのように食べ比べによつて優劣が簡単にについてしまう。審査員の質にもよるが、舌の肥えた人間にとつてはこれほど判定の下しやすい条件はない。

「それでも、今回の田所さんと創真くんの退学を賭けた食戟には相応しいメニューだと思うので」

「…………ま、後悔するのはお前だ。オーケー、その体で調理に掛からせてもらうよ。——但し、途中で止めてくれと言つても聞いてもらえると思うなよ？」

「——怖いなあ」

背を向けた四宮さんを一瞥し、直ぐ様テーマとしたルセツトに目を通して通す。

「これで簡単な方つて、本当にバケモンだな」

改めて見るとその完成度の高さに驚く。

そして同時にまともにやれば到底敵わないことも一目で分かつてしまふ。

「————やつぱりここは、郷に行つては郷に従いますか。『レギュムの魔術師』には『魔女』の魔法を。究極のルセツトには究極のルセツトを————」

四宮が動き出してから数秒後、榊奴もまた後を追うように同じ道を歩きだした。

二〇一九年六月

目の前で起こっている自らの理解を超えた戦いに感嘆とも驚嘆とも付かない声をあげる田所に対し、幸平創眞はこの場でただ一人四宮小次郎と対峙する榊奴操の動きを食い入るように見つめていた。

二
何て

「堂島先輩。どうして榊奴先輩は自分の得意料理じやなくて、四宮先輩のフランス料理を選んでですかね」

確かに目の前の食戟は先程の創真達のモノとは正にランクの違うものだ。だが、自らの土台で余裕の表情を浮かべる四宮に対し、榊奴が顔には出さぬものの何とか四宮に食い下がつてるのは創真の目にも明らかだつた。
そんなもの

「アイツに得意料理は無いさ。どんな料理でも卒無くこなす。それこそ、お前のようにな。今日の課題、見させてもらつていたがフランス料理を作つたのアレが初めてだろう?」

ええ、まあ、実家でそれっぽいものは作つたことはありましたけど、

「では聞くが、何故お前は初めて作つた料理をさしたる間違えなく完成させる事が出来た?」

「そりや、課題でこれを作れってレシピを渡されましたし――」

「そう、それだ。料理人という生き物は未知の料理に対面した時、作つたことも食べた事も無いモノをたつた一つのレシピで作り上げる事

が出来る。誰でも一度はするだろう。まずはレシピ通りに作り、ある者はそれに自分なりの工夫を凝らしらしていく。そうして、いつしか全く新たな料理が生まれる。これは俺達料理人という生き物が一流と呼ばれるために必ず通つてきた果てしない道だ。だが、アイツは違つた」

遠月学園元第一席堂島銀は食戟という戦場に立つ元第十席に対しハツキリと評価を下す。あの男は料理に関しては間違なく凡人だと。

「知識を、技術をひたすら高めながらも榊奴操という料理人はその努力を全て目の前のレシピを忠実に再現することに注いだ。レシピとは言わばそれを創りだした料理人の魂そのものだ。アイツは凡人ながらたつた一握りの天才に対抗するためにその天才レシピを利用しようとした」

「天才を利用する…………」

レシピ通りに作るという単純な作業はしかし、全く以て平坦な道ではない。そもそも、料理人全てがそのレシピ通りの味を出せるのならこの合宿はそれほどの難易度では無くなるだろう。

つまりは、それも才能。

だが、その才能は榊奴操という料理人に致命的な欠点を埋め込んだ。

「アイツには自ら誇れるような必殺料理^{スペシャリテ}は存在しない。料理人としての全てをレシピの再現に費やした結果だ。文句は言えんだろう。そして、遠月は自分だけの才能を持たない凡才の存在を許しておくほど甘くは無い」

「じゃあ、どうして――――――どうして、あの先輩はこの学園を卒業したんですか!?」

「……………そうか、お前も」

幸平創真もまた、才能の無い人間だった。

榊奴操と同じく自らの最強の剣を未だ模索中の創真にとつて、
「^{生き方}_{模倣}と創作」^{は真逆}でも凡人ながらこの学園を卒業した料理人を気にならない事など有り得ない。

「俺の、親父？」

堂島はすでに理解していた。

幸平創真という料理人と榎奴操という料理人は決して交わり合う事は無い。もしも、このまま二人が料理人を目指すならば例え本人達にその気は無くとも必ず衝突することになる。

人を挫折に追い込んだ料理人だ」

模倣の天才

榊奴操の調理は異常だった。

四宮が創り上げたルセツトを本人の目の前で自らの作業と照らし合わせながら調理していく。それでいて輪唱のように数手遅れではあるが、一瞬の動作の違いもなく食材をその魔術で料理へと変化させる。

（噂には聞いていたが…………）

実際に見ると料理人として薄ら寒さすら感じるほどの正確性だった。

オリジナ_{四宮}ル

らば絶対に不可能。人間に個人差というものが存在するように料理人にだつてそれぞれの癖や個性によつて調理に若干の差が出る。野菜を切るスピードや茹でるタイミングまではルセツトに書いてないよう同じ作品を作るにも人間ならばそのタイミングに僅かながらのズレが生じるはずだ。

しかし、榊奴操の調理にそんなものは存在しない。

四宮が現場の中で掴んだ無駄の無い動きを榊奴は目の前のルセツトを参考にするだけで寸分狂わず実行する。その動きを見るとまるで今までの経験を積み重ねて完成した自分の動きが正しいものだと遠回しに答え合わせされている氣すらする。

「四宮さん、シンデレラって知つてますよね？」

「…………何だ、薮から棒に」

「いえ、繼母達に虐げられていたシンデレラって可哀想な少女は魔法使いの魔法によつて純白のドレスとかぼちゃの馬車を手に入れた。これつて、俺達料理人に当てはめると面白いと思いません？」

飄々とした口調ながらもその手は数瞬前の四宮と一切差異無く動き、その目は真剣にこれから作ろうとしている料理のルセツトと食材に注がれながら、榊奴は同意を求めるように四宮に語りかける。

「魔法使いが料理人と言いたいのか？」

「ええ。それでシンデレラやかぼちゃが食材で魔法がレシピといった

ところです。魔法使いは魔法を使つて舞踏会で誰よりも輝くシンデレラを作り出した。でも、あれつて最終的には王子様つてのはシンデレラを彼女が落としたガラスの靴で判別するじゃないですかあ？」

「何が言いたい？」

要領を得ない会話に若干の苛立ちを覚えながら、四宮は次の食材の調理に入る。この九種の野菜のテリーヌは使用するそれぞれの野菜が主役であり、それぞれの味に優劣が付かないように同時進行で調理をする必要がある。それはたった一つのミスでコース全体の動きを損ねるフランス料理の縮図であり、四宮をしてでも会話中に手を止めるという愚行は致命的になるほどだつた。

「簡単な話です。どうして王子はシンデレラを見つけられなかつたのでしよう？舞踏会に來ていたどんな美女よりも魅力的に感じられた美女を彼女にガラスの靴をはめるまで確信が持て無かつた。俺の解釈はこうです。“魔法使いの魔法が完璧すぎた”。元から美しかつたシンデレラを夜空に輝くたつた一つの月へと変えてしまえるレベルでね」

「はつ、そいつは結構な話じゃないか。お前の言う通りの解釈だとすれば魔法使いのルセットは王子を虜にするような料理を作り出した。それの何が問題ある」

「俺が言いたいのはシンデレラじやなくかぼちゃの馬車の方ですよ。アレの元になつたのは民家にあつたかぼちゃとネズミですよ？元から素材のよかつたシンデレラとは訳が違う。レシピつてのは前提としてそれに見合つた食材と設備が存在する。かぼちゃとネズミが魔法使いのレシピの材料として最初から存在してたんですか？」

榊奴の手が数秒前に西宮が下処理に入つたカリフラワーへと伸びる。だが、同じなのはそこまでだつた。

この勝負で明確な勝敗が付くとするならそれは料理人の腕以上に食材の優劣となつてくる。その中で四宮のものに対し既に痛み始めているカリフラワーに榊奴は全く別の処理を加える。

「だから、俺は——魔彼法使い女を信じる！」

「『ワインビネガー』だとつ!?」

レシピに沿つて料理を作るというのは料理人にとって誰にでもできる才能ですらない基本的なことであり出発点だ。

誰でも最初は誰かが作ったレシピを参考にする。そして、その中でも才能のあるもの達はそこから前に進み自分だけのレシピを作っていく。

料理というのは料理人から料理人へのレシピという魂のバトンリレーであり、今日の美食社会があるのは一重に未知への挑戦という、料理人達の弛まぬ努力と研鑽の結晶である。

遠月学園はそんな食の未来を作り出すたつた一握りの玉を生み出すための箱庭であり、言つてしまえば新たなレシピを作り出す

パーソナルリアリティ自分で現実すら持てないものは決して生き残れない。

しかし、レシピ通りの料理というスタート地点をただ一人、がむしゃらに極めたものがいた。

「操——」

判定員のひとりであるイタリア料理店「リストランテ エフ」という城を持つ遠月が求めた玉の一人、水原冬美は三年前のスタジエールにてエフにやつてきた一人の学生について回顧する。

遠月学園の伝統的な行事であるスタジエールは学園を出て実際の食の戦場で今まで培った学生たちの実力を発揮するという建前を

持つて行われる一年生が本当の意味で遠月学園の生徒として認められる為の最後の試練である。

秋の選抜という一種の祭りが終わり、学年のトップクラスの実力が明らかになつた中で選抜に出ることの出来なかつた生徒や結果を残す事の出来なかつた生徒をふるい落とすことでの学園の方針である少數精銳教育をスムーズに進める。

そして、一見店に順応し、卒無く仕事をこなす少年もその候補の人だつた。

このスタジエールはただ与えられた仕事を行うだけでは決して突破できない。

研修先の店に何を与えられるか。

それこそが真の目的であり、「エフ」という水原の集めた一流のスタッフが犇めく魔境はスタジエールの本来の目的を考えると殆ど攻略不可能な城塞だつた。

何せ既に世界に名を連ねるほど完成された調理場は学生と異物を容易に弾き並の学生ならば対応する事すら出来ずに終わる。例え対応できたとしても学生レベルの実力で既に一流の職場に何を与えるだろうか？

少年はそれでもよくやつたほうだつた。

一週間という短い期間を理解し、無理矢理にでも二日目には店の作業を並程度にはこなせるようになつていた。

三日目には調理の一部を任すようになり。

五日目には一人で数品を作り上げるほどになる。

七日目にはスタッフの何人かを実力で抜くまでになつた。

スタジエール最終日までなつて少年の抜ける穴というのは次の日には何事もなく塞がる程度のものでしか無かつた。

「どちらが勝ちますかね？」

「順当に行けば間違ひなく四宮」

隣に座るドナーの質問に答えながら水原は自分の身体が小刻みに震えていたことに気づく。

当時の恐怖が蘇る。

遠月において必殺料理スペシャルリテを持たないながらも卒業まで漕ぎ着けた異端中の異端。

他人が作り上げたレシピを完全にコピーし、あらゆる状況に対応することの出来る万能さとレシピに本来記されない実際の火入れのタイミングや切った野菜の大きさまでもコンマ単位で読み解く才能。この二つの才能は似ているようで全くの別のものである。

榊奴操という料理人が行うのはただレシピ通りに料理を仕上げるだけ等という生易しいモノではない。どれだけ道化を演じて調理風景などで観客を喜ばせようとその先に待つのは料理人としての栄光の終わりでしかないのだ。

（そう、“この”食戟は間違いなく四宮が勝つ。でも、その後は――）

その少年がスタジエールの数ヶ月後、一年生ながら第十席の頂きに到達した事を知った時にはオーナーシェフの水原以外の全料理人が再起不能の事態に陥り、それまで来ていた固定客の離れた水原天城冬美の治める工フは事実上瓦解していた。

魔法は終わり、呪いが始まる

魔法使いはシンデレラにお城の舞踏会へ出られるように魔法をかけた。

しかし、十二時になれば魔法は解けシンデレラもかぼちゃの馬車も元の姿へ戻ってしまう。ここから怒涛のハッピーエンドへ進むのだが、このお話の凄いところは魔法使いが登場したのは最初の一回のみで後は動き出した歯車のようにトントン拍子で話が進むところだ。

ご都合主義だといえばそれでおしまい。

物語だからと思考停止すればきっとその人の元へは都合のいい魔法使いは現れない。

だが、こんな考え方も出来ないだろうか？

多くの御伽話にとつて一定以上の強力な魔法を使う存在を魔法の鏡を持つ白雪姫のお妃然り、眠れる森の美女の魔法使い然り、強力な力を持つ魔法使いはこう呼ばれる。

魔女。

その言葉にもはや男女の概念はない。

あるのは彼らが登場したお話には必ず富を与える魔法とそれ以上の呪いがセットで登場することだけだ。

「完成だ」

フランス料理において盛りつけの美しさは時折芸術に例えられる。

『レギュムの魔術師』と言われる四宮のそれも一つ一つのパースが整うことで黄金率を表したような美しさを醸し出していた。

「美味しいですねえ。あれ？また私の分がない…………」

「だから、お前は審査員じゃないだろうが。水原の分わけてもらえ」九つの野菜を掛け合わせつつも決して交わらないように作り出したそのテリーヌは見た目だけで食欲を刺激する。

「あれ？ 水原さん食べないんですか？」

「まだ、操の料理が出来てないわ」

「はつ、アレじやそもそも勝負になるかもわからねえぞ？」

四宮の対戦相手の榊奴操の料理は途中まではこの料理のルセツトを考案した四宮自身が危機を感じるほどのものだつた。

しかし、彼は選択を誤つた。

「魔女の後継者と名乗つていたが、自分の土俵であるコピーを捨ててくれるとはな。傷んだカリフラワーに『ワインビネガー』を使用するつてのはどこかで見たやり方だが、アレでは俺のルセツトと決定的に違う。ルセツトつてのはミリ単位で計算された芸術だ。それをアドリブで変える愚かさはわかるだろう？」

「…………四宮はワインビネガーを使った後の操の動きが何か変わつたことに気づかなかつたの？」

「ああ？ 確かに一瞬だけ何かを考えるように停止したが、その後は普通だつたぜ？ 大方土壇場でルセツトの調整に入つたんだろうが――

――

「あの子にそんな器用な真似は出来無いわ。レシピ通りのものを作ると言つたら本当に寸分狂いなく作る。手なんて抜きようのないほどその手はレシピをなぞる様に正確に動く。そもそも、レシピを使わない料理のレベルは辛うじて遠月を生き抜く事は出来ても卒業には到底及ばない」

「進化したとでも？」

「卒業生といつてもまだ一年目よ？ それに操はこの数ヶ月で三件は店を追い出されていると言つていた。とてもそんな暇はないわ。――でももし、可能性があるとすれば」

四宮と僅かな誤差ながら榊奴の料理が皿に盛り付けようとされていた。

その目には焦燥などはなく、当たり前の日常を繰り返したような気

樂さすら見える。

「榊奴操には在学時、師と仰いだ人間がいた。第八十七期生薙切りながら数えて先々代の第十席。黄金のレシピを生み出す『魔女』と言われた人間が――」

「堂島さん」

「水原。お前が榊奴の態度になにか思うことがあつたのなら俺が許可する。お前の好きなようにしろ」

「ありがとうございます」

「『九種の野菜のテリーヌ』です。つて言つても先に出された料理と全く同じじや説明する意味ないですよね…………」

結局実食は後攻に回ってしまった。

今回は勝つことが目的ではないとはいえ、いつそ清々しいとすら思う絶望ぐあいだ。

俺の料理は全く持つてオカルトに片足突っ込んでるとしか思えないが先行か後攻かで全く相手の反応が違う。

食戟に勝つならば先行を選びたいところだつたが、四宮さんの動きがまさかここまで正確だと思わなかつた。プロでも、いや調理に慣れたプロだからこそある程度の省略やレシピに対する自分なりの手入があつて然るべき筈なのだが、四宮小次郎という料理人にはそれがない。

神懸かり的といつていいくほどの自分の腕に対する自信。

それこそが四宮さんを若くして「プルスボール勲章」へ導いた最大の秘密であり、誰もそれを越えることはできない。

「操。本当にいいの？」

「すいません。本当は水原さんにこんな事は頼みたくないんですが、

どうしても気になることがあって」

「そう、ならないわ」

ただ一人、先に出来上がった四宮さんの作品に手を付けず待ついてくれた水原さんと言葉を交わす。

きっと、沢山迷惑を掛けた。恨まれているとも思った。でも、再会したとき彼女は何事もなかつた様に接してくれた。それだけでもこの合宿に参加した意義はあつたというものだ。

「実食お願ひします」

『俺はシンデレラの話で実は一番割を食つてたのは王子様だと思います。退屈な舞踏会もそれなりに楽しかつたでしょう。彼女に会うまでは』

榊奴操がレシピを完全再現するという才能を持ちながら料理人として大成できず、多くの料理人を挫折に追いやつたのは何も他人を上回るからではない。

『王子様はシンデレラに会つて恋をした。ガラスの靴というどうしようもない手掛かりに縋ろうとするほどにね。でも、それこそが魔女の策略だとしたら？普通靴持つて持ち主探すために自分の権力使つて街を駆け回らないでしよう？しかも、虚偽の証言をした者の足を切り落とすという狂行までした。そんな彼の目は血走つていたことでしそう』

基本を忠実に。

ただそれだけを極めた榊奴は確かに魔法と言えるものを手に入れただろう。だが、同時に魔女から呪いも受け継いでしまった。

『彼の中ではその時点で既にシンデレラという女性が当たり前になつていたんですよ。俺の料理はレシピ通りに作りその味を食べたもののが基準にする。何せ、あくまでそこにあるレシピ通りに作るだけですからね。何の工夫も創作もしない。ただ、レシピ本来の味を引き出す

だけ。その味自体に何の不思議もない』

一から生み出すのではなく、その通りにやれば必ず出来るものに人間は感動しない。

それでも、その生き方を教え彼を救つてくれた魔女だけは彼を決して否定しなかった。

『でも、みーくんの料理はいつも美味しいですよ?』

どれだけ強力な呪いでも魔法を教えた魔女だけは対象外。都合のいい話もあつたものだ。

『貴女がそう言つてくれるなら俺はこの道を進みますよ』

その先に栄光など存在しないことなど分かっていた。

でも、どうせ見つけてもらえなければ埋もれていた才能。このまま突き進むのも悪くはない。

目の前の皿に乗せられたコインは一枚。

対面上に置かれた皿には当然のように残りの二枚が乗せられていた。

「ま、こうなりますよね」

妥当な結果に思わず笑い転げてしまいそうになる。

同じ料理で挑めば必ず優劣は付く。決め手としてはどちらがその料理を深く理解しているかだが、これは比べるまでもないだろう。

「神奴くんのモノも確かに美味しかったが、流石四宮さんのものと比べるとね。ごめん」

「うむ、確かに美味いが、味の差が殆どない以上審査に間違いは出ないな」

ドナートさんと関守さんの酷評が耳に痛い。

「なぜ水原の票が入つたかはわからないが、どうやら勝敗は決まったようだな」

「くやしいけど、おいしいです。でも、四宮先輩。もしかして手加減し

たんですか？」

「は？」

四宮さんの表情が崩れる。

勝負には負けた。

理想の姿になれる魔女の魔法は終わり、ここからは永遠に解けない魔女の呪いがやって来る。

料理人としての役目

「これこそが俺がセンパイから教わった魔女の魔法であり、呪いですよ」

「魔法？呪い？ムツシユ榊奴、お前何を言っている？」

「アレ？自分は『レギュムの魔術師』とか言われているのに信じていな
いんですかア？四宮セ・ン・パ・イ？」

食戟の結果は既に出た。

そして、全てが俺の“思い通り”になつた以上、今更演技をする必
要もない。

「この世の中にはね、本当に魔法も呪いもあるんだよ」

「テメエ、何を考えてやがる…………。食戟は俺の勝ちって、事実は今
更変わらねえ」

「まさか、俺が最初から貴方に勝てると思つて挑んだとでも？馬鹿
言つちやいけない。これでも、才能と経験つていう途轍もねえ壁なん
てのは嫌というほど実感してんだよ。どれだけレシピを完璧に再現
したところで日々それを実行し、洗練させた天才の料理は必ず俺の上
を行く。あの天才だらけの遠月にいて俺がその壁にブチ当たらな
かつたとでも？―――当たつたよ！そして、粉々に碎けた！だか
らいま俺はここにいる！」

遠月という箱庭は凡人が生き抜いていけるほど生易しいものでは
ない。どれだけ優秀な成績を残しているものでもたつた一度の失敗
で退学という氣を抜けない環境と食戟という独自の制度は若き料理
人達を互いに競わせ、巨大な原石を荒削りの美しい宝石へと磨き上げ
る。

そんな中、「誰もを料理で笑顔にする」という俺の願いは見事撃ち落
とせられた。遠月が求める『食の極み』は食べた人間の笑顔“なんか”
よりも遥か先を目指していて、笑顔という“中途半端な”イメージは
高みを目指すもつと必死で切実な料理人達の思いに打ちのめされた。
俺が魔女と出会いレシピを見ただけでその味を完璧に再現する魔
法を得た後もそれは変わらない。食の怪物たちは俺が引き出した“

「偶像」よりも上の味を引き出してくる。それに対しても俺は常に一定のラインまでしか踏み込めない。その先天才へは決して至ることはできない。

「どれだけ技術を、知識を、経験を磨いたところで天才と同格が精一杯。大体一度並んだところでアイツ等はすぐに引き離してくるし——」彼等。四宮さんもそいつらと同じだと思つていたから、俺は魔女の呪いに頼つたんだ。四宮さん、食戟を始める前に俺が言つたこと覚えてますよね？」

「俺と幸平たちの食戟のやり直しだつか？だが、そんなものに何の意味がある！既に出た勝負だ。まさかあいつらが今の食戟で何か掴んで俺に勝る武器を手に入れたとでも言いたいのか？」

「残念ながらそれはありえないでしょう。貴方が作つたのも俺が作ったのも彼らが作つたものと作り方や材料は同じテリーヌだが、参考にしようとするべくどうやっても美味しい方に引っ張られる。』今はまだ『無理だ。それに俺が言つたのは食戟のやり直しではなく、『判定の”やり直しだ』

「…………、？それなら尚更意味がわからねえ。それのどこに意味がある？」

「意味は——まあ、実際に判定する人たちに聞いてみましよう。関守さん、どうですか？」

「…………」

「ありや、無視ですか。ドナートさんは？今改めて考えてみて、四宮さんの料理と田所さんの料理——どちらが美味しいかたですか？」

？

「…………わからない」

「わからない？それはおかしな話ですね？一度決まつた勝敗でしょう？何故、わからないんですね？」

関守さんもドナートさんも二つの食戟の両方で四宮さんに票を入れていて。だが、その二人でさえこの四宮小次郎が圧倒的勝者であるはずの状況で再びの問い合わせに答えられずにいる。

「…………確かに俺はシユーフアルシもテリースも四宮の方々が素直に美

味しいと思つた。だが、今は何故かその答えをもう一度出せる自信がない

「俺もです。こんな事はありえないのに、あつてはならない事なのに自分で下した決断をもう一度しろと言わると答えが出ない」

食戟における審査員とはその一線に賭けられた対価と料理人の魂を背負い、判断を下さねばならない。その判定は絶対として扱われる以上、当然心変わや心情による変化があつていい筈はない。

それに何より今回の審査員は皆、遠月が誇る料理人達だ。普段ならともかく、料理に関してそれも食戟ならば実際に調理する者達以上に真剣に取り組む。それなのに、彼らが今胸を張つて優劣を付けられる基準というものが此処にはない。

「ふむ、では先程の食戟は無効つて感じですかね？いや、一度決着は付いたのに『客』の心を掴んでいなかつた四宮さんに問題があるか

「なん、だと…………つ!? テメエ、何が言いたい？」

「うーん、ハツキリ言わせてもらいますけど。今の四宮さんは怖くないんですねよね」

誤解の無いように言うと俺を睨みつけてくる四宮さんの顔は震え上がるほど怖い。こんな事を言つている際に考えるものではないが、俺はこの地下の厨房から再び地上の陽の光を見る事ができるのだろうか。

そんな不安がよぎる中、それでもこの人に伝えなければいけないものがある。

「俺は遠月学園で一年の終わりから卒業式まで第十席の椅子を守り続けていました。元一席の四宮さんならお判りでしょうが、あの学園において十傑とそうでない生徒の間には目に見えるほどの差が存在する。その証拠に遠月の卒業生の殆どが十傑の席に座つたことのある人間です。そして、十傑とそれ以外のちょうど境目である第十席にはとある役割が存在する」

「知つてるよ。遠月十傑だった人間ならだれでも知つてゐる下らないルールだ。俺はそんなもの受けた記憶は無いがな」

「じゃ、その時の十席の人も優秀だつたんですね」

「違えよ。誰があんな条件を呑むかって話だ」

遠月において、十傑としての地位というのは一学生に与えられる权限を軽く超えている。

自分専用の施設を持つのは当たり前、望むなら学園や外部のスポンサーからの莫大な資金援助だって可能だ。十傑の中には学生時代からすでに自分のブランドや店を持つているものも少なくないし、知名度だって遠月を知る世界中の間から注目されるまでになる。

当然、そんな席を手放したいと思うものは限られ、十傑以外の学生に食戟においてその席を賭けるに値する対価など日々用意できるものでは無い。十傑の地位を掛けた食戟は十傑内で行われるモノであり、それ以外の者にその場に参加する権利は与えられない。

「ま、そうですよね。今のえりなちゃんも噂だとまだ食戟じや負け無しな上に、自分から挑ませることは有つても挑む事は無いそうですし、俺の前任者はそもそも食戟自体否定的でしたから」

遠月学園における十傑への挑戦条件。

通常、食戟とは本人同士が同意した場合のみ発生するものだが、ただ一つ十傑に選ばれたものでさえ断る事が出来ない状態が存在する。

『遠月十傑評議会 第十席に勝利した者は無条件での十傑に対する食戟が認められる』だつたか。第十席つてのは大変だよなあ。ま、実際は十席自体に挑むにも対価は必要なんでまずお目に掛かる事は無いが――――――

「俺は受けましたよ？毎日ポストに送られてくる挑戦全部に。何故か最後ら辺は全くと言つていいくほど来なくなりましたけど

「酔狂な事だな。だが、それがこの勝負と何の関係がある？」

「…………まだ、わからないんですか？俺に挑み、負けた者達の中にはそのまま挫折し遠月を去つたもの者も多い。でもね、それでも必死に努力し、己を磨いて上を目指したものは確かにいたんだよ。何度も挑戦して、遂には俺の偶也も越えた彼らには確かにあつた。勝利に対する貪欲な飢えがツ！生き残るための執念がツ！そして何より、目の前の客に対する精一杯の挑戦がツ!!」

「客への挑戦だと？」

「そう、客に対しどんな状況でも最高の料理を出すのは『最低条件』だ。でも、それは料理人にとっていつまでも考え続けなければならない『最大案件』でもあると俺は思います。料理人として、客として今審査員達が迷っているのはそういう事でしょう？確かに四宮さんの料理は文句無しの完成形だ。だが、田所さんが考え、今俺が再現した偶像は材料や技術が整わない状況でも自分の出せる最高の味を提供しようとした確かな料理人としての思いがある！」

「四宮、最後にスタッフや客の意見を聞いたのはいつ？」

「水原？」

「確かにあなたの料理は完成している。でも、このルセツトには不測の事態に陥った時の対応策が存在しない。料理人として、オーナーシエフとしてその事態が起こらないようにすることは大切な事よ？でも、それだけじゃいけない事を私は三年前に知った。卒業後、誰よりも早く戦場へと飛び立つたあなたがそれを知ったのはいつ？」

四宮小次郎という料理人について、今この場で最も理解している人間は水原冬実に他ならないだろう。

遠月学園第七十九期卒業生にして、在学中は第二席として最も近くで四宮小次郎を見てきた人間だ。誰よりも彼をライバル視し、同時に誰よりも認めている料理人としての盟友。

「お前、気づいてたのか——」

「料理人としての完成は同時に料理人としての停滞を意味する。あなたが戦つた榊奴操という料理人はレシピを通じてそれを創りだした人間を映し出す鏡よ。完璧な偶像を創りだし、客にそれがその料理の本来の味なのだと刻み付ける。だから、他の料理人は次にその客が同じ料理を食べるときに彼らを満足させるために、自ら作り出したレシピを超えないわけいけない。でも、停滞した人間は——そこが完成形だと、上を目指すことを諦めた人間は永遠に偶像を超える事は出来ないわ。私の集めたスタッフもそうだった。そして、四宮。あなたもこのままだとこの怪物に食い殺される」

水原さんが指し示すのはテーブルの上に置かれた二つのテリース。

それは一見同じに見えるものだが、実はカリフラワーを調理する段

階で俺のモノにはワインビネガーが使われている。それは今日の課題で田所さんが行い、他ならぬ四宮さん自身が否定した悪足掻き。だが、料理人として果たしてそれは間違つていただろうか？

「——四宮さん。俺、実は昔貴方の店でこのテリーヌを食べた事があるんですよ。その時に一緒にいた人が言つたんですよ。「この人は天才だ。絶対に今より大きくなる」ってね。俺はその人を信頼しているんで、その言葉の通りだと絶対に勝てないって今でも思っています。でも、俺なんかの料理で今回貴方に傷を付けてしまつた。しかも、貴方が創つたルセット通りモノではなく、学生が土壇場で必死に考えだした苦肉の策で」

魔女の魔法は元になるレシピが優秀であれば優秀であるほど効果を發揮する。それは逆に言えばレシピの完成度が料理としての魅力に直結することを意味する。そういう面では申し訳ないが、田所さんの技術では「SHINO, S」で使われている料理の味を超える事は出来ないだろう。レシピとは幾分にも計算された芸術そのものなのだから。

「もう一度言います。料理人として客に最高の料理をお出しするのは最低条件であり、最大案件だ。——四宮小次郎、アンタはいつも客の顔を見なくなつた？」

「…………お前の料理、食べさせてみる」

四宮さんが重い口を開く。

その視線はテーブルに置かれたもう一つのテリーヌに注がれていった。

抑えられぬ思い

「また、勝てなかつた——か」

全てが終わり、敗者としてせめてもの務めとして一人厨房に残り後片づけを行う。

テーブルに乗せられた自分以外の料理を眺め、一つずつ口にする。四宮さんの作つた『シユーファルシ』と『九種の野菜のテリーヌ』、田所さんと創真くんが元十傑に対抗するために作り出した『虹のテリーヌ』。どれもおいしくて自然と顔が綻んでしまう。

「悔しいの?」

「——水原さん」

声を掛けられ振り返ると、そこにはたつた一人俺の料理に票を入れてくれた恩人が居た。

「どうして、ここに?」

「一応、お礼を言つておこうと思つて。四宮の停滞に気付いてくれてありがとう」

「別にいいですよ。他でも無い水原さんの為でもあつたんで

「私の為?」

「ええ、だつて水原さんつて料理している時の四宮さん大好きでしょう?」

「!?——、大好きつてほどでもない

貴重な水原さんの赤面顔を貰つた。これだけで今回、あの天才に挑んだ価値は十分に得られただろう。

すぐさま、クールないつもの雰囲気になるがタキちゃんタイプが似ているので内心だと今も動搖しているんだろうなと思うとニヤニヤが止まらない。

「ま、今回はスタジエールの時のお礼とお詫びも兼てと言う事で。あの時はすみませんでした!」

「ああ、それなら別に。四宮じゃないけど、あの時は変に店全体の雰囲気が固まり出してたから、何か新しい風でも入れようかと思ってスタジエールを受け入れたわけだし。丁度よかつた」

「うわ、流石遠月卒業生えげつねえ…………」

顔の前でV字サインを取る水原さんに萌えながらも当時まだ自分の力を自覚していなかつた俺が完全に利用させていたという事実に恐怖を感じずにはいられない。

センパイといい、俺の周りはどうしてこう怖い女性が多いのだろうか？やはり、癒しで言えばイギリ甲斐のあるタキちゃんとか木久知に限るな。今度「春果停」にでもお邪魔しようかな、などと考えていると水原さんが不思議そうな顔で俺の顔を覗き込んでいることに気づく。

「ねえ、操」

「な、何ですか？」というか、その座り方とある名探偵思い出して怖いんですけど…………。可愛いんですけど」

「呪い、増えた？」

「…………俺が四宮さんのルセツト以外で魔法を使ったことに関して言えば違いますよ。ほら、これ証拠」

「―――そのルセツト、四宮のじやないわね」

俺が自慢げに出したお洒落にパッケージされた四宮さんの課題用のルセツトは一見すると田所さんたちが持つ課題で使われたものと同じようだが、よく見ると最初からカリフラワーの部分などで『傷んでいる場合』にワインビネガーを使う前提として再計算された調理法が事細かく載せられている。

「うちのセンパイのものです。前に四宮さんの料理を食べたってさつき言つたでしょ？ その時に書かれたものです」

「ちよつと待つて、それつて何年前？」

「三年前です。……気持ちは分かりますよ。あの時あの人は二年後くらいならこれくらいのものになるだろうという予想でこれを書いてましたから」

四宮さんの停滞が始まつたのはそこまで昔のことじやない。当然以前食べた時よりもルセツト自体に手が加えられて段違いに進化していた。

しかし、あらゆる食をその手で書き留める『黄金のレシピ』を創り

だしたかの魔女はその上をいく。実際に料理すれば恐らくは四宮さんが上だろう。しかし、レシピを創るという一芸において彼女を上回る人間を俺は知らない。

必要ならば未来すら予測し、常に究極のレシピを導き出す。

それこそが、俺の憧れにして超えるべき人間だった。

「噂には聞いてたけど、とんでもない才能ね。異常と言つていいくらい

「それは俺も思いますよ。あの人見て、食べて、嗅げば実際の調理風景を見てなくともその料理を作り出すのに最適な調理法を書きますから。…………気まぐれなのが難点ですけどね」

全盛期には一年で千を越えるレシピを書いたとか、食戟で相手のレシピを改良したものを審査員に『見せただけ』で調理せずに勝つてみせたとかどこまで本当かわからない伝説を持っている人だが、俺と一緒にいた間は四宮さんのような本当に美味しい興味の湧く料理しか書かなかつたり、学園祭のためのその日限りのレシピを百種類近く創り出したりと仕事量のムラが激しかつたのは覚えてる。

総じて掴みどころの無く、人生を楽しんでいる人だつた。

「…………好きだったの？」

「反撃のつもりですか？ま、否定はしないんですけど。好意っていうよりは尊敬や憧れ、後は俺を救つてくれた事への恩義のほうが強かつたかもですね。と、いうか畏れ多くてとてもじやないが告白とかはできませんて。本当、どこ行つたんでしょうね」

魔女の行方は彼女の卒業後、誰ひとりとして知らない。

一応、親しい人間には思い出したかのようにお手製のレシピが送られてくるので生存が確認されているが、消印が地球の隅から隅まで様々なので探そうにも俺のような暇人でなければ不可能なレベルに至つてている。

「恩義、か。ねえ、操は四宮に自分の料理を試してみたくなかつたの？誰かのレシピじゃなく、自分だけの必殺料理スペシャリテを――」
「必殺料理、ですかあ」

水原さんの質問に言葉が詰まる。

なぜなら、それは今一番誰かに聞いて欲しくなかつたことだから。てつきり、意外と性格の悪い堂島さん辺りに後々コツテリやられるかと思つたがまさか彼女とは。

「ま、勝てる勝負ではなかつたですからね。ましてや審査員は俺の尊敬する先輩方だ。見苦しい料理は見せられませんて」

「嘘ね。少なくとも食戟を挑んだ時の目は死んでなかつたわ。それこそ、あの幸平創真のように」

「ここであの少年の名前を出してくるか。

この人も存外性格が悪い。

「田所さんからね。」今の四宮さんのルセ^{実力}ットを見せられた時にですね。正直な話、怖気付いちやいまして。二人の退学もかかつていて事だし、負けても一撃を加えられる方法を選んだのは事実ですよ？」

「それで？」

「それでと言われても、それまでですが？」

「ここで思う。

これ以上は踏み込まないでくれと。

これ以上俺に言い訳を見せないで欲しいと。切に、料理人としての俺が悲鳴を上げる。

「——嘘ね」

どうやら、神様は俺に相当罰を与えたいたようだ。

「聞いてどうなるものでもないですよ？男の負け惜しみってのは」

「構わないわ。それでも、一人の料理人として放つておくことは出来無い。操が私に実食の時に願つたのはそういうことでしょう？」

「…………あれはただ、俺みたいになつて明日からの課題で生徒達を理不尽に振り落とさないでくれつてことですよ。まさか、負け犬の愚痴を聞いてくれなんて頼むわけないつての。一応、男の子ですよ？」

俺

再び、彼らが作った料理を口に運ぶ。

一口目と変わらず、涙が出るほど美味しい。

「——俺は確かに魔法を手に入れた。この力で遠月を卒業できたことは間違いないし、この才能に気づいてくれたあの人にも感謝

している！でも、忘れられないんですよ。初めて料理したとき、分量も火入れの時間もバラバラで今思えば美味しいとはとても思えない俺の料理を食べててくれた人たちのあの顔がツ!!この頭にこびり付いて離れないツ！確かに俺の料理は上手くなつた。でも、それはいつも誰かの力を借りたもので、俺だけの力じゃないツ!!その証拠に、俺の作つた料理は作り方から何まで完璧に近いはずなのにそこには感動も笑顔も存在しない！…………知つてますか、水原さん。俺の料理を食べた人はみんな最終的に”本物”を求めるらしいですよ？俺の作つた料理じゃなく、その料理を考え出した誰かの本物が食べたいと思うらしいです。それが、どれだけ屈辱かわかりますよね？俺の客の筈なのに誰も俺の料理を見やしない!!

どれだけ技術を磨こうが、どれだけ食材に拘ろうが、どれだけ完璧に再現できる状況を作り出しても、それは結局既に誰かが行き着いた領域でしかない。

コピーは永遠にオリジナルに敵わない。

それが本当だつたらどれだけ良かつただろう？

現実は残酷だつた。コピーも完璧さえ目指せばオリジナルも打倒出来る。出来てしまつた。それでも、客の求める”真実”は俺の料理じやない。

「言つてやりたかった！お前らの求めるものなんて何処にもないって！そんなものはまやかしから——一番美味しいのは俺だからつてアソツ等の前で言つてやりたかった！でも、言えるわけないだろ！どれだけ外道に落ちても料理人はそれだけは言つちやいけない。客を騙してでも、夢を見せなきや俺達は終わりなんだ！」

「…………もし、四宮が自分の必殺料理スペシャリテを出してきたらどうするつもりだったの？」

「勝てません。はつきり言つてあのレベルの人間の必殺料理スペシャリテは俺の力じゃどうにもならない。そりや、レシピがあれば限りなく百点に近いものは作れますし、作ります。でも、貴女も四宮さんも天才つてのはズルいですね。こちとら百点が限界なのに平気でそれを超えてくる。ハツキリ言つて食べる順番とか関係なしに捻り潰されてましたよ。

ま、その時は土下座でもなんでもして退学だけは取り消してもらいましたけど」

「あの一人はそこまでして守るべきもの?」

「ええ、俺にとつて彼等は最期の希望だ。あのジョウイチロウ・ユキヒラの息子である創真くんは勿論、土壇場で魔女あの人と同じ考えに至つた田所さんも必ず化ける。今は消してしまうのもわけないような小さな火でも、いつか俺の幻想を焼き尽くしてくれる業火になる。そう、思つたんですよ。えりなちゃんも含めてね」

「そう」

彼女は短く咳くと悲しそうな目をしながら僅かばかり俯いていた。やつぱり、神様は俺を恨んでいるのだろうか?

こんな事を打ち明ければ結末なんて想像できただろうに。胸の内にしまつて置く位がちようどいい思いだらうに。

どうしてこうも、俺は弱いんだ。

「すいません。忘れてください。俺の今言つたこと全部、どうつてこ

とない事ですから。それこそ、人間誰もが抱える悩みですしちゃ……」

「関係なくはないわ。誰もが持つ悩みでもない。私にはきっとあなたにかかりつた呪いは解けない。でも、先輩として胸を貸すことくらいはできる」

「水原さん——。すいません」

「いいのよ」

「あ、いえ。そういう事じゃなくて、水原さんの胸じゃ借りても泣けないっていうか。せめて日向子さん、理想を言えば木久知サイズが欲しいというか。安定感を求めるなら堂島さんが最強だとは思うんですけど。いや、最後のは選択肢には絶対入れても選びませんけどね?」

水原さんの顔が一気にゴミを見るような目に変わる。でも残念!俺にとつてはご褒美です!

いや、本当に助かりました。でも、この線だけは男としても譲れないんですね。水原さんもタキちゃんも甘えるよりは愛でる方とうか……前者でも一向に構いませんけどね。

「——操。最終日、私のところ三倍で宜しく」

「つちよ、それは本当にシャレにならな——

「無駄口はもういい。この合宿では私は操を自分の従業員として扱つていい権限がある」

「それ学生に対してのみ適応されるやつだつたと思うんですけど——
——っていうか、三倍は本当に無理ですって!!」

「うるさい。もう、質問は受け付けない。ここでは私がルールよ」
「横暴だああああああああ!!!」

そそくさと厨房を出て行く水原さんにどうにか考え方直してもらう
ために地上への階段を付いていく。

既に時刻は深夜。

これで地獄の宿泊研修も半分が終わつたことになる。

最終日には最大の関門があり、三日目でもこれまで以上に無理難題
が出されるだろう。

一体、何人の生徒が生き残るのか。俺は彼らをどれだけ救い、導け
るのか。不安は残るばかりだけど不思議と心の中は軽い。
泣いても笑つてもここが正念場。

極の世代編

出会いは必然に

「俺は笑顔を―――料理で笑顔を……」

キッカケは幼い頃に母が買ってきてくれた家庭料理用のレシピブックだつた。

数量が小さじとか大さじとか今思えば曖昧な単位だつたとは思うがそれでも当時は精一杯書いてある通りに調理した覚えがある。世の中に出ている料理は当たり前のことだが下手に自分流のアレンジさえ加えなければ美味しく出来るようになつていてる。

そう、当たり前のことだつた。

でも、その当たり前のことでの俺の料理を食べてくれた人が笑顔になつてくれたのが嬉しくて―――だから、この道を選んだ。

『平凡極まりない味ですね』

遠月に入り、中学の三年間をただ知識と技術を高めるために費やし、高等部に進学する頃には世界中で知られている料理の殆どを味は保証できぬが作れるようになつた頃、当時中学生にもなつていないとある少女に料理を酷評された。

そして、その言葉は実に的を射ていた。

日々の講義やその延長線である地獄の宿泊研修は問題無く突破出来たものの、料理人としての個々の実力を示す秋の選抜では予選落ちという体たらく。

平均点以上は取れてもお前の料理では誰かの心を響かせる事など出来無い。そう、言われた気がした。

諦めるにはいい機会だつた。

“客に笑顔を届ける”。

たつたそれだけの理由でこの世界トップレベルの料理人を排出する遠月で生き残ることなど到底不可能だつたのだ。

「だから。最期に食戟つてのをしてみたかつたんですよ」

「そうですかー」

遠月の敷地は広い。

一体何に使うかわからない施設が無数にある中、諦める決意をした俺が迷い込んだのは魔女の庭園だつた。

何も知らない俺を迎えたこの庭園の主は俺の愚痴を文句一つ言わずに聞いてくれた。

「うーん。でも、私はみーくんが辞めちゃうのは悲しいですね～」「み、みーくん!?

「そうですよ? 楼奴操くんだからみーくん」

「ま、まあ、センパイがそう呼びたいなら構いませんけど…………」

掴み所のない人だつた。

日がな一日花々が咲き誇れる庭園で紅茶を啜る事だけで絵になってしまふような、それでいて誰よりも強い光を持つている女性。腰まで伸びる鮮やかな黒髪と翡翠色の瞳は見るものを釘付けにし、足が不自由なのか車椅子に座りながらも決してか弱い等というイメージが湧かない。一目見ただけでどちらが上なのか理解してしまえるほど、その姿は輝いて見えた。

そんな彼女が何故、俺なんかの話を聞いてくれる気になつたのはわからない。

それでも、初対面の筈なのに全てを話してしまえる自分がいた。全部聞いてくれる彼女がいた。本当に不思議な時間はあつという間に過ぎ、日は暮れ季節的にも肌寒くなつてくる時間が訪れる頃には俺だけが話すのではなく、談笑のように互いの話をするようになつていた。

「…………ねえ、みーくん。もし――――、もしですよ? もしも、魔法が使えるとしたらどうしますか?」

別れ際に彼女は少し悩んだ素振りを見せた末、そんな突拍子のない事を言つた。

夕日で顔は見えなかつたけど、今思えばきっと泣いていたんだろう。少なくとも彼女は会つたばかりの人間のために泣ける。そんな人だつた。

だから、茶化す事もなく俺も真剣な願いを言えるのだ。

「やつぱり、料理でみんなを幸せに――――笑顔にしたいですね」「でも、この学園を退学しちゃつたらみーくんは笑顔じやないですよね？」

「そりやあ、学校を夢やぶれて中退した奴が早々笑顔になれるほどこの世界は上手く出来てませんよ。でも、」

わないでくださいね？」

河毛言、反

何も言い返すことはできなかつた。

最初から覚悟が決まつていいたら誰かに食戟を挑もうだとかこんな所まで迷い込んだりなどしない。きっと誰かに止めて欲しかった。それを彼女は心を読んだかのように当ててみせた。

貴方の時間を私にください。きつと私が

「なんで」「んな」とに……

た。後日、改めて俺は魔女の招待状を手にあの庭園へと足を運んでい

で
す
!!

迎え入れてくれた彼女はこの前と同じように明るい調子で手を広げるよう両隣のメンバーを紹介しようとすると、
「さあ、そんなことは無用だ。」

何故なら……。

「な、なんで榊奴くんがああああ……」

「よう、人の顔を見るなり随分な反応だなあ木久知」

この場にいる人間は俺以外遠月の人間で知らないものはいないと
いう有名人達だ。

同学年の木久知園果は気弱なところはあるが、洋食という広い分野
を得意としておりその実力は一年ながら既に十傑入りを噂されてい
る。

もう一人だつてそうだ。

「ツケ、」

顔を合わせるなりそっぽを向いた黒髪の少女は二年生にして遠月
十傑の一人に数えられるスペイン料理のプロ角崎タキ先輩。

そして、その中心で一人車椅子に座りながらもこの場の主だとい
ふことを誰にも疑わせない不思議な雰囲気を持つ女性こそ、遠月を統べ
る魔王の眷属——薙切せりか。この庭園に迷い込んだもの
を惑わせるという遠月学園で最も出会つてはいけない魔女だ。

彼女の創りだすレシピは『黄金のレシピ』と呼ばれ、学生のモノで
ありながら多くの高級料理店で採用され、噂では数億円単位で取引き
れているとも聞く。

(…………本当に場違いだよなあ)

十傑級が三人。

何が悲しくて秋の選抜で予選すら突破できなかつた凡人がこのメ
ンバーに混ざらなければいけないのか。

「園果ちゃんにタキちゃん。彼が今日からここメンバーカーになるみー
くんですよ」

「み、みーくんつて榊奴くんの事だつたんですか!? もつと大人しい人
かと思つてたのに!」

「先輩。悪いけど私はこんな得体の知れない奴認める気は無いです
よ」

生憎と俺の印象は二人には最悪らしい。木久地に関しては宿泊研
修の時に散々連れ回したりした覚えがあつたから警戒されるのはわ
かるが、角崎先輩とは完全に初対面で恐らくは俺の実力に疑問を持つ

ての発言だろう。そして、その予想は当たっている。ここまで辛うじてこの学園を生き抜いて来れたとはいえ、学園内でも実力はトップクラスでここにいるのが当たり前という人々が相手では自慢にもならない。

「俺、やっぱり帰ります」

「えー、どうしてですか？」

「どうしてって、どう考えても場違いでしょう？ 凡人には凡人に見合った場所があります」

「でもー、その居場所でもやつていく自信が無くなつたからここに来たんですよね？」

「う…………」

まるでこちらの心を読むかのように言葉を繰り出してくる魔女に疑惑感よりも興味が湧いたのは事実だ。別にここにいれば天才になれると思つてくるほど希望に満ち溢れた人生を送つてはいないし、約束したからといって態々こんな場所に来るほど律儀な性格でもない。

ただ、心を本当に読まれたなら俺自身が本心ではどう思つているか教えてもらひたかつただけである。

俺は生まれつき、自分自身で考へてることが本当に心の底から思つてゐるもののかわからない。

他人を偽る嘘がいつしか自分さえも偽つてゐるような感覺。この口から出た言葉が、頭で考へてゐる事柄が、眞に自分のモノなのかがハツキリしない。

そんな自分が初めて感情が思考と合致したのが俺の作つた料理を食べてくれた人たちの笑顔であり、初めて考へもしなかつた本心を言い当てられたのがつい先日彼女と出会つた時である。

もしかしたら、この人と居れば本当の自分というものが見つかるような気がした。

「それに、みーくんには我がサークルに入つてもらわないと困るんですよ。今週末にある第九席さんとの領土を賭けた食戦にウチからは新人さんを出すつて言つちゃたんですから～」

「…………せりか先輩。私、一言も聞いてないんすけど」

俺も聞いていない。

この流れは非常にマズい。このままいけば俺がその九席との食戦に駆り出されるのは明白だ。ここは角崎先輩に頑張つてもらわないと。

「そうでしたっけ？でもでも、折角の食戦に私やタキちゃんが出ちやうと大事になっちゃいますし、園果ちゃんも新人というには目立ちすぎますね。うーん、困りましたねー。断つてもいいんですけど、遠月十傑の名前に傷が入っちゃうかもですし」

まだよく関わっていない俺ですらわかるような壯絶などぼけ方を見たような気がする。

角崎先輩はプルプルと震えながら数秒停止すると、何故か物凄い形相でこちらを睨み付けてきた。

「ツチ、オイ新入り。お前得意料理は？」

「……無い、ですけど」

「は？なんでここまで生き残つて得意料理が無いんだよ？」

そんな事言われても困る。

俺自身それで悩んでいたわけでその答えもまだ見えないからここにいるのだ。

「みーくん、食戦は初めてでしたよね？じゃ、試しにタキちゃんとやってみましよう！」

「いや、勝てるわけないでしょ。相手は十傑ですよ？」

「大丈夫、大丈夫。タキちゃんこう見えて優しいですから。…………

手加減とかしたとこ見た事ないんですけど」

「いや、それ全然大丈夫じゃないですよね！き、木久地お前なら分かってくれるよな！」

完全に俺の求める笑顔でない“笑み”で固定されている魔女と見るからに不機嫌な小さい先輩。

この場で頼れるのは真の遊びと書いて親友である彼女しかいない。

「…………きよ、今日はお花が綺麗ですね！」

「おい、ネクラ巨乳。慣れない事はしない方が身のためだぞ…………クソ、日頃の恨みのつもりか！」

おかしいな。

高校時代の思い出作りの一環として世界の秘境探検回に連れて行つてあげたのに好感度が足りないようだ。やはり、梁山泊二泊三日体験ツアーネ（帰れるとは言つてない）の方がよかつたか？

「先輩。いくらなんでも無茶じゃないですか？タキ先輩相手にいきなり料理勝負なんて…………」

「さつき、あっさりとみーくんを見捨てたくせに言いますね！」

「うつ―――――あ、アレくらいは問題ありません。どれだけ私が酷い目に遭つてきたか知らないからそういう事が言えるんです！」

庭園に備え付けられた厨房で二人が食材の準備をする中、審査役である木久地園果はスケッチブックに何かを書き留めているせりかの車椅子を押しながら彼女の出した無理難題について苦言を呈す。

この学園では十傑と一般生徒の間には計り知れないほどの差が存在する。どれだけ才能の有る料理人が居ようと学園内でたつた十人しか座る事の許されないその席に挑む等、そうそう出来る事では無い。

「うーん、でもそうですねえ。このままだと勝負にならないですか。よし！」

小首を傾げる動作と共にスケッチブックを書き終わつたせりかは意を決したように園果が抑える車椅子を『立つ』。

「せ、先輩!?」

「大丈夫ですよ。私は体力が無いだけで歩けない訳では無いですよ？」

十メートル位なら走れます。じゃ、これ渡してくるので園果ちゃんはそのまままで待つてくださいね？」

突然の行動に驚くが、一番園果が驚いたのはせりかが立ち上がった事では無く、このタイミングで行動したという事実だつた。

難切せりかという女性は誰かの為に動くような人間ではない。こう言えば聞こえが悪いかもしないが、数か月一緒にいる園果ですら彼女が歩けるという事実を初めて知つたし、どんなにお金を積まれても気分が乗らない時は一切行動しない気分屋な一面もある。

そんな彼女が今、思い立つたように書き留めていたものをつい先日知り合つたばかりという榊奴操に自ら渡しに行こうとしている。その事実が園果にとつては何かの前触れだと思えてならない。

「みーくん。どうですか？」

「どうつて、見ればわかるでしよう？作る料理すら決まってませんよ。
…………と、いうか歩けたんですか」

「ふむふむ、ならこれ作つてみてください。ここにある食材で出来る
筈ですよ」

渡されたのはレシピというよりも巨大な図面のようなメモ。

どの食材から調理するかは勿論、調理法や動きなどが細分まで記されていてタイムスケジュールのようだつた。最も、このレベルで日々動いていたらその人間は間違いなく過労死するだろう。

「出来ますか？」

「多分。調理中の行動を出来るだけ正確に制御して、製造業などで使われる工数のように自分の行動を客観的に観測すれば…………そ
うなると、この食材の適正温度とそこまでにいく時間が――――全

ての食材と調理器具を管理すればいけるかな?」

「フフ、私の思ったとおりですね。大丈夫ですよ。みーくんは私を信じるだけでいい。そうすればきっと、望みは叶いますから」

その時、俺の両肩に置かれた手の重みはきっと一生忘れるることはないだろう。

一番近くの天才

初の食戟に向け、魔女の元で腕を磨く榊原だつたがここで一つ誤算があつた。

予選落ちした為殆どノータッチだつたが秋の選抜の本戦は未だ継続中であり、榊原以外の三人は全員何らかの形で関わっていたのである。

現在、榊原操と薙切せりかの二人は秋の選抜本戦の会場である月天の間を一望できるVIPルームの一つに来ている。榊原にしてみれば恐らく単独でこの場所に来る機会は一生無いと思われるのでつい辺りを見回してしまう。

「あのセンパイ、食戟って明日ですか？こんな所でノンビリしていいんですか？」

「うーん、でもこれは私の仕事でもありますし！」

魔女の乗る車椅子の数歩後ろに立ちながら翌日に迫った十傑との戦いという死刑宣告に胃をやられる。

そんな榊原の心境を知つてか知らずか、薙切せりかはオペラグラスを使つて会場の様子を楽しそうにのぞき見ている。

彼等はただこの選抜を見学しに来たわけではない。

秋の選抜という行事自体、学園の最高意思決定機関である十傑評議会に運営が一任されており、出場者の選定から審査員への交渉、競技

の運営まで全てたつた十人の生徒が執り行つてゐる。当然少数精銳である以上、その殆どが裏方に徹して表側には数人しか出てこない

が、それだけ彼等一人一人に振られる仕事量が膨大である証である。

公然では足が不自由ということで通つてゐる魔女にも当然その任がいくつか与えられており、その一つがこの大会内での不正行為の監視である。まず有り得ないが、もしも賄賂やイカサマ等公正な勝負を妨げる行為があれば長い遠月の歴史に傷を付けることになる。

その点で彼女の眼はこの業務には適任だつた。

遠月第十席薙切せりかの翡翠の瞳は全てを見渡す。

操ですら修行して得た“氣”や“オーラ”と言われるものを視覚

に集中してやつと料理人たちの手元が見えるような距離で彼女は審査員であり学園総帥である薙切仙左衛門の細かい表情に変化まで手に取るよう見えるという。

「あ、『はだけますよ』？」

「いや、あのじいさん基本表情の変化がないんですけど…………視力とか関係ないんですよ？と、いうかセンパイ食べる前に当てないでくださいよ」

「ん？ 食べてからだと賭けになりませんよ？」

二人は神聖な食の激戦であろう事か「食の魔王」と呼ばれる老人が料理を食べて『はだける』かどうかという賭けをしていた。

せりかが言い出したことだが、現在全試合で的中という恐ろしい精度を誇つており賭けとしては榊奴の全敗。負け越しているから言うわけではないが、仮にも不正を監視している立場の人間が何をやっているのだろう？

「それに、みーくんの練習相手になつてくれるタキちゃんも十傑ですからね。今はこの選抜の裏方として後輩達の為に汗水垂らして働いていますよ～」

「あ、あの角崎先輩が後輩の為に？に、似合わねえええ」

せりかの台詞に辟易とする。

件の先輩は超が付くほどの実力主義で数日前から始まつた訓練でも一切手加減せずに圧倒的な実力で榊奴を叩き潰しており、お陰様で上達しているのかどうか全くわからないという状況。そんな彼女が後輩の為だからといって笑顔で働いている姿は当然ながら想像できず、溜まつたストレスにより本日の特訓はより一層の激しさを増すと思われる。

「…………もう一人は流石に頼めねえしなあ」

「フフ、本当なら私が相手をしてあげたいんですけど。生憎と料理に腕じやタキちゃんと園果ちゃんの方が上ですかね～」

「そんなんそんなん（謙遜を）――。一人とも言つてましたよ、貴女と戦うと確実に心を折られるつて」

「そうですか～、二人ともそんなど言つていたんですね～」

(あ、ヤベえ!)

雑切せりかの表情は聖母の笑みといつていいほど朗らかなままだが、気の上下にてある程度相手の感情の変化を感じ取ることが出来る神奴にとつてそれが逆に恐怖となつていて。彼女は完全に自らの感情を制御できる人間だ。一切感情の揺れが無いにも関わらず周囲には喜怒哀楽を誤認させるほどの気を放出する事が出来る。それによつて、どんな達人でも彼女の心の中を知ることが出来なくなつてしまつていて。

つまり、今彼女が神奴の言葉で実はブチギレっていて誰もその事実を知ることがなく、水面下でとんでもない事態に発展しているなんてこともあります。そこで得るのだ。こんな達人級の精神遮断技術をどこで覚えたのかわからぬが今の発言がもし気に障つていたとしたら、園果はどうもかくもうひとりの先輩からの至極当然真っ当な報復が待つていて。そうなる前に話題を変えなければ。

「あ、先輩來ましたよ！」

「まあ、本當ですね！おーい、園果ちゃん！」

「ここガラス張りなんで聞こえないんですけどね」

丁度いいタイミングで調理の終わり、審査員席に持つていく木久知園果に感謝する。やはり、親友はこういう時に使えるな。

「さて、決勝戦まで來ましたけど……どちらが勝ちますかワクワクですね♪」

「…………やっぱ、帰つて練習してもいいですか？」

「みーくんは園果ちゃんが心配じやないんですか？」

「別に心配なんてしませんが、何か？」

今から始まるのは秋の選抜の決勝戦。

事実上の今期NO・1を決める戦いだと言つても過言ではない。当然ここまで勝ち抜いてきた対戦相手は疎か審査員達まで曲者揃いであり、ここまで残ってきた園果でも並の料理では勝ち目はないだろう。

「アーッはネクラで氣弱でいつも周りの意見に振り回される困った奴です。でも、それ以上に料理という分野では間違いなく天才ですよ。

少なくとも俺以上にはね」

木久知園果の得意とする洋食は幕末から明治初期にかけて生まれた西洋人のために日本人達が彼らの食文化を研究して作り出されたある意味ではこの国が代表するもう一つの日本食だ。当時の料理人達は西洋料理の食材を揃えることが困難な状況で自分達の持つ知識と発想で独自の進化をもたらした。

西洋の技術を取り入れることはきっと国内外からも大きな反発や奇異の目に晒されることだろう。だが、彼らがいたからこそ今の日本の食文化がある。

それはかつて洋食と呼ばれていたものがフランス料理・イタリア料理・スペイン料理・ロシア料理・ドイツ料理などと国別に呼びわけるのが普通になった現在でも同じでハンバーグやシチュー等この国になくてはならないものとして深く根付いている。

「洋食の天才であるアイツに勝るものはそうそういないですよ。少な

くとも同じ年代にはいなかつた」

「『かつた』ですか。フフ、やっぱりみーくんは面白い子ですね！」

榊奴の発言に珍しく感情そのままに笑うせりかに思わず見とれてしまう。

美しい黒髪も翡翠の瞳もその小さな身体に宝石のように散りばめられながら完璧なバランスで成り立っている少女。角崎タキよりも小さな身体で、木久知園果よりもか弱い腕で、榊奴操よりも強い心で、今という感情を素直に表現した彼女は何よりも価値があると素直に感じる。

「お、俺が言いたいのはですね！つまり、アイツはツ——」

「大丈夫ですよ、私も同じ意見です。みーくんは園果ちゃんをずつと見てきたんですよ？ 中等部の頃から、高等部に上がつてより一層”友人”として、”ライバル”として見てきた。だからこそ、負けることを認めないのでなく、勝つことを疑わないと思える。——

「悔しいですか？ 自分があの舞台に立つていなことが。むず痒いですか？ 一方的なライバル意識だけが増大していくこの状況が」

「——センパイ。俺は、——」

「でも、ダメです。今貴方は私の従者としてこの場にいます。遠月第十席の付き人がこの場を離ることは主である私が許しません。ここで見届けなさい。あの場に立てない屈辱を。ライバルが一足先に次のステージに上がるその瞬間を」

屈託のない笑みを浮かべる思わず見蕩れてしまうような少女の姿は既にそこになく、少女の居た場所には妖艶な魔女が鎮座していた。

獅子は子を崖から叩き落とすというが魔女はどうやら弟子に屈辱と憎悪と絶望を与えて育てるようだ。今更ながらあの二人の言っていた言葉の意味が分かる。これでは普通の人間なら数分言葉を交わしただけで心を折られるというのも納得だ。

結局、榎度操は親友が栄光を掴むという優越感と一番身近なライバルの勝利に対する劣等感という相反する感情を抱きながらその一部始終をその目に焼き付けた。

宣戦布告

表彰式が終わり、秋の選抜という一つの行事が終わる。

それは同時に学生達にとつて新たな試練が目の前に迫つていることとなる。

「実地研修ですか」

「そうです。遠月の学生にとつては初めての本当の食の戦場へと立つ機会にして、その才能がどれだけその場所で役立つか試す機会でもあります。でも、みーくんは何も心配いりませんよ。この行事は別に天才でなくとも突破可能なものとして――――――」

「そこまででお願いします」

「どうしてですか？」

「それ以上教えてもらうとどうにもイカサマをしているようとして――――――」

榊奴の言葉に彼が押している車輪の付いた玉座に座る少女は不思議そうな顔をする。

「ふうむ、成る程成る程みーくんはズルがしたくないと」

「ま、先輩方に特訓してもらっている以上真っ向勝負とは言えないでしううが、一応は俺も男の子なんでそういうのは真剣勝負で挑みたってわけです」

「フフ、わかりました。私が少し無粋でしたね…………でも、この学園に通つてている以上フェアな戦いなんてそもそも存在すると思いますか？」

「…………」

彼女の言葉に押し黙る。

この学園で言う料理人としての実力はその調理技術だけを意味するものではない。食材や調理器具を用意する手腕、数多く存在する課題の真意を見抜く直感は勿論、時には夢を捨てて本来の道とは違うルートを通る覚悟も必要になつてくる。先達からの知恵を借りることもこの学園では必要なことなのだ。何を利用してでも生き残る覚悟。それこそがこの遠月で最も必要なもの。

(でも、そんなことをやつていった先に本当に客の未来なんてものが
あるのか?)

榊奴操の料理は誰かを笑顔にするためのものだ。

笑わせるのと笑われるのと全く違うと誰かが言っていたが、道化になつてでも最終的に誰かが笑顔になれるならばそれでも構わないと思つてこの学園でも生きてきた。

それは今も変わらず、この胸の奥に引っかかるように存在する。モヤがかかつたような思考の中、対面から歩いてくる相手に気づくのが僅かに遅れる。

「みーくん、ストップです」

「え、あ、はい!」

車輪で動くものははじて急に止まれない。そこまでスピードが出ていなくともそれは同じで主を乗せた車椅子が停止したのは相手との距離が一mを切つてからだつた。

「おや、これはこれは薙切せりか様でしたか。秋の選抜での激務ご苦労様でした」

自分達が危うく接触しそうになつた相手はどうやら最初からこちらに気づいていたようでさして慌てる様子もなく言葉を発する。

「ああ、貴方は第九席の――」

「…………須郷圭一ですよ。この前テレビでも特集をやつっていました」

せりかにそつと耳打ちをする。

遠月学園が誇る第十席薙切せりか須郷圭一と第九席が面と向かつて会話する機会は意外と少ない。これは同じ十傑である角崎タキから聞いた話だが、どうやら須郷圭一は同学年であり、自分よりも早くに十傑入りしたせりかに一種のライバル意識を持つているらしく、表立つてではないものの何かにつけて張り合おうとするらしい。

その度に他の十傑が止めに入るらしいが、残念ながら今ここにそういった助け舟はない。

「どうやら相当お疲れのようだ。従者に車椅子を押させるほどの仕事ならば私がやりましたのに」

「フフ、大丈夫ですよ。私は元気いっぱいです」

「ほう、それはそれは。明日の食戟が楽しみです。…………して、聞く所によると私の相手は貴女ではなくその配下の者が務めるとのことでしたが、角崎タキと木久知園果のどちらを出してくるのですか?」「ううん、そうですねえ。十傑のタキちゃんが出ちやうとややこしいですし、園果ちゃんは今日はお疲れだったので休ませてあげたいですしぇ」

須郷の探りを入れるような口調をのらりくらりと躊躇せりか。

第十席である彼女は自身の食戟に代理人を出すことで有名だ。その筆頭がある二人であり、角崎タキが十傑入りしたのもその実績がデカいという噂まであるが、彼女の場合はそんな事がなくても間違いなく実力で入っていただろう。そういうた噂が流れるのはいつの時代も恨みや僻み、妬みなどを持つ者が少なからずいるということだ。

「では、まさかご自身が?」

「いえいえ、私にはもうひとり右腕がいるんですよ?」

「右腕? ああ、後ろの彼ですか。見たところ一年生のようですが……ふむ、おかしいですね。彼を今回の選抜で見た覚えがない」不意に話題が他ならぬ榎本のモノへと移り変わる。

「みーくん、ご挨拶を」

「えーと、一年の榎本操です。秋の選抜では予選落ちでした。先輩に見覚えがないのはそのせいいかど」と
「予選落ち。――――成る程、せりか様は私の実力に疑問を持つているようだ」

「値踏みをするような視線から吐き出されたのはそんな言葉だつた。
「ぎもん? 何の事ですか?」

「今回の食戟は仮にも十傑同士の対決だ。それに実績のない一年生を出すとは。そう思つても私に落ち度はないと思ひますが」

「「「」もつともです」という言葉を危うく呴きかけるほどの正論だった。

十傑相手にはせめて秋の選抜で決勝辺りまで残った生徒を出せと言ふ須郷の主張は最もだろう。

榊奴としてもせめて木久知園果のサポートくらいで出させてくれと再三言つて いるところだ。

「それに、」

須郷は言葉をとぎるよう 咳払いをすると皮肉を込めた笑みを浮かべる。

「今年の一年はどうやら不作のようだ。知つていますか？ 予選のAブロックでは最初の方で数名が高得点を出したものの、それ以降は誰ひとり60点すら満たない結果だったとか」

「つ？」

「仮にも学年の選抜たるメンバーがそんな有様では遠月の未来も心配ですねえ」

「うーん、そうでしようかあ。みんな頑張つていたと思ひますよ～？」
「頑張ればいいというものではないでしよう？ 仮にも遠月の学生がそんな体たらくでは示しが付きませんよ。この分では我々の卒業した後の十傑のレベルが落ちないか心配ですよ、私は」

須郷の瞳は既に榊奴を見ていなかつた。

その言葉の全てはただ目の前の薙切せりかとその不作の一年の頂点に立つた木久知園果に向けられている。

「須郷先輩。訂正してください」

「…………何だ、君は」

須郷の前に立つように二人の十傑の間に割つて入る。

既に榊奴の事等眼中に無い須郷は突如視界に入ってきた羽虫を煩わしく思うようにその目を剥く。

「ぶつかりそうになつたことは謝ります。でも、今の発言は取り消してください」

一連の会話でこの男がどんな人間なのかは理解できる。自分の実力と実績を元に他者を貶めることで優越感に浸る典型的なタイプ。厄介なのはそれが実際に確かに確かな実力を持つて いることで意外にもこの徹底的な実力社会である遠月にはこう いう者が多い。

だから、自分がどう言われても事実である以上それはどうでもよかつた。でも、彼らは違う。秋の選抜を勝ち残り、有終の美を納めた

彼らは――その頂きに立つた木久知園果が不当な評価を付けられるのを黙つて見ていられるほどお人好しではない。

「発言を取り消せだと？・小物がツ、少し自分の立場がわかつていよいだな」

「自分でもそう思いますよ。でも、発言は取り消してもらう」

静かに睨み合うこと数秒。

堺があかないと思つたのか須郷が視線を逸らす。

「…………せりか様は部下の躊躇が苦手なようだ。そういうえば、角崎嬢も少々品がありませんでしたね」

「いや、それは元々ですよく？タキちゃんはヤンチャさんなので」

「ツ！・アンタ、事実だからって言つていいこと悪いことがあるぞ！」

まさかここであの先輩の話題まで出すとは相当性格が悪い。

角崎先輩はあれがいいんだ。あれでお嬢様口調だとギャップで萌えるだろうが。

「まあまあ、一人ともそれくらいにしませんか？ここは遠月の学生らしく食戦で決着をつけましょう」

「…………ああ、そうでしたね。彼が明日の相手ですか。それは楽しみだ、もし万が一勝てたら発言は取り消しましょう。ですが、」

「そうですね。対価を追加してしまった以上仕方ないでしよう。こちらも明日掛けるものを増やしましようか」

須郷の嫌味な笑みを受けながらも涼しい顔をするせりかが次の瞬間口にした言葉は正気を疑うものだつた。

「まずは、私の十傑としての席とここ数年で書き留めたレシピですね。後は、私が所有するこの学園の敷地と設備、学外にある私が援助しているお店が百か二百程あるのでそれと――」

「な、何を言つている？」

「え？明日の食戦に賭ける私の対価ですけど？まだ必要ですかあ？なら、雍切としての権限も付けましょう！」

彼女の言葉に須郷も神奴も完全に言葉を失う。

賭けられたものの総額は数億では足りない程でどう考へても個人が口約束で交わしていいものではない。

「そういう事ではないでしょ！貴女はご自分が何をしているのか理解できているのか！遠月の食戟は絶対だ。それは薙切といえども蔑ろには出来ないんだぞ！」

「どうしてそこで薙切が出てくるんですか？ああ、勝手に権限を賭けたことについては心配しなくても大丈夫ですよ？薙切というのは食については絶対ですから全て自己責任で済みますし！」

「ツ――わかりました。ご自分が言つたこと後悔せぬよう」

「何を言つているんです？私は対価を示しましたよ。次は貴方です。えーと、第九席の人。私のお友達を侮辱した事、対価はちゃんと払つてもらいますよ？」

日が沈むと同時に魔女はその笑みを濃くしていった。

一瞬の出来事だった。

先程まで憎らしいと思つていた須郷が哀れに思うほど一方的な条約の締結。

ニコニコと笑う彼女の隣で榊奴は事が終わるまで魂の抜けた人形のように立ち尽くすしかなかつた。

「あ、アンタ何やつてんだ！」

榊奴にしては珍しく、というより初めて魔女に対して暴言を吐く。掛かつた時間はモノの数分。

たつたそれだけでこの魔女は一度の食戟で遠月第十席と第九席が互いに持つ全てを賭ける勝負を括りつてしまつたのである。

「え、だつてムカツクじやないですか。あの人絶対性格悪いですよ」「アンタほどじやない！っていうか馬鹿だろ！なんであんな条件をツ」

薙切れりかが付けた条件は須郷圭一の発言の撤回と謝罪。

ここまでではいい。

だが、その後に彼の第九席の地位をそれ以上の条件を提示して殆ど強制的に賭けさせたのである。

「ば、馬鹿!? わ、私そんな暴言初めて言わされましたよ! 馬鹿? ばか? バカ? ひ、酷い……」

「もうそんな猫被つたつて騙されませんよ。今日という今日はどことん言つてやる! アンタ馬鹿だ!」

「に、二回も!」

だつて、おかしいだろう。

須郷としては彼女が提示した条件は破格のモノだつたし、明日の相手は彼女自身ではなく名前も知らない一年だ。断る理由など当然ないし、彼の性格から言つて逃げることなど絶対出来ないだろう。

そんな雁字搦めの状況を作り出すためだけにこの魔女は自分の持つ全ての手札を賭けたのだ。一体どこの賭博師だ。

「…………つて、本当に泣いてるんですか？」

「あ、当たり前です! 馬鹿なんて生まれて初めて言われたんですよ! 傷つかないわけ無いでしよう!」

予想外の事態だった。

そこにいたのは豪胆な賭博師でも妖艶な魔女でもなく、たつた一言で驚いたように目頭に涙を一杯にためる一人の幼い少女。

「な、何泣いてるんですか。馬鹿なんて普通に日常会話で飛び出すでしょう?」

「そんな日常知りません! 私の世界にそんな当たり前は存在しないんですよ!」

いつもは真意を悟らせない魔女が感情を剥き出しにして反論する。翡翠色の瞳が真つ赤に染まるほど泣くと、迫力も威厳もない目でこちらを睨みつけてくる。

「いいですかー！私はあなたに最高の剣を用意します。あなたはそれであのすナント力を打ち取りなさい！これは命令ですよ！」

「え、えええ

そこにいたのは紛れもなく、見た目相応の子供だった。

全ては手の上で

『食の殿堂に集いし料理人達が、食材と共に腕を振るい合う。此処、月天の間で今年何度目かの食戟が本日執り行われようとしています。実況は放送部の早津田みるるがお送りします！そして解説は現遠月第三席であるこの方！』

『というか昨日まで秋の選抜で働いてたのになんで私ここにいんの？ 実家に帰つて掃除がしたいんだから…………』

『そう言わずお願ひしますよ。あ、実況席にあるいなり寿司は好きに頂いていいそうですよ？』

『それを先に言つて欲しいから。三年の矢成音孤』

巨大な会場に響き渡るのはなんとも個性的な二人の声。

片方はこの場に身内がいたならば絶叫しそうなほどのキャラ作りをした桃色の髪の放送部のエースであり、もう片方と言えば赤い着物を羽織り頭から狐の耳を生やした十三歳くらいの少女である。

先日まで執り行われていた学園の重鎮たちが列席する式典じみた大会とは打つて変わつていろものな雰囲気で始まるのは第十席と第九席による十傑同士の食戟。

「ふ、まさか月天の間を貸し切るとは思い切つたことをしますね」

「十傑同士の対決は此処じやないんですか？私の思い違いですかね？」

「…………あくまでその一年生を遠月第十席としての代理人として進めるおつもりですか。いいでしよう、夢々後悔なされぬよう」

イラついた様子の須郷が自らに与えられた調理場へと去つていく。

昨日の今日で変更された食戟の開催地点が寄りにもよつてこの場所だ。無理もないだろう。

月天の間に集まつた数百人のギャラリーを見てよくもまあこんなに集まつたものだとも思う。

それだけ十傑同士の食戟が貴重だと取れるが、この学園での生き残りの数を計算してみると明らかに多いのは気のせいだろうか？…………これ以上考えるとヤバそうな気がする。放送部とかどうやつ

て課題を生き残っているのか不明だし、親族とかそういうのが集まっていると考えよう。

「緊張しているんですか？」

「まあ、以前やつたサークルでの命綱無しでやる空中ブランコからの空中三回転に比べればマシですよ。負けた時のリスクは誰かさんのせいでこつちのほうが凄まじいですけどね！」

「ま、まだ言うんですか!? 私は謝りませんからね? 悪いのはあつちです。あの第九席の――誰でしたっけ?」

「…………もういいですよ、勝ちますから」

「勝てますか?」

「勝つしかないし、勝ちますし、勝てると思います。何せこつちは親友たちを貶されて、先輩の全てが懸かっていて、男の意地がある。こんだけ条件が揃っているのに負けることを考えちゃそれこそ台無しえよ?」

今日この日のために修行をした。

レシピは全て頭に入っている。

食材も器具も全て二人で用意した。

条件は揃つた。だからこそ今、自らも戦場へと立つ。

『両者準備に入つたようですね!』

『見ればわかるから』

会場の熱気が高まる中、実況席の二人のテンションは対照的だった。

遠月でも珍しい十傑同士の対決に胸を躍らすみると食戟 자체には興味がないと言わんばかりの音孤。

一般生徒であるみるるから見て十傑というのは殆どが未知の存在だ。新聞部が作成する『遠スッ』や学外の情報誌で顔出ししている者

を除けばその存在は謎そのもの。顔は疎か名前すら知れ渡つていな
いというのが殆どだ。

『うーん、第九席の須郷はこの遠月を牛耳っている薙切家程じゃない
けど超が付く金持ちの一族で今年十傑に入つてから食戟で勢力を伸
ばしてくるからなー』

『食戟で?』

『そ、この学園を卒業出来るのはひと握りだけど一応在籍していただ
けで外では相当有利だから。アイツはそういう連中に片つ端から食
戟を仕掛けて配下にしているんだよ。在籍していた事実だけあれば
いいってことは遠月において絶対のルールである食戟の結果を蔑ろ
にして遠月に在籍してた事実そのものを抹消されることだけはみん
な避けたいからな。だから、この学園にいるうちに配下を増やしてお
けば卒業後の栄光は約束されたも同然つてわけ』

『そ、そんな理由が』

音孤の言う話ではこの遠月の悪しき習慣らしく毎年こういうゲー
ムが有力な生徒の間で流行つていてるらしい。

その情報が外部に漏れていない時点で十傑の情報操作能力の高さ
が伺い知れるし、この場で大人数に向けて説明しながらも飄々として
いる音孤の心臓の強さに驚かされる。

『あ、私は卒業したら実家の神社で祀られるだけだからそんな事して
ないよ?』というか、今の十傑でこんなくだらない事してるのは須郷だ
けだから。金の力、権力、数の暴力で【3K】なんて私たちの中で呼ば
れているくらいだし。アイツを嫌つてない奴なんて第一席サマとそ
こにいる第十席くらいじやないのかなー?』

『第十席というと………』

みるるの視線が第九席と対峙している少年へと移される。

『あ、違う違う。そっちじゃなくて車椅子の方だから。あれは代理人
でしょ』

『代理人?これ十傑同士の食戟ですよね?』

『ま、普通はそう考えるよねー。でも、本当の十席はあの車椅子でほく
そ笑んでる性格の悪いチビの方で、あつちの代理人は一年生じやない

かな。確かに、私が担当していた秋の選抜のAブロックで見たような気がするし』

『す、すいません。私の資料にはあの生徒の情報が何もないんですが……』

みるが今日の台本をひつくりがえすような勢いで捲る中、音孤が既に4個目のいなり寿司に手を出す。

『ま、予選で落ちたしね。普通の子だと思うよ？…………氣とかオーラは別にして』

音孤は手で社を作るようにして覗き込みながらそう呟く。

こういった事は第六席の豪雪山の専門だが、生憎彼は「季節の変わり目なので山で遭難するものが多い」という今年既に三回くらい聞いた覚えのある理由で一週間前から遠月の裏山に籠もりつきりだ。

『ま、別に関係ないでしょ。あの魔女に関しては』

『魔女…………たしか、第十席の二つ名ですよね』

『そ、私も大概だけどアイツも相当だからねー。だつて、私同期なのにあいつが自分で料理しているところ見たことないもん』

遠月の怪物

須郷圭介という人間は間違いなく天才だつた。

一年時の宿泊研修は苦も無く突破し、秋の選抜で好成績も残した。スタジエールでもその才で存分に成果を上げている。二年時も同じく、最終学年になると同時に十傑入りするのは彼にとつて至極当然なことだつた。

実家も難切程ではないにしろ、古くからの名家であり遠月で生きていくうちに須郷についてくる者達も当然のように過ぎていく。卒業できるものは毎年片手で数えるしかいないという遠月を卒業するにふさわしい存在だろう。

「はい。では、定例の十傑会議を始めますね~」

学園内に存在する会議室にこの遠月の頂点に立つ料理人達が一堂に会する姿は正に圧巻の一言。須郷でさえ、十傑の座について初めてこの部屋に足を踏み入れた時は若干の緊張があつたほどだ。

しかし、

「相変わらず揃わないねい。一席サマは当然として、二席と兄弟もないとは……過半数ギリギリじゃん、これ」

「はーい、二席さんはさつき学園執行部に追いかけられてましたー」

三席の巫山戯た格好をした少女に返答する形で応えるのは明るい声ながらも相変わらず暗闇から這い寄るような笑みを浮かべる八席の少女。

彼女達の言うとおり、現在この部屋には須郷を含め十人いる筈の遠月十傑が半數近くしか存在しない。念の為に言つておくが、遠月十傑評議会とは学園の最高意思決定機関でありその決定には講師陣といえども逆らう事が出来無い程の重みがあり、それらが一堂に会する會議ともなれば無断で休むことなど到底許されることではない。

「最近は大人しいと思つてたんですけどね~?」

「なんでも昔の仲間が来てなんやかんやあつた内に昔の熱い気持ちが戻つてー、最終的にどこかの部室を爆破していたそ�でーす」

「まあ、流石ですね」

(おい、それは普通に刑事事件ものではないのか?)

須郷もここに来る途中それらしい発見を見たが
明るいのは宁ろ詰て済むようなものではなかつた。

それなのにもかかわらず、八席の報告を聞いた黒髪の少女はまるでやんちやをする子供を見るような様子で微笑むと何事もなかつたかのように会議を進行する。

「では、ここにいるメンバーだけで始めましょうか。今日のお茶菓子は武蔵くんのお手製ですよ」

「山でなつた「シ」で作つかないが
わからんが、良ければ食べててくれ」

そう言つて立ち上がつたのは二mを超える巨漢。

第六席であるその男は大きめのパイを手刀で次々と人数分に切り分けていく。普通ならばそんな事をすれば潰れてしまうことは必至だが、その切られた断面は業物の包丁で寸断されたかのように一切の型崩れも存在しない。

（何事かの口で、普通に面倒の、三つ、二つ、一つ、

目の前で当たり前の、珍しい起こりが異常な光景で思れて、聞き流し、そうになつたが、このパイの材料がなつたというかの山の異常な生態系も問題だ。

遠月学園の敷地内に存在するその山へ以前銃で武装した護衛十人を引き連れて入つた際には奥地へ迷い込んだ瞬間ものの数分で全滅した苦い経験がある須郷からしてはそろそろあの山の処遇について話し合うべきだと言わざるにはいられない。

一本目の議題について私が

ぞ?
」

「は？ 一つしか違わないのに先輩すんなよ、ババア」

「…………うぜえ」
「ば、ババア!? 私はこう見えてもれつきとした高校生だから! もう成長止まつても別に年取つてるわけじゃないんだからな!」

須郷の声はパイを巡る女子達の喧騒にかき消される。

普段ならば、すぐさま配下の者がこの不届きな者達を黙らせるところだが生憎とこの部屋には十傑メンバー以外の立ち入りが制限されている為、今はどうすることも出来無い。

「フフ、相変わらず取り合うほど美味しいですね～」

「…………喜んでもらえて何よりだ」

「では、この調子で最近の出来事についてでも話していきましょうか

」

須郷が腹立しさに拳を握り締めている間にも黒髪の少女の言葉によつて会議は思わず方向に転がっていく。

「…………先日山から湧き出たエネルギーに釣られて地底から爬虫人類を名乗る存在が出現した。…………一度は拳を合わせることになつたが、最終的には互いに鍋を囲み合い和解に成功した為危険はない」

「最近の東北の乾季だけどさー、なんか遠月学園^{ウチ}に雨神が間違えて紛れ込んでたみたいでね。丁重におもてなしして返したからじきによくなると思うぜー」

「なるほど、では今年の農作物への被害は台風さえなんとかすれば問題なさそうですね。それと、武蔵くんもいつもご苦労様です。彼等については雍切も把握していたのですが先に動いてくれたおかげで対した被害もなく済みそうですね～。お祖父様が今度お礼をするとのことですよ？」

「…………気にするな。…………いつものことだ」
(なんだ!?「いつらは一体何を話し合っている!?)

この日本屈指の名門料理学校遠月茶寮料理學園に似つかわしくない会話に須郷は彼等の正気を疑う。しかし、運命の悪戯かこの場にいる人間は同じくおかしなものを見るような目をした角崎タキを除いては皆この話題に注目しているようで疑問を持った須郷はいつもとは逆に集団内の数の暴力によつてその他の意見として切り捨てられてしまう。

そんな不条理に嘆きながら、新参者にして第九席という己の立場に

ここにいるもの全てに認めさせる力が欲しい。

「では、今日の話し合いは秋の選抜についてでしたね」

須郷が望みながらも手に入れることが出来ず、いる力を持つ第十席である車椅子の少女の号令と共に会議は進行していく。

（私はこの時を待ち望んでいた。力を蓄え、あの女に一矢報いる日を
ずっと待っていた！）

遠戸第九席である須郷圭一の眼には最初から対戦相手である第十席薙切せりか以外写つてはいない。

「全く、本当に眼中にないみたいで参るよな……別に事実だからいいんだけどさ」

既に調理に入つた須郷の姿を横目で見ながら榊奴もまた目の前の食材に視線を落とす。

『世界三大珍味』と呼ばれる三つの食材。

一般的にキヤビア、トリュフ、フォアグラと呼ばれるこれらは本日の食戟のテーマにして第九席須郷圭一の得意とする料理だ。調理台に置かれたそれらは明らかにほかに用意した食材とは別格の異彩を放つており、料理人としての本能が何かを囁きかけてくる。

「二つだけならまだしも三つ一遍に使つた料理とは贅沢つていうよりも怖いもの見たさの方が上なんじやないのか、これ」

事前に須郷のやり口を同じ十傑である角崎から聞いていたものの実際に目の当たりにすると如何に効果的なのかわかる。

今回のテーマ選定についてはこちら側にこれといった得意料理も苦手料理も無い為、自然とあちらの意見が通つたが聞く所によると須郷は時に十傑としての豪権を使って、時に食戟を挑むしかない状況に相手を追い込むことによつて自身の得意料理へとあらゆる手を使つて誘導するらしい。

これは食材を自分達で確保しなくてはならない食戟のルールを逆手にとつた戦法でどの食材も高級食材に数えられるものである以上、対戦相手は今回の榊奴のように知り合いの伝手で安く仕入れるという方法でも使わない限り、まず満足な食材も揃えることが出来ず敗北が決定する。例え用意出来たとしても須郷のモノは金と権力に物を

言わせた最高品質だ。並のモノではまず歯が立たないだろう。

「…………極めつけは」

会場をグルリと見渡す。

少し離れた位置にいる薙切せりかと目が合う以外は誰も彼もが榊奴に対する声援のかけらすら送らない。

完全なるアウエー空間。

ここにいる者は全て須郷が集めた人間であり、当然ながら榊奴に味方する者は存在しない。全身に刺さるような奇異の眼は大した実績もない一年でありながら十傑同士の食戦という大舞台を任せられた榊奴を品定めするかのようで既に所々嘲笑が混じつていて、誰ひとりとしてこの愚か者の敗北を疑っていないのだろう。

「ここでの笑いどころは他でもない俺自身が一番場違いだつて自覚している点だよな。全く、どんな不幸が積み重なればいきなり十傑とやり合うことになるんだか――――――」

溜息と共に張っていた方の力を抜く。

食材の質も、料理人としての経験や才能も完全に負けている。声援なんて一つもないし、誰も勝てるなんて思っちゃいない。

きっと、数日までの自分ならこの時点で諦めている。学園を去る準備すらしていただろう。

でも、今は違う。

薙切せりかと出会い、角崎タキ直々の指導を受け、木久知園果の優勝を間近で見た。

そしてなにより、目の前の男にその思い出を汚された憤りがある。実際に言われるまで思いもしなかった。自分がまさかこれほどまでに簡単に焼きつけられようとは想像だにしなかつたことだ。

それでも、その時点で覚悟は決まっていた。

「例え、全てで負けていようと――――――俺にはあの人から貰ったレシピがある。それを生かすやり方を角崎先輩から教わった。そして、証明するんだ。木久知園が不作なんかじやないって、あいつらは間違いなく天才だつて証明してやる!」

たつた一つ必要な条件

「私達、本当に行かなくていいんでしょうか？」

「別に負けたって多少領土が取られるだけだろ？それくらいなら、構うことねえよ。大体、最初に無茶な提案をしだしたのはあの先輩だろうが」

「…………もしかして、タキ先輩まだ相談無しに食戦の相手を決められたの根に持つてるんですか？」

「ウツセー、お前は黙つて荷物持つてろ」

遠月十席にして薙切せりかが率いるサークルの一員である角崎タキと木久知園果は月天の間で繰り広げられる食戦には参加せず、学園からバスで一小時間ほどの距離にある市街地で買い物をしていた。

十傑の一員ともなれば電話一本、メモ書き一枚で古今東西の食材を集めある程度の権限はあるのだがせりかもタキもあまりその方法は好みではない。自分で調理するものはどんな達人に任せせるよりもまずは料理人である自分で見た方が確かなものを作れるし、目利きという観点で言えば薙切せりかという少女に勝る人間をタキは知らない。

『ううん、この食材は少し泣いていますね～。折角の料理が可哀そうです』

『なんだ、テメエー…………』

初めて彼女に出会った時に言われたその一言は今でも覚えている。

自分よりも一つ年上の少女は秋の選抜の会場で何故か卒業生や学園総帥に混ざつて審査席にいて、学園側が用意した食材を一目見てそう下した。料理人にとって目利きは命だ。当然その時点のタキもそれはよく理解していた。だからこそ、その時正に手を伸ばしかけていた食材を傷物と称した彼女の言葉はタキの料理人としての技量を疑つてのモノだと受け取つた。

結果から言えば薙切せりかが正しかつた。

あの場で彼女が言いださなければきっとタキは十分な実力も出せずに十傑に入るのももう少し遅かつたことだろう。

だが、それは同時に自分の目利きの腕が決定的に彼女に対して劣つ

ていたと言う事を証明してしまった。選抜で結果を残し、その後も実力で全てを勝ち取りながらもその敗北の記憶は拭えない。

ただの一回。

その一回で角崎タキは薙切せりかに対してもうしようもない敗北感を植え付けられた。

それと同時に手も触れず、匂いすら嗅がずに、食材をその翡翠色の瞳で見るだけで良し悪しを断じる正に慧眼というに相応しき彼女の瞳に一種の憧れを抱いた。

この世界はどうしようもない実力社会だ。

実力があればどんなに若くてものし上がる事は出来るし、逆に実力が無ければ一生成り上がる事は出来ない。

その世界で圧倒的な才能を持つ彼女は今も第十席という不相応な地位に納まっている。この完全競争社会である遠月で、まるで何かを待つているかのように勢力争いには加わらず、気付けば形式上とはいえタキの方が十傑の中で上位に来ていた。

しかし、それで彼女を追い抜いたと考えられるほど能天氣な人間では少なくとも今の遠月十傑は務まらない。例え序列が上でもあくまでそれは学園に対する貢献度や成績の上でのもので料理人としての腕を証明するものでは無い。もし、そんな制度だつたならば十傑の順位は第一席と第十席以外は常に変動している事だろう。

それ程の実力を持つ人間がつい先日会った一年生の為に懸々舞台を用意した。

それは薙切せりかという壁を越えようとするタキにとつて予想外の出来事であり、到底認められるものでは無かつた。

「……やっぱ、気に入らねえ」

「やっぱ気になります」

「あん？」

「やっぱ見に行きましょうよ！」

大量の食材をその両の手で持ち、ふらついている園果もある一年の知り合いだという。友人を心配してかその顔は優れない。相手は仮にも十傑の一人だ。その憂慮ももつともだろう。

それでも、タキはその提案を認める事は出来ない。

「お前、この買い物が何のためにあると思つてんだ。今なら私だって
アイツが勝つくらいは『見え』てんだよ」

この一週間、一人である少年の相手をしたからこそ角崎タキは自分達や魔女のような圧倒的な才能は無くともその真っ直ぐな瞳を持った少年の勝利を疑うようなことはしなかつた。

「クソッ、負けるわけにはいかねえんだ！」

須郷との実力の差は明らかだつた。

仮にも学園の頂点の一角である三年生と同学年ですら平均の位置しか狙えない一年生。才能の差もさることながら二年の歳月というものはどうしようも無く深い溝となつて立ちはだかる。

榊奴にとつて唯一勝てる要素があるとするならそれはあの魔女から与えられたレシピに他ならない。

しかし、それこそが今までに榊奴を追い詰めている最大の要因だった。

『おーっと、榊奴シェフの動きが乱れる！ここで須郷シェフのリード
が広がってしまうかああ？』

(――マ、ズイ！)

焦りから既定のタイミングから僅かに遅れる。

そのズレは本来なら他の作業で修正すればいい。

だが、今ここで調理しているのは自分が考えた手順によるものでは

無い。

これらのタイミングはあの薙切せりかが考え出したもので榊奴の眼から見ても全てが完璧、神業ともいえるレベルで整えられた一切無駄の無いレシピの一節だ。一つの遅れが全体に様々なズレを齎し、最終的には取り返しの付かない事態となってしまう。そうなれば、最早勝負どころではない。この食戟で背負った薙切せりかが持つ地位も名誉も、彼女が信じてくれた自分自身も全て無に帰すことになる。（須郷先輩の動きからして、俺がレシピを完全再現しても勝てるかどうか五分五分がいいところ……。これ以上ミスをすれば――

——確実に負ける！）

額を汗が伝い、包丁を握る手が震える。

十傑に勝ると言われるレシピが今は天より垂れた一筋の蜘蛛の糸のようにか細い希望に見えてくる。この糸の他に縋るものは無く、本來こういった場合に頼るべき自らの経験や閃きなどが完璧に整えられたレシピを切り落とす諸刃の剣となる。料理人として積み重ねてきたものが全て自らの足枷となるこの状況は悪夢というしかない。

レシピ通り作っても勝てるかどうかわからない。だが、その武器を捨てて経験や勘に頼ればこの相手には敵わない。十傑である須郷圭一は榊奴よりも今回のテーマを熟知し、研鑽を積んでいるのだ。

もし、同じ年月を懸けていれば話は違つただろう。二年という歳月はどうしようもない差を生み出していて、それを埋める術は頭の中に刻み込んだレシピ以外に存在しない。

どうしようもない絶望が直ぐそこまで迫っている。

「あの薙切せりかの代理人というので多少警戒していたが、全くの期待外れだつたようだな」

「ッ！」

その声は対面する須郷圭一からだつた。

二人の料理人の距離は調理台を挟んでいるもののそれ程の声量を出さずとも届く程度で、須郷は会場にいる他の人間に聞こえないようなトーンでこの日初めて十傑である薙切せりかでは無く、代理人の榊奴操に話しかけてくる。

「いやはや、どうして君のような人間が彼女に選ばれたのか理解に苦しむよ。角崎タキや木久地園果ならば理解は出来る。彼女達は確かに天才であり、それらの才能が完全に開花する前に手元に置いた彼女の先見の明には脱帽ものだよ。だが、君に関しては正直解せないな。実力も無いかと思えば今日の前にいるというのに然したるプレッシャーも感じられない。一体彼女は君の何に引かれたというのだ?」

その問いに榊奴は答えられない。

自分以外の三人に関して同じ質問を投げかけられれば即座に論破し、食戦が実行不可能にする程度の解答を用意する事が出来るだろう。しかし、たった今投げかけられた疑問はそもそも榊奴自身が今日まで悩み続けてきた問題そのものだ。

実力は勿論、料理に対する情熱もこの学園で言えばそこまで強いモノとは言えない。榊奴の目指す到達点である“誰かを笑顔にする料理”は結局のところ今の居場所でなければ到達できない場所ではない。場所と方法を選びさえすればきっと手に入るようなもの。

「…………ふん、何も言い返せんか。もういいだろう。これで終わりにしてやる」

須郷が初めて今回のテーマである食材の一つを手に取る。

彼の手元には文字通り下ごしらえのすんだかのようにメインとなるべき食材の立ち位置が明確に示され、調理人自身の手でその場所に確かな輝きを放つ主役が降臨する。

「見るがいい、これこそが眞の食材というのだ。料理人にとって常に最高を出す事は基本以上の意味を持たん。この須郷圭一という人間は常に精進を欠かさず、誰であろうと手は抜かない。だからこそ我が家^{スペシャルティ}必殺料理は食材の質でこそ決まる!紛い物では到達できない極みを今こそ、この場に集まつた者達に見せてやろう!!」

主役の登場と同時に張り上げられた須郷の声に会場中から歓声が沸く。

それだけの美しさがそれらにはあつた。榊奴の用意した者がニセモノに見えるほどの輝きが、自分達こそがホンモノであると証明するほどの存在感。

それを前にして、榊奴操が取れる選択は先程と変わらない。

やる事は変わらず、やれることも無い。何もしていらないのに溝は数分前よりもはるかに深いモノとなつていた。

『あーあ、やつちやたねえ』

『こ、これはどういう事でしよう？ 私には榊奴シェフの食材と須郷シェフの食材が全く違うものに見えるのですが！』

隣で大声で驚く実況とは打って変つて同期のあまりの大人げない行動に頭を抱える矢成音弧は色々言いたい事は有つたが極めて冷静に自分の務めをすることとする。

『まず、食材についてだけど、これはただ単に質によるものだねい。牛肉なんかにA5なんかのランクがある様に高級食材にもそれぞれランクがあるんだよ。そういうやなきやファミレスなんかでトリュフなんか見かけないだろう？ そこにあるのはピンからキリまである食材の中から金や須郷家が代々積み重ねてきた食の供給ライン、遠月十傑としての人脈全てを駆使して集めた逸品だ。断言してやるよ、今この場において須郷のモノに勝る食材は他に無い。間違いなくこの地球上で最高品質の食材だよ』

音弧の宣言と共に再び会場が湧き立つ。

何せ、遠月に通つていても授業以外で触れる機会なんて早々無いモノばかりだ。それでいて料理人として須郷の腕前は保証付き。審査員は勿論、この場に集まつた者の中には過去に須郷に食戟で負けた者も数多く存在する。そんな彼らが嘗て恐怖を感じた料理を今回は一人の観客として再び圧倒的な状況で視聴出来るのは敗者としてもそ

れほど悪いものでは無いだろう。

（一応、性格がもう少しマシなら人望もあるのかねい。
…………とは言え、須郷が必殺料理^{スペシャルティ}を使つたつてことは勝敗は殆ど
決まつたも同然かー）

須郷圭一という男はあれでいて容赦がない。

相手を自分にとつて価値の無い存在だと見下すことがあつてもそれを理由に手を抜くことなど決してしない。刃向う弱者は常に全力で完膚なきまでに叩き潰す。そうしてこの遠月で作り上げた勢力は十傑の中でも最大級のモノでもしあと数年あればもつと上を狙えた人材だと音弧は評価している。

今回の勝負も当然手抜きなど一切行わず、考えられる限り全力で食戦に臨んだと言う事は想像に難しい事では無い。それこそ、が第九席須郷圭一と第十席薙切せりかの違いであり、今回の流れを結果付けてしまつた要因だ。もし、須郷が相手が一年生だからという理由での手の人間にありがちな油断をしたり、魔女が最初から本気で潰しに掛かればもつとマシな結末に変わつていただろう。

しかし、例えどんな未来が予想できても傍観者であり、常に公平な立場である音弧にはどうする事も出来ない。

未来予知はある魔女の領域であり、未来を変えるのはそれ相応の器が必要だ。

「結局後は、あの少年次第かねい」

もう一波乱ありそうな会場を眺める音弧は憂鬱な表情で本日四十七個目となるいなり寿司に手を付けるのだった。

「うん、ちょっと予想外ですかね？」

第九席の食材による必殺料理^{スペシャルティ}の完成という自身の想定を超えた動きと本人の思いどおりにすら動けていない榊奴操という二つのイレギュラーに対面しながらも雑切せりかは周囲の不愉快な歎声^{雜音}と嘲笑^音に多少眉を顰めながらも余裕の表情を崩していなかつた。

彼女にとつてあくまでこれは想定内。

この程度のイレギュラーはハピニングの内にも入らないものであり、思い描いた未来^{レシピ}の一つでしかない。

ここまでもそうだつたし、これからも変わらない。

この会場に入つた時から全ての人間が、^{食材}状況^{調理器具}が、雑切せりかの作り上げたレシピによつて料理という完成形へと進むことが決定している。

どんな状況にも対応できる完璧なレシピなど存在しない。

少なくとも遠月第十席を冠し、魔女の名を欲しいがままにする雑切せりかの描き出す『黄金のレシピ』と呼ばれるものはそんなものでは無い。

誰よりも料理では無く、そのレシピを創る事に精通している彼女だからこそ出来る戦い方がある。

あらゆる状況に対応するならばそれだけの数のレシピを用意し、料理人に叩き込めばいい。

自らの想定を超えた料理が目の前に現れたのなら――

「さあ、それではみーくん。【プランB】といきましようか」

車椅子に収納した画板を取り出しながら発したその声は小さく、例えその場にいたとしても聞き取れるようなものでは無かつた。

それでもいつも通りの笑みを浮かべながら魔女は確信を持つ。

選んだ理由など然程大きなものでは無い。

ただあの少年が彼女の望みに応える“程度”の才能を持ち合わせていただけ。

（ほうら、目が合つた）

創り上げるは至高のレシピ

その変化は一瞬の内に起こつた。

圧倒的な実力さと会場全体を包み込む重圧に飲み込まれそうな榊奴操が微かに笑みを浮かべた瞬間、この状況を作り上げてきたの全ての工程を嘲笑うかのように状況が一変する。

レコードが切り替わるように、今までの探し探しの行動がまるで違うものに変わる。

「なあ、あれって中華の技術じやないのか？」

「確かに。あの一年は中華料理を作ろうとしていたのか」

「で、でも、さつきまで須郷先輩と同じ料理を作ろうとしていたように見えたよ!？」

その変化に気づいた学生たちが口々に自らの予想を口にする。流石に世界有数の料理学校の生徒だけあつて榊奴が自身の料理に加えた変化から直ぐ様情報を得るスピードを普通ではない。

しかし、その予想が確信に変わる前に次の合図が鳴り、又しても榊奴の動きが全く異質なものに変容する。

「今度はスペイン料理?」

「い、いや、俺には洋食に見えた……」

「何言つてんだよ! あれはイタリアの焼き上げ方だろ!? お前ら講義で何聞いてたんだよ!」

「そもそも、あんなデタラメなやり方じや……………アソツ、諦めたのか?[?]」

次から次へと姿を変える榊奴の調理法に遠月の生徒達は翻弄されながらも、自らの経験や知識と照らし合わせながら分析し結論を出す。“あんなやり方でまともな料理が出来上がるはずがない”、と。

料理とは思いつきや直感で作るだけではいけない。特にこの学園では中等部の段階からあらゆる分野の調理法に対する知識や技術を叩き込まれ、それらが持つ特徴と決して交じり合うことのない強烈な個性を学生一人一人がその脳裏に叩き込まれている。そんな彼らが下した判断は正しく、信頼におけるものであり、目の前で行われてい

る奇妙な光景を見ればどんな人間でも同じような答えに至るだろう。

ただ一人、遠月第三席である矢成音弧を除いては。

『成る程ねい。そう来た訳かい』

矢成音弧と会場にいるその他の生徒の違いは単純に十傑か否かだけではない。

この遠月で生き残る人間は二種類存在する。

一つは学園から出される課題を突破できる程度にあらゆる調理技術を獲得し、その中で突出した才能を手にして必殺料理へと繋げる万能型。

もう一つは最初から誰にも負けない必殺料理スペシャリテを持つていて、自らの得意分野だけで全ての課題を突破する特化型。

須郷圭一が前者であるとすると、矢成音弧は完全なる後者であり、自分の好きな『いなり寿司』というたつた一つの料理を極めていたら気付けば第三席こんな場所にまで上り詰めていたという変わり者だ。

しかし、世の中にはそんな特化型の料理人ですら“アイツはおかしい”と感じるような人間が存在する。

例えばこの遠月始まつて以来の問題児と言われる第二席。

例えば万能型でありながら、その行動が超特殊である第八席。

例えば会場全体が混乱している中で一人マイペースに何かを綴つている全ての元凶である第十席。

そして、その混乱の中心にいるあの少年もまた、矢成音弧ですら異常と思える怪物であることは間違いない。

(それにもしても、『一回』も見ていて今更気付くとは私の眼も曇ったのか、それともそれだけあの一年生が異常なのか。……全く、何てモノをキープしてんのだよ、あの腹黒女)

見る者を圧倒しながら作品を作り上げていく神度を見ながら、彼を最初に見ることになつた秋の選抜の予選を思い出す。

ハツキリ言つて酷いモノだつた。

八十点以上の点数を叩き出したのが優勝した木久地園果を含めて四名。

それ以外は軒並み六十点前後と音弧の知るここ数年では考えられ

ないほどの惨状に須郷を含む大多数が今年の一年生を不作と例えた。だが、その理由が今はつきりと目の前に現れた事で認識を改める。

「矢成先輩、矢成さん？おい、いなり狂い仕事しろ！」

思考の海に旅立とうとしていた精神が隣に座る放送部の早津田みるるの声で呼び覚まされる。

「…………なんだい。人が考え方してるので」

「いえいえ、今起こつてる現象の説明が貴女の仕事ですのでー。目上方に説教的になるのはイメージ的に悪いのでマイク外して言いますが、今日ここにあるいなり寿司は遠月の料理人達が誠心誠意を込めて作つたモノなのでその分の働きはしてくださいよー」

「お前、中々言うねい」

「仕事ですのでー」

営業スマイル全開のみるるにやれやれ、と溜め息を付きながらそのままマイクが音声を拾わないように例え話をする事にする。

「秋の選抜の予選の結果は知つているかい？」

「えーと、通称激戦のBブロックと冷戦のAブロックでしたか？私はBブロック担当だつたんで矢成先輩のいたAブロックについては詳しく知りませんが、なかなか大変だつたと聞いています」

「そうだねい、来賓や薙切の老人達がいくら機嫌悪くしようが私の知つたこつちやないが、どうやらいうほど今年が悪かつたわけでもないみたいだぜ？」

「と、いいますと？」

「いつも通りつてだけさ。去年は角崎や一席サマはともかく、八席が暴れただろう？私の年なんて色々な意味で酷かつた。決勝に進んだのが今の十傑メンバーばかりとはいえ、予選じや殆どが八十点オーバーで平均点が酷いことになつてた」

「そ、それは今の三年生方が優秀だつたつてことじや……」
「いんや、別に……決勝に残つた豪雪山とか二席は確かに色々な意味でインパクトは有つたけど、他の連中は至つて普通さ。普通過ぎて最悪な奴に目を付けられた。…………この学園で生き残るには現状維持じやダメだつて流石にお前も分かるだろ？」

大岩が飛び交い、会場内で突如食戦が巻き起こる光景が普通と呼べる人間が大多数だつた時代だ。今は少なくなつてしまつた同期達の反応はそれなりに見ていて面白いものだつたが、あの予選に關してはそういつた反応は望めなかつた。

一部の色々と極まつた者と普通に点数を出せる須郷のような天才以外の生徒にとつて、秋の選抜という学園で上位を決める戦いは絶望以外の何物では無かつた。

地獄の宿泊研修を終えたばかりの一年生にとつて純粹な実力を試す機会である筈のステージは同時に怪物達の異常性を証明することになる。それを一番理解しているからこそ、彼らは絶望し、突如現れた救いの手を魔の契約とも知らずに手に取つた。

「この遠月で生きていくにはどんな手段を使つても成長していくしかない。それを誰よりも理解して実践していったのがあそこにいる薙切せりかさ。この遠月では同期つていうのは競い合うライバルであり、蹴落とすべき宿敵であり、高め合う盟友である。そんな薙切の爺様の言葉をアイツは実践したんだ。悩んでいる生徒達に自分のレシピをばら撒いて、データ取りに利用したんだよ」

「で、データですか？」

薙切せりかには二つの武器がある。

一つは幼い頃からその身に刻まれた薙切という一族の異常なまでの食へ拘りによる英才教育によつて生み出された膨大な食の知識。

そして、彼女の才能の根幹となるのがその眼だ。

「例えば、今私が食べているいなり寿司を見てお前はどう感じる？」

「お、おいしそうです」

「うん。確かにおいしいがやらないからな。これは私のだ。…………ってな具合に普通の人間じゃその程度しかわからないが、意外にこの“見る”という方法で得られる情報は多いんだよ。例えば、この皮がどんな方法で作られているかわかるかい？」

いなり寿司の茶色く光る皮を指差しながら、音弧は今にも食べてしまいたい必死に欲求を抑える。大好物を目の前にしてお預けなど、最大級の苦行として登録されるべき行為であるが自分から問題を出し

た手前、みるるが応えるまではここはぐつと堪えるしかない。

「そりやあ、私も一応遠月の生徒ですからわかりますけど…………あの、
そんなに食べたかつたら食べてもいいんですよ?」

「そ、そうか?なら、遠慮なく」

神速で口に運んだいなり寿司は絶品。

全てどうでもよくなりそうになるが、またしてもそれを堪え乍ら答
え合わせに移る。

「ま、今のがアイツの武器さ」

「え、どういうことですか?」

「だーかーら、アイツは今私が食べた料理を見ただけでその材料と調
理法と作った人間のある程度の実力がわかるんだよ」

そんなデータラメな!、という声がみるるの口から洩れそうになる
が、マイクの存在を思い出したのか慌てて口を塞ぐ。

「…………で、でも、そんな事が可能なんですか?」

「普通は無理。でも、中等部の薙切りながそういうようにあの一族に
はそう言う食に対し異常な奴が確実にいる。ま、食べるか見るかの
違いさ。アイツは私たちと違つて生まれた時から料理に囲まれてい
たからね。始めは100%じゃなくても、長い事やってるうちに約
中率が上がつていつたんだろうさ」

「あ、もしかして」

「ふつふーん、気付いたようだねい。今日あの一年生が使つてているレ
シピがどこから現れたつてのが…………」

そう、今まさに須郷圭一が戦つている魔物の正体。

それこそが、魔女が自らの勘や才能を頼りに創り上げたレシピを多
くの学生に分け与え、その結果によつて導き出されたさらなる高みを
目指した果てに辿り着いた『黄金のレシピ』という遠月が生み出した
怪物そのものである。

今までに食戟によつて巻き起こつた歎声に包まれている会場を月天の間の外から覗く影があつた。

「にやはは、これは予想通りというか想定外というか順調といえば順調なんですかねー?」

遠月学園第八席と呼ばれる少女は現十席の中で最も素性の知れない人間と呼ばれている。

彼女の二つ名である『影の傑作シャドウ・アート』はミスディレクション等を利用した料理の表と裏を演出する芸術家としての側面からそう呼ばれるようになつた。逆に言えば、そう呼ばれているだけでも同じ十傑でさえそれ以上のことを知つているものは少ない。

ある程度の実力があるのなら同じ料理人である以上、料理を食べれば相手のことが理解出来るなどと無責任な事を言う人間がいるが彼女に関しては例外で作るものは必殺料理以外にも強烈な個性を放つ料理ばかりなのだが、どういうわけかどれを食べても料理人である彼女の顔をはつきりと認識できたものはいない。まるで料理の持つ強烈なイメージがその他の情報を覆い隠すかのように第八席という存在が表舞台に上ることはない。

今回の食戟についても彼女が行つた事など別段大したことではない。

良識があるかは知らないが、現十傑の中でも比較的常識人な第九席に半年ほど時間をかけて現在の遠月学園の有り様について『相談』

し、そのついでに一部の権力者達に食戟を利用したマネーレースを“提供”、後は同期のよしみで本日の帰りのバスを小一時間ほど送らせてどうやつても角崎タキ達がこの食戟に間に合わないようにしておらず、このとおり別段大したことはしておらず、特に関係者というわけでもないので会場には立ち寄らずに出歯龜氣分で様子を見に来たわけである。

「音弧さんは気付いてるみたいですが、肝心の須郷さんは気付いていないですかー」

恐らく、彼らが意図の伝達を図っているのは音によるモールス信号だろう。魔女の所属するサークルがこの遠月に何故か古くから存在する『アマチュア無線部』を乗つ取つたものである事を知っている彼女からすれば二人が料理学校でおよそ覚える機会など皆無であろう連絡手段をマスターしていることに疑問はない。

食戟において第三者からの助言・助力は基本的にルール違反であり、不正として事務局に報告してもいいのだが、それではおもしろくない。この場にいる誰もこの会場内で発信される信号について気付いていない以上、第三者である自分の口から何も言うことはない。

「ちょーっと、須郷さんが張り切り過ぎたみたいですが元々この辺りで手を引く予定でしたし、ちょうどいいですかねー？わたししては特に儲けなどは出ていませんがそこらへんは残念無念また後日ー、という事で！」

歓声や嘲笑が完全に消え失せ、静まり返った会場を背に第八席は自らの完成した芸術が壊れる音を満足そうに聞きながらその場を去った。

二人の怪物

須郷圭一の必殺料理^{スペシャリテ}の登場を機に二人の料理人が互いに創造していた道が今、完全に分たれていた。

何十何百と繰り返し磨いた技術と地位と権力、数の暴力さえ使って用意した最高の食材により圧倒的優位性を保つ須郷。

それに対するはあくまで須郷のコピーとして立ち回っていた序盤から一変し、見ているものに複数の調理形式を思わせる程の奇怪な動きを新たに武器とした榊奴。

「ふ、料理人だと思つていたがどうやら道化師の間違いだつたようだ。全く、せりか様には困つたものだ。このような道化に大切な食戦の場を任せるなど少々十傑としての自覚が足りないと見える」
「別にもうその程度の挑発に乗る気はないですよ。既に賽は投げられた――俺はその通りに動くだけだ」

須郷は先程までは一線を画した榊奴の動きに一瞬驚きの表情を見せたものの、そのあまりに整合性の取れないデタラメな調理法に直ぐにその驚きを愚か者に対する嘲笑と憐れみ、そして遠月の生徒としてのプライドから沸き起こる静かな怒りへと変える。

「はっ、その通りに動くだと？ 君は何もわかつていな。自ら思考せずして何が料理人か！ この遠月で生き残るために最も必要なものは高みへのし上がる野心とそのために何かを捨て去る覚悟だつ！ それすらもなく、ただ誰かの言いなりになつてているような人間にこの私が負けるわけがないのだよっ！」

須郷の動きがより一層、洗練されたものになる。

この遠月で生活するなかで常に磨き上げてきた技術と共に繰り出されるのは料理人としての魂。

目の前の一年生との二年間という隔絶された差と才能・技術・地位といったものによる圧倒的な違いを見せつける為に―――この道化を蹴散らし、あの魔女と呼ばれる少女に一矢報いる為に―――そして、この食戦に賭けた全てを守り抜くために第九席の天才は

一切の容赦なく獲物に牙を突きつける。

その圧倒的なプレッシャーは見ているだけの観客すらも飲み込み、月天の間そのものを喰らい尽くそうとする。

これこそが十傑。

これこそが遠月の頂点。

その風格を前に、榊奴操は怯えるでも笑うでもなく、ただ機械的な動作のようにその全身を調理のために注ぐことで答える。

「確かに、俺一人では貴方に勝てないでしょう。でも、今の俺は落ちこぼれの一年ではない。この場に立った時点で俺のこのちっぽけな両手にはあの人の一――第十席である薙切せりかの名が乗せられている。いい加減気づいたらどうです？ 貴方が戦っているのは榊度操でも薙切せりかでもない。俺たち二人だろということに！」

榊奴は決して勝負を諦めたわけでも、絶望したわけでもない。

その証拠に口を動かしながらもその目は、その鼻は、その耳は、一刻と変化していく食材が発する僅かなサインを見逃すまいとその五感全てを総動員して観察する。

全ては作戦通り。

この食戦の前に薙切せりかから言われた言い付けをただ純粹に守つた結果がこの状況だ。

初めは渡されたベースと足るべきレシピと榊奴が持つ技術によつて対抗し、相手の実力を測りその全力であり限界を意味する必殺料理スペシャリテを引きずり出すのが目的だつた。

そして、今日の前で作り上げられている第九席の必殺料理スペシャリテという圧倒的な力を前に榊奴操と薙切せりかが行おうとしているのは前代未聞を大博打。

「最初に言つておく、自分の限界を超える準備は出来ているか？ 今から俺達は貴方の必殺料理スペシャリテを超える。だから、その限界を超えて見せてくれ。じゃないと――貴方は負ることになる」

榊度操の人間として優れている点を上げると言われば、木久知園
果は何でも出来るところと答え、角崎タキは不機嫌そうに忍耐力や
真っ直ぐな所を挙げる。薙切せりかもまた、考えただけでも相当な点
をその口から言葉にことができるだろう。

しかし、榊奴操が料理人として優れている点を挙げるとすれば彼を
知っている人間でも答えるのは難しい。例えば、同じ学年内でそれぞ
れの得意分野で競えば榊奴の勝率は半分よりも下を走る事になる。
それは決して誰かに対し劣っているというわけではなく、榊奴に得
意料理と言えるものがなく相手の得意料理で負け、それ以外でたまた
ま選んだ分野でもこの遠月では相手の方が優れている場合が少なく
ないからだ。

『若き料理人達を競い会わせ、最終的に唯一無二の才能を持つ玉を
完成させる』という遠月の理念から言えば、自らの得意料理を持たな

い榊奴は間違いなく何の意味も持たない存在だ。この学園では何か一つの分野で誰も負けない人間やなんでも得意でその中で一つだけ突出した才能がある人間がいても、何でも卒無く熟せるが特に得意と呼べるものがない人間（スタジエール）は存在しない。何故ならそういう人間は秋の選抜後に迫る実地研修によって軒並みはじかれ、この学園を去るからだ。

当然榊奴もその一人であり、彼自身それを感じ取っていた。

だが、そんな少年を平凡と見捨てず異常と捉えた翡翠の眼を持つ少女がいた。

遠月十傑評議会第十席にして、食の魔王の一族と呼ばれる『薙切』の名を持つ少女は榊奴自身ですら理解していなかつた才能を誰よりも早く掬い上げた。

「うーん、次はB—7ですかね？」

薙切せりかはその手に持ったペンで大きな画用紙に絵を書きながら規則的な音による信号で料理人としての戦場に立つ少年に指示を飛ばす。

レシピがあるのに何をと思うかもしれないが、何もせりかが渡したレシピは一つではない。

そもそも薙切せりかが創るレシピは彼女の直感によつて判明した料理の情報を分析し、『薙切』として彼女が持つ食に関するあらゆる知識を総動員して昇華させたものを自身の手で他人に分かるように書き出したもので、レシピとして形になつた時点で一つの料理で『ベースとなつた料理を正確に再現したもの』と『元の料理よりも優れたものの』の二つが完成する。更に彼女のやり方として三つ目の『食材や料理人の技量に問題があつた場合のマニュアル』を付けた三つのレシピが『黄金のレシピ』と呼ばれ、彼女の代名詞となるほどの結果を世界中の料理人達を通して上げている。

しかし、それはあくまでその料理を作つた本人が使用して初めて100%の力を発揮するもので誰でも簡単に扱えるものではない。料理人は一流となる過程で失敗や経験を通して自分なりのカンやコツといったものを生み出し成長する。だからこそ、せりかは一人として

同じ動きをしない彼ら一人一人に対して特別に生み出したオーダーメイドとも呼べるレシピを渡す。それは例えるなら彼女が最近愛してやまないゲームにおける『秘伝の書』のようなものだと説明するようしているが、この業界はこういったものに疎い『料理こそ我が人生』といった人間ばかりが大成する為、この例え話が上手くいった試しは殆ど無い。

では、今回。

榊奴操に薙切せりかが渡したレシピとは一体如何なるものなのか。
その完全な答えは既に二人の頭の中にしか存在しない。

結果的に言えば膨大すぎたのだ。薙切せりかがレシピを創るような人間は基本的にかの分野で優れた料理人であり、その一つに絞つて書き上げてばそれで済む。木久知園果なら洋食を、角崎タキにはスペイン料理に限定すれば彼女たちの腕をより生かしたものを作りかはいくらでも創り出すことは出来る。だが、あの少年に關してはそれがない。どの分野においても突出した才能がないというのは厄介なものでそういった人間に對してレシピを創るときは大抵別の料理人に創つた方がいい物を創れる。普通に考えれば榊奴操に對してもそのパターンが当てはまるはずだ。

だが、あの少年には得意と呼べるものも苦手と呼べるものも存在しなかつた。

基本を誰よりも重要と捉え、他人が試行錯誤を繰り返し自らの才能を育て上げている中、あの少年はひたすら基本を学んだ。教科書を読み耽り、何度も一人で反復練習をして、与えられた課題のレシピをほぼ完全に再現できるレベルにまでその技術を鍛え上げた過程で生まれた偶然の產物。どうしてそんな曲解をしたのかせりかにも想像つかないが、あの少年は教本通りの技術をひたすら極め続けた。あいつた教材は万人が学ぶために敢えてコツといつたものは欄外にこつそりと載つていて、程度でアレを完璧に覚えたところでその先のステップに進まなければ意味がないものだ。大抵その鍵は実践する内に身についていくそれに合つたやり方であり、榊奴自身も確実にその機会はあつただろうにそれでも無我夢中で極めたのだろう。

結果的に榊奴操には料理における癖というものが何もない。

「先程からあの小元氣なうるさい実況が聞こえないとなると、『彼女』は気づいたようですね。でも、彼女にそこまで読み取らせないとなるとやはり『本物』ですか」

彼は——榊奴操は初めて薙切せりかに会った時「自分には特別な才能がない」と言つた。

でも、それは違う。

そもそも才能がなければこの遠月でこの段階まで生き残れないし、今もこうして遠月の頂点の一人と渡り合う事など出来無い。そして、その事実こそが彼のただ一つの異常性を証明している。誰も疑問に思わないのだろうか?——名前は忘れたが、あの少年と戦っているのは仮にもこの遠月の頂点。一年生が、それも秋の選抜で結果すら残せないような人間が一瞬でも渡り合える相手ではない。それなのにあの第九席が隠し玉である最高品質の食材を使った必殺料理を出すまで明確な差が誰の目から見ても存在しなかつた。それどころか今も尚、必殺料理か否かという明確な一点を除いては本来圧倒的な実力差があるはずの相手にその技術によつて喰らいついているように見える。

それを誰ひとり疑問に思わない。それどころかせりかが指示を出した事で彼の動きが変わつたことばかりに気を取られる始末。

基礎が基礎であるがゆえにそれが荒旅によつて研磨され尽くした宝玉相手に本来有り得ないような善戦をしていても誰も不思議に捉えない。それは料理人が基礎というものの大切さとその地方の強さをその身に刻み込んでいるから。

食という文化に精通していればいるほどその異常に気付く事無いまま、その光景を『あたりまえ』と誤認してしまう。

しかし、基礎通りにやつていればいいというのなら人類の料理という文化の進歩はどうの昔に限界を迎えていただろう。

基礎が絶対だからこそ、そこからの創意工夫が目立つ。榊奴のやり方では技術点で百点を取れても応用点を取ることが出来ない為どうしてもそれ以上へは進めない。だが、それは逆を言つてしまえば基礎

を極め続けた榊奴の百点は途中で応用の道に入つた料理人達では決して辿り付くことの出来無い不可侵の境地であることを意味する。

そしてそれが如実に現れたのが今回の秋の選抜の予選である。

五人いる審査員が榊奴の調理風景や完成した料理を見て無意識のうちにそれが『あたりまえ』と認識してしまった結果、本当に突出した才能を持たない者以外には誰ひとりとして高得点を出さず、過去に類を見ない不作の年と言われる悲劇が巻き起こつたのだ。しかもその元凶は誰よりも平均点を叩き出し、誰に知られる事もなくその場を後にするというどうしようもない結末だ。

その誰も得をしない結末に眼を付けた薙切せりかが彼の為に用意したレシピは正に異常だった。

Q：料理というのが日本、イタリア、フランス、中華等に分かれているのは各文化圏で独自に進化した結果に過ぎません。でも、日本が外国の技術を取り入れて洋食を編み出したように他の文化圏の料理を学ぶことで新たな地平を切り開けることは食という文化の歴史が証明しています。レシピというのは本来先人達が学んだノウハウを私達後人が取り入れ、次へと活かすのですが…………人間の寿命は短く、新しいものを取り入れる事が出来る時間を考えるとそれらを学び、取り入れられる猶予は限られています。では、どうすればいいでしょうか？

A：あらゆる料理を全て同じ実力で作れる料理人と料理に関する知識だけを詰め込んだ人間を用意して、それぞれの力を合体させる。

あらゆる文化圏の料理に関する知識を有し、それをレシピという形に変えることが出来る薙切せりかならばあらゆる調理法を取り入れた『黄金のレシピ』を超えた『至高のレシピ』を創り出すことも可能だ。しかし、そこまで辿り着いても人類は挫折する。例えあらゆる料理の知識を有する人間を作れてもあらゆる調理法をマスターした料理人を作ることは出来無い。例えそんな料理人がいたとしても、結局はその人間が最も得意とする料理のレシピを創つた方が美味しいも

のを作れてしまうから。

だが、榊度操には得意とするものも苦手とするものも存在しない。ただひたすらに基礎だけを極めた異常なまでに基本に忠実な技術があるだけだ。

それこそがたった一つの条件。

それこそが薙切せりかが『黄金』を超え、『至高』に辿り着く為に欠けていた最後のピース。

ずっと探し求めていたものを見つけた薙切せりかの才能はまるで共鳴するかのように更なる高みへと舞い上がる。

薙切せりかと榊度操。

二人の怪物の異常とも取れる才能は須郷圭一の必殺料理を糧に存分に発揮された。

榊奴の自分自身でも気づいていない異才が最も効力の発揮する相手は当然目の前でその『決して振れない軸』をいやがおうにも見せられている料理人だ。

どんな料理をつくるにしろ、基礎というものは料理人にとって最も重要なものであり、その成長には必要不可欠な存在だ。だが、"より高みを目指す為" 料理人達はそれをベースにしつつ自らの道を歩み出

す。特に若い才能たちを強制的に競い合わせるこの遠月においてはそれは必要不可欠な行為であり、その自分なりの料理の型を持たない人間は生き残れない。

だが、榊奴の誰もが『あたりまえ』と無意識に感じてしまうほどに完成された基礎はそれを粉々に壊し尽す。榊奴の動きを見た料理人達は当然自分たちもそれが『出来るものだと』勝手に思い込んでしまう。

だつてそれは当たり前に誰もがやつてきたことだから。
みんなその道を通ってきたことだから。

途中で応用の道へと旅立つたものと今も基本を極め続けるものは最早その動きは全く別ものだというのに。

無意識の内に料理人達が取つたその行動は曲がらない方向に無理やり関節をねじ曲げるかに等しく、今まで積み重ねてきた料理人としての方を歪める。

今回も同じだ。

榊奴操が須郷圭一に並んだわけではなく、本人が気づかないうちに須郷が勝手に榊奴と同じレベルまで落ちてきているだけ。

そして、その差は薙切せりかのレシピによつて絶望的に広がる。
薙切せりかのレシピが何故『黄金』の名を冠するか。

それは、彼女のレシピの作り方にある。

薙切せりかには自身のその翡翠色の眼で捉えた料理が一体何で出来ているのか、どうやつて作られたかを肉を炙る温度を一度単位で、ボールに加えられる材料の数量を一ミリグラム単位で言い当てられる技術がある。

それを第三者視点で俯瞰的に観察し、自ら持つ知識を使い昇華させる。そんな行為をこの遠月で数年間に渡つて繰り返した。

自分で料理して試行錯誤等はせず、複数人の料理人に作成したレシピを渡すことでの結果を知り、誰よりも早くレベルアップを行う。答え合わせなど生き残るために成長を強制されるこの遠月ではいくらでも出来るし、どんな無茶な料理でも一定以上の技術をほぼ全員が持つ

ているので再現出来ないということもない。

そうして、料理人達の努力を、技術を、才能を糧として確実に上回る形でレシピが完成する。

それは料理人の全てを注いだ必殺料理とて例外ではない。

須郷圭一と榎本操。

二人の料理が完成し、その皿に乗った姿が同じことに動搖する会場の中で食材の差すら逆転するかのように二人の怪物の作り出した料理は隣に並ぶ嘗て必殺料理と呼ばれていたモノを過去の遺物として輝きを放っていた。

渦巻く陰謀

その道は真っ直ぐだつた。

須郷家の跡取りとして生まれ、与えられた役割を自らが持ち得る才と権力で完璧にこなす人生。

遠月学園での生活もその一線上でしかなかつた。

この学園を卒業することが『須郷』という家にとつてメリットとなる。たつたそれだけの理由で6年間という決して短くない年月を別に興味もない料理という道に割くことに不満がないといえば嘘になる。

しかし、それを胸の内に秘め、与えられた役割をどんな手を使つても完遂してしまうのが須郷圭一という人間である。

そんな彼と薙切せりかはとても境遇が似ていた。

彼女に初めて会つたのは中等部に入学して三ヶ月ほどした頃だつた。

調理台に背の届かないほど小さな体躯、包丁すら満足に握れないひ弱でか細い腕、まな板を持つだけで震える足。料理人として必要な最低限の条件さえ満たしていない。

与えられた課題を難なく終わらせ、「中等部とはいえ遠月とはこんなものか」と落胆する程度の実力を有していた須郷にとつて当時の彼女は目の前に転がる小石程の価値もない存在だつた。

A～E評定まである遠月の評価基準に対し、常にC以下を彷徨つている落ちこぼれ。『薙切』という名門に生まれながら自分の役割すら満足に全う出来無い彼女に落胆さえしていた。

“須郷”と“薙切”。

二つの名家に生まれながら料理人として必要な才を持つていた彼に対し、持たざる者であつた彼女への周囲からの風当たりは強かつた。

誰もが薙切という恵まれながら料理人として必要な才を持つていた彼女を嗤つた。

ある日、氣怠そうに授業に使う食材を与えられた机に運ぶ彼女に声

をかけたことがある。

「その調理台は君の背では使いづらいだろう。私の権限で各調理室に少し低めのものを用意した。よければ使い給え」

「……………ですか。何処のどなたかは知りませんがありがとうございます」

気紛れだつた。

料理人としての実力と須郷として有する数々のアドバンテージを生かし、入学後たつた半年で中等部のヒエラルキーの上位に席を置いた須郷にとつて目障りだと感じた程度のこと。

その気になれば環境を自ら変える力がありながら努力をしない彼女にイラついたからか、自分より下の者を卑下して優越感に浸る愚者に対し思うところがあつたのか。今となつてはどうでもいいことだ。

ただひとつ言えるのはそれが須郷圭一と薙切せりかの中等部での最後の会話だつたということだけだ。

それから薙切せりかが更に約二年の雌伏の時を経て徐々に頭角を現す頃には、須郷は上級学年の猛者達や現在『極の世代』と呼ばれる中で既に覚醒の兆しを見せていた者達へと対抗するための戦力を整えるのに罹りつきりになつてしまつていて、彼女の事等頭の片隅に追いやつっていたのだから。

「あゝあ、だから言つたんですよー。普通にやつたら負けちゃいますって」

気に障る笑い声が耳元で囁く。

振り返れば見慣れた笑み。第八席と呼ばれるものの一人だ。

そいつは一般生徒が立ち入れないこの調理場に自らの権限を最大限行使して誰にも疑問を持たせることなく降り立つ。

『えー、両者の調理が完了したということで、放送部所属の私早津田みるが両選手にインタビューを行おうと思いまーす！』

早津田みると名乗った女子生徒は予め録音していたのかマイクに音声を流しながら、須郷にだけ聞こえるトーンでゆっくりと話します。

「難切せりかは化物です。中等部では余程のことがない限り退学にはならないことを逆手に取り、自らの成績と引き換えに周囲の生徒の情報根こそぎ集めた上でそれを余すとこなく利用し、高等部進学とともに十傑の座に就いた。敷かれたレールを真っ直ぐ進んでいただけの貴方と違つて彼女は与えられた時間を最大限有効活用しました。スタート地点はそう違わなかつたのに、途中までは自分が成功していくのに、いつの間にかどうしようもないほど抜き去られていた。それを貴方は許せなかつたから今ここで勝負を仕掛けた」

「何が言いたい……」

「劣等感は隠さず行きましょうよ。『私達』のように悪意も敵意も受け入れてしまえば選択肢は広がるんですよ？」

その桃色の髪の女子生徒はその特有の貼り付けたような笑みを浮かべながら須郷の腹の中をかき回すように言葉を紡ぐ。

「大丈夫です、勝てますよ。実食にまで持ち込めば必ず勝てる。そう、『八神真理』は判断しました」

「つ！？貴様らまさか！」

「ええ、初めに説明したように審査員はこちらで『信頼のおける』

方々を用意させていただきました。それに、魔女には勝てなくとも貴方が対した『彼』には弱点があります。どれだけ完成した姿が劣つていようと、貴方の料理は彼の料理に勝てます」

それは須郷の料理人としてのプライドを迷うことなく踏みにじる言葉だつた。

確かに、このまま行けば須郷は間違いなく負けるだろう。

魔女のレシピによつて完成させられた相手の料理には須郷が全力を尽くした為に出来た隙を付いた秘策がある。それが炸裂すれば須郷の負けは決定的だ。

だが、この少女の口車に乗せられそれを受け入れれば須郷は人としても料理人としても大切なものを失う事になる。

「何を悩む必要があるんです？この食戟にあちらが賭けた対価はご存知でしよう？あれに見合うものなど、第九席としての座だけではすみませんよー？あちらはあの難切です。食に関することなら一切の容赦なく、どんな不条理なことだつてやつてのける。貴方が今まで積み上げて来たもの全て失つてもいいんですかー？」

上にで来たもの全て失ってもいいんですか？」

「え、何がですか？私たちはあくまでサポートしたに過ぎませんよ？口車に乗つたのは貴方じやないですか？それとも、この会場全体を覆うほど募つた身内の前で一生消えない恥でもかきますか？…………安心してください、これでも私達――『八神真理』一同は貴方に期待しているんです。これが成功すれば貴方に第八席の座を明け渡してもいいという判断が出ているんですよ？」

一族の期待を一身に背負つてゐる須郷にとつて十傑の肩書きは大きければ大きいほどいい。

その提案は願つてもないものだつた。

「どの道、この食檄に負ければ薙切せりかは何の力もない小姑娘です。この遠月で生きていくどころか——ふふ、ま、報復なんてありますせんから安心してください。あ、そろそろあつちに向かわないと

!

早津田みるが須郷と対面していた榊奴へと向かおうとする。その背中を須郷は——。

買出しに出かけていた角崎達が遠月学園に戻る頃には既に夕日が暮れかかっていた。

「くそ、帰るのが遅くなつた」

「そ、それにしてもビックリですね。羊の行列で電車がストップするなんて…………やつぱり街は怖いです」

（いや、どう考えたつておかしいだろ！）

基本的に寮生活を推奨されているこの学園では連休以外での遠出には外出届が必要であり、二人が所属する寮では規定の時刻まで学園に帰宅できなかつた者には罰則が加えられることになつてゐる。それは十傑と言えども例外は無く、無断で遅れた場合は当然キツイ罰が待つてゐる。

（学園に電話しても誰も出ないどころか繋がらないところまであつたし、やつぱりこれは――――――）

「にやはは、ダメですよー角崎さん。遅刻しちゃー」

閉じられた校門の向こう側からこちらを見下ろすようにその声の主は立つていた。

色素の抜け落ちたような青髪に、心底気に入らないがスタイルのいい体付き、極めつけは日頃一日中顔に直接彫り込んでいるかのように浮かび続ける氣味の悪い笑み。

「やつぱりお前が、八神」

「にやはは、私の事は親愛を込めて『シンリー』でいいですよ？」

「シ、シンリーですか？」

「そうですそうです。八神真理^{やがみしんり}でシンリー。他の“私達”と区別するときにも使つてください」

「園果。そいつと会話するな、性格が悪くなるぞ」

何の警戒もせず、笑い続ける八神と会話する園果に注意を促す。

この奇人は角崎が十傑の中でも最も警戒する対象であり、料理への姿勢で真逆にいる存在だ。それを例え数回の会話と言えども後輩と関わらせたくはない。

「…………食戟はどうなった」

「あれれー、気になるんですかー？やつぱり、角崎さんって意外と後輩思いだつたりするんですねー」

「…………」

「ありやりや、黙つちやつた。ま、でも言わなくともわかるでしよう？須郷圭一が薙切せりかに勝てるわけがない。それどころか、私を含めた料理人の殆どはあの方と真正面からやりあつて勝てる武器を持ち合わせてはいません」

その言葉に角崎も口には出さないが同意する。

薙切せりかの最大の武器はその知識と他人を観察して得た経験から相手の料理を即座に上回るレシピを編み出すことだ。角崎達料理人は自ら培つた技術や経験から新たな料理を作り出しが、薙切せりかは料理人としての道を捨てることで自分以外の全ての料理人の知恵を他の料理人達が力を磨くために掛けたのと同じ時間で手に入れた。

彼女と同じ時を過ごす以上、技術の修練に励む料理人達は彼女の知識を超えることは困難だが薙切せりかはただ他の“前例”という名の経験を踏まえるだけで軽々と彼らの限界を超える。しかもそれは対抗しようと料理人達が努力すれば努力するほど薙切せりかに力を与えることになり、最終的に彼らの屍の上に残されるのは生涯掛かってたどり着いた料理の極地を一步超えたレシピだ。

だからこそ、彼女をよく理解している現十傑は独自に魔女への対策を生み出した。

第一席の現遠月最強は必殺料理を超えるレシピを作つたところでそれを作れる料理人が存在しないというある意味では最強の正攻法

で突破した。

第二席の手持ちの食材を捨てて調理する『満足食堂』を提唱する変態は「そうか、食材を使わなければいいのか！」というちよつと何を言つているのかわからない謎の境地に到達した末に編み出した
食戟流満足殺法・零式で対抗した。

第三席の矢成音孤の作るいなり寿司はその味を超えられても彼女の神性までは真似出来ない為、それを無効化できない以上魔女は彼女に手出しあしないし、彼女も必要以上の関与もしない。

第六席の豪雪山に至つては得意とするフィールド『山』が生態系維持の為に車やヘリなどで移動出来ないので、体力の無い魔女ではそもそも辿り付けない。

「須郷圭一は最初から全力で挑みましたよ。そして――」
「アイツ……」

須郷圭一はそういうたた対策を一切持つていなかつた。

厳密に言えば彼が日頃から集めていた遠月での地位や権力といったものがそれに当たるのだろうが、かの魔女に対してもそれは何の意味も持たない。

この学園では各々が持つ、誰にも負けないという調理技術こそが大切なのであってそれ以外のもので対抗しようとしても料理に直結しないものでは効果が薄い。

それでも、須郷圭一が難切せりかに挑んだのは己の中にある感情への一つのケジメだらうと角崎は予想する。

最終学年になつた時、卒業するために必要なことは何か。

そう、問われたときつと角崎タキと須郷圭一の意見は一致する。だからこそ、今回の食戟例え勝敗がわかっていたとしても極力干渉せずに入った。

一週間ほど前に難切せりかが突然連れてきたあの一年生が出てくるまでは食戟の代理人は隣にいる木久知園果に任せようと思つていたほどだ。

「じゃあ、榊奴くんは勝てたんですね！」

そんな角崎の心境を知らない園果は友人の勝利に歓喜する。

しかし、この場にいるもう一人の十傑がただその報告をする為だけに現れるような人間ではないことを角崎は知っていた。

「そうですねー。勝てたといえば勝てたんですかねー？」

そう、角崎タキは知っている。

遠月第八席が浮かべるその笑みは誰かを安心させるためのものでは決してないことを。

早津田みるが須郷圭一から離れ、榊度操にインタビューやしようと振り向いた瞬間。

その手にしつかり握られていたはずのマイクが忽然と姿を消した。

「え、」

「無拍子からのフェイントを利用した超速移動。名付けて、榊奴ファントム——いや、何でもない。ただの高速移動だよ」

何が起こったかわからないというみるの反応は榊奴の手に握られた彼女のマイクが粉々に握りつぶされるまで続けられた。

「全く、この会場の中で一体どんな因縁が渦巻いてるかなんて途中から割つて入ったような俺にはわからないけど、生憎とこれ以上は誰も『笑顔』になんかなれないってのは分かるんでね。手を出させてもらう！」

料理人としての責務

必要なものは『笑顔』。

それが榊奴操が人生の全てを賭けて己が料理に求めるものであり、その為ならば自分が持つどんなものでも犠牲にする覚悟がある。どんな状況でも求めるものは『笑顔』だ。

『笑顔』は人に希望を与える。それで救われた人間は確かにここにいる。

「話を聞く限りこの食戟で俺の求める『笑顔』が生まれることはないみたいだ。審査員に本当に細工しているかどうかは別として――――――その疑惑がある以上、須郷先輩は給仕サーブした時点で自分自身が作った『皿』を汚すことになる」

「ひ、人の心配をしている暇があるんですかー?もし、私の言葉が本当なら貴方は負けるんですよ?」

「…………」

榊奴の求める『笑顔』とは別種の仮面を付ける少女は突如人間離れを見せた榊奴に驚きつつも直ぐ様子をかけた仮面をつけ直し、恐らくは先ほどの須郷にやつた手口と同じ巧みな口撃を仕掛けてくる。

「今の状況を考えてみてください。巻き返したとはい、貴方はそこにある第九席さんに対し終始劣勢だった。例えレシピがそれを覆したものとしても、今日この場に集まつた観客の殆どはその正しい意味を理解なんてしていませんよ?だから、例え『正しい』判断が下されなくとも誰も疑いはしません」

「…………嘘、だな」

「え?」

「アンタは審査員に細工がされているかどうかなんて知らない。担当が違うんだろ?アンタはこの食戟で『実況者』という料理人に対し、途中で話しかけても誰も疑問に思わない最高の『役』だつたから選ばれた。同様に、仕込みに適した『役』があつて、そいつが動いたという情報をアンタは知っているだけ。だから俺達を揺さぶる為の手札は持っているが、それが本当に正しいものなのかは理解していないん

だ

「生憎と俺は人の表情の変化や汗の量から嘘を付いているか否かを大体判別することができる。ウチのセンパイや身内・・等、なかにはにはそういう隙を見せない人間もいるがどうやらアンタは違うようだな」

「そ、それは……」

ここまで話し、早津田みるの表情が焦りと絶望に変わるのを見て、横目で周囲を確認する手間を取る。それは十秒に満たない僅かな時間。しかし、意外なことに空気というものを読むには周りをじっくりと観察するよりも感覚だよりの方がいい時もある。

目まぐるしく変化する視界の中、食戦の審査員たちは何が起こったかまるで理解できていなかのように目を丸くし、この食戦が正式な勝負であることを証明する為に一人呼ばれた趣味の悪いスースを着た認定員はこの場で起こっている現象を見逃さないようにそのメガネの奥の瞳を光らせていた。

そんな中、須郷圭一の自らの料理人としてのプライドとこの食戦の結末で左右されるであろう己の未来に押しつぶされそうな姿が眼に入る。

(やるしかない、か)

割に合わないって事はわかっている。

これから行うのは応援してくれた木久知園果や今日まで特訓に付き合つてくれた角崎タキを、何よりこの食戦の為に文字通りあらゆるもの賭けてくれた薙切せりかを裏切る行為だ。

榊奴がその選択をすることで発生する火の子は確実に彼女達にも降りかかるだろう。それは榊奴が去ることで全て丸く収まることではないことも理解している。

（――それでもつ、こんな食戦お遊び如きでどんな人間であれ己の人生を料理に費やしてきた料理人の人生を狂わしていいはずがない！）

作戦は単純、食戦の参加者であり一方的に負けていた一年生が勝てないと躍起になつて暴れだした。ただ、それだけのシナリオでもこの

場に集まつた第九席側の観客は無理なく受け入れるだろう。過程と結果、榊奴が暴挙に出る理由は揃つてゐる。

第八席を名乗つてゐる早津田みるの言葉がハツタリだという保証は彼女が肝心な部分は何も知らないという事実に行き着いた時点でどこにもなくなつた。本当はもう少し情報を持つていってくれれば他の手段もあつたのだが、どうやら本当の第八席……というのは相当狡猾な人物らしい。

諦め交じりの溜息一つと入れ替わりに拳を握りしめ、

「…………なにをしているんですか？」

その拳はこの場で考えられる限り最弱であろう車椅子の少女の声によつて制止された。

「薙切せりか…………」

「い、一体何故ここへ!?」

料理人同士が技を競い合うこの厨房スペースへは本来調理に参加する料理人以外は何物も立ち入る事は禁止されている。今回は規模が規模と言う事で特別選手へのインタビューとして早津田みるのが立ち入りを許されたが、これも一般的にはマナー違反。当然参加者である榊奴の身内である薙切せりかと言えども例外ではない。

「何故つて、おかしなことを言いますね。これは元々私の食戦だったはずですが」

「ですがあなたは代理人を立てたはずですよね!? 今更出しやばつてしま

たところで

「ううん、本当におかしいですね。私はあくまで料理の代理人をみーくんに頼みましたけど、その後までは頼んでいませんよ?」

マイクと笑顔の仮面という武器を一気に失つたことで逆に怖いもの知らずとなつたのか十傑という遠月における権力の象徴を前にしても食い下がるような勢いを見せるみるに対し、心底不思議そうな顔をしながらせりかはその車輪で出来た足を動かして審査員の座る場所まで真っ直ぐと進む。

「ちよつと、待つ―――つひ!?

後を追おうとするみるだが、一步踏み出した瞬間にこれから向かおうとする魔境から発せられた自分はどうしようもない霸気に気圧される。

今回の食戦はまさに十傑同士のモノに相応しい全てが集められた。月天の間という最高の舞台、最高級食材を使用したテーマ、そしてその勝敗を決定する最強の審査員。それこそが遠月学園の長い歴史を支え続けた現遠月の重鎮達であり、放送部員という理由でこの場に存在を許されているみるではあまりに役者不足の強者つわもの揃い。

「お久しぶりです、叔父様方」

彼らの眼光に萎縮し、一步も動けないでいるみるを余所に何の躊躇も気苦労も無いとていうように薙切せりかは彼らの前に行き、慣れた仕草でお辞儀をする。

「おう、せりかちゃんじやないか」

「元気そうで何よりじゃな。そうじや、こつちに来て一緒に食べんか

?」

対する老人たちも幼い頃からその姿を見てきたせりかの登場に顔を綻ばせ温かく迎え入れようとし、少女のひどく不機嫌そうな翡翠の瞳を直視してしまう。

「ん、なにか機嫌を損ねるようなことを言つたかの?」

「…………遠月の重鎮である貴方がたならこの会場の変化に気づいているでしょ？」

「はて、なんのことかのう。年を取ると色々目も勘も鈍つてしまつていかんわい。…………それで、この場で遠月の玉を見出すという理念から逸脱した行為が行われていたかのう？」

「…………なるほど、この程度は全て想定内。遠月の為になると、そういうことですか。わかりました。――なら、こちらもそういう風に振舞わせてもらいます」

結論から言うとこの時点で薙切せりかは少々キレ・・ていた。

遠月の伝統ある食戟にまとわりつくように張られたそれぞれの思惑。

それを知つていてそれでも遠月の礎になるならと全て見逃そうとする老人達。

この場所には最初からせりかが選んだあの少年が求める笑顔など生まれる余地もなかつた。

(これは私の責任ですね。あの子に背負わせすぎました)

認めよう。

自分は過ちを犯した。

だが、過ちは取り消すものではない。過ちといふものは認め、それをあらゆる意味で上回る成果を挙げる。それが“薙切せりか”的歩んできた道だ。

「…………みーくん。世の中にはこういう風に思い通りにいかないこともあります。それでも貴方は料理人です。料理人といふものはどんな場面でもお客様に料理をお出ししなければいけません。それがどんなに認められない状況だろうと料理人としてこれは絶対です。わかりますね？」

「…………はい」

苦々しくもはつきりした声で返事をする少年にせりかはこれ以上責めようなどとは思わなかつた。

叱責の言葉の代わりにいつもと変わらぬ笑みを。

それが難切せりかのやり方。

「よろしい。では、思い通りに行かない状況での“料理人として”的お手本をお見せしましょう。――といつても、見せるのは

全てを蹂躪して、笑顔で帰る私なりの方法で、ですが

そう、これから始まるのは魔女と呼ばれた遠月第十席薙切せりかのただの八つ当たりだ。

「実食つ！」

どこからともなく響いた大声とともに五人の審査員のもとにそれぞれ二つの皿が給仕される。

「ふむ、見た目で言えばせりかちやんの料理の方が美しく整つてはいるが――――見た目と味は別じやせい？」

「ですな。まずは第九席のモノから頂くこう」

老人達はそれぞれの料理を推し量るように一瞥した後最高品質の食材で作られた須郷の皿に手を出す。

見た目という意味では薙切せりか――――つまり榊奴が作り出したものが優れているといったばかりなのに何故、と思うかもしれないがあくまで彼らの料理が優れているのは完成品の美しさだけ。並べてみれば確かに須郷のモノと比べれば優秀と言わずにはいられないが、それでも使用した食材の質という意味では圧倒的な差がある。

それらの差を見抜けぬようなものはこの審査員席にはいないというかの如く迷い無い手付きで料理を口に運んだ審査員達はその口中に甘い果肉のようなゼリーを運んだ瞬間静止する。

「こ、これは!?」

「口の中で料理が消滅した!？」

通常生物が取る『食事』という行為には口へと運んだ栄養素を自らの血肉へと変える為、その命を噛み締めるという意味を込めて『咀嚼』が行われる。

しかし、今彼らが口に運び養分としたものにはそれが存在しなかつ

た。取り込んだ瞬間に口内に溶け込むような旨みが発生し、その余韻がいつまでも消えない。

一步。

須郷圭一が前へと出る。

「…………今回使用した食材は珍味と称されるようになどれも癖が強い食材です。一つ一つならその強烈な個性を味わうのに申し分無いが、世界三大珍味というのは伊達ではない。消費者にこの三つの食材を同時に味わわせるのならば料理人は確実に現れるだろうクドさを如何に軽減するかを考える。私が辿り着いたのは口へ入った瞬間に旨みだけを残して蒸発させるというものです」

「た、確かにこれなら食事する上での苦痛の一つとも言えるクドさと満腹感を感じることなく次々と口へと運ぶことが出来るつ!!」

審査員の絶賛の声が会場内に響き、集まつたギヤラリー達の感嘆の声で月天の間は秋だというのに真夏のような熱気に包まれる。

「遠月の重鎮をここまで言わすなんて!さすがは十傑の一人だ!?」

「まだよ。まだあのお方が反応していない」

一人を除く四人の審査員の好印象を得た事で須郷の皿の有能性は証明された。

それならばと、会場にいる誰もが最後に残った老人の反応に期待するるのは当然のことだった。

「『食』とは、どんな時代を跨いでも常に進化し続けるものだ。この遠月学園は若き才を磨き、たつた一握りの『玉』を生み出すためだけに存在する」

五人の審査員の中央に座するはこの遠月を世界有数の調理学校として君臨させ続けるたつた一つの理念を体現したマスラオ。

食の魔王と呼ばれる老人が言葉を発した瞬間、熱気漂っていた会場は一瞬の静寂に包まれる。

「須郷圭一、客に対するその誠意見事だ」

「ありがたきお言葉です」

「ならば、食する側としてもそれ相応の気位を見せねばな」

老人は口に入った瞬間解けるはずのゼリーを確かに噛み締める。

「なつ!?

口内に溶け渡るよりも遙かに早く、調理した須郷の予想を上回る形でその頸を開閉し、料理に込められた全てを文字通り噛み碎くが如き咀嚼音が会場内を響き渡る。

「食材の良さを損なうこと無く全てをひと皿に纏め上げる。この遠月でのその精進、確かに受け取つたつ！」

学園の頂点として全てを喰らい尽くした老人——薙切仙左衛門の幾重にも着重ねられた着物がても触れてないのに脈動しだす。

「で、でるぞ——」

優れた料理である須郷の必殺料理を食べたことで老人の着物が弾け飛び、老齢に見合わないほど筋肉質の体格が顕になる。

「「おはだけだアアアアアアアア!!!!」」

苦渋の選択

『おはだけ』

学園総帥が自らの着飾った衣類を脱ぎ捨て、料理人に対する最大限の敬意を表するこの行為はこの遠月学園では最高評価と言つて差し支えないものだつた。

「『おはだけ』を超えるには『おはだけ』しかない」
時の遠月リゾート総料理長堂島銀は自らの生涯のライバルと定めた漢との食戦の際、そう語つたといふ。

それだけこの学園にとつて学園総帥が今とつた行為の意味は大きく、遠月第九席の料理は素晴らしいといふのは直接それを味わう事のなかつた観客達にも伝わつた。

「流石遠月十傑…………つ、こうも簡単に『おはだけ』を出すなんて！」
「やつぱり、須郷先輩はすげえぜ！それに比べ——」

「ああ！あの十席だつていう女の子どう見ても俺達より年下じやないか。料理も別の奴に任せているみたいだし、本当に十傑に見合つた実力があるのか？」

事ここに来て、調理中に見せた榊奴の動きや魔女が作り出した黄金のレシピにより完成した料理の美しさなどは食の魔王の出した最高得点の前にかすみ、会場全体の風向きはこの食戦の開始前と同じ、いやそれ以上に現十傑である須郷に向いていた。

これは榊奴が一人で戦つている間も姿の見えない本当の第十席という幻影が観客の中でひとり歩きしていった時よりも圧倒的に悪い状況だ。なにせ、今しがた姿を現した第十席は良くて体の小さな中学生レベルの少女でしかも足が悪いのか車椅子に座つている誰が見ても圧倒的弱者であり、強者だけが生き残り弱者は容赦なく切り捨てられるこの学園には全くと言つていいほど似つかわしくない存在だったのだ。

聞けば、既に彼女が十席止まりなのは雍切の家の力を使つて十傑に入つたからだと、今まで別の人間に料理を任せていたのは料理人として実力がない事を隠すためだと根も葉もない噂まで立ち続けて

いる。

「…………」

榊奴操は内心思う所があるのであるものの、会場の下劣な視線や嘲笑をその小さな体で一心に受けながらも顔色一つ変えずにただその視線を自らの料理を食べる審査員客に向ける薙切せりかの為に次々と料理を給仕していく。

料理を作り、客の手元まで運ぶ。それが今回榊奴に与えられた役割であり、そこから先は彼女の役目だ。

「さて、ここにいる皆様方には改めて説明するまでもありませんが、料理とはただ作るだけで終わりではありません。料理人が食事を作り、お客様がそれを食するだけで終わりだというのなら世の中の料理店はそれを作る料理人の数を揃えるだけで事足ります。しかし、一流と言われる料理店では最高の知識を持つたスタッフが必ずと言つていいほど存在し、お客様の心をくすぐる『言の葉』で食事を彩らせてくられます。私がこれからするのはそういうことです」

「ふーん、そういう事かい」

一人となつた実況席ではあの榊奴という少年の手でいつの間にか給仕させていた料理をその口へと運ぶ第三席矢成音孤の姿があつた。恐らくはあの魔女の計らいなのだろうが、既に大量の自らへの

お供えいなり寿司をその小さなお腹へいっぱいに蓄えていた音孤からすれば一
体全体何の嫌がらせだと勘ぐつてしまいそうな間の良さだった。

仕方なく口に運んだ瞬間に訪れたその『違和感』の正体に気付いた頃には審査員席の老人達も音孤と同様にその料理を口に運んでおり、食戟という場の都合上防ぎようがなかつたとは言えこれで全員その邪悪な思惑に見事に引っかかつてしまつた事に少し歯噛みする。

「…………美味しいんですか、それ」

「ふつふーん、食べてみるかい？」

「結構です」

いつの間に帰つてきたのか作り笑いをすっかり辞め、不機嫌そうな表情を隠そうともせずに早津田みるるは音孤が次々と口に運ぶその料理を恨めしそうに見つめていた。

「それはお前のご主人からの言いつけかい？」

「ご想像におまかせしますよ。ま、ひとつだけ言つておくと私達はそういう関係ではないですよ。油断していたら貴女でも足元を掬われる程度には危険な存在だと自負していますが」

「そうかいそうかい。いいんじやねえの？元々この学園はそういう場所だし、曲がりなりにもこの地位まで登つた奴は少なからず覚悟はしているよ。それはお前さんが一番わかってるんじやねえの？」

「私は私の役割を果たしただけです。あの場で須郷圭一が口車に乗るほど勝ちに拘る様なら計画を変更しなければならなかつただけですし、どちらに転んでもいいような手順は考えてました」

「言うねえ。邪魔が入つて心底ビビつている割には饒舌だ」「び、ビビつてなんか！私は役割を果たしただけです……で、それ美味しいんですか？」

音孤のからかう様な姿に更に不機嫌を極めるみるるだが、仮にも遠月の生徒として未だに手にした料理を離さない音孤に興味があるのかもう一度先ほどと同じ問い合わせをする。

「いや、それがわかんないんだよねい」「は？」

二度目の『おはだけ』が出るか、それとも一步届かずにこのまま決着がついてしまうのか。

会場の注目を余所に、審査員の老人たちの顔は優れないものばかりだった。

「なんじや、これは」

説明は受けた。

薙切せりかの言葉は彼女の事前の宣言の通り、食欲をそそられるものであり、その言には遠月の重鎮として今まで数多くの美食を味わつてきた老人達からしても指摘する点は存在しなかつた。

この食戦という制度は実際の料理店での食事と違い、料理人達が実際にその腕を振るい作品を完成させる姿をその目で見ることが出来、当然それらも評価に多大な影響を与える。

料理人同士の実力を競い合うに適したように見えるこの制度には実は重大な欠点が存在する。

それは食の現場に長く携わるほど料理に対して真新しさを感じられないくなるというもので、初めて見る技法や食材には確かに感嘆するものがあるものの長年の経験からそういうものは年々少なくなつていき、調理している段階で以前見た調理風景とその味から出てくる料理に対し先入観を得てしまうというのは人間として仕方のないものもある。勿論、そういう事で抜きにして素晴らしい料理には最大限の評価を付けることは老人達にとって暗黙の了解であり、この遠月学園ではそれらを度々凌駕する逸材が出るので学園の運営にはそれほど問題もない。

しかし、時折この制度の欠点に狙い澄ましたかのように突き当たる生徒が居る。榊奴操という少年がまさにそうだ。当たり前のことを当たり前に、教本通りの技術は確かに失敗しない道筋だろう。だが、この遠月の重鎮や時折招致する特別審査員と呼ばれる人々はその当たり前を骨身に染みるほど味わつており、決してその料理に高評価を下すことはない。普通の作り方では普通のモノしか出来無い。確かにあの少年の動きの一つ一つは眼を見張るものがあるが、それでも学園の上位陣には遠く及ばない。薙切せりかのレシピによつて途中から動きが目に見えて変わつたのは理解出来る。けれど、途中から調理法を変更した料理は味が崩れることはあっても整う事はない事を知つてゐる老人達にとつてそれは曲芸というレベルでしかなく、紛れもなく天才の一人である須郷圭一には遠く及ばないだろう。

「有り得ん。これは、有り得ん！」

だからこそ、その衝撃は人一倍だつた。

言葉による説明を受け、自らの眼でその光景を確認した。だからこそ、どんな味になるかは大体想像できる。

しかし、これは、この料理にはそれがない。

例えるなら幾重にもアクリル板にされ、透き通るような輝きを見せたステップ。鍋の底まで見えてゐるその透明なステップを薄いからといつて味がないというものはいないだろう。調理過程を見ているのなら尚更のこと。宝石のような輝きを見せるその液体には異物一つ無く、それが出来るまでに加えられた食材の味が凝縮されている事を知つてゐるからこそそのステップに対する期待は高まる。

この料理もそうだ。

なまじその過程を見ているからこそ、味に對してのある程度の予想と一定の期待を持つ。

だからこそ、この料理は異常だつた。

「むううううう」

「これは……」

老人達の普段は閉じることを知らない饒舌もこの時ばかりは頑なに閉じられ、一切の言及を拒んでいた。

難切せりかが考え、榊奴隸が実現した料理はそれだけ彼らにとつて危険なものだつた。

人間の味覚に一定といふものはない。

つい先日までなんの疑問もなく食べていたものが環境の変化によつてはとても美味しく感じられることがある。その逆も然り、美食を追い求めればヒトという生き物はワンランク下の料理では最早満足できなくなつてしまつ。当然、その基準は人それぞれであり万人が同じように美味しいと感じられる料理はどれだけ追い求めても存在しない。それどころか追い求めるほどにそれは遠ざかつてしまつ。歩んできた人生の大半を食への探求に費やしてきた老人達はそれを十分に理解しており、遠月学園は多種多様の玉を発掘し、それをそれぞれの分野の頂点へと押し上げることで最高の美食を追い求めてきた。

それをこの料理は否定する。

彼らが最も忌避するべき『平凡』という言葉によつてこの料理は彼らの積み上げてきたものを真っ向から否定した。

レシピ通りの食材、レシピ通りの手順、レシピ通りの環境。それら全てを揃えても結局出来上がる料理には差異がある。それは単純に料理人の実力だつたり、食材の質だつたりと色々だが、同じ料理人が作ったとして全く同じ味が出せるというわけでもない。料理人によるのは昨日までの自分を越える努力とお客様に『いつもの味』と呼ばれ親しまれている味を再現する努力であり、機械のように全く同じものをコピーすることなどはできないのだ。

それは食べる側にも同じ。いくらあの時美味しかつた味だといつたも今日その日までに食べてきしたものによつてそれは『思い出の味』として形骸化しているものだ。「思つていたものと違う」などという感想は日々精進している料理人の腕が落ちたというよりは客の舌が肥えただけというのが圧倒的に多く、常に客を満足させるためには料理人側も過去の栄光に縋つてばかりではなく、次の目標に向かつて進まなければいけないということがよくわかるだろう。

美味しい料理を作り続けることがどれだけ難しいかはこの遠月にい

れば嫌というほど理解できる。だが、実はそれ以上に作り続けることが困難な味が存在する。不可能といつてもいいその味とは、

(普通じゃ)

(普通すぎる)

(あまりに普通)

歴戦の美食家たちが声として発せずにいるその感想を何も知らない観客が聞けば確実にこの異様な料理を作ったものたちは嘲笑の対象となるだろう。

しかし、それは同時にそう、評する事は老人達にとつて苦渋の選択だつた。

思考停止して片方が美味しくてもう片方が普通だから美味しい方の勝ちと言つてしまえば簡単だ。実際老人達よりも食に対して未熟なもの達はそんな判決を下すだろう。

だが、事はそう単純ではない。

料理において一定の味が存在しないということは万人にとつての『普通』と言える基準は存在しないという事になる。

よく、「この料理は普通だ」等と耳にするが、それは可もなく不可もなくという理由で普通と評しているだけで本当の意味で平均的な味などでは断じてない。美食を求めればその要求ラインが高くなつていくのと同じ様にその人にとって『普通』と呼ぶに相応しいラインはどんどん押し上げられていく。だからこそ、万人にとつて『普通』と呼べる料理は誰もが『美味しい』と呼べる料理以上に有り得ない。(もし、ここで正直な感想をワシらが口にすれば――)
(身を滅ぼすのはこちらも同じ、か)

遠月学園の弱肉強食とも言えるルールは何も生徒たちに対してだけのものではない。重役である彼らとて、秋の選抜を代表とする行事や食戦の場でその役に相応しくないと判断されれば簡単にその首を切られる可能性は十分にある。その権利を持つ代表格が現在この審査員席の中央に座する食の魔王と呼ばれる老人であり、学園の最高意思決定機関でもある遠月十傑評議会だ。

しかも、今回は十傑同士の正式な食戦であり、下手な判断は即自分

の身に降りかかる。そう、彼らに危惧させるほどの料理が目の前にあるのだ。

(学園総帥よ、お前さんは一体どうする?)

長いものに巻かれるというのは社会を生きる上では決して間違つたものではないが、この一人一人の判断が勝敗を決める場では絶対に行つてはいけない行為。

それを見逃す魔王の一族ではなかつた。

「ふふふ、そんなに美味しそうにたくさん食べてくれるなんて嬉しいですね~」

「つは!?

気づけば学園総帥である薙切仙左衛門を含め、全員が判断どころか何のリアクションも下せないまま目の前に出された料理を食べ終えていた。

「おかわりはいくらでもありますよ。なんなら今からでも新しいもののを作りましょか? 今度はもつと上手く作れると思いますよ。ね、みーくん?」

「え? あ、ああ、すみません。まさか俺の料理をこんなに食べてもらえるなんて思つてもいなくて…………そうですね。料理人として、お客様が望むならいくらでも作ります!」

「違う。そうじゃない」とこの料理を食べた誰もが叫ぼうとしただろう。

薙切せりかのいつもと変わらない“笑み”を見て、彼女をよく知っている審査員達はそろつて確信した。

今この場で彼女が発した「今度はもつと上手く」というのは今の料理を食べて味覚の基準点が変化した老人達に対し、それにあつた『普通』の味を作り出すというのだろう。もし、その料理を食べれば今度こそ正当な判断が下せるなどとは誰一人思わなかつた。

「しょ、勝者。第十席薙切せりかとその代理人榊奴操!」

そうして、第九席須郷圭一と第十席薙切せりかの食戦は遠月学園史上稀に見る『おはだけ』が出なかつたほうが勝利するという結果から学生達の間では『脱ぎぞん』と呼ばれ、密かに起こりかけていた第十

席に対する下克上ブームはその下に十傑である角崎タキや秋の選抜優勝の木久知園果や食戟で人間離れした動きを見せた榊奴操が付いていることもあります。直ぐ様沈下し、食戟のすぐ後に審査員達が揃つて寝込んだことで直接その恐ろしさを味わっている現三年生だけならず、中等部に至るまで「名前を呼んだら呪われる」レベルに恐怖の象徴として刻まれることとなつた。

神の舌を持つもの

この遠月学園では一日の講習が終われば基本的には自由行動が認められている。

所属する部活や研究会で腕を磨くもよし、外出届を出して学外の様子を見に行くもよし、各自で自主的な講義を講師達にご教授願うのも自由だ。

秋の選抜前まで特別なサークルに所属していなかつた榊奴の日課はこの学園に混在する多種多様な分野の研究会を周り、その技術を習得することだつた。

ここ一週間は予想外の食戟などの準備のせいで殆ど通えていたなかつたが、それが終わつた今一息ついている暇などない。

この学園に集まるのは世界中で天才と呼ばれる料理人の卵達。彼ら等に共通しているのは境遇や趣味、才能によつて決められた得意分野や土台があるということ。榊奴にとつてのそれは『ただレシピ通りに作る』というものであるが、常人が十日を掛けて渡りきる道のりを一日二日で軽々と超えていく怪物達を相手にするにはレシピという予め定まつたものに依存するこのやり方はあまりに心もとない。

そこで編み出したのが学園中の様々な研究会を回つてその技術を吸収し、レシピが課した如何なる要求も直ぐ様実行できるようにするというやり方だ。幸いこの学園には様々な国の色々な流派が存在するので陶器作りや変わり身、バリツ、パルクール、ジークンドー等そんじよそこらではお目に掛かれない実戦的な技術も比較的簡単に習得できる。

「えーと、今日は蒸し窯研究会で檜風呂の実践研修が七時からか。……これは是非入浴セットを持つていかないと。後、珍しいものだと「夏はまだ終わらねえ！漢達の行灯祭り（秋編）」、か。俺の気のせいじやなければ毎月やつてるよなこれ」

お手製の遠月学園イベントマップに書かれた面白そうな行事を吟味し、その日の予定を決める。この学園では昨日までいた生徒がある日突然退学になるのも珍しくないのでどこもその日その日を全力で

やることも特徴だ。

彼らの熱気にさらされ、自らも一つ成長する。それが榊奴操としての理想である。

「おーい、少年。暇なら手伝つてくれ?」

「えーと、貴女は確か第三席の矢成音孤先輩でしたつけ」

「そ、そ。でさー、ちょっと困ったことがあつてねい」

目の前にいるのはケモミミロリな来訪者。

彼女によつて今、まさに榊奴の小さば理想が阻まれた瞬間だつた。

「即刻、この研究会の解散を命じます」

閑散とした第十六実習棟に凜とした声が響き渡る。

声の主は中等部に上がつたばかりとは思えない自身に満ち溢れた姿勢で自分よりも年も体躯も上の男達に物怖じ一つせずに彼らにとつての死刑宣言を下す。

いつまでも動こうとしない男達を苛立たしげに見つめる少女の名前は薙切れりな。今年この遠月に入学したばかりの身でありながら、既に高等部の生徒達と幾度となく渡り合い、多くの輝かしい成績を残したこの遠月でも近年稀に見る傑物である。

「聞こえなかつたのですか?私は今すぐここを出て行けと言つているんですよ?」

「で、ですが。それはあんまりで——」

「そう。では、食戦で決着をつけるということですね?」

「い、いや!そういう事では——」

歯切れの悪いこの研究会の長はこの棟に残つた最後の人だ。こ

の第十六実習棟は近々えりな専用の研究棟として生まれ変わることが“決定”しており、ここにいた他の研究会はすべて退去済み。そして、この研究会も程なくえりなの実力の前にひれ伏す事は半ば決まつているようなものだつた。

えりなの実力は天性の味覚とそれに裏付けられた技量により、この遠月でも既に最高位のものとなつてゐる。

だから、次の瞬間教室に入つてきたものが誰であれ今の状況を搖るがすことはありえない。

その筈だつた。

「はーい、ごめんねい」

「なつ!？」

新たに教室に入つてきた中学生であるえりなよりも小柄な少女の姿を見て、一瞬固まる。

狐の耳のようなものを生やした着物姿のこの少女はえりなの知る限りこの学園でもトップクラスの魔物で同時にえりなが“今のところは”負けを認めるしかない例外の一人。

「あれー、どしたの?」

「…………あなたこそどうなされたんですか？矢成先輩」

「よりによつてこの子か…………」

遠月学園第三席矢成音孤の生み出せし料理は口に入れたあらゆるものをして通り虜にする。

彼女が本気を出せば学園のパワー・バランスは一日で崩壊すると言われる程の実力を誇りながらあくまで必要最低限の行動しか起こさない変わり者。

そんな彼女がどうして？というえりなの疑問に対する答えは意外なところから帰つてきた。

音孤の用事とは簡単に言つてしまえば揉め事の仲介だつた。

この遠月では生徒間のモノから研究会同士のモノまで揉め事というものはそう珍しいものではない。大体がその後食戟に移行するかそれでも収まらない時は生徒会執行部の強制執行によつて事が収まるのだが、今回は彼等が別件で手が離せないため十傑である音孤にお鉢が回つてきたらしい。

現場に行くとそこにいたのは顔見知りの研究会の部長以下三名と言い争つている様子の少女。互いの年齢を鑑みれば研究会側が年下の少女を取り囲んでいるように見えるが、彼らを知る身としては間違つてもそんなことができるような人格ではなく、逆に少女の方が三人相手に無茶な要求をしているようにも見える。

「で、よりによつてこの子か…………」

ここで問題となるのがこちら側の顔見知りが研究会の面々だけでなく言い争つている少女も該当するということだろう。

「あら、誰かと思えばあなたですか。まだ、この学園にいたんですね？」

「…………お陰様でね」

彼女についてはこの学園で知らない人間のほうが少ないだろう。
雍切えりな。

容姿端麗、料理人としてのスキルも生まれながらの天性のものがあり、あの雍切の後継者として幼い頃から教え込まれた技術や知識は既に高等部の生徒にも劣らない。

そんな彼女が音孤に連れられた榊奴程度の男を見て怯むはずもなく、「…………なんにせよ、これは私と彼らの問題です。部外者は引っ込んでいてください」

「さ、榊奴くん」

彼女の高飛車な物言いと研究会部長の弱々しい叫びがこの場の全

てを物語っていた。

今現在彼女がやろうとしている地上げ屋も真っ青な行為は意外にもこの遠月ではそう珍しいものではない。この学園では欲しいモノがあれば己が皿で勝ち取るという暗黙のルールが存在する。

えりなの実力なら年上の高等部の面々から勝利をもぎ取るのにさほど苦労はしないだろう。この研究会の実力も榊奴の知る限りあまり高いものではない。下手な挑発に乗つて食戟を受けようものならこの学園が絶対視する『食戟の掟』によりありとあらゆるもののが奪い取られるだろう。

戦えば負けるのは目に見えているからこそ、彼らは年下の少女一人に強気になれず結果を少しでも先延ばしにしようと決死の交渉を試みているのだ。残念ながらそれは榊奴程度が助つ人として参加しても覆ることはないだろう。

「はあ、しようがないか」

この場に呼ばれた意味がここに来てようやくわかる。

もし、彼女と榊奴が顔見知りだと知つてこの場に連れてきたなら矢成音孤という人間にに対する警戒度を上げなければならない。同時に榊奴がこの研究会と懇意にしている事を知つていてこの状況を知らせてくれたのなら感謝してもしきれないだろう。

「えりなちゃん、君はこの『キヤラ弁』研究会がどれだけこの遠月にとつて重要なか知つているのかい？」

「どういうことですか？」

「まず、この研究会は遠月の中でも三十年以上の歴史を持つ由緒ある集まりだ。これは学園に問い合わせれば確認が取れる。更に彼らの作る作品は毎年大会で一定の成績を残している。その完成度はなんとセル画と比べても遜色ないと言われるほどだ」

まずは軽い心象操作。

勝てないが負けられない勝負というのは昔から嫌と経験している。幸い今回は必ずしも正面からぶつかり合う必要もないでの比較的楽な部類に入る。

「…………セル画とはなんですか？」

予想通りの返答。

この歳で料理人としてこれだけの実力を持つているという事は同時に相応の対価を支払っているということになる。彼女の場合はおそらく圧倒的にサブカルチャー系統の知識が不足しているのだろう。生まれた時から息の詰まるような“本物”の中で過ごしてきた彼女に想像の産物である“偽物”にかまけている時間なんてものはない。きっと漫画ですらまともに読んだこともないに違いない。

「なつ、セル画を知らないだと？あの“雍切”的族が？」
「むつ、失礼な！し、知っています！当たり前でしょう！私は“雍切”なのですから！」

雍切えりなは自分が食の世界で榮華を極める“雍切”的族だということに誇りを持つていて。それは立派なことであるし、その名を良からぬ事にしか使わないもうひとりの“雍切”を知っている都合上本当に尊敬に値することだと思う。

しかし、“雍切”であることあくまで利用しその才能を料理だけではなく漫画、ゲームだけならずネットから仕入れたあらゆる知識を蓄えることに余すことなく費やしているあの車椅子の魔女と違い、今回はそのプライドと自身の得意分野以外への無知さがえりなを追い詰めることになる。

「へえー、なら当然この研究会の素晴らしさは理解できるだろう？なにせ、年に二回あるあのもはや国際的といつてもいい祭典で類まれなる成果を上げているのだから」

因みにこれは事実だ。

冬はともかくあの地獄の夏に食品関連を持ち込むとは正気の沙汰ではないが、彼らは研究会設立時から一度も欠かさず参加し、自らの“嫁”を徹底的な衛生管理の元死守してきた。既にこれだけでも遠月内ではトップクラスの技術を持つていてことの証明になる。

「祭典――。そ、それがどんなものであろうと現在のこの研究会の成績が遠月に相応しいものであるとは思えません。第一、それほど の実力があるのなら食戟で示せばいいのではなくて？」
「うーん、ちょっと違うんだよな。彼らが凄いのは実力があるから

じゃないんだよ」

「では、それを説明してください。もし、私が納得できるものであるのなら今日のところは引き下がりましょう」

（またまたー。他人に言われて納得するようなタマジやないくせに。つていうか、納得してもまた来る気なのかこの子は…………）

確かに、えりなの言うとおり一定の成果が挙げられるのならそれに越したことはない。だが、はつきり言つて彼らにそれを求めるのは酷というものだ。人には向き不向きというものがあり、この研究会の面々はその愛を注ぐ対象をひとつずつ箱に収めるために日々精進している為、基本的には食戦のような表舞台に立つようなやり方には向いていない。

では、どうやってこの危機を乗り切る？

（困ったな、レシピはあるだろうから少し時間を貰えれば作ることは出来るが何の知識もない彼女が納得するかどうか――――）

レシピさえあれば完璧に再現する自信はある。だが、目の前の相手にそれは出来ればしたくない。

『平凡極まりない味ですね。まるで何も感じられない』

「つ!？」

初めて会つたその日、榊奴の料理を食べたえりなの鋭い言葉が脳内で蘇る。

それはレシピを再現することしか出来無い榊奴の料理を真っ向から否定するものでこの言葉のおかげで結果的には魔女という最大の師と出会う事が出来たものの、今のところはあの言葉を覆す答えを得ているわけではない。

「どうしたんですか？証明できないなら私はこのまま彼らと交渉を続けますが」

「いやいや、別にそう焦ることもないんじやね？」

「……矢成先輩。失礼ですがこれは私と彼らの問題です。いくら十傑といえど、これ以上の介入は越権行為だと思います」

「ま、なんだけどねい。でもね、私は何も仕事でここに来ているわけでもないんだよ」

えりなの発した言葉になにか思うところがあつたのか音孤の眼が僅かに細くなる。

序列通りなら現在この遠月で三番目に強い彼女なら、えりなが相手でも何ら臆する理由はない。

だが、狐のように他人をからかうことが好きで猫のように自由を愛する彼女にとつては本来この程度の研究会の存続などは些細なこと。横槍を入れてまで関わる程の理由などあるはずもない。

では、なぜ彼女はここにいる？

神奴の矢成音孤に対する分析が正しければそれは十傑の使命感には程遠いものの筈だ。

（と、なると理由はあれか……矢成先輩は知っているのか。この研究会が持つもう一つの顔を……これが無くなれば間接的に自分にまで被害が出ることを恐れているからこそこの対応か。なら、勝機はある！悪いがえりなちゃんこの研究会は無くさせないよ。ここには俺にとつての宝が眠っている。例えどんな卑怯な手を使ってでも言いくるめてみせる！）

戦う意味

ジャンケン。

一般的に物事の優劣を決めるときに用いられる決闘法の一つで必要な道具が己の身一つという点から世界的に有名な競技である。

「最初はノーリング シュンケン ホン！」

」」」」」

対決する一人から繰り出された拳。

木戸の手元に立つ。日の前の少子はハヽヽ、昔叫んでいた。

えりなにとつてはその逆だ。

—もう一回です！

いいよ。だってジャンケンなんて『運』だもんね」

ニツクにより遠月伝統の食戟ではなく、二人のジャンケンへと移行することになった。井畠研究会を絶る華麗な行方は極めて説明が難しく、交渉元の元老院は、このままでは研究会の存続が危ぶむことにならぬと判断したのである。

最初は食戟のテーマを決める程度のものだつた。誤解の無いよう
に言うが、榊奴操と薙切りなどは本来はあつてない
ものだ。なんでも作れるように努力する代わりに得意料理が存在し
ない榊奴に対し、薙切として食文化の英知を教え込まれているえりな
には自らのテリトリーコそあれ苦手な料理など存在しない。

だからこそ、テーマの選定において二人の希望は殆ど無くそんなことで時間を食いたくないとえりなが切り出したのがジャンケンだつた。

そういう先に切り出したのは元りなかなかのた

「あれれ？ 敬語はどうしたんだい？」

「だ、誰があなたのような男をつ！」

「言つておくが、先にジャンケンを低俗な競技と貶したのは君だ。そ
の報いは受けてもらう。そら行くぞ、最初はグー」

「クツ、じや、ジャンケン」

普段の神奴ならばこのように相手の精神を逆撫でするような言動は取らない。

しかし、えりなは持ち前の負けず嫌いを発動し一回勝負のところを何度も食い下がっているうちに発した言葉が料理人としてジャンケンをこよなく愛する神奴の逆鱗に触れた。

「また、俺の勝ち～」

「ど、どうして…………」

「どうして？さあ、どうしてだろうね。もしかしたら俺がイカサマをしているかもしない。でも、一つ教えてあげるよ。” 例えればても立証できなきやイカサマじゃない”」

一般的には運ゲーと呼ばれるジャンケンだが、実はその認識は大いに間違っている。

この競技にはいくつかの必勝法が存在し、それを知っているか知らないかで時にこのようなワンサイドゲームが展開されることがある。料理人としてひたすら基本に忠実に歩んできた神奴にもそれがある。

講師や自分よりも実力が上の料理人たちを参考とする上で最も注視するのは相手の手元だ。その手でないとあらゆる作品を作り上げる料理人の手元からは非常に多くの事を学ぶことが出来る。そして学び取つた多くの技術は今日の神奴操という料理人を語る上で欠かすことのできないものであり、その結果得た技術が相手の手元を見て次の動きをほぼ100%予測し、それと同時に自分の手元を同じようく動かす曲芸じみた模倣だ。

これと客が今何を食べたいか予想するために学んでいる精神学やFBIの知り合いなどから学んでいる最先端のプロファイル技術を応用すればジャンケンにおいて奇跡的な勝率をたたき出すことは難しくない。

相手の目線や手首の角度を観察し、心理操作すら駆使する神奴の必勝法は今のところ全国ジャンケン大会決勝リーグで当たった猛者達や彼を凌ぐ観察眼を持つ薙切せりかを除いて破られてはいない。

「さて、これで49戦目。もう少しで50の大台だ。別に俺としてはまだまだ相手してやつてもいいが、流石にこれ以上君に恥を上塗りするのは気が引ける。どうだろう、今回の件は手を引いてくれないか？俺も料理人だ。専用の調理棟の重要性は理解している。上を目指す以上これで十分なんて妥協は存在しないことも。その上で、彼らについても今一度考えてくれないか？君にとつても重要な話だ」

「ど、どういうこと？」

目を真っ赤にしながらも決して涙だけは見せないように榊奴を仇が如くキツく睨みつけるえりなに対し、あくまで笑顔で近づく。

「このキャラ弁研究会には遠月学園において代々重要な役割が与えられている。卒業アルバムは知っているね？」

「当然です。この遠月を卒業した証にして毎年数冊しか作成されることはない記念品。ゆくゆくは私が手にするものです」

「そう、君にとつても重要なものだ。なら、その卒業アルバムが毎年その実態を明かされることもしつているね。何故だと思う？」

「？何故って、それだけ重要なものだということでしょう？」

先程のジャンケンの件もあってか含みのある榊奴の言葉にあからさまな警戒心を隠そうともしないえりなだが、自分に関係のあることだと理解しているだけに少しずつその警戒は甘くなっていく。
「ま、普通はそう考えるよな。でも違う。卒業生達が頑なにその実態を隠すのは彼らにとつてそれがとんでもない地雷だからだよ。俺も多くは知らないが、あれには在校生や講師達からの賛辞の言葉の他に各々が遠月の生徒として送れる最高の“賛辞”が載せられる。その

内1ページをこの研究会は数十年に渡つて担当している

「伝統、ということですか」

「そういうこと。わかつてくれたかな？」

伝統という言葉は人に何とも言えぬ充足感を与える。例えどれだけくだらない事だろうと人間はそれが伝統だと言われるだけで納得してしまう時がある。その魔力を知つているからこそ、榊奴は今度こそ価値を確信する。

彼の知つている雑切えりなという少女は絶対的な才能とそれを最大限生かす環境を持つ強者であり、それを持つてもあまりあるほどの負けず嫌いなのだ。

「ふ、それがどうしました？例え伝統だとしてもそれがくだらないものであれば消し去つてあげるのが『雑切』である私の役目です。この遠月にそのような低俗な伝統など必要ないわ。第一、私の人生にそのような汚点を刻むなどありえない。この事について教えてもらつたこと”だけは”お礼を言つておきますわ」

榊奴の言葉をバツサリと切り捨てることでどこか勝ち誇った表情をするえりなは先程と同じようにキヤラ弁研究会の代表に詰め寄るように「さあ、食戟を——」と言葉を投げつける。

どうやらこの棟を手に入れる決意は固いようだ。榊奴の方に食激をする意思がない以上ここから先は当人同士の問題。介入は諦める他ない。

「そうか、残念だよ。俺では力不足なようだ」

「ようやくわかりましたか。では、邪魔者もいなくなつたところで——

「えりなちゃんがそんなにコスプレがしたかったとは——男と

して美少女のコスプレを止める理由はない。是非撮影の際は呼んでくれ。一応俺も裁縫の腕前はここ的学生服を自作して誰にも気づかれない程度はある。きっと役に立つと思う」

「……………へ？」

目を点にしてたつた今聞こえたとんでもない発言の意味を理解しきれない様子のえりな。榊奴こそ至つて真剣な表情だが、隣で堪えき

れずに壁をその小さい手でバンバン、と叩く音孤やえりなどの食戟という実質的な死刑宣告を受けながらもいそいそとカメラを取り出す研究会の面々などは完全にこの状況を楽しんでいた。

「君がこの研究会を食戟で潰し、この棟を手に入れるというのはわかつた。でもね、それで卒業アルバムのページがなくなるわけじやない。この遠月に一体いくつの研究会が存在すると思つていいんだい？キャラ弁研究会がなくなればその役割は他の研究会へと受け継がれる……」

「ここが無くなるとすると次の候補は『魔女っ子ファミリア』か『巫女さんファーム』かね。私としちゃこれ以上変な属性が増えるのは流石に纏まりがつかないから止めようとしたんだけどね。ま、角崎やお前の面白映像が見れるなら悪くないかね。て、いうか魔女の魔女っ子つてそんな面白そうなの見れるなら私が先に動けばよかつたねい！！」

「なつ！な、ななな!!？」

「言つたろ伝統だつて。伝統つてのは受け継がれていくものだ。今までの卒業生が君と同じことを考えなかつたとでも思うのかい？はつきり言つて無駄だよ。この問題をどうにかするには遠月学園そのものと争うしかない。これは考え方によつては学園を巣立つことで強大な力を持つ卒業生達にとつての抑止力なのさ。卒業したからつて天狗になつているとこのアルバムを公表するぞつてね」

その点ではこの研究会は優秀だ。

ありとあらゆる食材を使い、写真と遜色ないレベルで作り上げられるキャラ弁は一発でモチーフとなつた本人がわかる出来となつている。以前少し見せてもらつた今年の第二席のモノなど試作段階のものでも、嘗て貧困街出身でありながら富裕層トップクラスの生徒に一步も引けを取らず遠月統一一步手前までいつた伝説のチームのリーダーである彼を象徴するように三人の仲間を現す無限地獄の三龍と彼自身を象つた氷結の龍が中央に降臨するという見事な出来だつた。

厨二ゴコロを刺激するそのデザインはきっとあの伝説に憧れる者達にとつては大金を積んでも手に入れたいものだろう。

榊奴としてもあんなイイモノを御蔵入りにするのはもつたいない
ということでなんとか阻止しようとしたが、魔女つ子なども非常に興
味をそそるものであることには変わらないのでそれで満足するしか
ない。

「ま、しようがないよね。これ以上邪魔して君の道を阻むなんて俺に
は出来ないし、後は好きにすることをいい。——すみません、矢成先
輩。折角頼つてもらつたのに力になれませんでした」

「いやいや、気にすること無いよ。無茶を言つたのはこっちなんだ。
——それより、一人で角崎にはどんなコスプレが似合うかゆづく
り話そう！ 今度の十傑会議でこここの後釜を決めるときに推薦するか
らさ」

研究会の面々と怒りと恥ずかしさで全身真っ赤に染まつたえりな
を置いて教室を出る。

遠月学園とは絶対的な競争社会。上を目指そうとする若者を止め
ることなどできない。そう、えりなどそこまで年の変わらないふたり
はどこか悟つた表情で多くの研究会が立ち退かされ静寂に包まれた
廊下を歩いていた。

数分後、「やつてられるかあああああ！！」と、とてもお嬢様が発する
ものではない声が聞こえたがキャラ弁研究会の存続が決まつたと二
人が知るのは数日後のことなのできつと関係のないことだろう。

「全く、素直に相手してやればいいだろうに。お前には十傑相手でも
通用する魔女のレシピがあるだろう？まさか、遠慮したのかい？」

研究等を出て暫くした後、矢成音孤がイタズラめいた表情でそう話しかけてきた。

「何のことですか？矢成先輩」

「とぼけるなよ。勘がいいなら今の状況分かつてゐるだろう？この前の食戟で須郷の奴が十傑から失脚して今第九席の座は勝者である魔女預かりとなつてゐる。つまりは、だ。魔女の配下であり、直接前者に引導を渡したお前が今一番十傑に近い位置にいる。少なくとも何も知らない学園の連中はそう思つてゐるよ。」

今朝の遠スポでは須郷という聞き覚えのある財閥の本社ビルが爆破されたという記事が一面を大々的に飾つており、十傑同士の食戟という世紀の一戦が二面行きというまさかの事態が発生してゐたので油断していたが、案外と噂というのは広まるのが早いらしい。

「…………そんなことあるわけないのになあ。俺を倒したところで次の十傑になれるわけがないし、そんな事で十傑になつたら真面目に十傑を目指している人たちに失礼だ。だいたい、候補なら俺よりも相応しい人間がいますよ」

「あれ？十傑に興味ないの？」

音孤の意外そうな声に「ないわけがない」と即答する。

だが、榊奴操には十傑になる前にやらないことがある。

「二回です」

「ん？」

「二回、あの子…………薙切れりなに俺の料理を食べてもらつたことがあります。まあ、一回目は「不味い」で二回目は「つまらない味」と評価は散々でしたけどね。」

「ほう、それは興味深いねい」

音孤の目が食肉類のように鋭くなる。

「残念ながら今の俺には彼女を笑顔にする料理を作ることは出来無い。でもだからこそ、俺は前に進もうと思える。あの日の『不味い』があつたから今の俺があるんです。100人が口を揃えて美味しいと言える料理つてのはそれを作った料理人もそれを評価した客も素晴らしいと思える。でも、俺にとつては99人の『美味しい』と同じく

らいたつた一人の『不味い』って声が重要なんです。

だつて、三回目は『美味しい』と言わせてみたいじゃないですか

「あの神の舌に文句無しに美味いなんて言わせるのは至難の業だぜ？」

私たち十傑でも必殺料理^{スペシャルティ}抜きでどれだけがその領域に立てるか

……

「それでも、です。俺の夢は料理で誰かを笑顔にすることであり、それは俺自身の力で成し遂げなければならぬ。でも、恥ずかしながらまだその自信がないんですよね。食戟つてのは時に対戦相手の料理を食べることがあるんで自分の料理に自信が持てるその時までは——俺はあの子と料理で戦うわけにはいかないんです。ま、料理人つていうよりは男の意地ですけどね」

「料理で笑顔を」。

目指すいただきが遠くても——否、遠いからこそ努力することができる。そういう意味ではえりなを料理で笑顔にすることは十傑になるよりも難しく、重要なことだつた。この目標を達成するまではある座に届いてはならない。もし、届いてしまう時が来るならそれは偽りの冠を被つても何かをやり遂げないといけない時だろう。

「へー、やっぱ面白いねいお前。気に入つたよ、私の事は信仰を込めて音孤と呼んでいいぜい。ほら、これは親交の印だ」

「さつきのジャンケン対決の間に作つた」と渡されたのはプラスチックのタッパに入れられたいなり寿司だつた。

一見なんの変哲もないどころか割と雑な入れ方で「宴会の残り物を詰めました」感が溢れるそれを渡すと上機嫌で帰ろうとした音孤は最後に一言、

「もし、魔女のところが嫌になつたら私のここに来るといい。お前には特別に私のために供え物を作る許可をやるよ」

「それって、どういう————つ！」

それ以上の言葉を発することは出来なかつた。

口の中を伝わる衝撃が咀嚼以外の全てを枷奴に放棄させる。少し冷めたご飯もそれを包む油揚げも何もかもが違う。料理人にとっては身近であるはずの物が全てこの世のものとは思えない領域に達し

ている。

（おいおい、これをあの部室にある食材で作つたってのか!?この人、一
体何を——

榊奴操はその日、生まれて初めて信仰するほどの美味さということ
を知つた。

動き出す陰謀

「これは一体どういうことだ!?」

薙切れりかと須郷圭一の食戟から数時間後、とある高層ビルの最上階に男の怒号が響いていた。

男は元第九席須郷圭一の実父であり、食品関係で強い影響力を持つ須郷グループの全てを牛耳る絶対権力者だった。

しかし、数時間前に行われたとある賭けによる大敗で絶対権力者どころか今やその地位すらも危ういという所まで追い詰められている。「あれは絶対に勝てる勝負ではなかつたのか！」

「にやははー」

「貴様ア!!」

男がその怒りの眼を向ける相手の少女は青白いその髪を揺らしながらいつもと変わらぬ愛想笑いを浮かべ続ける。

その様子が気に入らなかつたのか男は更に機嫌を悪くし、今にも殴りかかりそのまま少女を亡き者にしようという怒氣すら纏つてしまふ。

しかし、それはそれ。これはこれ。

この程度の怒りに身を任せた威嚇行為など少女があの学園でくぐり抜けてきた修羅場に比べればその笑みを消すには圧倒的に役者不足だ。

「一体今日のゲームでどれほどの金額が動いたと思つている!!」
ゲーム。

男は遠月学園と言われる日本どころか世界屈指の料理専門学校伝統の料理対決による決闘——通称『食戟』を利用した遠月の出資者や世界的な富豪達を引き入れての非公式の賭け事をそう呼んでいた。

遠月の生徒達が料理人としての全てを賭けて臨む食戟は娯楽に飢えた上流階級の人間達には最高のショーゲームとなる。

勝者が全てを得て、敗者が全てを失うという社会の縮図とも言える光景を見世物としたそのゲームは瞬く間に勢いを増し、出資者としての権限で学園内に設置させたカメラによつて自前のスクリーンで

ポップコーンとコーラを片手に勝敗を予想するだけの行為で男は無数の利益を出していた。

“利益を出す”というのはこういう賭け事では絶対に勝てる細工をしているということに等しい。

今回もそうだった。

遠月の頂点と言われる十傑同士の食戦に観客は湧き、無数の金が動く。

男はいつものように遠月に通う息子が必ず勝つような細工を仕掛け待つだけでいい。

相手は遠月を統べる“薙切”の名を持つだけで十傑の席を用意されただけのお飾り。愚かにも自分が持つ殆どの権限をその食戦に賭けたということで息子が勝つことで結果的には男のものとなるそれらを巡つて既にいくつかの商談が設けられているほどだつた。

最高の食材を用意してやり、会場全てを覆い尽くすほどの観客を用意する。駄目押しに審査員を押さえるなどという明らかな不正行為すら行つた。敗北などはありえない。後はどれだけ出資者達が喜ぶような演出ができるかそれだけの筈だつた。

そう、この賭けは絶対に負けるはずの無いものだつた。

「わたしはあくまで貴方のお子さんの須郷圭一さんが勝つ確率を少しでも高くするお手伝いをしただけですよー。でも、ゼロに何を掛けたところでゼロなよう無駄な行為だつたみたいですがねー」

今まで数々のゲームを演出し、この最大級の食戦をセッティングした現第八席を名乗る少女が裏切るなど予想すらしていなかつた。

「ま、さ、か、最初からこうするつもりでこの私に近づいたのか？」

「駄目ですよー。成功者つてのは何時如何なる時も裏切りにだけは注意しなくちゃ。そうしないと—————こオオオオオンな事になつちやうんですからー」

愛想笑いが一変、少女の顔が下劣な笑みに染まるのを確認していくよいよ男の我慢は限界を超えた。

「わかつた。貴様とはもうこれまでだ！」

机の引き出しにしまわれた護身用の拳銃を取り出し、怒れる手つき

で銃口を少女に向ける。

「なんの真似ですかー？」

「わからんか？邪魔なものは処分するんだよ。貴様の次は私に恥をかかせたあの愚かな息子だ。私の受けた屈辱を数百倍にしてから殺してやる！」

「散々利用して、用済みになれば捨てるなんて貴方にとつて私も息子さんもトイレットペーパー程度の価値しかないんですね。残念ですが、もうちよつと楽しみたかったのですが」

「命乞いは無駄だ」

「それはどうでしょう？」

いたずらめいた少女の表情を確認することも億劫だつた。

躊躇なく引き金が惹かれ、黒塗りの銃器から火薬の匂いと共に鉛の塊が放たれる。それはこの状況においても笑みを崩さない少女に向かつて一直線に飛来し、直後ビルのガラスを突き破り少女を庇うように出現した何かへと吸い込まれるように着弾する。

「なっ！」

男が驚くのも無視して少女は自らをかばつた相手へと芝居掛かつた様子で駆け寄つていく。

「いやーん、怖かつたですぅ。先輩い」

それは二mを優に超える巨漢だつた。

巖のようなその身体には銃弾による傷は見当たらず、代わりに鉛玉が着弾したと思われる部分が何かを取り込んでいるかのように脈動している。

「…………鉄分は人間の身体を作る上で非常に重要な栄養素だ」

「にやはは、世界中を探しても銃弾を鉄分だつて言つて取り込もうとするのは豪雪山先輩だけですよ」

「…………お前のその話し方は苦手だ」

少女の猫撫で声に微妙な表情をする遠月学園第六席豪雪山武蔵は地上五十mを超えるガラス張りのビルに対し、命綱無しのロツククライミングを敢行したその身で息一つ切らさず目の前の後輩にその凶弾を向けた男を静かに睨みつける。

「…………」が山ならお前は既に二十回ほど死んでいる。その類の銃器は迂闊に獣を呼び寄せるだけだ。肉体の鍛錬をススメる

「あれ、可愛い後輩をよくもつーみたいな反応はないんですねかー？」

「…………八神、お前も十傑の一人だ。あれくらいは避けられるだろう」

「それはそれ。これはこれつーと、いうことで。可愛いヒロインのピンチには野獣系ヒーローの登場が不可欠なんですよ」

「…………そう、か」

「ツク!!」

何を納得したのか巨漢は引き続き少女をかばうように一步前に出る。

そのあまりの威圧感に銃という普通に考えればどうしようもないほどの優位性を持つているはずの男は一步、また一步と後退りすることになる。

「これでも苦労したんですよウ？須郷財閥といえば雍切には及ばないものの数十代に渡つて続く名家ですし、他ならぬ貴方も学生時代は元十傑。この社会では強力なカードですウしイー？近づくのは容易じゃなかつた。でもでもウ、自分が出来たからつて子供にそれ以上を求めるのは酷じやないですかねエ？学年トップが当たり前、十傑入りしなければゴミクズ以下だーとか、いますよねエそういう典型的なバカ親。ちょっと褒めてやるだけで大分違いますのにイ」

「はつ、褒めるだと？そんな事をして何になる。なぜ私の利益にもならない事をしなければならんのだ？」

「にやはは、いいですよウ。最高に面白くなつてきましたー。
芸術家冥利に尽きるというやつです。と、いうことで今回の特別ゲストの登場でーす！」

狂笑の仮面を付けた道化師は恭しく頭を垂れながら舞台袖に下がり、それと入れ替わるようにして室内へと進み出てきた車椅子の少女を見て今度こそ男の表情が凍りつく。

なぜ、この少女が―――そう思わずにはいられなかつた。

銃弾をものともしない益荒男や笑み以外の一切感情を表さない気

味の悪い道化師に比べれば新たに現れたこのひ弱な少女など障害としては最も容易いものだといえる。

それなのに――優しく、聖母のような笑みを浮かべる少女に男は一瞬の安らぎすら感じなかつた。

「難切せりか」

「…………」

男の言葉に答えるでもなく、魔女はただ微笑みを浮かべていた。ただ、その笑みが一般的に好意的に受け取られるものに対し、真逆かれ以上の意味合いを持つていることは言うまでもない。彼女からすれば目の前の男は自分や学園を利用して私腹を肥やす害虫にも似た存在なのだ。

人生という長い道のりを歩く上で相手の立場になつて考へるといふのは非常に重要な技能の一つである。それはビジネスに関しても同じで自分にとつての利益と相手にとつての利益を天秤に掛け、最大限の成果を上げることが成功の秘訣だ。この見積もりを誤り、相手との修復不可能な溝が出来てしまえば手に入るはずの利益は一転してそれ以上の不利益へと変わる。

今回のビジネスにおいて相手方というのは男と同じく遠月を影で食い物としていた連中だが、それ以前のものとして賭けの対象となる彼女達が存在しなければこのビジネスは成り立たない。

交渉役兼緩衝材として遠月でも強い発言力を持つ十傑の一人を抱え込んでいたが、それも今さつき破綻した。残ったのは先日の食戦での莫大な損失と今まで散々利用していた彼女たちとのどうしようもない程の溝。待つのは破滅という二文字だということは今まで多くの人間を逆の立場で見捨ててきた彼にはよくわかつていた。

そこまで考えて、男はいつの間にか自分がこの勝負に最初から負けていると錯覚していたことに気づく。

(――つ、こんな小娘ごときに何を臆することがある！所詮は難切の名が無ければ何も出来ん小娘。他の二人にしてもそうだ。十傑評議会など所詮は学生のお遊び。そんなものの我が財閥の力とは比べ物にもならん!!)

今までの過程はあくまで対等な相手だからこそ成り立つものだ。世界的な財閥のトップと一介の学生組織が同条件など有り得るはずもない。この状況さえ乗り越えられれば後から適当な理由付けをしてどうとでもできる。

そう、この状況さえ乗り越えられれば――

「ふう、今日は疲れました。もう休みたいので帰りますね？」

「――は？」

一瞬何を言われたのか理解ができなかつた。

車椅子の少女は見た目相応に小さくあくびをすると、自身の身体の向きを反転させ元来た道を戻ろうとする。

「あれ、帰っちゃうんですかー？ここからいいとこですのにい」

「私は記念だから来いと言われたので来ただけですよ。こんなところに興味はありません。面倒事は嫌いです」

「ま、いいですけど。でも、これで今日のことはチヤラでお願いしますよ？わたし、これでもみんなを騙していたみたいですがごく心が痛んですからー」

「…………八神、心にも思つていなることは言わないほうがいい。言葉の価値が下がる」

少女に続くように次々と帰ろうとする学生達には先程までの他を圧倒するように雰囲気は一切感じられず、この部屋の唯一の入口であり、出口である扉に手をかける。

“支配者曰く、支配とは気づいたときには既に完了している”

扉の向こうの風景を見た瞬間、男の脳裏にはそんな言葉が浮かんでいた。

「あ、言い忘れてました。今までご苦労様です。これからは私が彼らの主人ですので、どうぞ気楽に余生を過ごして構いませんよ？」

チラリと見えた魔女の横顔を見た瞬間全てを理解する。同時に背筋に凍つた刃を突き刺すような感覚が襲う。

利用されていたのは誰なのか。

一体どちらが先に仕掛けたのか。

そして、最初から最後まで踊らされていたのは一体どこのどいつ

だつたのか。

「ば、馬鹿な——」

扉の先には魔女と呼ばれる少女に忠誠を誓うように膝まづく無数の人の列。初めに思いついたのは彼女の元々の配下である遠月学園か薙切の手のモノ。しかし、その中に今朝も自分に媚びへつらうように挨拶をしてきた人間が何人かいることに気づき、その過程を否定する。

次は、次こそは、次ならば——いくつもの仮説を立て、必死に最も真実に近いであろう解答から目を背け続ける。

現実逃避しかけていた思考を現実に引き戻したのは学生時代からともに歩み、男が財閥という自らの城で最も信頼していた料理人の言葉だった。

「ボス、今までお世話になりました」

「何を——一体何を言つてゐる！お前は、お前たちは!!私のつ!!!
「申し訳ありません。俺は料理人だつた。あなたと違つて俺は料理人としてこの財閥を持ち上げようと思つていた」

「そ、そうだ。そうだろう！私達はいつか薙切を超え、この社会の頂点へと登ると誓つた！」

「はい。そうです。でもね、」

料理人の声が変わる。

その目は目の前のかつて友と呼んでいた男ではなく、車椅子に乗つただけの弱々しい少女に向けられる。

「俺は知つてしまつた。彼女のレシピを！知つていますか？俺が數十年掛けて磨いた技術を彼女のレシピは余すこと無く”利用”してくれんんですよ？俺がどれだけ努力しても届かなかつた栄光をたつた一皿で軽々とこの手に収めさせてくれた！！あなたも料理人だつたらわかるだろう？俺達は、俺達料理人はたつた一つの栄光のためならすべてを捨てられる。俺は彼女に——いや、この方にそれを与えた！」

正氣ではなかつた。

正気であつてたまるものか。

既に料理人はかつて男が知っている存在ではなく、ただ一つの榮光を求めるだけの狂人だつた。その眼は虚ろで有りながらその身体は全盛期のように力強く、野心に燃えていた。

一度も見たことのない姿。一度たりとも見たくなかった狂気がそこにあった。

『い、いつからだ』

『え?』

『いつからこんな計画を進めていた!』

『計画?何のことですか?料理を作るのにそう何日も必要ありませんでしたよ?厨房にはよく下^ざしらえされた食材もありましたし、設備も十分でした。あとは即興でレシピを作つて料理を作る。ね、簡単でしよう?』

「は、はははは。なんだそれは――本当に何なんだよ」

その日、料理会からひとつの財閥が消え、いくつかの至高のレシピが生まれた。

第八席は自身の電話帳の上から三番目にある『あざみん』と登録された番号を呼び出す。

相手は数回の呼び出し音の後出た。

『やあ、君から掛けてくるとは珍しいね』

電話越しにも感じられる圧倒的な支配者としての邪氣がすぐさま五感全てを臨戦態勢へと変化させる。一瞬でも気を抜けば気づかぬうちに『彼』の操り人形と成り果ててしまうのは前任者達を見て嫌と

いうほど学んでいる。

生まれながらの支配者というのは難切という前例がいるが、『彼』は支配者であつたが故に難切となつた。支配者であることを義務付けられる一族にとつて『彼』程魅力的な条件を揃えた若者は正しく至高の玉であつただろう。

「いえいえ、ちょっとした業務連絡です。——先の件、滯りなく完了しました。取りこぼしはリストを送つとしたのでそちらでどうにでもしてください。でも、本当にマメですねえ。追放された身なのにこうして影から遠月の敵を排除しようなんて」

『なに、いざれ僕のものとなる場所だ。これくらいの害虫駆除は義務の一つだよ』

「そうですかー。それはそれは。ま、再利用だけは考えないでくださいよ？彼らもあるの食戦が終わつてから大量に彼女のレシピを買い漁つてしまひましたから。もう今頃は何人使い物にならなくなつていてる」とやら』

魔女という名は伊達ではない。

確かにそのレシピは料理人に強大な力を与えるが、それは同時に殆どの料理人にとっては通常の方法では辿り着けない味をいとも簡単に出させてしまうことになる。通常数年単位の修行で到達できる味が決して自分たちでは作り出せないレシピで導き出されるなど軽いホラーだ。

人間とは常に上を目指す。そこに美味しいものがあればそれを食べるし、それ以下のものは目もくれない。たつた一つのレシピを仕入れた店は遅かれ早かれその事実に気づき、次のレシピを求めるがあの気まぐれな魔女がそう安安と新しいものを書いてくれるわけがない。下手な薬物よりも中毒性のあるそのレシピは既にいくつもの料理人を破壊しつくしてきた。

『それはそれで好都合だ。周りの評価で地震のそれを簡単に変える豚共もそうだが、そもそもそんなものだけに頼る料理人など料理人ではなく家畜に餌を作る飼育員に過ぎない』

「にやはは、さつすがですねー。そこに憧れはしませんけど痺れちや

います！」

通話は途切れ、笑顔を取り付けた道化師は夢想する。

堂島銀は実直だったが故に網にすらかからなかつた。。

才波城一郎は自由奔放さが仇となつた。

そして、『彼』は究極の美食を追い求める薙切にとつてこれ以上ない存在だったが、最終的にそのあまりに危険な思想に耐えられなかつたのは薙切の方だつた。

最終的に力づくとも言える手段で追放されこそしたが、その底は未だ見えず多くの者を虜にしている。

そのカリスマが果たして遠月という巨城まで届くかどうか

「ま、八神真理という人間は自分が樂しければそれでいいんですよー。

樂しければそれで、ね」

『F』の悲劇 開演

実地研修制度^{スタジエール}

遠月学園に通う高等部第一学年の生徒達にとつて『地獄の宿泊研修』と並ぶ関門であり、外部の様々な料理の現場に派遣されるカリキュラムである。

派遣先は高級料理店から食品メーカー、公的機関等多岐にわたり、実践の空気を学ぶ正式な授業の一環となつており、当然遠月の課題である以上実力が足りなければ容赦なく振るい落とされる当事者たちにとつては決して油断ならない期間となる。

さて、ここまで事を頭の隅に留めてこの話を聞いてほしい。

実地研修^{スタジエール}では、ここまで生き残った一年生たちが一斉に日本各地の様々な食の現場に飛び立つ事になり、その合否は派遣先からの評価も当然ながら遠月側の合格ラインを満たしている必要がある。

つまり、この実地研修^{スタジエール}では学生達と共に日本各地に飛び立つ遠月の審査員達の存在が不可欠なのである。

毎年数百名の生徒が日本各地で同時に課題を開始するこの実地研修期間ではこの行事の為だけにスキルを磨き上げた専用の審査員達^{スタジエール}が大量に遠月学園の臨時スタッフとして雇用される。

実地研修^{スタジエール}の合格基準を正しく理解し、生徒たちの努力や店側に与える影響をしつかりと判断できる審査員は貴重であり、本日召集されたこの男も只者ではない雰囲気を纏い、その実力から校門からこの実地研修専用案内口までの長い道のりを誰にも感ずかれる事無く辿り着いている。

「この空気、久しいな」

「お待ちしておりました。コードネーム223、これが今年の担当者の名簿です」

毎年顔を合わせる教員とは一年に一度の付き合いと言えど、最早長年の友のような信頼を氣付いており、男が『極秘』と書かれた封筒を目の前で破るのも咎める事無く見守っている。

「ほう、この時期で十傑候補の一人か。一昨年の薙切せりかや矢成音

弧、去年の角崎タキや八神真理を思い出すな

「ええ、長年この行事の審査員を務められた貴方へと学園総帥直々の推薦です」

「なにつ、仙左衛門様のか！…………それは失敗は許されんな。常日頃から鍛え上げたこの技の冴えが未だ衰えていない事を証明せねばなるまい」

「気に入つて頂けたようで何よりです」

「当然よ。五十年以上続けたこの任が今やつと結実しようというのだ。これで高ぶらずになんとする！…………こうしてはおれんつ！」

私は準備があるゆえ、失礼する！それでは御免！」

教員の言葉に胸の奥に眠る闘志が呼び覚まされたかのように張り切る男は内容を確認した封筒とその中身をその卓越した技術で再生不可能なまでに塵にすると懐に忍ばせていた煙幕を爆発させ、その場から消失する。

「つ、相変わらずせつかちなお方だ。室内での煙幕はやめて欲しいと毎年言つているのだが…………」

男の行動によつて発生した白煙に残された教員は咳こむも、男が封書を塵にする直前に目にした「榊奴操」と「木久地園果」という名前を思い出し、今回ばかりはしようがないかとその貼り付けたような笑みを広げるのだつた。

さて、遠月学園名物地獄のスタジエールが開始されて早二日というところだが、この段階で既にきめ細かい網の目をふるい落とされた者の数は計り知れない。ひと月という学生生活の中では決して短くない期間を実際に料理の売り買いをしている戦場に駆り出される事となる学生達の大半は遠月という環境とレッテルを過信し、今自分達のいる場所を戦場の第一線だということを理解出来ていなかつたからである。

「不合格」

「そ、そんな……」

審査員ナンバー223の担当する生徒がまた一人研修先の主任から遠月での生活の終止符となる言葉を浴びせられた。学生達がそれぞれ派遣された店の責任者には研修期間の間は本当のスタッフのように扱ってくれと学園側からの要望が届けられ、実際に各自の意思で彼らをクビにする権限を与えられている。

学生だからといって決して甘やかされることはない。このスタジエールの選考基準は現場の空気が常に張り詰められていることであり、たつた一つの異物が店全体を数日で良くも悪くも変えることが出来るようになつていて。逆に言えばこの期間中に何らかの変化を与えるなければ本当の意味での合格ではなく、それを確かめるために学生達と店側の様子を逐一遠月側に報告し、最終的な合否を決定するのが審査員の役目である。

「ふむふむ、これで六人目。最初の関門である現場の空気に触れるという段階で落ちるものは落ち尽くしたかのう」

223は毎日審査員としての必須技能である変装を駆使して各研修地へと直接様子を見に行つている。勿論、客として入るには限界があるので時に仕入れ業者や清掃員として出入りすることで可能な限り学生達の生の反応を観察する。

最近の若い審査員の中には道端の電柱の影から観察するなどといふ愚行を犯す輩がいるが、万が一通報でもされて持ち場を離れる可能性をしつかり考慮しているのだろうか。一流の審査員ならば駆けつけた警備員を即座に制圧、その後装備を奪い何事もなかつたかのよう

に持ち場に戻るくらいの技能が求められる。

それが遠月クオリティ。何もある学園を支えるのは料理人だけではないのだ。もし戦争が起こつても食と武の両方の面から即座に事を納められるのが遠月という何代にも渡りこの世界に君臨してきたモノの力の証明である。

「今年の持分は十人。全盛期は三十はゆうに任せられていたというのに、嘆かわしいことだ。それもこれも去年、一昨年の失責から。今年こそは本来の力を発揮し、まだやれるということを証明せねば……」

相棒であるハヤブサの『月光丸』に脱落者の報告を兼ねた書を括りつけて大空へと飛ばす。それと同時に223の身体は闇に溶け込むように姿を消し、次の参加者のもとへと向かうのだった。

『リストランテ・エフ』

遠月学園の卒業生が経営するこの料理店は近年でも稀に見るほどの急激な速度で日本国内に存在するイタリア料理会の上位ランキングに喰い込むほどの活躍を見せ、経営者である『彼女』は昨年の最も勢いのある若手料理人TOP10に入賞する等、現在国内でも有数の優良物件である。

そんな今ノリに乗つているエフの店内で躍動する影があつた。

「ミサオ！ 次はこつちを頼む！」

「操くん、こつちもお願ひ！」

「はい！ 今行きます！」

スタジエールが始まつてから二日目。

つい先日あつたばかりのあの『エフ』のスタッフ達から頼りにされていることに喜びを感じる。学園では体験できない実際に客の相手をする現場特有の技術を学び取る事がこのスタジエールの醍醐味だが、榊奴は特技の一つである周囲と即座に溶け込む社交性を持つたつた一日で従業員達からのある程度の信頼を勝ち取っていた。

「今こそ我々日本人が代々培い進化させてきた至高の技術をお見せしよう！用意するものは割り箸、使い古しの布、そして輪ゴム。これを組み合わせるだけであら不思議！たつたこれだけで掃除機やほうきなどが届かない隙間のゴミを簡単に取ることができまーす！」

「おおお!!」

「まだ驚くのは早い！普段は手の届かない天井の汚れも片手に濡れた雑巾、もう片方に空拭き用を持って空中三角飛びを駆使することでの通り！」

「こ、こびりついていた汚れがみるみるうちに！」

「なんという身体能力！これが日本のいや、遠月の学生の力なの!?」

瞬く間に開店前の清掃を済まし、次の作業に取り掛かる。

滅多にA評価を出さないことで有名なローラン・シャペル講師の授業でレシピに記載されていない盛付けや調理後の清掃などの部分で本来B評価だった品をギリギリA評価まで繰り上げたことのある身としてはこのくらいはそれほど苦でもない。

同様に開店後のラッシュ時でも頭の中で各テーブルの状況を整理し、その上で一人一人の客のペースや体調、性格を考慮し完璧なタイミングで料理をお出しする事が出来るため学生の身分で『エフ』からすれば外様である榊奴にも十分な信頼を寄せてもらっている。

——ただ、ひとつ。たつた一つ心配なことがある。

(あーあ、俺ここに来てから一回も料理してないな)

スタジエールの期間は基本的に一週間。

ここまで調査と店外をウロチョロしていたので不審者かと思いつぶまえた視察員の何名かから聞いた話によればこのスタジエールでは派遣先に順応するだけではなく、その先——現場に何を与えるかというものが審査基準になつてゐるらしい。

その基準で言うと今行っているホールでの業務は一見真逆。ハツキリ言つて榊奴一人がいようがいまいが変わらないというのが本当のところだろう。

なら、直ぐにそんな作業をやめてもっとスタジエールを合格するのに必要なことをすればいい、とは思う。だが、そうはいかないのがこの世界における常識だ。一度請け負つた仕事は最後までやり遂げるのが当然。途中で投げ出したり満足にこなせないものの意見など受け入れられるはずもない。

そして、どれだけ上手く効率的に行つたとして常に違うお客様を相手にするサービス業にとつて明確な合格ラインなど存在しない。あるのは目の前に存在するお客様とまだ見ぬお客様に対するあくなき奉仕の精神だけであり、それは悟りを開くために仏の教えを学び、ひたすら修業に励む修行僧に近いものがある。

そして、もう一つ。

榊奴操が厨房に足を踏み入れられない理由がある。

「ゴメンネ。あの遠月から来てくれた操くんにこんな事までやらせちゃつて。本当なら彼女と一緒に厨房に入つてもらうべきなんだけど——

一緒に回転を準備をしていた『エフ』のスタッフであり榊奴の教育係である伊佐敷夏那が申し訳なさそうにそう言つてくる。

「いえ、しようがないですよ。店で最も重要な厨房に素人を一気に二人も入れるのは無茶だつてわかつてましたし、適材適所つて言葉がある通り俺はサポートに回るのが今回は正しい選択だつてわかつてますから」

「え、でも遠月の学生なら料理が凄く上手いんじゃないの？」

キヨトン、とした顔で夏那はとんでもない事を口にする。

「は？ い、いや遠月は確かに日本——いや、世界でも有数の料理学校ですけど、そこに通つているからつて皆が皆料理が無茶苦茶上手いってわけじゃないですよ！」

「へー、そうなんだ。冬美さんも遠月出身だから操くんやあの子もてつきりそのレベルだと思つたんだけどなー」

「いやいや、水原先輩は遠月の中でも1%以下の卒業生なんでそれと比べられても。はあ、ウチつて外から見たらそんなイメージのなのかな…………」

遠月の中でも実力はしっかりとピンからキリまで存在する。ただ下の者たちが次々と切り落とされていくので化け物みたいな連中だけが生き残るシステムなだけなのだ。

彼女は遠月の料理人だから料理がうまいと思つていいようだが、實際は遠月に所属しているから料理が上手いではなく、遠月で生き残るために死に物狂いで知識や技術を身につけなければいけないので料理が上手くなるのが正しい。その中でも卒業まで漕ぎ着けるのは極一部であり、この『リストランテ・エフ』を経営する水原冬美は当然榊奴などと比べるのもおこがましい程の天才である。

「ま、でもアイツは伊佐敷さんが期待するような天才ですよ。それは保証します」

「ふーん、信用しているんだね」

「ええ、アイツがメインで俺がサポート。今までそうでしたし、きっとこれからも変わらない。ずっと見てきたから痛いほどわかっていますよ。本当にどうにもならないほどね」

榊奴操が厨房に踏み入れられないもう一つの理由にして最大の案件は同時期にここに派遣されたもうひとりの存在だ。

このスタジエールで一つの現場に一人以上の学生が派遣されるのは珍しいことではない。一体どういった基準化は定かではないが、話したこともない赤の他人よりは普段から学園で接点のある人間が同じ現場を指定される傾向があるらしい。そして、それはただ単純に知り合いだから助け合い、協力しろという意味で受け取る事は遠月学園に通つておる身としてはとてもじやないが出来なかつた。

そう、この『リストランテ・エフ』に彼女——木久知園果が派遣されたのは偶然でも神からの恵みでも何でもない。

たとえ、普段は仲のいい友人でもこのスタジエールにおいては互いに牽制し、相手より結果を出すことを強いられた仇敵ライバルとなりえる。

そういつた意味では彼女の存在はこのスタジエールにおいて絶対

的な壁となりえる。

木久知園果という少女は料理人として絶対的な才能を持つ。それこそ水原冬美に匹敵するレベルであり、時期十傑候補として上級生を差し置いて真っ先に名前が挙がるほどだ。ハツキリ言つて榊奴では勝負にもならない。そう思わせるに十分な差があるので、だから、

「俺はホールを任せられた。任された仕事はトコトンまでやるつもりです。伊佐敷さん、今日もご教授お願いします」

「いやー、普通に君もう私超えてると思うんだけど…………私に教えられる事後何個残っているかなー？」

榊奴操は勝つことを諦めた。

『F』の悲劇 序章

『リストランテ・エフ』の朝は早い。

教育係である古門真司と共に今日入ってきた食材のチェックを済ませながら木久地園果はここ数日の経験から次にやるべきことを思い浮かべる。実を言うと、普段の学園での授業と違う現場独特の雰囲気園果は未だ順応できずにいた。

「おい、新入り。次はこいつだ」

「え、でも次はこっちじゃ——」

「それは昨日教えただろ。手が空いたらやれ。一週間しかねえんだから毎日同じこと教えてられるかよ」

園果の教育係に選ばれたこの古門真司という少年は園果やもう一人この店に来ている彼と同じ年でありながら既にこの『エフ』の中核である厨房である程度の地位を築いているらしく、言い方こそ乱暴だがその技術は遠月で様々な料理人を見てきた園果をして一流だと思えるものだった。

順応出来ていないので主に自分のせいであり、このままでは厨房を譲ってくれた彼に申し訳が立たない。

「——なによそ見してんだよ？」

「あ、ご、ごめんなさい！」

「ツチ、次はこっちだ。まだ終わってないつて言うなら置いてくぜ？」

「ま、待つてください！」

動きにくい。

それが今のは园果の心情だった。

遠月学園は良くも悪くも料理を一番に考えていた。いい料理を作るために良い設備や良い食材を揃えるのが当たり前で学生はその中で結果を出せばいい。だが、ここは違う。

いい料理を作るために食材や環境を用意する事は同じでも、それをスタッフ一人一人が一からやらなければならない。その上で結果を出すことが当然。それが园果が初めて体験する実際の食の最前線の特徴だった。

「つたく、遠月だか何だか知らねえが素人を二人も寄越しやがって。
こつちの苦労も考えてもいねえ」

「…………私も遠月出身だけど」

その時、するりと二人の間に割つて入る影があつた。

「つげ、」

「真司。新人が入つてうれしいのはわかるけど、女の子をいじめちゃダメ」

水原冬実。

この『エフ』の主であり、その形が通う遠月学園の誇りある卒業生。もう一人の彼が聞いた話だと真司は数年前に水原がどこからか連れて来たらしく、その縁から彼女に頭が上がらないらしい。因みに姉弟ならともかく、親子みたいなどというと双方から怒られるので禁句とのこと。

「は!? そんなんじゃねえよ！ 大体、冬実の方こそ自分の持ち場は終わつたのかよ!？」

「冬実さんでしょ？ 今日は私は入らないわ。こつちは任せる」

「任せるつて——またあの副料理長^{バーナー}が仕切んのかよ」

「不満？」

「マニュアル通りにこなせばいいって言うなら不満はねえよ」

「そう」

水原は真司の解答に意味有り気な視線を送ると、園果に「頑張つて」と一言残し、厨房から出て行つてします。

残された二人の間には何とも言えない空気が流れる。

「…………言つとくけど、うれしいとかそんなのはねえからな。どんだけ人数が居たつて戦力にならなきや頭数には入らねえんだ。まずはそれを目指せ」

一瞬バツが悪そうな顔をしながらもすぐにまた最初の不機嫌そうな顔に戻つたことで彼の情報が正しかつたと再認識する。

口が悪いが決して面倒見が悪い訳でも意地悪という訳でもない。それが古門真司という少年。

ならば、木久地園果という少女もこの戦場で一刻も早く自分の個性

を出していかなければならぬ。

その為にはまず、彼に倣つて大きな声で返事をしてみよう。

「はい！」

「洋食という文化が出来たのは鎖国が解かれ、人々が世界へと目を開け始めた明治維新前後と言われています。そもそも洋食とは――」

「あと何時間続くんだ？ その話」

帰りの電車の中、ふとした切っ掛けで園果の蘊蓄癖を発症させてしまいかれこれ十五分。通えなくはない距離と言う事で電車通勤にしてはみたものの、まさか彼女まで付いてくるとは思わなかつた榊奴としてはどうしてこうなつたと言わざるを得ない状況である。

「で、なんで？」

「なにがですか？」

「いやいや、遠月の馬鹿デカい学費をバイトの掛け持ちで辛うじて払つている絶賛苦学生な俺と違つてお嬢様のお前なら近くのホテルに泊まればいいじやん」

このスタジエールでは期間中の宿泊費や通勤費は出るが、それ以外は自費だ。本来なら『エフ』の休憩所に止まらせてもらいたいところ

だが、研修組が二人いるのに榊奴だけがという訳には当然いかない。

かといつて、彼女にソファでの就寝を強いるのは酷だろうと言う事で毎日一時間ほどかかる道程を往復する事になつたわけだが、そこに彼女が付いてしまつては本末転倒だ。

「別と一緒に帰つてくれなくともいいんですよ？」

「そういう事は一人で切符を買えるようになつてから『言え』

「し、失礼ですね！最近は切符が変えなくともスマホで乗れるんですよ！」それくらい知つてます」

「へー、よく勉強したな」

「あんまり馬鹿にしないでくださいよ。私だつて成長しているんです」

誇らしげに最近育ちすぎてタキに親の仇が如く睨まれている胸を張る姿には微笑ましいものがある。

「ま、お前の乗ろうとしていたの逆方向だつたけどな

「え！」

「お前な、電車に乗れば目的地に着くと思っているだろ。タクシーじゃないんだから目的地伝えればどこでも言つてくれるわけじやないんだぞ？」

「たくしー？」

「こ、この野郎。まさか日本人の誇り高き移動手段の一角を知らないだ、ど？」

本当にどんな温室環境で育てばこんな純正のお嬢様が出来上がるのか。タクシーの存在や電車の乗り方を知らない人間なんて遠月にも——いや、うんいるな。基本的にあの学園はお坊ちやま・お嬢様と呼ばれる上流階級の若者が通う側面が強い。二年前の『クラッシユ・オブ・サテイスフアクション』である程度榊奴のような一般家庭出身者でもまともに過ごせるようになつたが、それ以前は家柄で受けられる授業や待遇に相当な差があつたらしい。

「大体な、帰りはいいとして俺が時間を調節しないとお前朝の通勤ラツシユで最悪——死ぬぞ？」

「死？いやいや、そんなまさか。ここは日本ですよ？ただの移動で命

の危険なんてあるわけないじやないですかあ。さすがにそんなウソには騙されないですよ！」

「嘘？ ほう、嘘だと？」

彼女は知らないだろう。

サテリーマンにとっての戦場は会社では無く 通勤時の電車の中で
あることを。最近では女性専用車両が出来て女性は安心かもしれない
が、それでも全国の男性諸君は常に両手を上に挙げる習慣が未だ離
れないと聞く。その意味をきつと彼女は理解できないだろう。やさ
しく、泣き虫で、すぐに信じてしまう“良い人”である彼女には関係
の無い世界だ。だから、神奴は守らなければならない。きつとこの先
二度と関わらないであろう二つの世界を守護まもらなければならない。

三

「お前の得意な洋食と同じように技術革新によつて生まれたこの乗り物は日本人の移動形式を大きく変えたんだ。しかし、この革新的な技術にも弊害がある。基本的に運転席などのない通常の中間車1両あたりだいたい140～150人が乗れると考え、それが十両と考えよう。それで大体1500人は乗れるだろう?」

二〇五

!?

味が解るか？」

「じゅ、10万!?でも、それじやあ入りきらないんじや」

「それないからいいよ。連用しないよ。学校が同じだから？」どんな理由が有れ、授業に遅れれば単位はもらえない。通常の授業なら取り戻しは聞くが、今回のように特別な課題の場合は遅刻＝即失格だ。それを全国の会社員は毎日行っているんだよ」

因みに電車が一時間あたりに何本出るとか、地域事に差がある事は

車に10万人が乗っているところを想像してもらう事にしよう。

「む、無理ですよ。絶対に入りきりません！」

「因みに、都市伝説だが電車会社の封印された倉庫には内側から人型にへこんだ車両が放置されているそうだ」

.....{!?

今度こそ、園果の顔から血の気が引く。

悪いとは思うがこれもお互いの為だ。明日からはホテルに泊まつてもらうかいつも通り車で通つてもらうとしよう。

「 駄目、です。駄目なんです。決めたか

一決めだ?

何かおかしい

いつもならこれくらい斬かせは大人しく従うはずだか
がいつもと違う気がする。

私はいつも誰かに助けてもらつていました。家族にも、せりか先輩やタキ先輩、そして榊奴君、貴方にもです。でも、私は決めたんです。このスタジエールでは自分の力で戦うつて。誰かに支えてもらうだけじゃなく、私も誰かを支えられるようになるつて決めたんです」

これだ。

卷之六

いつもほんわかとしている癖にいざという時は頑固でどうしようもないわからずや。それが普段調理中にしか見せない本当の木久地園果の顔。榊奴操が憧れ、自分もそうでありたいと思いながらも決して辿り着けないであろう境地。

「榊奴君のお陰ですよ」

「^?」

「この前の食戦。見ていてハラハラしましたけど、いつもの榊奴君と何かが違いました。だから、私も変わろうと思えたんです」

言えない。

この状況で同期のメンバーを馬鹿にされてイラついていて、つい。等と口にすれば何を言われるかわかつたものじやない。普段から誰かを料理で笑顔にすると口走っている分際で私情に駆られた結果の姿に触発されたと知つたら流石の彼女もブチぎれる事は間違いない。

「聞いてますか?」

「あ、ああ。そう、か。わかつたわかつた。そういう事なら不肖この榊奴操、料理人としての自分に誓つてもお前の意思を尊重しよう」

「本当ですか!?」

反則だ。

そこでその満面の笑みは反則過ぎる。こんな男として絶対無碍には出来ないモノじやないか。

「ま、取り敢えずはあと数日で結果を出さないとな。俺の予想ではこのままだと合格ラインはまだ遠い。だから今日からこの時間はスタジエール攻略のためのミーティングにあてるぞ。通勤時間つてのは意外と使える者なんだ」

「はい!」

こうしてライバルに塩を送るのはきっと遠月の学生には相応しくない行為だろう。厨房に入れない身としてこれでも策を考えるのに一杯一杯なのだが、それでも彼女にだけは合格してもらいたいと思つてしまつたのだから仕方ない。

「…………むう、尻がむず痒い」

「おい、おっさん。ケツ搔きながらこつちによつてくんじやねえよ」

因みにこの時隣の車両では変装した視察員と偶々乗り合わせたとあるイタリアンレストランに勤める少年がいた事を榊奴操以外は知らない。

『F』の悲劇 来客

スタジエール四日目。

その日は水原が不在という理由もあり、店内に普段と違う緊張感があつた。

「こういう時つて誰が指示出すんでしたつけ？」

「うーん、そこら辺はそれぞれの店で違つてくると思うけどウチの場合は冬美さんがしつかり不在時のマニュアルを作つてくれているから基本的にそれに従つてれば問題ないかなー」

夏那の言葉にそういうものなのかと多少疑問点は残るが納得する。スタジエールに来る前に先輩達から聞いた話によると研修先に選ばれた殆どの店は何らかの問題点を抱えているらしい。そこを付くのが攻略のコツだとせりかは言つていたし、それ以上は自分で考えろとタキも言つていた。と、言う事は二人とも少なくとも一ヶ月ある研修期間の内に何らかの改善を行う事でこの課題をクリアしていることは間違いない。

この『エフ』にも何らかの欠点があると踏んで観察していたが、主が不在の今も問題なく機能している事から特段問題点となるべきものが見当たらないのが現状だ。

「うーむ わからん」

「あ、操くん。後二分くらいで一番テーブルの料理が出来ると思うからゆつくり運んでいってねー」

「え、ゆつくりですか？」

「うん、そうだよ」

事もなげに返す夏那の姿に違和感を抱きながら指定されたテーブルを見る。

そこに座っている中学生くらいの男女のグループはワイワイと談笑しながら食事を楽しんでいる。成程、次の料理が二分後に出来上がるとして、今持つていけばテーブルに残った皿をズラす必要があり、そのためには一度彼らに了承を取ることになるだろう。しかし、残つ

た料理は僅かで今も少しづつ手を付けているところを見るとほんの僅かに給仕のタイミングをズラす事で彼らの会話を止め無くて済むと言う事か。

「わかりました。ゆっくりいきます」

「よろしく」

こういつた料理店のサービス担当に最も求められるのは卓越した技術よりも場の空気を読む事だろう。どれだけテキパキ動いてもそれでお客様の気を損ねるのならとても素晴らしいとは言えない。料理人と客を繋げるための懸け橋として考えうる限りの最善を目指す。その為には厨房とホール、店全体を把握することが必要不可欠となつてくる。

しかし、そこでふとお越しな事がある事に気付く。

「あれ、夏那さん。今二分後に料理が出るって言つたけど、どうやつたんですね？それ」

「え。なにが？」

ここ数日で仲良くなり、呼び方が名字の伊佐式では無く名前の夏那になつた先輩が何を言つているんだこの子はと言つた様子で振り返る。

この店の主である水原より少しばかり年下の彼女だが、この『エフ』でホールを任されるほどの実力者であることは確かだ。だが、そうにしても厨房から何時料理が出てくるか正確に把握する事など可能だらうか。

どの順番でオーダーした料理が出てくるかは出来上がつた料理を受け取る際に視界で捉えた厨房の様子から誰がどの料理のどの工程に取り掛かっているか把握できるので難しくはない。だが、その料理がいつ出来上がるかなんて正確に把握できるものだらうか。

榊奴操の料理人としての全てはレシピを正確に再現することに収束される。レシピさえわかつていれば調理している段階を見て完成までの時間を予想する事は出来る。それでも、人間に個人差がある以上完成までの道筋に差が出る事は当然なのだ。

「うーん。ホールにいるといろんなんものが見えるからね。厨房と違つ

て直にお客様と関わることになるし、料理を受け取るときに厨房の様子も軽く見えるからね。後は経験かな」

「経験ですか？」

「うん、多分操くんならいつか理解できると思うよ。それとももう理解してるのかな？」

「からかわないでくださいよ。俺なんてまだまだです。でも、いいアドバイスを貰えました」

厨房にいるあいつの代わりに、学ぶものがまたひとつ見えてきた気がする。

さて、肝心の二番テーブルだが、普段の『エフ』のメイン層である落ち着いた雰囲気とは打って変わり、和気藹々と賑やかな宴を繰り広げていた。

「お待たせしました」

「おー、待つてたぜい！」

様々な国の人間が来店する店内でも異質な集団だった。

まず、榊奴を出迎えたのは小さな体にサイズの合わないダボダボの着物を着付けた少女。狐色の髪の上からはいつもの通り人間の耳とは異なるケモミミが生えており、「ドレスコード？ 何それ食えるの？」とでも言うかのように個性を爆発させている。

同じ学校に通う先輩としても、今日この日だけは他人の振りをしてもバチが当たらないだろう。

他二人も同様に服装こそは見覚えのある制服だが、銀髪の少女には

たぬきの耳が黒髪でやる気のなさそうな少年には狗の耳が乗せられている。着物の少女のものと違い、こちらはどこかのテーマパークからそのまま持つてきただよなチープさが感じられる。

そして、残念なことにこちらも知り合いだ。

「みてみて、リョウくん！ いつだかの大道芸人さんよ！」

「そうつすね」

ツヤのある美しい銀髪とそれをさらに輝かせるかのようにシミ一つない真っ白な肌を持つ少女の言葉に気だるそうに机に突つ伏しかけている少年が続く。

薙切アリスと黒木場リョウ。

苗字からもわかるようにアリスの方は薙切の血族で、黒木場はその従者——といつてもいいのかはわからないが、今の薙切せりかと榊奴操の関係に近いものだろう。

「大道芸人？ お前、料理人じやなかつたつけ？」

「昔色々ありまして——」

音孤が興味津々といった様子でこちらを見てくるが、あまり思い出したことないので自分から話したくはない。

「ふーん、ま、いいや。後で二人から聞けばいいしねい！」

「つぐ、お客様だから止めるすべがない…………そ、それにしても珍しい組み合わせですね。」

「ああ、こいつらが日本で遊びたいって言うからねい。今日一日案内していたのさ」

なるほど、そういうことか。

アリスと黒木場の二人は正確には遠月の学生ではない。アリスの父がデンマークに設立した「薙切インターナショナル」。そこでは分子美食学を始めとした最新の調理技術を研究しており、二人はその所属していたはずだ。榊奴の知る限り編入手続きも行われておらず、今着用している遠月の学生服は頭部の耳と同じくコスプレということになる。歴史ある遠月の学生服はその退学率の高さから意外と市場に出回つていたりするが、音孤とアリスの性格を考えると出回っているものではなく特注で作らせている可能性が高い。一応は外部の

人間為にここまでするのは完全に職権乱用だが、今の自分は一介のスタッフ。それを咎める術は持ち合わせていない。と言うか何も見ていない。

「本当はせりか姉さまが案内してくれるはずだつたのだけどね」

「…………お嬢、完全に門前払いされていましたね」

「え、先輩が？」

しょんぼりとするアリスの言葉に衝撃を受ける。

何を隠そうあの魔女、従姉妹であるアリスとえりなを溺愛している。それはもう、日頃から彼女達と会つた時にプレゼントを毎日買ひ換えているくらいに。そんな彼女が折角会いに来たアリスを門前払い？

「…………音孤さん、最近公務の方はどうです？」

「ギクッ！――い、いやー、大丈夫だよ、大丈夫。みんなちゃんと

働いてるつて！」

「…………嘘、ですね。タキ先輩は兎も角、貴女と先輩が眞面目に働くなんて有り得ない」

「つちよ、それ酷くね！魔女は兎に角、私も信用してないとか！」

「え、信用していますよ。悪い方に。

中等部の頃、自分の才能の限界に気づき長期連休を利用して始めた料理巡礼の旅。様々な国を渡り歩き、その土地土地に根付く文化を触れながらたどり着いたのがアリスちゃん達のいたデンマークだった。そのときは途中で旅費が切れてしまい、しようがないので曲芸でお金を稼いだのだが、たまたま研究所から下界に降りてきていたアリス

ちゃんと会つたのだ。

体内の気を熱エネルギーへと変換する秘拳を利用し、タネも仕掛けもないマジックショード（物理）をしていた俺は当然料理人として認識されず、彼女が住んでいる研究所に面白いからという理由で連行されたのだ。

「火を吹いていたし——」

「あれは基本的にマジシャンと料理人ならある程度できる芸当」「分身したりしてましたね……」

「プラズマによる幽体離脱と身体鍛錬の賜物」

こちらを大道芸人と勘違いしてるアリスちゃんとその従者である黒木場くんに本職は料理人だと説明しても信じてもらはず、結局彼女が専攻している『分子ガストロミー』の理論を理解していたことから「普通の大道芸人がそんな事を知っているはずがない。さてはスペイカ!?』と、ひと騒ぎあつた結果なんやかんやあつて彼女の父親と意気投合。遠月でも中々お目にかかるない最先端の技術を目の当たりにできたのはいい思い出だ。

「そういうえば、お父様が今度ウチで開発中のモーメントについて意見を聞きたいと言つていたわ！」

「ああ、あれか。あれが実現すれば世界中のエネルギー問題が大幅に解決する。ぜひ、話を聞きたいな」

「ええ、取り敢えず試作品が完成したらバイクの動力源として組み込むと言つていたわよ。その時はテストにつきあつてほしいんですけど」

「いいね！その時まで俺の方でも準備しておくと伝えてくれ

「ふふ、わかつたわ！」

「でも、どうしてバイクなんでしょうか？」

「さあ？」

この場に二人を『エフ』まで連れてきた音孤さんはいない。目を離したすきにいつの間にか会計を済ませて帰つてしまつていたのだ。

以前、キャラ弁研究会での一軒で仲良くなつてから、お互い「ミーサ」、「音孤さん」と言い合うまになつたが、未だにあの人の自由奔

放さには振り回される。本当に猫のよう気ままにいなくなるんだから困つたものだ。

流石に中学生を保護者も付けずに返すのは問題ということで知り合いである俺が彼女達を送ることになった。因みに、教育担当の夏那さんはアリスちゃんが“あの”薙切だと知ると先輩風など叩き捨てるかのように華麗に全責任を俺に押し付けてきた。関係者の間では

“薙切”の名は鬼門らしい。

（俺の知っている限りだと魔王と呼ばれる総帥は当然として、一口味わうだけで数十カ所に及ぶダメ出しで心をへし折る金髪お嬢様、直接口には出さないがニコニコ笑顔で本人の目の前で平然と改善用のレシピを書き出す確信犯の黒髪魔女、そして他に比べれば比較的マシだが裏表がないせいで時に誰よりも他人の心を抉る銀髪小悪魔……。うん、どう見ても地雷原ですね。俺も気をつけよう）

彼女達が帰路につくまで普段よりも十割増しくらい店全体の緊張感が増していたが、もろに巻き込まれた木久知は無事だろうか。

「それにも、折角日本まで来たのにせりか姉様会つてもくれないなんて！」

「お嬢2ヶ月くらい前から楽しみにしてましたよね」

「そうか。それは悪いことしたなあ。俺からも後から言つておくよ」

普段の天真爛漫な姿とは違い、どことなくシュンとしているアリスちゃんを見て今頃家で就寝前のお菓子を食べているだろう魔女に軽く天罰を下したくなる。あれで結構ジャンクフードが好きなのでこのスタジエールが終わる頃には買いだめしていたスナック菓子が空になつていることだろう。…………今朝仕入れた期間限定品の情報をメールする際に先月の体重のデータを添付してやろう。

「今日のために新作を用意してきたのに！」

「でも、あれ味がしないじゃないですか」

「なんて事を言うの！私が作った料理に味がないなんてあるわけないじゃない！」

「そう言つて以前金髪のところで作つたアイスは不味かつたじやないですか」

「あ、あれは失敗よ！でも、えりなと違つてせりか姉さまは不味いなんて言わないわ。ちゃんと見て改善点を教えてくれるもの」

「多分それ食べてないよね。そして、普通に不味いっていうよりも工
グいよね。

「大体リョウくんが作った料理だつて前に散々批判されたじやない
！」

「俺はあるの後ちゃんと改善しましたから。それに、そういうことは俺
に勝ち越してから言つてください」

「なんですつてー！ナマイキよ！」

メールを黙々と打つている間にも二人の会話はどんどんヒート
アップしていく。前々から思つていたがこの二人の関係は面白い。
主従関係なのは違いないのだが、互いが互いをライバル視しているの
でちょっと目を離すと互いに高め合つていつの間にかありえない進
化をしているのだ。

俺にも、そんな相手がいれば次へ進めるのだろうか。ふと、そんな
ことを思うが該当者はいない。周りに置いていかれないことで精一
杯の今はそんなことを考えている暇はない。

「あの、二人共、ここ一応電車の中だから。そろそろ静かにしてくれ
るかな？……じゃないと秘拳を使うことになるんだけど」

今はとにかくこのスタジエールを乗り越えることが先決だ。
でも、いつかは。

基本的に矢成音孤という人間は自由奔放を地で行く性格だ。

仕事や責務よりも自分の興味のある事や面白い物の方についつい気持ちがいつてしまう。しかし、その結果が全ていい方向に向いてしまうのが音孤が持つ一種の才能だった。古来より座敷わらしや招き猫など、その場にいるだけで周囲に幸運を撒き散らす怪異は多く存在する。神社の跡取りとして、将来的にそれらの仲間入りすることが確実な好みに与えられた役得だと思えば納得もできよう。

薙切アリス、黒木場リヨウの両名から別れた帰り道、小降りといえども空から確かに落ちてくる水滴を傘も刺さずにスキップで避ける。音孤の歩く先には浅い水たまりがいくつもあるもその全てがまるで彼女を汚すことを恐れるかのように一切の水しぶきも上げずに静止している。

軽装ながらも確かな品を感じる着物が水滴ひとつ付いていないことに疑問を感じるのはなく、彼女だけが空間から切り離されたからのように自分のペースでこの雨を楽しんでいた。

「ご苦労様でーす！」

そんな少女を止める声がひとつ。

それは雑踏の中から突然現れて、音孤の世界へ土足で踏み込む。

「……八神かい。何の用さ」

「なんの用とはあんまりですねえ。同じ学校の先輩に会つたら挨拶するでしよう？普通」

時刻は平日の夜中。明日も早朝から授業があるというのに、学校から何駅も離れた場所で普通に知り合いに会うだろうか。自慢じやないが、外出先で音孤に話しかけてくる相手なんて人間関係的にも格好的にも殆どいない。小学生でも通じる小柄な外見に着物とケモミミのコスプレをした幼女。外で話しかけた時点で一発で通報物のこの生き物に平然と自分から話しかけてくる人間などそれこそ本心を笑顔でコーティングした変人や先程の薙切アリスと榊奴操くらいしか心当たりはない。

基本的に十傑というものは巨大なコミュニティを築いているものだが、音孤の属する極の世代というのは文字通り曲者揃いで互いの意見が揃うことが殆ど無い上、一部の主に二席とか八席とか十席にいる連中のせいとその他の一般生徒からも敬遠されがちなのだ。そういう意味では大いにとばっちりを受けている音孤だが、彼女も彼女での曲者揃いの一人なわけで、自分に来る不都合を全部ひつくるめて「まあ、いいや」の一言で済ましてしまう極度の変人である。

「で、話があるんだろう？ 私と世間話がしたいなら、学園でおねいがしたいねい」

「あ、本当ですか！ 実はわたし、話し相手がいなくて困っていたんですよ。あまりにいなさ過ぎて、角崎さんでも誘つてお茶会を開こうと思うくらいでして——」

「お、ソイツはいいねい。私も誘つてくれよ。特性のいなり寿司を持つていくぜい」

「じゃ、わたしは紅茶を用意しますねー」

紅茶といなり寿司という異次元の組み合わせが着々とお茶会のメニューに組み込まれていくも、当の一人は気に入った様子もなく自分の世界を繰り広げていく。広げすぎた風呂敷を引つべがすのは今現在本人の預かり知らぬところで巻き込まれかけている角崎タキの役目であり、彼女のリアクションが観たいが為に悪巧みをする二人の女狐にとつては骨を断つためには腹を切るくらいはどうということはないのである。

「あ、そういえば、『エフ』の方はどうでした？」

唐突に。

本当に唐突に、今までの空気を切り裂くように悪意が湧き出る。

遠月学園第八席八神真理。現在の遠月学園で最も闇に近く、十傑の中でも裏方の誰も手を付けなさそうな仕事を率先して行う彼女の本性は基本的に矢成とよく似ている。

楽しければそれでいい。

そこに他人を巻き込むのも同じであり、違うのはそこに悪意が存在するか否か。

「あー、」

そんな似た者同士の質問に矢成はわずかに考える。
その間、実に三秒。

「ダメだね。ありや」

熟慮に熟慮を重ねた結果、答えは出された。

先程まで何の不満もなく食事を楽しんでいた店をあっさりと切り捨てるように評価する。

「おやおや、珍しいですねえ。あなたがそう言うなんて」

「別に料理に不満はないよ。サービスだつて上々だ。新人教育だつてしつかり行き届いてる。ま、ミーサの場合は要領がちよいと良すぎるからすんなり行つてるだけかもしけないけどねい」

「ん？ そこだけ聞くと問題なんて見当たらぬよう思えますけど？」

「うん、ないねい。客として入つた私から付ける文句なんてひとつもない。身内びいきじゃないけど、流石遠月卒業生がまとめる店つて感じだよ」

それでも、と矢成は言い加える。

その顔は普段学園で見せる飄々とした態度からは想像できないほど達観しており、決して彼女が個人的な感情で発言しているわけでもないと嫌でも理解できる。そう、まるで何かにとりつかれているように淡々と評価を下しているだけ。

「断言するぜい。リストランテ・エフはこのままだと必ず行き詰まる。それが一年後か半年後かそれとももつと早く来るかは流石にわからんないけどねい」

「なるほどなるほど。あのいなり神様にそう言わせると、遠月事務局の情報網も案外バカに出来ないものですねえ」

いなり神。

遠月第三席の二つ名として有名なこの名は当然彼女がいなり寿司を得意としていることから付いたものである。

国や文化を超えたあらゆる料理を教える遠月では基本的に全ての料理形式ある程度マスターすることが求められる。自分の得意分

野以外にも目を向け、そこから新たに道を切り開くようにと遠月上層部が定めたものだが、生徒達からすれば一度のミスが退学になるこの学園で同時に複数の分野を人並み以上に極めなければいけないというのは相当な苦痛となる。特に合宿やスタジエールなどの行事では本当の意味で命取りとなることが多い。

そんな中、矢成音孤はたつた一つの料理で全ての課題を突破してきた。課題に対してもアレンジをしているわけでもない。伝統的な日本料理であるいなり寿司一つで全ての講師にそれ以外を極める必要はないといしめたのだ。

良くも悪くも完全実力社会のこの遠月で下されたこの評価は学園設立以来、その分野で最高の料理人と認められた事を意味する。

結果、彼女は現在講義への参加義務をすべて免除されている。好きな時に好きな授業を受け、好きな時に好きなことをする。まるで気まぐれな猫のように振る舞いながらも、九十年近く続く遠月の歴史の中でも数人しかいないと言われる『極めし者』の一人として、常に在校生達の憧れであると同時に嫉妬の対象である彼女を心ない人々は一芸特化のキワモノなどと切り捨てるがそれは違う。

彼女が本当に優れているのは――

『F』の悲劇 潜入

アリス達を送り届けた直後、榊奴は激務で疲労した体を休める事無く遠月学園に向かっていた。

時刻は既に午前零時を回っていた学園は昼間の喧騒を忘れ、研ぎ澄ました刃のように静かに日が昇り若き料理人達がその門を叩くのを待ち構えていた。

「流石にキツいかな？ 行けるかな？」

黒を基調としたトレーニングウェアに着替え、幾重にも張り巡らされた監視カメラの死角で一人静かに体をほぐす。

今この学園は昼間と違い、世界最高峰のセキュリティシステムで守られた鉄壁の要塞だ。来るものを拒み、出るものも阻む。遠月学園では次代を担う料理人達の玉の選定と同時に汐見ゼミ等を筆頭とした最新鋭の技術が大量に存在している。学園の生徒ならば誰でも学べる技術が外の世界では冗談抜きに数年後ものだつたりするのだ。そういうつた意味で学園の機密性は某アンブレラ社と同等と言われており、夜間の侵入は至難の業といえる。

日中？ 武装した兵士をものともしない KUMA や INOSISSI を一撃で倒す生徒がいる状態でどうしろというのだ。

「でも、やらなきやいけないことがある以上躊躇はしていられないか。よし、準備完了！」

意を決したように榊奴は外敵を阻むように立ち憚る高さ 5 m の壁を料理人としての技術を利用して登り始める。料理人として食材を痛める可能性のある赤外線対策は万全だ。月間スパイ養成講座を定期購読し、半年間毎号付いてくるパーツを組み合わせて作り上げた暗視ゴーグルと頭の中の知識を総動員して進んでいく。日頃からもしもの時のために考えていた侵入ルートが役に立つた。コツは地面の上を歩かず、敢えて木々を飛び移ることだとだけ言つておこう。

遠月学園には基本的に寮は存在しない。

学園に通う生徒は近くで部屋を借りるか車などでの送迎が基本とされている。地方から上京し、決して裕福ではない田所恵としては学内に唯一存在するこの極星寮に入寮が認められたのは幸運だった。入寮試験で何度も落ち、他に行く宛がなく粘り切るしかなかつたとうのは内緒だ。

「お母さん、私ここでやつていけるかなあ」

部屋の窓から見える極星畠のとても学生が育てているとは思えない完成度に圧倒される。同時にどんな場所に来てしまつたという後悔とも言える感情が湧き上がる。ただでさえ高レベルの授業に持ち前のあがり症も相まって入学から半年が経とうというのに未だ結果の残せない毎日。中等部では余程の事がないと退学にはならないとはいえ、高等部に上がつてしまえば別。実力の足りないものは容赦なく切り捨てられてしまうこの世界でこのまま行けば最初の脱落者となつてしまふことは火を見るより明らかだつた。

このままではマズイ。そう思うも実行に移せない日々。故郷の自分を信じて送り出してくれたみんなの為にもせめてこの学園で生き残る程度の実力をつけたいが、正直言つて現状からどうやって抜け出せばいいかもわからない状況だった。

「よつと」

「え？」

憂鬱になりながら外を見つめていた窓の隣にその人はいた。

というか、飛びついてきた。

全身を黒一色で統一されたユニフォームに頭にはゴーグル、背中に

は刀傷と思われる傷跡がある男が寮の壁に張り付いていた。

「え？ え？ 何が——」

「ちょっと！ タンマ！！」

一瞬の思考停止の後、最初に蘇った防衛本能から叫ぼうとした瞬間、口元を押さえて部屋へと押し込まれる。

「ゴメン！ 今叫ばれると流石にマズいんだ。いや、叫んでもしようがない状況だと私はながら思うがちょっとの間待つて欲しい」「んー！ んー！」

生まれて十数年。

こんな明らかに格好の人間に襲われる機会等この平和な日本であるはずもなく、恐怖で体が震える。

「あー、もう、こういう時は！」

（ツ！？）殺される！お母さん、お父さん、ごめんなさい。私ここまでみたいです！）

男が背中が何かを取り出そうとしてハッキリと命の危険を感じる。恐怖から目を瞑り、一瞬の後フワリとした開放感が全身を包み、これが死ぬということかと思いにふける。

（あ、なんか諦めちゃうと落ち着いてきた。死ぬってこういう感じなんだー。なんかいい匂いもするし、わ、悪くはないのかな？）

自室のベッドのようにどこか慣れ親しんだような場所に寝かせられ、ハーブの香りが鼻腔を刺激する。どうやら地獄というわけではないらしい。

「あ、ちょっとまつてね。もう少しで出来るからー」

「あ、大丈夫です！」

「よし、出来た。もう眼、開けていいよ」

言われた通りに眼を開ける。そういうえば、さつきから話している人は誰なんだろう——。

「へ？」

「ベタだけどカモミールティだ。ハチミツはいるかい？」

「あ、ありがとうございます？」

さつきの不審者がお茶を入れてくれていた。しかも、手持ち無沙汰

なのが部屋の清掃までしてくれていた。

「いやー、流石極星寮だねー。古いながらも器具が充実している。うん、いい寮だ」

「えーと、どうして――――」

そこまで言おうとして戸惑う。

一体どこから突つ込めばいいのか。こんな時、友人の榎涼子や吉野悠姫なら上手く突つ込めるだろうが、この状況内気な恵には荷が重い。

次の言葉が出ず、オドオドしているとそれを察したのか男が口を開く。

「いやー、悪いね。学園に侵入しようとしたら思つた以上に手こずつちやつて。ドーベルマン程度ならどうとでもなるんだけど、まさか忍者を放し飼いにしているとは思わなくてね。見通しが甘かつたという他無い。途中から「薙切インターナショナル」で開発中の警備ロボットが出てきたときは焦つた。あいつらビーム撃つてくるんだぜ？確かにビームは男のロマンだけさ。もうちょっと出力抑えないと肉焼くにしても焦げちゃうと思うんだよね」

忍者？ロボット？一体何を言つているのだろう。

もしかして自分は夢でも見ているのかもしれない。だつて、明らかに匂いや見た目から美味しいはずのハーブティからは普通という感想しか浮かばないし、きっと入寮試験に受かつた事で張り詰めた神経が切れて変な夢でも見てているんだろう。

「――で、止む終えず飛び移った窓にキミがいたんで、悪いと思つたんだけど隠れさせてもらつた」

「いえいえ、いいですよー」

「そうかい？そう言つてもらえると助かる」

夢だと思えばなんてことはない。悪い人ではなさそうだし、そこまで気にすることないんじやないかと思えてくる。今もせつせと引越ししてから録に整理の出来てない室内を眼にも止まらぬ速さで片付けていってくれるし。

「あ、これはどうする？」

「それはこつちの棚でお願いします」

「はいよー」

中学一年の少女の指示で物音一つ立てずに部屋を片付けていく全
身真っ黒な男。

うん、これが夢でなければ大変だ。

それにもこの人、知識が凄い。

持ち込んでバラバラになつた参考書などをわかりやすいように正
確に並べていつてくれる。そして、すかさずハーブティのおかわりを
入れてくれる。

「あの、料理——よくするんですか？」

「ん、ああするよ？あんまり上手くないけどね。あ、ごめん。ついつい
癖で片付けてしまつた！俺としたことが女の子の部屋を勝手に！——
——周りの連中がどいつもこいつもだらしないせいだ！本当にごめ
んなさい！！」

「い、いえいえ、私こそ、片付けてもらつているのに自分だけこんなに
くつろいでしまつて！」「ごめんなさい！」

「いやいや、今回は全面的に俺が悪いから！キミに謝られるとどうし
ようもない。そうだ、なにか相談に乗ろう」

「そ、相談ですか？」

「ふむ、なるほどな」

(何やつてるんだろう、私)

聞き上手というのか、恵の話を真剣に聞いてくれ、要所要所で相づ
ちを打つてくれる男にいつの間にか緊張せずに話せるようになり、気
付けば遠月学園での不安を全て打ち明けてしまつていた。

「つまりは自分に自信がないってことか。うん、じやあ逆に考えてみ

よう。君が自分に自信を持つて――自分の料理を全力で出したいと思うときはどんなとき代?」

「自分の全力ですか?」

「そうだ。これは俺の持論なんだけど、料理つてのは自分のために作るときよりも誰かの為に作る時の方が前に進めると思う。確かに自分の為に作る料理は才能や努力の続く限り進めるだろう。どれだけ自分が進んだかわかりやすいからね。でも、誰かの為に作る料理はその誰かの感想がないと成長した実感がわかないけど、彼らのことを思えば思うほどなんだか力が沸いてくる気がするんだ。その思いが――誰かを思いやる心がある限りその料理人は前へ進み続ける」

「思いやる心……」

その後、男は自分の夢は『料理で誰かを笑顔にすること』だと教えてくれた。

ゴーグル越しに見える目はどこか優しくて、それが決して嘘ではないということを教えてくれる。

「料理は『心』つてのはあながち間違ってはいないと思う。勿論、知識や技術も必要だけどね。それら全てを引っ括めて『料理つてのは皿の上に自分の全てを乗つけること』だからさ。別に無理して先のことを考えることはないよ。経験上、多少やんちゃしても中等部の間は余程の事が無い限り退学にはならないし、準備期間だと思って自由にやることをオススメするよ。そして、高等部に上がった時に自分の全てを引き出せるようにその心の刃を研いでおくといい。――もし、その時が来て俺がそばにいれば、キミを全力で応援すると約束するよ」

「応援する」

そう言つて、その人は窓から飛び出していった。

ここは一応二階なんだけど、関係なかつたみたいだ。

最後に、もう覚えたからといつて置いていってくれたいいくつかのレシピに目を落とす。恵の眼から見ても完璧とも言えるバランスで組み立てられた黄金のレシピ。いつか使いこなせる日が来るのだろうか。

「自由に、か。そういうえばここに来てからずつとそんな余裕なかつたな。まだ緊張せずにやれる自信はないけど頑張つてみよう！」

「あつぶねー、このまま長居すると流石にふみ緒さんに殺されるところだつた」

後日、極星七不思議に『極星寮の黒い妖精』が追加されることを彼はまだ知らない。

『F』の悲劇 決意

夜の学園に刃の混ざり合う音が木霊する。

方や風魔一族に伝わる秘蔵の忍者刀、方や先日京都のとある刀匠に弟子入りした時に鍛え出した数打の一つ。獲物の差では圧倒的でありながら忍者等の使い手である223は目の前の侵入者を仕留められずにいた。

「ほう、包丁を使わぬとはその意氣や良し」

「いや、料理人の魂をこんな下らない事で使う訳無いだろ！」

今まで見てきた武術を考えられる限り再現したような動きをする少年の動きは一分一秒ごとに加速する。その動きに老体がついていけなくなっていたのだ。

さらに、少年の不自然な動きも歴戦の勇士である223を混乱させていた。

通常、複数の流派を取り込む場合その流派の長所同士を組み合わせた動きを作るものだ。何度も思考し、最適な解を作り出さなければとても実戦では使い物にはならない。その試行錯誤のうちに使用者の癖や才能に合わせて方が変化するのは当然のことだった。

しかし、目の前の少年は違う。

複数の技術の長所も短所もひつくるめて原型のまま、持ち前の器用さで不自然のないように仕上げてきている。こんなことは通常ありえない。

おかげで223はたつた一人の侵入者を相手取っているだけで數十人の達人を相手にしているような重圧にさらされている。忍術だけで、風魔、伊賀、葉隠、夢想抜刀流、武神流そして、毒島流。これだけの達人を同時に相手にしているような錯覚に陥る。

「一体何が目的じや。貴様ほどの手練が望むものは一体何だ！」

「俺は——」

男の姿が消える。

(瞬間移動？いや、縮地法か――――見事ツ)

すれ違いざまの掌底が鎖帷子を貫通し、223の意識を刈り取る。

認めよう。これほどの達人、遠月総帥である雑切仙座衛門以来だ。消え行く意識の中、223は確かにこの一線を生涯の名勝負の一つとして記憶した。

「俺はただ、書類整理に来たんだよオオオオオオ

はつきり言おう。

矢成音孤が『エフ』にやつてきたのは断じて偶然でも気まぐれでもない。普段から飄々としている彼女だが、一応現在の十傑の中では角崎タキについての常識人だ。更に十傑である以上、生徒の研修先はある程度把握しているはずだし、店であつた時も驚いているふうには見えなかつた。本当に冷やかし目的ならともかく、あの接触はいくつかの意味があつたと思われる。

その一つの心当たりが的中した。十傑の人間が普段使用する校舎に入り、合鍵ではなく何故か渡されていたマスターキーで扉を開く。そして目の前に広がる紙の山に啞然とする。どの机を見ても未処理の山、山、山。からうじて第七席であるタキの席だけ抵抗の証のように他の机に比べて量が少ないが、後の面々に関しては全く手付かずといった有様だ。

「たつた数日空けただけでどうしてこうなるんだよ…………」

どうやら、あの接触は彼女なりのSOSだったらしい。

それにも、榊原や木久地がいないだけでこの有様とは、一体今までどう処理をしてきたのか。

いや、検討は付いている。ここ一ヶ月で大きな変化がひとつあった。

それは元第九席である須郷圭一の存在。あの男は確かに料理の腕前では他の面々に一步遅れていたが、才能に反比例するように常識人であつた。そして、手段も選ばないことで有名だつた。

そこから導き出せる答えは一つ。

今までの遠月の運営は須郷が部下を使つて半ば無理やり処理してきたのだ。その上で目だけは通していたという難切せりかが裏で手綱を握っていたというところだろう。彼が十傑に加入したのは今年の春からだし、去年までは卒業した先輩達がいた。時期的にはピッタリだ。

しかし、原因はわかつたがこんなに酷かつただろうか？

少なくとも榊原が十傑の業務を手伝い始めた頃はここまで量はなかつたはずだ。いくら十傑に一学園組織としては破格の権限が与えられているとはいえ、基本的には遠月の理念である食の探求に彼らの時間は割り振られるはずであり、学園側もある程度処理できる量を振り分けていたはずだ。ただでさえ、今年の十傑は実力が規格外な代わりに人格破綻者そろいだと有名で、仕事を割り振つても帰つてくる確率が限りなく低いとわかつているだろうに。

須郷圭一が抜けた穴も埋まつていらない状態で一体全体何を考えているのだろう。

取り敢えず一人分の書類が片付いたので移動する。

一応十傑の面々からある程度の権限をもらつてゐるとはいへ、一般生徒では判別不可能な案件は処理のしようがない。一応判断に必要なデータを添付し、他人でも記入可能な部分を記入しそれぞれの机に置いておく。

それ以外にも今月中に出さなければ学園の運営に影響のある書類は処理をした後コピーし、後日確認してもらうことによう。どうせ

机の上に置いておいても面倒だと理由を付けて手をつけない事は経験則で分かつてるので何故か混ざっていた学園長用の書類と一緒に後で学園総帥室へ持つていくことにしよう。

書類整理が全て終わる頃には空には既に青みがかっていた。
我ながらあの量をよく処理できたものだと思う。

速読に速筆、並列思考に分身。持てる力の全てを使わなければきっと夜まで掛かっていたことだろう。

ともあれ、これから一睡する時間はない。一応料理人としてどれだけ睡眠時間が少なくとも最大限のパフォーマンスが出来るよう鍛えているので五徹くらいまでは特に問題はないとはいえ、無駄な時間を過ごすのも気が引ける。

「さて、と。どうするかな」

『図らずとも時間が出来てしまった。

『エフ』に行こうにも早く着いたところで店の鍵をもらつていない以上、店内には入れない。ピッキングすれば可能であるが、研修先でそれをやれば一発で失格どころか下手をすれば逮捕されてしまう。

学園の生徒が登校するまでにはまだ時間があるので当然知り合いに会う確率も低いだろう。

『応援する』

ふと、先ほどあつた少女との会話を思い出す。

あの忍者モドキにやられた傷のせいで記憶がいまいち定かではないが、確かに彼女の相談に乗り神奴はどのような結果であれ、彼女を『応援する』と決めた。そして、昨日の矢成音孤も同じ気持ちだったのだろうと今更ながら思う。確かに十傑の業務に対しての要件もあつたのだろうが恐らくそれはあくまでおまけで実際は神奴の激励に来ていたのではないか?

その考えに行き着き、途端に申し訳なくなる。

このまま残りの日数を過ごしても木久地は兎も角、榊奴が合格する確率は限りなく低いだろう。

どれだけホールでの仕事をこなしたところでそれは料理人としての榊奴操ではない。

この数日で厨房以外の仕事の重要性は改めて理解した。どれだけ料理人が優れていようとそれを支えるスタッフがいなければその魅力は半減する。

完璧に料理を作り上げてもそれが冷めてしまえば当然美味しいとは言われないし、給仕にまで手を出すとその間の調理は疎かになつてしまふ。

それだけではなく、料理人が普段見ることの出来無いお客様一人一人の癖や好みを把握し、それを次に生かせるスタッフの存在は貴重だ。そういった人々の存在が料理店を支えているからこそ、料理人は安心して自らの魂のその一皿に注ぎ込める。

「でも、俺の目指しているものは——俺の夢は、その先だ」

気づけばその足は学園の奥深くにある庭園へと向かっていた。

きっと答えはわかっている。自分がどうすればいいのかも。でも、その一步が踏み出せない。あれだけあの少女にアドバイスしたというのにその行動の末に起ころう恐れている。

絶対に誰かが傷つく選択。

それを下せば榊奴は料理人としてスタジエールを突破する事が出来るだろう。だが、果たしてそこまでして選ぶ選択だろうか？行動を起こさなくとも合格する可能性が存在する状況で、そこまでして求めるものなのだろうか？

そんな榊奴の苦悩をあざ笑うかのようにその女はいつもと変わらず、触れれば容易く折れてしまいそうな細い体を車椅子に乗せた状態で微笑んでいた。

「おはようございます。みーくん」

「どうして……」

「ここで待つていれば貴方が来るような気がして——」

夢げな印象を思われるその姿に思わず先程までの苦悩が頭の片隅に吹き飛びかける。

それだけその姿は榊奴にとつて大切に思えた。何者よりも優先しようと思えるその姿に思考が持つて行かれかける。

「…………と、いうのは冗談である狐娘こむすめにアリスの案内を頼んだのは私ですかね。その結果あなたがここに来ることは分かつていました。改めて、待っていましたよ。みーくん…………どうかしましたか？」

「ツ!? な、なんでもないです」

危ない。

こんなのはこの魔女の常套手段だ。薙切せりかは自らの弱さを自覚している。自覚した上でそれを利用し、特定の仕草や相手の心の隙間に付け込むことで他人を自由に操る術を持っている。

この程度、普段なら軽く流せるはずが一瞬その術中に嵌りかけた。

(そんなに俺の中でこの問題が大きかつたってことか。駄目だな——
——こんなの考えなくともわかりきつているつてのに。二つの道があるなら誰も傷つかないほうを選ぶべきだ。何を悩む必要がある)
「うーん。これは重症ですねー。早めに来てよかつたかもです」

「何を——」

「じつとしていてください」

車椅子を動かし、ゆっくりと近づいてきたせりかの両手が榊奴の頭を包み込む。

必然的に彼女のシミ一つない翡翠の瞳に視界が溺れる。全てを理解し、全てを飲み込む瞳は榊奴を断罪するでもなく、受け入れるように見開かれていた。

「みーくん。隠し事は駄目ですよ。嘘を付くなら自分にも他人にも誇れるものにしなさい。じゃないと、料理も人生も中途半端なものになってしまいますよ?」

「…………やっぱ、貴女には嘘は通用しないですね」

「うん。やっぱりみーくんはその眼がいいですねー。諦めを知らない

眼です。心のどこかで諦めようとしても結局諦めきれない。自分の欲望にどこまでも貪欲に行きなさい。その先にあなたの望んだものがありますよ」

「本当にそれで――俺の思うままに進んでいいんですか？もし、それで誰かが傷つくようなことになるなら、俺は」

「失敗してもいいんですよ？」

「え？」

「いつたい誰が貴方に失敗するなと言いましたか？どれだけの人間が貴方に成功しようと？下らない。もし、自分の望みが、夢があるならまつすぐに進みなさい。その信念の先に障害があるなら踏み壊してでも進めばいいでしょう？」

一見突き放すような言葉。

それでも、包むものが何もないその言葉の槍は榊奴の胸の内にあつた悩みを一撃で貫いた。

今日この場所に戻ってきた理由がやっとわかつた。

どれだけ奇麗事を言っていたとしても、結局は同じだつたのだ。無理をしてまで書類を整理しに帰つてきたのも、極星寮で一人の少女の悩みを聞いたのも、全てはこの場所にもう一度帰つてくるためだ。
試験^{スタジエール}を乗り越え、料理で誰かを笑顔にするという自分の夢を叶えるための行為。

最初からやるべきことは決まつていた。

なら、いつそ思いつきりやろう。

胸を張つてあの天才達のいる場所へ戻るために――
自分の居場所へ帰つてくるために――

「先輩、ありがとうございます」

「どうやら吹つ切れたみたいですね。全く、面倒な後輩を持つつてのも大変なんですね。安心してください。失敗したつていいんです。責任くらい私が取ります。知つていましたか？私、それくらいの権限は持つているんですよ？」

自信満々に人差し指を立て、首を傾げてみせるせりかの仕草に覚悟が決まり安心してしまつたせいか思わず笑いがこみ上げてくる。

「あれ？どうしたんですか？ここは笑うところじゃないですよ？」

「いえ、何でも」

「怪しい。先輩命令です。答えなさい！」

「いや、そのポーズ。堂島さんや日向子さんがやるなら兎も角、先輩がやるにはちょっと父性や母性といったものが足りないかと」

恐らく本人にとつては自分に考えがある。任せろ、といった意味での行動だと思う。

だが、さつきまでの精神状態ならまだしも、一足先に気を取り戻した身からするとハッキリ言つて、子供が指を振つているようにしか見えない。

「し、失礼ですね！私はみーくんより歳上なんですよ？」

「へー、そうですか。でも流石ですね、こんな早起きをするなんて。いつもなら平氣で八時過ぎまで寝てるのに。まさかと思いますけど、一睡もしていられないなんてことはないですよね？大きくなれないですよ？」

「平氣ですし！徹夜くらい問題ないですし！一日くらい、私は起きてられる！」

「そう言つて、昼くらいになると授業をサボつて昼寝でもするんでしょう？全く、こんななんじやおちおち遠出もできませんね」

「なつ、私はこれでも難切の後継者候補のひとりで十傑でもあるんですよ？睡眠時間を削るのは仕方の無いことなんです。別にえりなやアリスに背だけでなく胸まで負けてきたという事実はありませんし、最近地味に成長期なタキちゃんに嫉妬して仕事を押し付けたりしていません。一日一回くらいのペースで揉んでご利益に預かりたいので園果ちゃんに早く帰ってきてほしいとかも思つていません。……だから、向こうが気に入つたならみーくんも別に帰つてこなくていいですかね！」

「そうですか。それはおかしいですね？俺の管理しているスケジュールだと一日八時間は睡眠できるように予定を空けているはずなんですがねえ。自由時間が欲しくて睡眠時間を削るみたいな馬鹿な真似をしなければ、ですけど」

疑うような視線を送ると、先程まで優雅に飲んでいたコーヒーカップが僅かに震える。

普段は相手に突っ込む隙を与えないほどの余裕を持つているというのにこう言う風に突っ込まれるのには弱い。いや、そもそも彼女に反抗しようという人間が周りにいないのが原因か。十傑で難切という看板はこの世界ではそれほどまでに重い。彼女が白といえばタコの墨でも白になるのだ。

「——いや、ないわ」

「なんですか？何がないんですか!?」

目の前の少女は最早先程までのその眼と言葉だけで他人を自由に操る魔女には見えず、ただのからかわれるのに慣れていない子供にしか見えなかつた。

「別に何でもないですよ。あ、それと先輩の仕事だけ残つてゐるんでもろしくお願ひします。そんなに言うなら、俺が帰つてきた時に終わつていなーなんてありえないですよね？」

「!?私の分やつてないんですか？折角、アリスと遊ぶのを我慢して積み上げた書類の山を私の分だけ!?」

「そういう事やつてるから魔女だと性格が悪いって言われるんですよ。アリスちゃんには一応フォローはしたんでちゃんと埋め合わせしてくださいよ」

「そ、そんな……私の休日の苦労が——久しぶりの力仕事の成果が——」

珍しく絶望した表情をしている魔女に少し満足する。

「この榊奴操が一方的になすがままになるような素直な人間じやないつてのはこれでわかつてもらいましたかね？」

「あの、今からでもちよつとお話しませんか？お仕事しながらでいいんで」

「おっと、すみません。出勤の時間です。これでも下つ端なもので、早めに出勤しないといけないんですよー」

後ろで拗ねたような唸り声が聞こえるのを無視しながら庭園を後にする。

これは帰つたら本格的に書類整理をしないとマズそうだ。
まずはこの試練を乗り越える。

それも自分の満足する形で、だ。

その為に――

「俺は、『エフ』を潰す!!」

『F』の悲劇 宣戦布告

『エフ』を潰す。

その決意をしたのは榊奴操という料理人としてのどうしようもない我が儘からだつた。

『誰かを笑顔にする料理』を目指している榊奴からすれば、料理で笑顔を作り出せる人間はすべて尊敬の対象だつた。

無論、遠月卒業生であり在学時は第二席という今の榊奴からすれば雲の上の存在である水原も尊敬する料理人の一人だ。

だからこそ、今の『エフ』の現状を見て見ぬ振りはできない。

今はまだ目に見える段階ではないが、このままで確実に『エフ』はダメになる。それ以前に、今の状態ではもうこれ以上前に進むことすらできないだろう。

停滞とその先に待つゆるやかな衰退は料理人にとっての真の敵だ。きっと水原自身もその現状に気づいているのだろう。

気づいていて彼女には動けない理由がある。

何故なら、現状を打破し今よりも前に進むためには一度『エフ』を壊滅状態にまで追い込まなければいけないのだから。

「そんなわけで俺は『エフ』を潰そうと思います」

数日後、榊奴はこの件に関して真っ先に話しておかなければならぬ人物の元を訪れていた。

「…………よりもよつて私にそれを言うのね」

リストランテ・エフに設けられた一室でその人物——水原冬美は普段から変化の乏しい表情で最大限の苦笑いを作り出していた。

「まあ、報告・連絡・相談でホウレンソウとも言いますし、今の俺は『エフ』のスタッフという扱いですから。こういう時はまず水原さんに相談するべきとthoughtして」

「ええ、正しい判断だとは思うわ。それが私の店を潰す相談でなければね」

「アハハ、すみません」

ここで来客の対応もするのだろうか。部屋の中では向かい合うように設置されたソファーや簡易的な調理スペースが付けられており、榊奴に向かいに座る水原はシェフとしてではなく、『エフ』を運営するためのオーナーとしての格好をしていた。

「別にかまわないわ。スタッフの意見を聞くのも私の仕事だもの。で、私にどうしようと?」

「单刀直入に言います。俺に協力してください」

「…………それをして私にどんなメリットがあるの?」

「言わなきやいけませんか?」

「普通は、ね。でも、今回は私がどうこう言える状況じゃないみたいね」

『エフ』の責任者である水原がどうして引き下がらなければいけないのか。

その気にならば、遠月に連絡するまでもなくスタジエール中の榊奴をその一言でクビにすることが今の水原にはできる。それが、スタジエールの研修先として自分達の店を学生達に貸し出す上での店側の当然の権利だつた。

だが、今の水原はその権利行使することはできない。

「えーと、これが『エフ』の仕入れルートで、こっちがここ数日他のスタッフに聞いた噂話から導き出した店の問題点というか、スタッフ関係のトラブル。あ、勿論裏付けは済んでますよ。証拠として機能する最低限は俺の知り合いの探偵を通して行っています。で、コイツが俺が『エフ』を潰そうと思った理由です」

多分、今の神奴の顔は水原側から見れば相当胡散臭い笑みを浮かべているだろう。

互いのソファーアの間のテーブルに次々に並べられているのは『エフ』を潰すために集めた情報の数々。一つ一つは小さなものでも、公開されればこれからの営業に確実に支障が出るものだ。勿論、間違つても公開するつもりはないが。

「これじゃ、まるで脅迫ね」

「ええ、脅迫です。だから、俺が失敗した場合でも脅迫されていたと言つて切り捨ててください。ま、これくらいじゃこの店がどうとかなるとは思えないですし、公開されても揉み消されるだけですけどね」

これから戦おうとしている相手はそれだけの力を持つている。

神奴が失敗すれば相手は何事もなかつたかのように『エフ』をこのまま運営させるだろう。これは、そうなつた場合の水原の負担を少しでも減らすための保険だ。

なにせ、今回敵に回す相手は今まででも最大級だ。

遠月十傑や卒業生達よりも遥かに巨大な相手。それらを相手取る上で自分以外の負担は最低限にしておきたい。

その覚悟が伝わつたのか。

苦い顔をしていた水原の表情が僅かに緩む。

「わかつたわ。協力する。でも、失敗した場合は容赦なく切り捨てる。それでいい?」

「ありがとうございます」

切り捨てるといった水原の顔はとても、冷徹に誰かを切り捨てられる人間のものではなかつた。そもそも、それができるならもつと早くにそうしていたことだろう。そうしていれば少なくともここまでにはならなかつた。

今の状況は水原の立場からしたらどうしようもないほどに詰んでいる。このままの状況では前に進もうにも後ろに下がろうにも最早どうする事も出来無い。

ただ、それこそ決められたレシピ通りに調理されるのを待つだけの状態。

それは一重に彼女の優しさが招いたものだった。

無愛想なくせに誰にでも手を差し伸べる。今年の地獄の夏合宿で彼女に救われた人間は多い。自分自身もその一人だからこそ、彼女の力になりたい。

だから、やるからには徹底的に、だ。

「で、私は何をすればいいの？」

「俺を厨房に入れてください。後は、いつも通りでお願ひします」

「それだけ？」

「ええ、それだけです」

出来るだけこちらの考えを悟られないように満面の笑みで返す。

「それだけで私の工^城フを潰せると？」

「ええ、潰しますよ。これは決定事項です。最悪、道連れにしてでも俺はこの店を変える。これがこの数日で辿り付いた俺なりのスタジエールの答えです」

水原の眉が僅かにピクリ、と動く。

料理人として自分の店^城を持つというのはひとつの中核であり、到達点である。

水原個人は遠月卒業後、多くの卒業生がそう成し遂げたように一年未満でその目標を達成した。

しかし、それは彼女が苦労していないということにはならない。本来何十年も掛けて下地を作り上げた上で成し遂げることを遠月学園という強力な後ろ盾があつたとはいえ、驚くべき短期間で行つたのだ。それで苦労していない訳が無い。

常人では推し量れないほどの苦労をして築き上げた城を榊奴のような学生に自信満々に潰せると言い放たれたのだ。これで何も思わないほうが異常だ。

「私はこれでも、努力をしてきたつもりよ。慣れない事も色々したし、自分でなくスタッフの成長に繋がるようこの店を導いた。それを、たつた一人を入れるだけで壊せると？」

それは紛れもない殺氣だつた。

水原の全身から放たれたそれは容易く榊奴を突き刺し、その信念を

折ろうとしてくる。

「やります。貴女が積み上げてきたもの、貴女の辿り着いた答え、その努力、その才能を俺は完膚なきまでに破壊する。容赦はしない。貴女が今まで歩んできた道がどれだけ大したことのないものだったのか、俺が証明してやる！」

それは宣戦布告の合図。

『エフ』という巨大な店と榊奴操というたつた一人の戦争の始まり。スタジエール期間。残り二日の間にどちらかが確実に勝ち、どちらかが確実に負ける。

これはそういう戦いだつた。榊奴操という料理人には今の『エフ』の状況は決して許容できるものではない。『誰かの笑顔』を求めるものとして、このまま朽ち果てるくらいならこの手で壊してしまわないといけない理由がある。

そして、ここにも自分の料理人としての信念に従つて動いていた人間がいた。

「私は――私の今までの道が間違つているとは思わない。『エフ』はそんな私の集大成。それはきっとこれからも変わらない」

「――俺は、そんなちっぽけな物でアンタに満足されるわけにはいかない。俺はアンタに憧れている。でも、こんなところで立ち止まるようなら、その程度なら、俺は――ツ！」

冷たく。

ただ、冷たく言い放つ。

言葉だけではなく、体温や室内の気温まで下がつてしまふような声色で、榊奴はさつきまでの仮面を一瞬だけ脱ぎ捨てて本音を放つ。水原が息を飲むのを感じる。

当然だ。

それは自分自身、憎み恥ずべき本性。エゴの塊とでも言うべきものであり、今まで剥き出しで他人に見せたのは数回ほどしかないもの。あまりに自分勝手で、他人には不利益しか生まないものだからと、普段は絶対に外には出さないものだが、今回はこのエゴこそが『エフ』攻略の鍵になるのは間違いない。

生まれ持った料理人としての才能が皆無だからこそ生まれたのがこの全てを喰らい尽くしそうになる欲求だ。それはきっと『エフ』を飲み込んでも足りない。次へ、次へと欲望の赴くままにひたすらに自らの道を進む。

冷たく。

どこまでも、人としての暖かさなど見当たらぬほどに冷たくなつていく心は、しかし、ここで踏みどどまる。

これ以上行けば、一生料理で笑顔を生み出すことなど出来はしない。それだけはダメだ。それだけは認められない。

「失礼しました。見苦しいものを見せてしまつて。一応、これが俺の覚悟なんんですけど、どうですか？」

最低限暖かさを取り戻した笑みで対面の相手の顔色を伺う。

今のは本性が、他人に畏怖を与える類のものだと自覚しているだけに、怖がらせてはいないうか。

しかし、その考えは杞憂に終わる。

向かい合つた水原は先程と変わらず、それどころかどこか安心したかのように顔をほころばせていた。

「ひとつ聞かせて」

「何ですか？」

「一応、貴方も園果も今回のスタジエールの基準を満たしていたわ。このままいけば問題なく課題をクリアできた。私は操がそれを理解していなかつたとは思えない。どうして、こんなことをしようと思ったの？」

水原の問いに榊奴は「ああ、そんな事ですか」と、返す。

そして、本来なら説明するつもりはなかつたが、と言いながら。

「最初は――――そう、じつを言うと最初はこのまま厨房以外で上手くやつてこの課題を突破するつもりでした。なにせ、今回は俺じゃ木久地がいますからね。普段なら協力するところですが、今回の

ような状況じや同じ場所にいても比べられて優劣を付けられてしまう。それなら、と。逃げ続けるつもりでした」

「…………その判断は間違つてない。貴方達を始めてみたのはあの合

宿だけど、その時から比べても二人の実力は離れていく。今の操じや、園果にもあの子にも勝てないわ」

「はは、厳しいですね。確かに俺には早く作ることも、美味しく作ることも、自力で何かを生み出すことすら出来無い。今の俺に出来るのはただ誰かの作ったレシピ通りに料理することだけだ。でも、それじゃあいつらにも、水原さん。貴女にも勝てやしない。——それでも、俺は遠月の人間です。あの学園で培つたのは料理の知識や技術だけじゃない。たまには俺も、誰かに勝ちたいと思うんですよ」

『F』の悲劇 思惑

少年が去った後、リストランテ・エフのオーナーである水原冬美は一人、自らの机の上に飾られている一枚の写真を見ていた。

そこには十数年前、あの学び舎で共に技を磨き、競い合つた仲間たちの姿があつた。この中には水原のように卒業した者もいれば、力及ばず途中で遠月を去つた者もいる。それでも、この仲間達がいたからこそ、今の水原がいる。逆にいれば、誰か一人が欠けていても遠月第二席という場所には立てなかつただろう。

あの時よりも確実に前に進んでいるという自信はある。でも、今あの時の仲間に胸を張つて自分の店を紹介できるかといえば正直わからない。

今までのやり方が間違つていたとは思えない。少なくとも、それで一般的に成功と呼ばれるようになつた。

それでも。

「アイツにだけは――見せられない」

絶対負けられない相手がいた。

ソイツは遠月の補助を断り、単身海を渡り、今は水原と同じように成功と呼べる働きをしている。

学生時代から、今も尚負けたくないと思える相手。よりもよつてソイツだよつて今の自分を見せたくないと思つている。

そして、もう一人。

そう思えるような相手がつい先日生まれた。

その少年はお世辞にも才能が有るとは言えなかつた。

技術や知識をいくら溜め込んで、肝心のセンスが遠目から見ても見当たらない。どれだけ努力しようと同じだけ努力した天才には絶対に敵わない。そんなハンデを背負いながら、人一倍料理を楽しんでいた。

結果的に、その少年は今年の夏の合宿で参加した講師を対象に取ら

れたアンケートで最も印象に残った生徒として満場一致で挙げられた。

実力や才能的には同学年内にも、木久地園果やあの赤ずきんのおかしな少女等、彼よりも圧倒的に優れている生徒がいたにも関わらずである。その場に残った講師達全員から一人残らず脅威として認識されてしまった。

それが偶然なら、どれだけ良かつたことか。

たまたま全員の意見が一致した。それだけなら、彼に特別目立つ何かがあったのだろうと思うことが出来た。

そう、そんな偶然が三年も連續で続かなければ。

二年前の今は極の世代と呼ばれる面々を差し置いて、たった一人で遠月リゾートに三十品目以上の新メニューを誕生させ、それと同時に今までメニューとしてあつた同じ数だけの料理を遠月リゾートから消し去つた【魔女】薙切せりか。

一年前、純粹に実力も才能もある角崎タキや搦手で合宿を大混乱に陥れた八神真理がいたにも関わらず、ただ一人圧倒的な才能だけで最終日の課題で売り切れを出した天才は今は学園で第一席をやつている。

この二人は他の生徒と比べても規格外だった。

単純な実力ではない。文字通り、比べるもののが違う。

食戟に例えるなら、魔女の方は水原ならきつと勝つことが出来るだろう。しかし、その代償に今まで培ってきたものすべてを搾り取られ、何度も目には負けてしまう。そして、もう一人の方には最早勝てるかどうかわからぬ。先に料理を作り終えられれば負けるし、先手を取つたとしてもひっくり返されるだろう。それだけ脅威と思える相手だつた。

そして、この二人は全く同じことをその年のスタジエールでやらかしている。

彼らは圧倒的な成果を見せた。

新たなメニューの開発やリピーターの増加、それ以外にも店そのも

のの格を上げるまでの活躍をした。

期間中に驚異的な売り上げを上げる事は歴代で十傑になつたものなら珍しくもない。

しかし、彼らが去つた店はその尽くが崩壊した。ある店は経営者が入れ替わり、それまでの方針が百八十度変わつた。

ある店はそもそもその目玉といえる料理を全く別のものに変えた。ある店は繁盛しているにも関わらず店主自らが店を畳んだらしい。それだけならまだ、よくあることで済む。

高い競争力を持つ遠月学園の生徒にはそれだけの可能性がある。

問題は、それぞれが言つた場所で最も格上と呼べる店。つまりは、遠月卒業生が経営する場所が完膚なきまでに潰されたことだつた。

スタジエールで選ばれる研修先はランダムではなく、実はある程度生徒の実力にあつた場所が選ばれる。勿論難易度は彼らがクリア出来るレベルではなく、それよりも上。物によつては学園側も絶対にクリアできないだらうと思う場所に送り込む。

合宿で結果を出した二人が向かつた先もそういう場所だつたはずだ。

それにも関わらず、彼らは結果を出した。研修先を原型が止めないほどに歪めて。一体どこの世界に研修先をよりよくするためだと言つて、経営者 それも遠月卒業生を真つ先に切り捨てる研修生がいるだろう。しかも、その事実を課題が終わつて数ヶ月間主無きその店に経営を維持させることで隠し通す等、遠月の歴史が始まつて以来類を見ないことだつた。

そして、今年。

前年度よりも競争者が少なかつたとはいえ、三人目が生まれてしまつた。

それも、他の二人よりも早く、遠月卒業生を潰した上でのランクインだ。学園側に警戒されるのも無理はない。

そう、あの少年。

榊奴操はすでに、あの夏合宿で遠月卒業生の一人を再起不能にして

いた。

そこはとある富裕層だけの閉じられたコミュニティがサロンの一室だった。

「これが、詳細データです」

「ほう」

八神真理が渡したデータを興味深そうに確認するのは髪の毛から靴の先まで全身を黒一色で統一された男だった。

まるで死神。

黒髪に僅かにメッシュのように入り込んだ白髪と死人のように白い肌だけが皮肉なことに男を生きた人間なのだと感じさせる。

男が覗き込んでいるのはここ数年の『リストランテ・エフ』の売上や客層を含む近況だった。

「素晴らしいね。君の言う通り、彼女の才能は一流のようだ。だが、それだけに惜しい。現状では彼女の才能を活かしきれる環境とはとても言えないな」

「ですねー。スタッフ内も派閥と言えるかどうかわからないほどおざなりなものですが分かれていますし、何よりこのままでは水原冬美という個性は確実に死にますよね。それは勿体無い」

「ああ、感謝するよ。彼女はきっと僕の目指す理想に大きく貢献して

くれる。こんな人材がダメになる前に発見できて本当に良かった」「でも、協力してくれますかねえ。わたしが言うのもなんんですけど、彼女かなり遠月の思想に染まっちゃつてますよ。ま、ドツブリというよりはそれでも困ることがないほど才能があつて、他の人間と違つてあのやり方でも問題ないから従つたつて風ですが」

「なんだ、そんなことか。確かにそれは問題だね。でも、心配いらないよ」

八神の危惧をもつともだといいながら男は然程氣にした様子はなかつた。

それどころか、どこか楽しそうに暗い笑みを浮かべながら。

「何、どうしても賛同してもらえないというなら仕方がない。――

――僕が直接教育してあげよう」

「…………」

アツサリとその言葉を言い放つ男に八神は笑みの仮面を貼り付けてまま、僅かに考える仕草を取る。

「不満かい？」

「いえ、わたしは才能がある人間が死ぬほど嫌いなのでいいんですが。それだと、わたし達が貰うものがなくなつてしまんじやないかと」

「ああ、そうか。今回は君達のお陰だつたね。心配はいらない。例え考え方は変わつても彼女は彼女だ。問題なく、愛せるだらう？」

まるで、既にそれが決定事項であるかのように言つてのける男の言葉に、八神真理として、そして『エフ』内部にいる協力者として考え、彼女は問題ないと結論づけた。

「はい。そうですねえ、わたし達はそれで構いませんよ。今じゃなく、未来がある『エフ^{I F}』が頂ければそれで」

「どうか！ では始めよう。――革命を」

(こつちが動く以上、内部崩壊は確実。このままじや、本当に頂いちやいますよ、水原先輩？)

ここに、また一つエフを狙う者達が動き出す。

あの店

お嬢様は効率厨 その一

○月×日

趣味として書いていた日記もこれで三冊目に突入した。

今回も普段は他人に言えないような心中をここで吐露していきたいと思います。ま、誰に見せるわけでもないんですけどね。日記を書いているのもただ単に私の場合ペンと紙を持つて難しい顔をしているだけです。

さて、今日から高等部に進学ですが、うるさい先輩もいなくなつたことですし出来るだけのんびり働かない方向で行きたいですね。

○月□日

あー、だるい。

何がだるいかつて、もうすでに自分の足で歩くことすらだるい。これでもこの細脚で去年は山を駆け回られたので体力は付いたかと思いましたが、別にそんなことはなかつたみたいだぜ。

…………『だぜ』って、同学年の女の子が言つていたので使つてみましたが、私のイメージとは合いませんね。

あれ、あつちは『だぜい』でしたつけ?ま、とりあえずこれはここに封印しましよう。

どこかに自分で歩かなくともいい魔法の道具とかないかな。

そういえば、この前『三国志』とかいう漫画を後学の為と偽つて暇つぶしに読んでいた時、蜀の軍師の人の座つていた動く椅子。あれはいいものだと思います。

今度、アリスのお父さんにお願いして似たようなの作つてもらおうかな。

△月○日

面倒なことになりました。

どうやらこの前話したあの椅子の件をアリスの父がお爺様に話してしまつたそうです。

本人としては私の体調が悪いのかと心配して相談したみたいですが、私は基本的に虚弱体质なだけで健康そのものなので心配はいらなりと何度も言え。お陰でお爺様から雷が落ちてしましましたよ。めんどくさい。

何か欲しいなら結果で示せ。

最もな言葉ですね。何もしたくないからその為の道具を寄越せと要求している私とは大違いです。
しようがない、働きましょう。

△月□日

久しぶりに働きました。

ええ、働きましたよ。私は机に向かっているだけでしたけど。

私には特別な才能がある。

この日本人離れした翡翠色に輝く両の眼。元から視力はいいほうだつたが、ある日を境にこの眼を通して料理を見るとその料理の味や成分がある程度わかるようになつた。

別に未来予知とか透視能力とかそういうのではありませんよ。人間に本来備わつてゐる互換の内一つが極端に発達してゐるだけです。人間が料理を判断する上で最も精度がいいのは舌でその次が鼻と呼ばれてます。その他の耳や触覚、そして目は限定的な場面では使えることがありますが基本的には美味しさを判断する際にはあまり重視されません。

その中で、私のこの才能は並外れた視力で料理の色やその中に入っている具材などや調理中ならば料理人の手の動きなどあらゆる角度から情報を細分化して分析し、頭の中に詰め込まれた食の技術と照らし合わせて限りなく正しい答えを導き出す。

まあ、要はよく当たつて一応根拠もあるだけのただの勘です。

同じく難切で『神の舌』を持つと呼ばれる私の可愛い従姉妹いもうとと比べる程のものでもないただの特技。一応的中率は舌による完璧な分析

が可能なあちらが200%なら私は100%といったところ。外れないならどちらを使つても構わないと周りに思われているようでたまに私のところにもそういう仕事が来るんですね。食が太くない私としては料理の鑑定を見るだけで済ますので相手が半信半疑になつていろいろ言つてくることも少なくないので正直あまり評判はよろしくない。

そもそもが他人の料理を評価するとか向いてないですね。

と、なると。

私に出来ることは限られている。

難切として育てられる過程で詰め込まれた食の知識とこの眼による新たな料理の作成。料理には材料と調理法の数だけ可能性がある。それを一つ一つ試すでもなく殆ど正解に近い形で導き出す私の眼なら他の料理人が数年かけて作り出すモノを短時間、それこそ数時間単位で作れてしまう。

作り出した料理をレシピとして世に出し、私はその際に入つてくる莫大な利益でのんびりと余生を過ごすことができる。

これぞ夢の印税生活！ 全二一トの憧れ！ 労せず大金を掴みましょう。

しかし、いくら結果が分かつてているとはいえ、なんの実績もなれば広まるものも広まらない。

当たる占いも他人を占わなければ噂にはなりませんからね。

ふむ。

レシピの実証ついでに少し動きますか……

△月△日

実験は成功。

講義などでペアになつた生徒などにその場で思い浮かんだレシピを使わせ、最高評価であるA評定を取らせることで少しづつだが私のレシピが拡散されつつある。あまり私の仕業だと思われるのも面倒なのであくまでギリギリA評定を取れる程度のものにレシピの質を抑え、ペアになつた子達にもさも自分の実力だったかのように錯覚さ

せておく。

私は講義中基本的に何もしない。背があまり高くないので大きめの調理台には届かないし、実技では四六時中技を磨いている遠月の真つ当な学生達に勝てないからだ。そんな中で、出来るだけ足で纏いになるように振る舞い、私個人ではなくレシピに対する評価が上がるよう調整する。

ゆつくりと、しかし着実に学園中を私のレシピが広まっていく。基本的にその通り作っていれば最高評価を出せるように作つていいのでそれなりに見る目があるものは最近高評価を取り続けているものを発見し、その理由が彼らの技術の向上ではなくレシピによるものだと気づくだろう。しかし、レシピを持つていて生徒は頑なにそれを認めない。何せ、自分達の評価がレシピによるものだと周りに知られれば折角優越感に浸っていたのに周囲からの評価がひっくり返ってしまうからね。ええ、そういう子達を選んだのは私ですよ。だつて、そのほうが操りやすいですし。

後は正義感が強い子やら、不正等が許せない子達が動き出して一悶着起ることでしよう。

そうなれば私の勝ち。

少しでも噂が広まり、食戦でも奪い合ってくれるものならそれで良し。私の目的はレシピが少しでも強いものに渡る事。あくまでバラまいたのは誰かに超えられるための踏み台としての価値しかないものばかり。それなりの性能を持つていて作り手の実力がある程度ありさえすれば最高クラスの料理を作れるが、別に私は自分のレシピが常に一番だとは思っていない。例えその時点では最高だとしてもそれを越える者が現れるのが世界の常。

この学園にはそれが出来る料理人がそれこそ腐るほどいる。誰も彼もが何百何千人に一人の天才ばかり。難切の最終にして決して到達できないと呼ばれる目標のためだけに作られたこの箱庭には多種多様な才能を持つた者達が集められている。

私が作つたそれこそ、日々進化を続ける彼らに喧嘩を売りつけるようなレシピをきつと超えてくれる者達がいるだろう。

さてさて、かわいい子供がどれだけ進化して帰つてくるか。タップリと期待して待つていましょうか。

遠月学園第八十七期生達に起こつた悲劇。

そう言われる事件の発端はとあるレシピだつた。製作者不明のレシピを使つた生徒達が国内だけではなく、世界的にも難問なこの遠月学園の課題を次々最高評価で突破していく異常事態。

これは初め、高等部に進学後に若き料理人たちが次々と頭角を現し始めたためだと思われていた。

数週間して一部の生徒達の成績がある一分野のみにすば抜けていいる事態に学園側が気づいたことによつて事態は一変する。

それだけならまだその分野に特化しているということで処理される問題だつたが、彼らのあまりに尖りきつた成績に異常を感じた講師達が個別に調査するととんでもない事実が発覚した。

彼らには確かに才能はあつた。

だが、それはとてもこの遠月学園で最高評価を得るに足るものではなかつたのだ。

さらに数日後、有志による調査の結果当該の生徒達が全員出自不明のレシピを使用していたことが明らかになる。

これはハッキリ言つて異常であつた。

世界中のあらゆる食に対する知識が集められたこの学園で、良くも悪くも不揃いな生徒達が例外なく最高評価を撮ることができるレシピ。そんなものが一体どこから来たのか。学園講師陣は見えない恐怖に駆られながらもこの事態を引き起こした犯人を探すことを決定

した。

しかし、講師陣はそのレシピの脅威を正確には理解していなかつた。

料理人一人一人の技量に関係なく試験を突破する事の出来るレシピ。少數精銳教育を行い、多くの生徒が卒業どころか進級する事無く切り離されるこの学園でそのレシピが持つ意味を。

奪い合いはすぐに始まつた。

卒業できるものがひと握りであるこの学園では自分以外全ての者が敵だと考える生徒は少なくない。持ち主に關係なく力を与えてしもうレシピが広まれば今までそれによつて甘い汁を吸つてきた生徒達のアドバンテージは失われる。当然、レシピの秘匿が始まつた。それは同時にレシピを求める者や腕試し感覚で興味を示す者、そして今回件で遠月の歴史や自分達の努力を踏みにじられたと感じる者達との争いの始まりだつた。

レシピを奪い合い、時には食戦に発展する状況の中。

一部の生徒達がその才覚でレシピを持つ者達を圧倒する場面が散見されたが、衆人の目に晒されたレシピの拡散を防ぐ事は出来ず、ある講義では実に生徒の八割が全く同じレシピを使つたなどという事態が発生。この自体に遠月側では異例の学期内での講義内容の連行とそれに伴う一部のレシピの使用を規制という措置を取らざるを得なくなつた。

長年遠月学園で講師を務め、厳格さと公平さで職務を全うしてきたシャペル講師にとつても苦肉の策だつたといふ。

生徒達がその完成と才覚で新たな地平を切り開いていく際、極端に偏った知識や技術を共有することはその後の彼らの成長の妨げになると学園側は危惧したそうだ。

競い合い、ライバルや友と邂逅することによつて己を構築するといふ本来の学園の狙いからそれほどまでに当時の状況はかけ離れていた。周囲の者が皆同じレシピを使う個性無き世界。誰が一番優れた料理を作るかではなく、誰が一番上手くレシピを扱えるか競う世界などこの遠月学園にとつて悪夢以外の何者でもない。

この状況を作り出した元凶は誰なのか。
それが判明するのはもう少し先のことになる。

第八十七期生の悪夢と呼ばれる事件。

その最初の引き金となつたレシピを巡る騒動は学園側が動いたことによつて一応の収束を迎えた。

しかし、それは表向きのこと。

上から規制されたからといって当事者達が納得するわけがない。何者かによつて意図的に仕組まれたレシピの奪い合いのトーナメント。バラ撒かれたレシピを己が才で打ち破り実質的な勝利者となつた少年は持ち前の正義感と使命感から事件解決後も単独で動き、ついには黒幕の元までたどり着いてしまつた。

学園中を混乱に陥れ、少年が信じる料理と誇りある遠月学園を侮辱した罪は大きい。

例え相手にどんな意図があるとしても決して許せるものではなかつた。

「君が、あのレシピを作つたんだね」

黒幕だけに分かる合図で呼び出したのは学園にいくつもある調理室の一つ。

そこに入ってきた人物は少年に気づくと、見蕩れるような完璧な作法と共に礼を尽くしたお辞儀をする。

「びきげんよう。今日はいい天気ですね」

そこに入ってきた黒幕。

この学園の総帥と同じ姓を持ちながら、同学年の中でも落ちこぼれと称されていた黒髪の少女はこれだけの事件を起こしたにも関わらず、悪びれもせず世間話でもするかのように話しかけてきた。

「君のやつたことは多くの料理人を侮辱した。理解しているのかい？」

「ぶじょく、ですか？」

少女の両の眼に輝く翡翠の目が不思議そうに少年を見つめてきた。まるでその意味を理解していないかのように無邪気で、優しい笑顔。一瞬本当にこんな少女があの悪夢のような事件を起こしたのかわからなくなる。しかし、この一ヶ月で食戟を行つて集めた証拠が彼女を犯人だと言つているのだ。この事件で決して少なくない生徒が退学に追い込まれてしまつた以上、ここで引くことは少年には出来なかつた。

「そうだ。あのレシピのせいで多くの人に迷惑が掛かつた。学園がこのひと月、どんな状況だったか君も知つていいだろう？」

強く、糾弾するかのように自然と声色が強くなつていく。

それに押されたのか少女は浮かべていた柔軟な笑みをしまい、どこか困つたような表情になる。

「何故、こんな事をしたんだい？ イタズラにしてはタチが悪い。自分の作つたレシピがまさかこんな事になるとは思わなかつたとでも言うつもりかい？ 例えそうだとしても、名乗り出してくれれば……」

「名乗り出て、どうするんです？」

「…………君が名乗り出ても何も変わらなかつたかもしれない。でも、君には騒動を起こした人間としての責任というものがあつた筈だ」

確かに、あのレシピの存在が学園中に広まつてしまつた時点で制作者が名乗り出てももう遅かつたかもしれない。何の意味も無かつたかもしれない。だが、それでもその責任をこの少女は果たすべきだつた。少なくとも、少年はそう信じている。

「そう、ですか。では、私に人柱になれと言う事ですね。この責任を取つて皆さんの方で謝罪し、今まで作つたレシピを含めて全て焼却しろと」

「待て、他にもレシピがあるのか？」

その言葉を聞くのがす事は出来なかつた。

彼女が謝罪するのはいい。それが正しい判断だ。しかし、その際に彼女が創ったレシピが万が一表に出てしまってもしたらまずいことになる。流石に今回のようなものは無いだろうが、物が物だ。責任ある人間が管理するべきだろう。

「正義感が強いんですね。ですが、今回の件は私の不用意な行動が原因です。他のレシピは償いとして私が責任を以て処分しましょう」

また同じ過ちを犯すとも限らない。それに、処分したとしてもレシピを作った張本人が居るんじや何の意味も無いじゃないか。それなら、対処しやすいように誰かが管理するべきだ」

もう一度とこんな事は起こらせない。

その覚悟を以て今回彼女を呼び出したのだ。少しでも再発の可能 性を潰すために全力を注ぐつもりだつた。

そう、彼女は信用できない。

この場で最初に会つた時にそう直感した。そして、その感情は今も尚強くなつていつている。

ふふふ面白い事を言うのね

「当然の判断？ それはどうかしら。もし、私を本当に止めたいたいのなら講師陣や十傑、それこそ学園そのものに今回の件を話せばいいでしょう？」

そういうつた少女は先程とは違う、どこか蠱惑的な笑みを浮かべ近づ

いてきた。

「どうして自分で管理するなんて言うの？ここまで来たご褒美にそ
うしてあげてもいいけど、私のレシピを使わずに今回勝ち抜いたあな
たにあれは不要でしよう？」

かツ

まだ、この少女は理解していないのか。
自然と語気が強くなるのを感じながらも責めずにはいられなかつた。

少年の怒りを感じ取つたのか、少女は少しだけ怯えた様子を見せながらも心中を吐露し始め。

「私はたまたま真剣に授業に出ていただけですよ？ 知ってる通り私はとてもじやないですが、他の方々と比べて勝つていると思える点がありますね。だから、必死に編み出したのがあのレシピです。講義などでペアを組んだ人に責めてもと渡していたのですが、それがいけなかつたのですね。まさかこんな事態になるなんて——

——と、でも言えばいいんですか？」

小馬鹿にするように少年を笑っていた。

「瞬間信じてしまいそうな涙ぐも演技が神経を逆なでしていく
「ツ、ふざけるなよ。僕にも我慢の限界がある」

「そうですね。そうしたらいいんじやないですか？」怒りに身を任せ
て私に手を出してみればいいんじやないですか。そうすれば、私のレ
シピは貴方のモノになりますよ？」

で勝ち抜いて見せる」

「そうですか。そうですね。貴方は私の試練を突破しましたし、資格は有りますか。…………では、新しいのをあげましょう」

一瞬、何を言われたのかわからなかつた。

まるで自分を試していたかのような少女の口調に違和感を覚えると同時に用意していたとでもいうかのように手渡されたそれを見て固まる。

「どうしたのですか？　さあ、受け取って下さい。今回の報酬ですよ？」

その言葉に、歓喜する自分が居た。

まるで、言いつけを守つてご褒美をもらえると思った子供のよう
に。今までお預けを喰らつっていて、久しぶりに餌を与えた獣のよ
うに。

少年の視線は目の前のレシピに釘付けになつていた。

「ゞ苦勞様です。よく頑張りましたね。私のレシピをここまで育てて
くれてありがとうございます」

「ち、違う。これは、僕のだ。僕が、僕が考えついたものだ」
「いいえ、違いますよ。そう思い込んでいるだけです。私が思いつい
たレシピをあなたが一番うまく活用した。それだけでしょ？　な
んなら、今自分が使つている料理のレシピをいつどうやつて思い出し
てもらつて構いませんよ」

視線がレシピから少女の翡翠の眼へと誘導される。

その眼には確かに見憶えがあつた。

『今日はよろしくお願ひしますね』

一度だけ、講義で組むことになつたあの日。

一体何を作つたか。あの時この少女は何をしていただろうか。

「嘘だ。これは僕が考えた、僕だけのものだ。誰にも渡さない。誰に
も渡してたまるか！」

「それでいいですよ。今回もそうすればいいんです。今日の事は私と
貴方しか知りません。私は知つての通り落ちこぼれですし、方や貴方
は今回の騒動を自力で勝ち抜いた英雄。周囲がどちらの言葉を信じ
るかなんて一目瞭然でしょ？　さあ、手を取つて下さい。私は日陰
者、貴方は日に当たる世界を歩く。これまでも、これからもそれは変
わらないでしょ？」

少女の言葉に、ゆっくりと少年はその手を伸ばし――。既に
その呪縛から逃れられないほど縛られていることを悟つた。

□月△日

実験は成功。

今日は使い勝手のいいテスターも手に入つた。それにしても、人間の記憶つて本人の思い込み次第で都合良く書き換えられるんですね。一番私のレシピに依存していた子に呼び出されたと思ったら、自分を正当化して私に罪を償えとか言つてきましたよ。私がレシピを処分するとか言つたら眼の色変えて止めに来ましたけどね。

それに対して、あの程度のレシピにどうしてそんなにむきになるんでしょうか。

彼が行つたように、ある程度進化できるように拡張性を残したものなのでそこまでの完成度は無いです。うーん、一から作るのが面倒だからとかですかね。確かに土台があるのと無いのでは全然違いますしね。

取り敢えず、今回学園中にばら撒いて生徒達それが手を加えたレシピをワンランク上げたモノを今度は適当に外の顧客に売りましょうか。学生よりも高値で買い取ってくれますし、学園内でこれ以上動くのも面倒ですからね。

それに対しても、ちょっと放つておくだけでこれだけの成果が出るなんてやつぱり何事も一人でやるよりみんなで協力した方が効率が高いですね。

『F』の悲劇 戦場

遠月学園から二人の生徒が来てから数日。

一人は厨房で、もう一人はホールで目覚しい活躍をしていた。
そして、今日。

リストランテ・エフの厨房では二人の生徒が揃っていた。
「今日からこちらでお世話になります。榊奴です。改めてよろしくお願ひします」

「——ふん」

慣れた様子で一人一人挨拶を交わしていく少年を古門真司は冷めた目で見ていた。

真司とあの少年はそれほど年は離れていない。もしも、歩んだ人生が違えば同じ学校に通っていたかもしれないほどだ。

だが、そうはならない。彼や同じくこの店に研修に来ている少女と真司は違う。

物心着いた時から両親が無く、施設に預けられた真司にとつて学校など縁のない場所だ。施設でイタリア人だつたマザーの手伝いをしながら生活し、数年前水原の手でこの『エフ』にスカウトされた時からずつと、客を相手にする食の最前線で戦い続けてきた。

学校などでヌクヌクと過ごし、多少のリスクがあるとは言えたった数日過ごしただけで働いた気になつて帰つていく連中とは違う。

まして、初日から真司のもとで失敗しながらもある程度形になつてきた少女とは違い、残り二日の段階でこつちにやつてきた少年に対しては絶対に負けるつもりはない。

「よろしくお願ひします」

そう、言つて。

差し出してきた手を睨みつけ、振り払う。

「初日に女が怖くて逃げだした腰抜けが。……精々邪魔だけはすんなよ」

真司から目の前の少年に教えることは何もない。

第一、水原からは少女に対しては気を配れと言われたが、もう一人

に対しては何も言われてはいない。どうなろうと知つたことではなかつた。

他の連中も同様で、同じく研修にやつてきた少女だけが少年に対する心配そうに話しかけるだけだつた。

「精々邪魔だけはすんなよ」

そう、言われて手を振り払われる。

(嫌われてるなー。ま、しようがないか)

彼、古門真司の言うことは最もだ。

榊奴は同じくこの店に来た園果が怖くて一度逃げた。そう、口には出さなくともみんな思つてはいるだろうし、第一それは事実だ。

しかし、これからはそうはいかない。

榊奴操という料理人を認めさせる必要がある。最低でも、この場にいても問題ない程度にはその価値を示さなくてはならない。

一通り挨拶回りが終わり、これからについてある程度検討を付けていると園果が心配そうな表情で近づいてきた。

「あ、あの。大丈夫ですか?」

「いや、あのが当然の反応だろう」

「でも、元はといえば私が譲つてもらつたから――

「はあ?」

「で、ですから。私が初日にホールに回つていればこんなことには」

「一体何を言い出すんだ、コイツは。」

譲つてもらつたのは榊奴の方だし、別にこの数日の経験が無駄だつたというわけではない。そもそも、ホールに出なければわからぬことをあつたので、こつちのほうがおおだすかりだつたのだが。

「第一、お前天然だから、そつちに回つてたら皿とか割りまくるだろ？」

「て、天然!？」

人には向き不向きがある。

何を隠そう、この料理をさせれば殆どの料理が必殺料理級のものになるトンデモ少女も厨房から一步出れば普通に天然娘だ。流石にどこかのスパイズ狂の口利教師ほどではないが、授業でコンビを組んでいるときは講師のもとに運ぶまででしょっちゅうやらかしそうになる。

「よし、この話は終わりだ。今日も一日頑張るぞ」

「ちよつと待つてください！ 私は自分が天然だつて思つたことありますせんよ！」

「そりやあ、な。天然は天然だと自覚してないから天然なのであつて、自覚しているならそれはもう末期だ。良かつたな、まだ助かるぞ」

そう言つて、いつも通りの何気ない会話を交わす。

思えばここ数日、あまりこういう会話をらしていなかつたと思いつす。そこまで思いつめていたつもりはなかつたが、どこか後ろめたい気持ちがあつたのは事実なのだろう。

「そうだ。俺、ずっとこつちには入つてなかつたからチラつと見てただけだけど。こここのシステムつて料理の旅団であつているよな？」

「ええ、正式には料理の旅団^{ブリゲード・ド・キュイジーヌ}と言つてスタッフを厨房内でのそれぞれの役職に就かせる事によつて全体を管理しやすくするやり方ですね。例えは私達のように新人が入つてくると責任者である料理長——つまりは冬美先輩が指導・教育に当たるのがこのシステムの基本ですが、スタッフそれぞれがしっかりと育つていればある程度の役職の入れ替えが可能です。そういう意味ではこの『エフ』は凄いですよね。全員が全員殆ど全部の役職を務めても問題ないくらいの練度ですから」

「そう、だな」

園果が説明してくれたとおり、この店のスタッフは一人一人の練度が恐ろしく高い。それは数日間ホールで働いていた榊奴から見ても明らかだつた。

だが、それではダメだ。

一見何も問題がないように見えるが、このままでは確実にこの店は衰退の道を辿る。

練度が高く、誰か一人が欠けても問題なく厨房を回せるということは今回のようにイレギュラー気味に新人が入ってきたとしても誰ひとり積極的に育てる必要がないということになる。何せ、新たな戦力など入れなくとも何も問題なく毎日の業務が進行するのだから。

ここは遠月学園とはい意味でも悪い意味でも全く違う。

初日にこの店に入つて最初に感じたのは不自然なまでの静寂だった。ピーク時などには確かに慌ただしさが出るが、全員が各自の持場に徹することで簡単に凌げるものであり、それをこの店のスタッフはよく理解していた。そもそも、ホールスタッフにオーダーを受けてから料理が出てくるまでの正確な時間を把握されているという時点でのそれが日常的に行われている行為だと予測するのは容易い。

今、この店で何かトラブルが起こつてもマニュアルの名のもとに迅速に対処されてしまうだろう。

さて、そのマニュアルだが、同じモノを榊奴は前に一度見たことがあつた。

「なあ、夏の合宿の最終日のイベント覚えているか？　あれ、凄かつたよな」

「ああ、遠月卒業生達全員によるフルコースですね。勿論覚えています。忘れられるわけないじゃないですか！」

そういつた園果の顔はあの時の料理を思い出したのかちよつと人には見せられないものになつていた。

以前食べた料理でこれだけのリアクションを取れるなら料理人だけではなく、審査員側の才能もあるのかも知れない。その際は下手をすると年齢制限がつくかも知れないので学園総帥や堂島先輩をそつ

と添える必要がありそうだが。

「お前、あの中にいきなり入れつて言われたらできるか？」

「む、無理ですよう！ 元々フルコースというのはそれぞれの料理の特色を踏まえた上でバランスよく組み立てるものです。それをいきなりやれと言われて出来る訳…………、あれ？」

「気が付いたみたいだな。あのフルコースを作り上げるためには参加する料理人全員が意見を交えないといけない。少なくとも、あの場で出されたものはそういう過程を経たものだつた。でも、それだとおかしいだろ？ あの人達は一人一人が一線級だ活躍する大物料理人達だ。何人かは元々付き合いがあつてそういう話し合いができる場があつたとしてもあの場の全員が一挙に集まる機会なんてそうそうないはずだ」

遠月学園の生徒はその校風から全員がライバルだと言つても過言ではなく、その中でも頂点であり明確な順位付けがなされる十傑達の仲はハツキリ言つてかなり悪い。歴代の記録を見ても遠月が誇る大型学園祭通称【月饗祭】で十傑同士が手を取り合い、共同出店をしたことなど数える程しかなく、悪い年は十傑同士の本気の潰し合いが行われた時もあるほどだ。

その殆どが元十傑である卒業生達も例外ではなく、榊奴の知る限り互いをライバル視するあまり普段は口も聞かないという人達もいる。ならば、何故そんな人達があの時だけは完璧な連携を見せたのだろうか。在校生達が目だけではなく、心やその胃袋まで奪われた最高のエンターテイメントショー。榊奴の目指す一種の境地であるそれを成し遂げたのはおそらく。

「あるんだよ、マニュアルが。それも俺達が知らない恐らく卒業生と遠月上層部だけが知ることを許された類のものがな。そして、それはこの『エフ』でも使われている」

遠月卒業生達を短時間で連携させる究極のマニュアル。

その存在に驚く園果を見ながら、榊奴は今日までの経験からその正体と倒すべき敵に辿り着きつつあつた。

「ふむ、そうりますか。では、こちらは——あ、私の勝ちですね」「だあああ!! もう一回だ! もう一回勝負しやが——つてください!!」

遠月学園に存在するとある庭園では今日も下級生達がいなくなつたことで暇を持て余した上級生二人が互いに持ち寄つたボードゲームで雌雄を競つていた。

とは言つても、直情的で思つたことはすぐに口に出してしまつタキと二十三十に罠を張つた上で大胆に進んでくるせりかでは相性が悪く、常に一方的な盤面が展開されている。

「全く、タキちゃんは諦めというものを知りませんね。とはいゝ、これでは私の連戦連勝。ここは運要素の絡んだデュエルでもしましようか。ええと、ここにあるのは【アーティファクト魔惑】と禁止制限無視なら【E M e m (マスク、ルーラー、八咫烏添え)】ですね? あ、シャイニングドローとリミットオーバーアクセルシンクロは有りでいいですよね? ではジャンケンです。これでも私、ジャンケンではみーくん以外に負けたことないんですよ?」

「なんか運要素のかけらもねえ気がするんだけど。何もさせてもらえない気がするんだけど!」

徹底的に罠に嵌められるかワンキル予感しかしない未来を予想し

ながら、それでも負けん気の強さからせつせと用意するタキ。

勝てないとわかっていても人には立ち向かわねばならない時がある。きっとそれは今なのだ。全身全霊を懸けてこのラスボスを倒すため、その命を燃やそうとしたとき。

「あ、そう言えば昨日みーくんが私のところに来ましたよ」

「つぶ！」

不意に発したせりかの一言で限界まで張っていた緊張の糸があつけなく途切れだ。

「それは深夜のことです。私がいつものように月夜を眺めながら軽いティータイムを始めようとした時、空から落ちてきた彼が一言。「君を攫いに来た」と。その姿と熱意に心を奪われた私は彼と熱い口づけを——」

「アツ、スタジエール中だつてのに何してんだ！」

「ま、冗談ですけど。軽いアドバイスをして返しましたよ？」

「ちよつと待つてくれ、それどこまでが本当にどこからが冗談なんだ？ アツが来たのは事実つてこといいのか!?」

「ふふふ、それはどうでしょう？」

表情を次々と変えるタキの様子を楽しみながら、せりかはもうひとつの爆弾を投下する。

「そろいえ、彼、『エフ』を潰すって言つていましたよ？」

「は？ はあ！ ダメだ、アツが何考えてんのかわからぬ。つて

いうか、本当に何考えてんのだあの馬鹿！」

二人の後輩達の研修先である『リストランテ・エフ』は遠月卒業生であり、タキが尊敬する数少ない一人である水原冬美が指揮する店だ。

そこを潰す。などと聞いて黙つてられる性格ではなかつた。

「今すぐ行つてあの馬鹿止めねえと！ で、すぐに冬美先輩に謝つて！」

「ダメですよ、タキちゃん。上級生である私達がスタジエールに直接手出ししては」

「で、でも！」

このまま黙つて後輩が消えるのを何もせずに見ているわけにはいかない。

あの後輩は目の前の琥珀の目をした規格外や同学年にいるあのいけ好かない料理人のクズとは違うのだ。仮にも一つの巨大な組織である『エフ』に太刀打ち出来るわけがない。

「タキちゃんは何も出来ないでみーくんが負けると思つていてるようですが、私は違うと思いますよ？ あそこには園果ちゃんもいますし」「園果？ アイツに何ができるんだよ！ 確かに料理に関しちゃ知識も技術も才能もそこそこだが、それ以外は胸にしか栄養が言つてない奴だぞ！」

「…………確かに、あの子の胸には私達にないものが詰まっています。夢とか希望とか、いいですよね。アレ。どうにかして手に入らないですかね？ 最近五つ以上年が離れているのにえりなもアリスもそちら辺の発育が目立つようになつてきて——————いえ、別にいいんですよ？ あの二人は私の大切な宝物ですから。どれだけ成長してもそれは変わりませんし。でも、この前久しぶりに見た時えりなお付の子まで明らかに私より胸が——————」

不意にタキの口にしたとあるワードにトラウマを呼び起こされたのか遠い目をしながら「タキちゃんだけは私の味方ですよね？ いつも変わらないその姿でいてください。つあ、今そういう呪いかけましたから、絶対ですよ？」等と漏らし始めたせりかに（もしかして、私をそばに置いてる乗つてそういう理由か？）とタキが真剣に悩み始めた頃。

「でもですね」と前置きしながら正気を取り戻したせりかが口を開いた。

「先日、タキちゃんに取つてきてもらつた資料に興味深いものが載つていたんですよ。ほら、ここです」

テーブルに置かれた何枚の紙。
そこには、中等部からの榊奴操という生徒が行つてきた課題の評価が記されてきた。

最大評価であるAとその下であるBが羅列するだけの記録。唯一、

その場での単独での創作料理の欄に関してのみ最低値のEと記載されている。

十傑であるタキからすれば少々物足りない感はあるが、論外であるEを除けばこんなものかと納得できる成績だ。

「これがなんですか？」

「単独での評価ではなく、ペアなどの複数での評価を見てください。どれもA評価でしょう？」特に園果ちゃんと組んだ時には恐らく実際の数値的にはそれ以上の評価が出ているはずです。全く、わかりにくいですよね。人間をAからEの五段階でしか表せないなんて」

「でも、それは出来る奴に引っ付いてただけって線はねえのか？ 実際、講師陣もそんな評価を下しているからこそ、今までアイツが表沙汰になつたことがなかつたんだろう？」

「ふふふ、そこがまたみーくんの不幸なところですね。いいですか、タキちゃん。みーくんは才能がないわけじゃありません。ただ持ち得る才能のことごとくに代償があつて、それら全てが彼の夢を邪魔するものなだけです」

「そんな——」

そんな本末転倒な、と言おうとしてこの数ヶ月一緒に過ごしてきた後輩の姿を思い出し、タキは否定ができなかつた。

あの後輩は特別普段から運が悪いというわけではないが、本人ではどうしようもないところで神様にイタズラされたとしか思えない不条理に良く合つていて、それがこの評価にも及んでいるとしたらまつたくもつて報われない。

「ま、落ち着いてくださいよ。話はこれからです。——ここにあるのは園果ちゃんや今までみーくんとコンビを組んだ事のある生徒達のデータです」

「へえ。——つて、そんなもん用意できるなら最初から私に行かせずに自分で行けばいいじゃねえか！」

「いえ、流石に個人情報の取り扱いは十傑権限を使つても簡単にいかないのでここはタキちゃんをおと——ごほん。まあ、そんなことはどうでもいいじゃないですか！」

「おい、アンタ今はつきり私を囮にしたとか言つたよな！　言つたよな!?　あの時はIV席の奴が絡んできて大変だつたんだぞ！」

タキの抗議の声は当然の事ながら受け入れられず、渋々せりかの指差す書類に目を通す。

初めの内は納得がいかない様子のタキだったが、そこは流石に十傑というべきか。一度読み出すと凄まじい集中力ですぐさまその違和感に気がついた。

「つて、コイツは——」

そこにあるのは一見普通の評価だつたが、先の後輩のモノと照らし合わせることで驚くべきことがわかつてきた。

「ええ、そうです。そういう事ですよ。全く、これに誰も気づいていないのは講師陣の見る目が無いのか、彼の擬態能力が凄まじいのか。それとも、遠月が目指す玉としての才能には相応しくないとでも思われているのか。でも、面白いと思いませんか？　あの場にはみーくんがいて、その才能を十分に発揮できる園果ちゃんがいる。果たして、あの店の者達はその事実に気付けるでしょうか？　ま、気づいたところでどうしようもありませんが。寧ろ、その事実に気づいて排除に移つた方が——」

確かに、この予想が合つているとしたらあの後輩にとつては皮肉としか言えない。天才ならぬ全くの愚才だ。

そして、それを誰もどうすることもできない。そもそもする必要がないだろう。タキがもし、あの後輩を扱う立場なら存分なく利用させてもらうだろう。だが、それと同時に人格を除けば何が何でも自分の店には置きたくない人材だ。だって、それではきっと料理がつまらなくなってしまう。

「…………ま、『エフ』はどうかしらねえけど、水原先輩があいつ程度にどうこうできるとは思えねえし、今回は様子見するか」「全く、素直じやないですなー。本当に二人が心配で今すぐにも飛び出したいくせに」

「なつ、そんなわけあるか！」

わかりやすいタキの反応に満足そうにせりかは領きながら先程ま

でと同じく持て余した暇を潰すために新たな遊びを考えようとその頭を働かせ始める。

「そう私達が気負うことはないですよ。みーくんも園果ちゃんもタキちゃんと同じく私が見込んだんですから。きっと無事にこの学園に帰ってきますよ」

そして、最後に。

「それに、成功すれば一つの店が潰れ、失敗しても若者が二人切り捨てられるだけじゃないですか」

そう、冗談に思えない事を笑顔で漏らしたのだつた。

『F』の悲劇 強敵

ここはエフの厨房。

一度は逃げだした戦場。その中心で俺は覚悟を決めて敵に立ち向かおうとしていた。

但し、今回は一人じゃない。

『卒業生支援制度?』

『そうだ。おかしいとは思わないか? 遠月学園は在籍したという事実だけで料理人としての箔が付き、限りなく狭い道を潜り抜けて卒業にまで漕ぎ着けた者は必ず大成する。でも、卒業生の殆どが一年足らずで自分の城を持てるってのは流石に変だろ? 過去のデータを調べてみると卒業生の約八割は遠月から巣立つて三年以内に何らかの結果を残している。それは遠月の過酷さとその地獄を突破した彼らの規格外さからくるものかもしれない。でも、もしそれ以外の要因があるとしたら…………?』

『過去のデータって……。全く、毎回どこからそう言うの調べてくるんですか。…………ま、いいですよ。私は何をすればいいですか?』

『いいのか? もしかしたら、今回の敵は――』

『どうせ、いつものように私に拒否権は無いんですよね? 楯奴くんの無茶苦茶には慣れましたよ私も!』

『いや、今回は流石に危なそうだから木久地には出来るだけ関わらないようにしてもらいたいんだけど』

『そういうのは先に行つてください。いいですよ、もうその気になつちやいましたから。…………それに、今の私達はパートナーですから』

パートナー。

園果にそう言われた瞬間何か憑き物が落ちた気がした。

今までの学園生活、間接的に競い合う事があつてもこいつとはいつも協力して乗り越えてきた。と言つても、過酷な遠月の課題の中で俺に出来るのはサポートくらいで殆ど園果の才能と実力により生き

残っていたようなものだ。

そして今回、この『エフ』という闘技場に閉じ込められたときその協力関係は意味のなさないものになつたと思った。一定の基準を満たせばいい今までの課題と違つて、今回はどうやっても比較される。『エフ』の従業員に、この店を訪れた客達に、そして園果自身に。そうなれば勝ち目はないと思つたからこそ俺は逃げだした。生き残るために料理から逃げ出して、他の自分の得意分野で結果を出そうとした。

それなのに、恐らくこいつは最初からそんなこと考えていなかつた。

俺が散々悩み抜いて後悔した選択はこの女には通用しなかつた。だつて、だつてこいつは最初から。

『パートナー、か。そうか。そうだよな』

『ど、どうしたんですか!? いきなり笑い始めて——ハツ、まさかまたとんでもない事をやろうとして！ だ、ダメですからね！ 今の私達は『エフ』に出向している状態なんですからあんまり酷い事は！』『悪い、多分無理だぜ今回は。でも、パートナーなんだからついて来てくれるよな、園果？』

『え？ 今なんて言つたんですか？』

『なんだよ、聞き返しても変わらないぞ？ パートナーなんだから』

『い、いえ、そうじゃなく今私の事名前で——』

なんだそんな事が。

『気持ちの変化だよ。前にタキ先輩の事苗字じやなく名前で呼び始めた時微妙な顔してただろ？ ま、あの人も音弧さんに反抗して名前で呼べって言つてきたわけだけど』

『そういう事ですか……』

なんか目に見えて落胆している。今の発言はまずかつただろうか。でも、本当はパートナーとして距離を詰めてみようとした結果なんてのは言いづらいしな。

『わ、悪い。戻した方がいいか？』

『別に。いいですよ、そつちの方が呼びやすいでしょうし。それに、今

はこつちの方が重要ですよ。…………操くん?』

操くん?』

「そりがなれこの三元詔せてもレシがれな」

もう開店か。さあ、いくぜ？ 何せ今回の敵は、遠月だ』

でも、俺言つたよな。今回はヤバそうだつて。

新入り、下準備は!?

出来ています。次のオーダーに取り掛かります」

…………はええじやねえか。よし、問題ない。次だ！」

「ありがとうございます！」

合格のサインをもらい僅かな時間安堵する。されば、これは本当にほんの一瞬。今、寝る。

正直言つてない。

今日任されたのはこの店の調理体系となつている料理の旅団の中でも新入りが最初に担当する場所であり、同時に最も過酷と呼ばれる研修生^{アブランティ}と呼ばれる役職だ。その名の通り見習いとして掃除や料理の下準備を行い、その合間に先輩料理人の動きを学ぶ事を求められる。本当によくできたシステムだと思う。各人員に決まつた役職を振り分け、仕事を限定しそれに集中させることで厨房を一つの生き物として動かす。それがフランス料理界で料理の旅団と呼ばれる所以。各人が己の役職を完ぺきにこなせば一人一人が掛け持ちで複数の作業を行うことの多い日本料理界と違い、限りなくミスを無くしつつ最高のサービスを届ける事が出来る。

だが、そのシステムは形式を重視し決まつたルールの中で食事をとする事を美德として受け入れられるフランス料理に特化したものだ。

リア料理と何より木久地園果という料理人には相性が悪い。「こつちの作業は完了！ 次、行きます！ 待たせたな！」

「こつちはいつでも準備は出来ています。待つていましたよ？」

「言つてくれるな。それじゃ、俺の集めてきた情報に腰を抜かすなよ？」

？」

俺は自分の作業と同時進行で園果のサポートを行う。

今回の目的は第一条件として他の従業員に自分達と同格だと認めされること。その為には自分の仕事を完ぺきにこなしつつ研修生以外の職務も行わないといけない。一人で行おうとすれば決まつた方以外の行動を嫌う料理^{ブリガード・ド・キュイジーヌ}の旅団から最悪弾き出される可能性があるが、今はコイツが居る。

天才料理人木久地園果の実力。

その大部分は彼女のん柄が関係していく。

いつもほんわかとしていて、弄られやすい。それでいて、他人の事を自分の事のように心配できる。そんな彼女だからこそ、その皿には強い想いが宿る。

そう、木久地園果は自らの皿に気持ちを載せる事が出来る。他人に対する想いやり。全てを包み込むような圧倒的な包容力。

仮に、作った人間の顔が見えると言う事を必殺料理^{スペシャルティ}の定義とするのなら、木久地園果の料理は全てが必殺料理へとなり得る！

「次の卓。先月子供が生まれたらしい。男の子だそうだ。奥さんも来ているから、出来るだけ体力の付くものがいい」

「わかりました！」

収集した客の情報を伝える。出来るだけ丁寧に、相手が想像しやすいよう一見料理と関係の無いものまで細かく。

別にそれで出されたオーダーと変えると言う事はしない。ただ、この情報は木久地園果という料理人にとって何物にも代えがたい力となる。

今まで遠月の授業では作るべき客が目の前にいた。

日々の授業、夏の研修、秋の選抜、食戟だつてそうだ。いつだつて思いを届けるべき相手はそこにいて、真っ直ぐに思えば思うほど皿は輝く事が出来た。

そして、今回。

遠月の試験としては殆ど初めてとなる。直接客の顔の見えない厨房。きっと力を出し切れてなかつただろう。慣れない場所で今までと違う条件で働くというのは本人の想像以上にストレスを伴う。

きっとコイツはコイツなりに俺とは別方面で悩み、傷ついていたのだろう。

料理の旅団
ブリゲード・ド・キュイジーヌ

一度就いた役職から移動するのに決して少な
くない時間要する。恐らく通常の方法では一週間限定の部外者で
ある俺達は最初に就いた役職から移動する事は出来ないだろう。実
力も定かでない相手に重要な部分を任せる事は普通しないし、安定を
求めるなら作業に手慣れてきたとしてもそのまま同じ場所をやらせ
るはずだ。今の俺達は遠月からのゲストではなくあくまで従業員。
どう扱うかはその店が決める。

その結果、園果は本来の実力を発揮できない役職に押し込められ
た。その性格では意見を言う事も出来なかつたのだろう。ただ眞面
目に自分に与えられた仕事を一生懸命にこなそうとして何度も失敗
した。

だが、今日は違う。

「安心しろ。お前の知りたい情報。客の好み、人柄、どうしてこの店に
来たのか。俺が知っている情報でお前を全力でサポートする！ だから、
お前はお前の料理を作れ！」

俺が今日この日まで厨房では無く、直接客と触れ合うホールで働い
ていたのは決して無駄な事では無い。

客達の言葉やスタッフとの情報交換、噂話まで全てはこの時の為に
集めてきた情報だ。

そして、園果もまた今日までしてきた事を、自分が何度もした失敗
という経験を無かつたことに対するような人間じや無い。

普段はおつとりしているが、料理人としてはそんなに甘くない。
今までそれがコンプレックスになっていた。

合宿でも、秋の選抜でも、そして今回も、勝てない事が当たり前だ
と思っていた。後ろに付いていくことが精一杯で追い抜く事さえ考
えていなかつた。

でも、違ったんだ。

追い抜く事は出来なくても隣に並び立つ事は出来る。少なくとも
こいつはずつとそう思つていてくれた！

「確かに、俺じやお前には勝てないかもしない。でも、それで協力で
きないと言う事は無い。俺達でやるぞ。この『エフ』に、遠月の学生
としての実力を認めさせるんだ！ その為に、俺はお前の隣に立つ
！」

「操くん…………。やりましょう、私達一人で！」

どれだけ臆病者と呼ばれても構わない。

それで最後に勝てるなら、それで誰かを笑顔にできるなら喜んで臆
病者になろう。一番やつちやいけないのは躊躇して何も出来ずにい
る事だ。

だつてそれが、ライバルの役割だ。

主人公に慣れなくとも、ライバルになる事は出来る。木久地園果と
いう主人公の隣に立ち、互いに意識し合い高みに上り合う関係。それ
くらいは俺にも出来るはずだ。

そして、それこそが今の『エフ』に、水原冬実という料理人に足り
ないもの。

（いい加減気付いているんでしょう？ あの人の幻影を追いかけても
ダメなんですよ、水原さん！）

宿泊研修 後編

夢の続きへ

——夢を見ていた。

あれはそう。高校一年の時にやつたスタジエールの光景だつた。我ながら馬鹿な事をしたものだ。その後俺は無謀にも水原さんに食戦を挑み、見事なまでに完敗した。

今も治らぬ悪い癖だ。

他の事だとそうでないのに料理の事になるとついつい引き際を見失う。

あの時もあの時も、そして今もそうだ。

「…………て、寒っ!？」

現在の室温マイナス六十℃。食べ物の新鮮さを保つのに最も適しているといわれる温度だ。この超低温下ではタンパク質の酵素分解も脂肪の酸化もほぼ停止する。勿論、厄介な微生物の繁殖もだ。

流石は天下の遠月リゾートが誇る超巨大冷凍室。徹底した温度管理が施されている。息が凍るとかそんな次元では無い。あまりの寒さに一瞬気を失つてしまつていたらしい。慌てて体内の気の流れを調整し、周囲の食材に影響を与えないよう最大限気を配りながら暖を取る。

「それにしても、まさかこんな所に調理セット一式があるとはな。流石は遠月。まんまと罠に引つ掛かつてしまつたよ」

次の課題で使う食材を取りに来たはいいが、何故かその場に用意されていた食材と調理器具達に導かれるままに料理人の本能に従つて手持ちのレシピを使つた低気温下での調理実験を始めてしまつたのが全ての始まりだ。そのままついつい熱中してしまい、生命活動に最低限必要な体温を手放してしまつたのが運の付き。どうやらそのまま寝てしまつたらしい。この合宿中、色々忙しくて寝ていなかつたのも要因の一つだろう。

「幸い、次の課題までにはまだ時間がある。急げば間に合うか。……

俺の時計が壊れて無ければだけど

因みにここでいう課題とは俺のではなく、他の先輩達によるものだ。

先日の一件とタキ先輩達後続組の到着により元々臨時の講師という立場だった俺は完全に裏方に回ることになった。うん、いつもとかわらない。やつぱり裏方は落ち着くなあ。あはは、やつぱり遅れたら殺されるんだろうなあ。

その手に獲物を持ち、眼から怪しい光を放つ『レギュムの魔術師』以下数名の姿が頭に浮かぶ。

何か扉に鍵が掛かっているようだが、この際しようがない。あの天下の大泥棒と呼ばれた大怪盗直伝の鍵開け技術を披露する事にしよう！

「遅れてすみませんでした！」

開口一番、全力で土下座をする。

本日の講師はあの四宮シェフ。そう、つい先日盛大な啖呵を切つておいて食戟の結果を有耶無耶にしたあの『レギュムの魔術師^{四宮}』だ。ぶつちやけ超怖い。

「おい、俺は昼過ぎまでに食材を取つて来いつて言つたよな」「はい……」

「今、何時だ？」

「じゅ、十一時半です」

「じゃあ、なんで謝つてんだ？」

「いやあ、それはそのー」

「言えない。

「貴方に怒られるのが怖くて昨日の食戟が終わってからずっと冷凍

室でスタンバつてました』なんて言える訳が無い。しかも、他の事に気を取られてそのまま寝落ちしたなんて死んでも言えない。例え時間には間に合つても社会人として、料理人として上司の欲しい時に必要なものを用意できないようではまだまだなのだ。

「つち、まあいい。解凍は出来ているようだな」

「ええ、言われた通り食材の質を落とさないよう最大限注意を払いました！」

「当然だ。確か、「客に対しどんな状況でも最高の料理を出すのは『最低条件』だ！」だっけか？この俺に偉そうにそんな当たり前の事を説教した奴がまさかこの程度の事でミスをする訳がねえよなア？」

「ソ、ソウデスネ」

やばい、この人超根に持つてる！？

水原さん達から聞いてはいたけど、想像以上にめんどくさい人のかも知れない。

「おい、今なんか失礼なこと思つたろ？」

「ソ、ソンナ、メッソウモナイ！」

そして、トンでも無く勘がいい。これは予想通りだけどまあ、その、物凄くやりにくいです。はい。

罰ゲームだ。

「おはよう。79期卒業生の四宮だ。この課題では俺が指定する料理を作つてもらう。ムツシユ榊奴、ルセット（レシピ）は行き渡つたか？」

？

「はい、俺が全員手渡しで行き渡らせました！」

「よろしい」

有耶無耶になつたとはい、実力的には俺の完敗だ。それはあの場

にいる誰もが理解している事だろう。結果的にはそれで創真くんと恵さんの退学が無かつたことになつたので万々歳だが、それはそれ、これはこれ。食戦に負けた者は相手の要求に従わなければならぬ。

今回の場合辛うじて負けてはいない上に非公式と言う事で中立的立場である審査員も含めた面々でちよつとした罰ゲームが考えられた。

それが今日一日四宮さんの元で雑用係をやる（記念写真付き）事だつた。最後のカツコの中の内容を考えたのは勿論日向子さんである。微妙に四宮さんに対する罰ゲームにもなつているような気がするが、勝負の内容を踏まえた上で公平な判断らしい。そう、椅子に縛られたまま自前のデジカメを渡してきた本人が言つていたのだから間違いない。

（それについて……）

お題は昨日と同じ9種の野菜を使つたテリーヌだ。この合宿では課題の内容は講師に一任される為、その内容は千差万別だが、こうして同じ内容の課題を組が違うとはいえ連続して出すのは珍しい。日向子さんや俺の様になんでもいいから好きなもの作つていといいうのなら別だけど、食材とレシピが用意してあつてそれを作れという内容の課題は事前に他の組から聞いていれば対応できてしまうからだ。いくら回り全員がライバルな状況とは言え、今回に限れば生き残る事が最優先。その為の情報収集は例え蹴落とす相手同士であろうと必要だ。

（ま、卒業生はそれを知つてゐるから敢えてフェアになる様に微妙に内容を変えるんだけどね）

因みにこれもある意味伝統と言えるもので、去年この合宿に参加した上級生などに聞けばわかる事だ。勝負は合宿が始まる前から始まっている。この合宿を生き残れるのはそんな風に始まる前から入念な準備をしてきた者とそんな事をしなくとも持ち前の知識と経験と対応力で課題を自力で突破してしまう天才達だけだ。因みに俺は前者、四宮さんを含めた卒業生の大半は恐らく後者だ。現実という者は厳しい。

（あれ、じゃあ、毎回課題の内容を変えるのは天然？　まさか、ただの

嫌がらせじやあ……)

情報収集をしなかつた天才組が講師達が毎回課題を変えるなんて知つてゐるはずがない。そりやあ、何年も連續で参加した人なんかは知つていて当たり前だけど四宮さんは俺と同じで今回が初めての筈だ。それに確か聞いた話じや、一日目と二日目の課題の内容は全く別物だつたらしい。ところが今回は昨日と同じ課題。まさか改心したのか？

生徒達はよほど今回の課題を恐れていたのか多くの者が情報収集をしていたらしく昨日の課題と同じ内容のレシピを見て胸を撫で下ろしていた。そりやあそうだ。いくら厳しいとは言え、作るべきものは決まつていてその為のレシピもある。そして、ここにいるのは入学しただけで天才と言われる遠月学園の生徒達だ。それだけの条件がそろつていればいくら厳しいとは言え、決して攻略できないものでは無い。

心なしか四宮さんの顔もどこか穏やかで昨日までと違い、あの張り詰めたような空気は感じられない。

昨日の食戦の後、堂島さん達が失つていた者を取り戻した敵な事を話していたが、もしかしてこの事だつたのか。どうやら、四宮さんはずっと失つていた人としての優しさを取り戻したらしい。

「四宮さん！」

「——フ、俺も丸くなつたもんだな。後輩達の事を考えるようになるとは。さあ、制限時間は三時間。あまり時間は無いぞ、さつさと始める」

「はい！」

見た事も無いような優しい顔で開始の合図をする四宮さん。

生徒達の表情もどこか明るい。

この調子なら、今日の脱落者は少ないだろう。もしかしたら初の全員合格もありえるかも知れない。

俺も死ぬ思いをして半日近くマイナス六十℃の室温に耐えた甲斐が——。

(ん？ 確かあの食材つて——)

「ああ、ひとつ言い忘れてた」

とある恐ろしい事実に気付く。

確かに現代の冷凍技術は凄まじい。昔なら日持ちしなかつた食材も数か月単位で保存がきくようになり、季節を選ぶ事無く料理を提供する事が出来るようになつた。しかし、それでも完全に取れたてそのままという訳にはいかない。特に食材の味や見た目をそのまま引き出す今回のルセツトのような料理では――。

「その食材はたつた今解凍し終わつたばかりのものだ。ここまで残つた才能ある諸君ならこの意味が解るとは思うが、残念ながらこちらの不手際でそのルセツトには対処法が載つていない。本当は昨日の夜の内に追加しようと思つていたんだが、色々あつてな。だが、まあそれはこつちのミスだ。当然君達に落ち度はない。だから今回は特別だ。昨日までなら俺のルセツトに手を加えるなど許さなかつたが、こちらに不備があるならしようがない」

何かとてつもなく嫌な予感がしながら四宮の方を見てみるとそれはもう邪悪な笑みを浮かべてあちらもこつちを見つめ返してきた。

「し、四宮さん？」

「――フ、俺も丸くなつたもんだな。いやあ、ほんと丸くなつたわ。ついこの前も後輩に大事な事を教えられてな。そいつ曰く、客に対しどんな状況でも最高の料理を出すのは『最低条件』だ。でも、それは料理人にとっていつまでも考え続けなければならない『最大案件』らしい。誇りある遠月学園の生徒達ならこの意味が分かるな？　いやあ、どこの誰かは言わねえけど、本当にいいこと教えてもらつたわ。オレも当たり前すぎて忘れていたぐらいだしなア」

思いつきり四宮さんがこつちを向いているため、それに誘導される様に生徒達の冷たい視線が何故か俺に刺さる。

「あ、あの四宮さん？　それ生徒達に言つてるんですね？　俺に言つてるわけじゃないですよね？　み、皆ア、騙されるな！　悪いのは俺じゃない！　性格が悪いのはあの人だ！　ちょ、見んな！　こつちを見るんじゃない!?」

違うんだ。この試験を考えたのは俺じゃないんだ。そこの鬼畜メガネなんだ！みんな騙されてはいけない！

「それでは諸君、今まで培つてきた知識と技術をこの勉強不足な先輩に見せてくれ。どうした？もう課題は始まっているぞ？」

「や、やっぱりこの人最悪だ！天然とかじやない、素で性格が悪いだけだったよ！」

その後、サポートに回っていた俺はどうにかして四宮さんの気を逸らす事に尽力しながら最低限公平になる様に必死に生徒達にヒントをあげながら地獄のような三時間過ごすのだった。

魔女の傷跡、女神の微笑み

合宿三日目。

生徒達の大半にこれまでの疲れが見られるこの日の夜。俺達講師陣は一部屋に集められていた。

「遠月卒業生の諸君は当然知っているとは思うが明日の最終課題では彼らにこの遠月リゾートの新メニューを考えてもらう。今回のテーマは『卵を使った朝食』だ」

「卵？」

「それって——」

堂島さんの言葉に数人が驚いたように声をあげる。何を隠そう俺もその一人だ。

「堂島さん、それって確か」

「ああ、榊奴は知っていたか。そうだ、このテーマは今から数年前、丁度角崎達の前の世代が経験したものだ」

その言葉にまた何人かがどよめく。この最終日の課題はここまで生き残った生徒達の将来性を見極めるためのモノもある。遠月学園の求める玉とは荒れ果てた荒野を切り開いて進むもの。つまりは常に新しい道を切り開いていく革新者であり、この遠月リゾートのメニューの中では実際にその当時の学生達が作ったモノが使われたりする。だが、それ故にこれまでの課題と同じように公平さを保つために毎年そのテーマを変えていく。少なくともここ数年で使われた課題がもう一度、という前例はない。確かに朝食という限られた条件において卵料理の占める割合は多いが、ネタ切れになつて再利用されるには早すぎる。だつてあれは——いやまでよ。

「そうか、極の世代」

思わずつぶやいたその一言は思いのほか室内に響いたらしい。何人かの講師がびくりと肩を震わせる。逆に動じないのは俺の隣にいる四宮さんやなんだかんだ言つて大物な日向子さんといった面々のみ。年が若く、その世代に近い者達ほど動搖は大きい。中にはその單語を聞いただけで強い拒絶反応を起こすみたいで吐き気を催して

蹲つてしまふ者もいた。

これはもしかして、やつてしまつたかも知れない。

「おい、なんだよその極の世代つて？」

そんな中、つい先日まで日本を離れていて昨今の遠月情勢に詳しくない人が発言者である俺を問い合わせる様に問い合わせてきた。心なし顔が近い気がする。

「ああ、四宮先輩は暫く日本を離れていたから知らないんですね。極の世代つていうのは丁度俺の2世代前、第87期生が中心となつていたころの遠月のメンバーの事です。その世代、特に十傑の面々は一人一人が時代が時代なら一席になれただろうと言われるほどの怪物揃いだつたことで有名です」

「あア？ そんなの別に珍しくねえだろ。俺の時だつて水原やヒナコ辺りがそう言われていたぜ。まあ、俺が居る限りそんなことは有り得ねえって言つてやつたけどな」

「そ、そうですか」

そう、自信満々に言う四宮さんだが、そういうのは他に人のいないところとして欲しい。現に水原さんのいるあたりから尋常ならざる殺氣が放たれていて、蹲つている人とは別の要因で俺のトラウマも発動しそうになる。

取り敢えずここは話を続ける振りをして話題を少し逸らそう。幸い、今話題に上がっている人達に関しては話の種が切れる事など早々無い。

「でも、彼らがそういうふうに言われているのには他にも理由があるんですよ。一部では遠月の理念の到達点と言われるほど彼らは凄まじかつたんです」

「遠月の理念？ それって確か——」

『この学園に通う生徒の99%は1%の玉を磨くための捨て石である』。

毎年、年度初めの始業式にて学園総帥直々に放たれるその言葉を比喩や冗談でもなく本当にやつてのけてしまつた世代があつた。

その年に高等部へと上がつた新入生は約2000人。例年の2倍

近くの豊作だつた。決して数が多いだけではなく、一人一人の実力も例年並みかそれ以上だつたという。しかし、最終的に生き残りこの学年を卒業したのはたつた5名。1%以下の割合である。そして何より恐ろしいのが、二年生に進級する頃には2000人いたはずの生徒がわずか30人ほどにまで振るい落とされていた事である。3年時に至つては10名に満たない事もあり、心無い者達の間では出来損ないだと數だけを集め過ぎた失敗世代だと呼ばれてしまう事もある。だが、それはあくまで事実を知らずに結果だけを見た時に言える感想だ。実際はそんな生易しいものでは無い。

それをこの課題を通して一番痛感しているのは当時からこの遠月リゾートに勤めていた堂島さんだろう。

「知つているものかと思うが今の遠月リゾートの朝食メニューの大半はその時作られたものだ。特に、卵料理に関してはたつた一つを除き、一人の料理人によつて考えられたレシピをそのまま使用している！」

「はあっ!?

今度は四宮さんが驚く番だつた。

当然ながら、この地獄の宿泊研修の最終日で生徒達によつて作られるメニューが実際に遠月リゾートで使われる例はまれである。あくまでこの試験は彼らの現在の実力と将来性を見る為。限られた時間で新たなものを創造するという事は当然並大抵の事じやない。仮に出来上がつたモノでも後から改めて考えれば他の案が浮かんだり改良点が山ほど出てくるのが普通だ。それが高等部に上がつてまだ数か月の新米たちのモノだとすればその時点でそのまま商品として出す事が出来るものは皆無。だからこそ、この最終課題で作られたメニューがここで使われる場合はその当時のものでは無く、後から鍛錬を重ねて成長を遂げた玉達が若き日の自分の恥ずかしい出来のメニューが未だにここに保管されていることを恐れて完成しに来たものが殆どだ。

だからこそ、今堂島さんの口から発せられた言葉が異様な程の意味を持つ。

「おいおい、堂島さん。冗談はよしてくれよ。天下の遠月リゾートのメニューがまだ高校一年のガキだつた奴に染められてるつてのか？」

大体、課題で提出する料理は一人一品の筈だ。まさかその生徒は一人で何十品も出したつてのか？」

「その通りだ」

「……冗談じゃないよな？」

「ああ、冗談ではない。その生徒はたつた一人で俺達が驚くような料理を数十品作り出した。本来はライバルであり共に競い合うべき強敵である同じ遠月の生徒を使つてな」

ライバルを利用する。この遠月ではよく行われる事だ。どんなことをしてでも上に上がる。まるで天から降ってきた蜘蛛の糸に縋りつくように誰もが同じことをする。その方法は千差万別。

だが、つい先日それを可能にする方法を俺はこの目で見ていた。同じく、四宮さんもその方法に思い当たつたようだ。限られた時間でも整えられた舞台とある程度の実力を持つ料理人が居れば多くの料理をその場に生み出す事が出来る。

「まさか！」

「そうだ。お前が今回の課題でやつた事と同じさ、四宮。彼女はたった一晩で用意したレシピを他の生徒にばら撒き、ひとつ残らず再現させることでこの遠月リゾートのメニューを塗り替えたんだよ」

再び室内にどよめきが広がる。

今度は年配の面々ですら緊張した様子で、世代の近い面々は当時の様子を知っていたのか僅かに顔が青ざめているものすらいる。それだけ異常な事なのだ。多くの料理人が集まり、日々改良を加えていくこの激戦区でたつた一つの才がこうも際立つて頭角を現すのは。

「は、馬鹿げてる。そいつもそうだが、周囲もどうかしてるぜ。自分の進退が掛かっている状況でよりもよつて一番重要なレシピを他人任せにするなんてありえねえ」

「ああ、そうだ。普通はありえないさ。だが、四宮。もし、一年のその時点で他者とどうしようもないほど才能の差がある怪物が居た場合はどうだ。最終課題は各会場で同時に行われる。実際に審査員とし

て招かれた客を目の前で奪い合うのだ。その際、他とどう考えても飛びぬけている皿があれば客はどうするとと思う？」

「そんなのは簡単だ。食の世界は弱肉強食。そんな事は学生でも俺達プロでも関係ない。一度戦場に立つたなら他を蹴落としてでも生き残る。もし、仮にそんな奴が居ても奪い返せばいい。第一、その時のテーマは朝食だろ？　そこまでの量は無い筈だ一人一人じや特に影響、は——」

そう、たつた一人がすば抜けていてもあの課題に関してはそこまで影響はない。四宮さんの言う通り一度奪われても再び客を取り返してしまえばいい。でも、その年だけは違った。

「際立つた才能。それを持つものが複数人いた。少なくとも10ある席の過半数が埋まる程度にはな。そして彼らは今お前が言ったように自分の力で客を奪い返すだけの力があつた」

そんな人間が同じ学年に複数いたらどう思うだろう。毎年、この学園を卒業するのは殆どが十傑のいずれかの席についていた者だ。一部例外が存在するが、その例外に自分が成れる保証はどこにもない。そして、運が悪い事にその年の生徒は例年よりも多かつた。最大10個の席をここにいる全員と先を進む上級生や後から迫りくる下級生達と奪い合う壮絶な闘争。落とせるライバルは早いうちに落としておきたい。出来ればそれは自分よりも前を行くものであると尚良い。そんな考えが数日の地獄ともいえる合宿の中で芽生えるのはごくごく当たり前の事だ。

「そんな中、その際立つた才能に一瞬だけでも並ぶ方法があると言われたら四宮、お前は本当に断る事が出来るのか？」

「……。そいつの名前は？」

「そう、俺は知っている。

あの人にはこういう事がとても得意だったのだ。

一際輝く才能を持つ生徒が数人。その存在を前にして多くの生徒が行き詰まり、冷静さを欠いていく。そんな中、一部では有名なものどちらかと言えば自分達と同じ側の料理人としてハンデを抱えている少女が協力を持ちかけてきたら……。『レシピは思いついたのだ

けど、自分では作る事が出来ない』、と助けを求める様に縋ってきたら。彼らは一体何と答えるだろう。

仮にそれが、牙を隠した仮初めの姿だったとして。

仮にそれが、一人では無く深夜遅くまで厨房に残っていたその他大勢に掛けられた言葉だつたとして。

仮にそれが、自分の仮説レシピを証明するためのデータ集めの実験だつたとして。

藁にも縋る気持ちで蜘蛛の糸を登つていた彼らにその甘い誘惑を振り切るだけの勇気はあつただろうか。少なくとも昔の俺には無かつたものだ。

気づけば誰よりも先に俺はその人物の名前を口に出していた。

「難切せりか。その後に魔女と呼ばれる事になる俺の師匠だつた人です」

恐らく無意識だつたのだろう。ここ最近彼女を思い出す事が多かつたから。

その夜、3日目の課題を終え既に満身創痍と言つた様子の生徒達が大宴会場に集められた。

みんな色んな意味で寝不足で初日の元気はどこへやら皆疲れ果てたようにふらふらと幽霊の様に彷徨つたり、椅子や地べたに座り込んだりとこれから事を考えると少々心配になるような状況だ。

そんな中、こちらをどうだと言わんばかりに見つめてくる創真くん

と目が合う。本当にいい眼だ。これから的事を思うと思わず目を逸らしたくなる。

そして、逸らした先にはえりなちゃん。こつちは何やら怒っている様子。もしかしたら昨日の食戟の事がばれたのかかもしれない。一応彼女は現十傑。つまりはいつでも俺をクビに出来る立場と言う訳だ。眼を合わせたら全てを自白したような気分になつてしまふのでここもスルー。

そして、三番目に目が合つたのは何やら高校生離れした肉体の厳ついドレッドヘアーの少年だった。何やらこつちをじつくりと観察するような気持ち悪いもとい意味深な視線を向けてくる彼は俺と目が合つたことを確認するとニッコリと笑顔で会釈した。思ったより礼儀正しいのかも知れない。まあ、仮に俺でも壇上に並ぶ卒業生の先輩と目が合つたらできるだけ大事にならないように愛想笑いで頭を下げるけど……。

こうなるとやはり癒しが欲しい年頃だ。創真くんの横で震える恵さんもとい田所さんを見つけ、同じく彼女を見つめてうつとりしていだ日向子さんと互いにガツツポーズをする。あ、四宮さんに睨まれた。

『よし、集まつたようだな。全員ステージに注目してくれ』

マイク越しの堂島さんの声はよくとおる。

どうやら俺の視線旅行の間に残っていた生徒が全員集まつたようである。その数は意外な事に初日からあまり減っていない。全員が疲れ切つていてるので、脱落者は殆どでなかつたようだ。

『明日の課題内容は……この遠月リゾートのお客様に提供するのにふさわしい「朝食の新メニューづくり」だ!』

毎年この課題はお題である各食事時間帯の八時間前に告げられる。今回は朝食なのでまだ常識的な時間だが、昼食の場合は問答無用で深夜に叩き起こされる事になる。それに比べれば大分マシだろう。アレは本当に辛かつた。俺は碌に寝てなかつた分時間の感覚がズれていて余計に辛かつた。

それに、この課題は当然その時出された食事の時間帯に有つたもの

を求められる。例えは今回の朝食で言えばやはりホテルの顔と言うべきものである為、宿泊客の一日の始まりを演出すると共にそのテーブルを晴れやかに彩るような『新鮮な驚き』のある逸品を提案しなければならない。

そう、大切なのは鮮度だ。そして、この課題の主役は、

『「卵」！ それが今回君達がメインとして使う食材だ。和洋といったジャンルは問わないが、ビュッフェ形式での提供を基本とする。審査開始は明日の午前6時、その時刻に試食できるように準備してくれ』ようやく堂島さんの説明が終わろうとしている。時機に生徒達も動き出す事だろう。

ここからが俺の仕事だ。なにせ朝食は鮮度が命。そのメインとなる食材が卵ともなれば自ずと調達方法は限られている。彼らは理由も無いが講師陣はみんな知っている。この課題のノルマが一体何食なのかを。そして、前日までと同じようにそれぞれの講師が別々の課題の為に用意した食材と違い、ここまで生き残った全生徒が同じテーマで一斉に調理を開始するのだ。それも朝まで何度も試行錯誤を繰り返して……。

伝える事は伝えたと、生徒達の悲鳴を背にして悠々と歩いてくる男堂島銀に対し俺は思い切つてこの課題を初めて聞いた時から思つていた疑問をぶつける事にした。

「あの、この課題つて本来どれくらいの生徒が受ける予定だつたんでしょうつけ？」

「例年で言えばここで全体の約三割が脱落しているからな。今年もあちらはそのつもりで準備していると聞く」

この課題。

実は遠月リゾートだけの力で行えるものでは無い。この広大な敷地を誇るリゾート地を支える心強い協力者たちのお陰で成り立っている。彼らはこのリゾートと持ちつもたれずの関係を築いており、彼らの協力無くしてこのリゾートはやつていけないとまで言われている。要するにお得意様だ。彼らの機嫌を決して損ねてはならない事はこの世界を生き抜くうえで最初に教わるほど大切且つ重要事項だ。

その上で質問。

この合宿を開始する前、生徒達は950人ほどいました。そして、合宿三日目を終えた現在、予想では三割程度が脱落している筈でした。

「えーと、今どれくらい残っているんでしたっけ？」

「そうだな、現時点で902人と言つたところか」

「明日の課題のノルマは？」

「1人当たり200食だ」

もう一度言う。

卵とは新鮮さが命だ。特に、この遠月リゾートでは一流の食材を厳選しているため朝食を作る際はその日の朝に取れた卵以外は使用しない。そして、料理人が無駄な調理を嫌うのと同じように生産者側もその日に取れた卵以外使われないと知つていて無駄な量を出荷する事は無い。

「なあ、操。確かにお前、アタシの課題の時、本当は落とすはずだつた奴を無理して合格にしたよな？」

「奇遇だな、角崎。俺も本当は退学させるはずだつた生徒を食戦まで起こして助けようとした馬鹿を知つてるぜ」

どうしてだろう。

先輩達の視線が突き刺さる。俺は別に悪い事なんてしていないはずだ。仮に目の前に道が閉ざされそうな生徒が居たとして、それがまだ成長過程でありそのまま進めば大きく花開くかもしないと思つたなら先輩として後輩に手を差し伸べるのが普通の筈だ。そう、俺は間違つたことはしていない。

それに、チャンスを与えたというなら俺以外にもいたはずだ。

「日向子さん！」

「……」

物凄い勢いで視線を逸らされた。

さつきまでガツツポーズを交わし合つていた筈なのにおかしいな。

「関守さん、ドナートさん！」

「いや、俺達は普通に合格条件に満たない者は落としてたぞ？」

「ハハハ、ハハハ」

何を言つて いるんだとい う視線と乾いた笑みが帰つてくる。

こ、こいつらまさか俺一人に押し付ける気か!? 田所さんを助ける

時は審査以外の面で明らかに肩入れしてたのに!

最後の希望を込めてこの場で最も尊敬する先輩に泣きつく勢いで
縋りつく。

「大丈夫」

天使いや、女神はここにいた。

そこにはこの世の慈愛の全てをかき集めたかのように普段からは
考えられないほほ笑みを浮かべた水原冬実が立っていた。

「み、水原さん……！」

やはり持つべきものは女神のような先輩だ。
確かに実働部隊は実質俺一人だとは思うが、人は美しい女神の為な
ら身を焦がして働く事が出来る。

「水原さん！ 一緒に頑張りま——」

「大丈夫、試験開始まであと七時間。それまでに集めればいいから」

女神はそう微笑むと欠伸を一つ。

そのまま既に先に行つてしまつた悪魔達の後を追うように冷房の
利いた談話室のほうへゆっくりと歩いていくのだつた。

足りない卵は、あと何個？

女神の皮を被つた悪魔と人の振りした悪魔達に明日の課題に使う卵を確保しろと言われて一時間。

現在俺は生徒達が翌日の課題の練習の為に使用しているリゾート内にいくつもある調理場をひとつずつ訪れていた。

恐らく俺に仕事を押し付けた連中はこっちが馬鹿正直に卵を取りに行くとでも思っている事だろう。確かに、かつて試験する側では無くされる側としてここにいた榊奴操なら少しでもより良い食材を手にするべく養鶏場に突撃くらいはしていただろう。

だが、今の俺にはそんな事をしなくて新鮮な卵を手に入れられる方法がある。

そう、コネと伝手である。

十傑時代の職権を乱用してここいら周辺の食材の生産者達とは友好を極めている。特に鶏卵界の重鎮である徳蔵氏とは「徳ちゃん」「操つち」の愛称で呼び合っている世代を超えた親友だ。殺氣はある言つたが、今持てる生産者ネットワークを駆使すれば卵の千や二千を朝までに集めるなどわけじやない。

寧ろ問題はこっちである。

「ああくそ！ なんも思いつかねえ！」

「もう時間が無いぞ！ どうすればいいんだアア！！」

調理場に入ると殆ど毎回と言つていいほど聞こえてくる叫び声。

シャペル先生は良く、「怒号よりももつと激しい焦燥の嵐の中」と例えるが焦燥以前の問題だと思う。何か考えようにも時間が無さ過ぎて逆に何も手に付かないのだ。疲労が限界にきているのにも拘らず寝るに寝られない状況もまた彼らを追い詰めている。結果、彼らに残されたのは行き場の無いその想いを言葉にして叫ぶ事だけ。

そして勿論、その間にも時間と卵はどんどん消費されていく。

眠気と焦りで卵を割り損ねた様子を見ながら俺自身も「大丈夫。アレは練習用。本番に使うモノじやない。大丈夫」と呪文を唱える。

どうしてこんな見回りをしているかと言うと、生徒達がどんなもの

を作るかあらかじめ把握しておくためだ。口を出すつもりは微塵もないが、例外もある。

先程、堂島さんは確かにテーマを卵料理だと言つた。だが、それを鶏卵とは限定していない。つまり、ルール上は卵がメインならばどんな料理でも構わないのだ。この抜け道は昔からあつて毎年少數だが他の生徒とは一線を画すセンスの料理が飛び出てくるらしい。

今回もうずらの卵や百歩譲つてダチョウの卵ならまだいい、だがありえないとは思うがカエルの卵やらワニの卵やらを使おうとする生徒が出てくる可能性も僅かばかりだが有る。と言うか実際にやつた奴がいるというのだからつくづくこの学園は規格外だと思い知られる。しかもそれが今や十傑の第二席だ。当時の食材調達係は相当胃の痛い思いをした事だろう。

そんな生徒が居ませんようにと願うのが半分。いたりいたでその時は作つたレシピを見せてもらいたいなと言う邪念が半分。そして探し回つてゐる内に見覚えのある顔と再会した。

「やあ、美作くん。さつきぶりかな？」

「いや、数分ぶりだぜ、センパイ」

美作昂。

特徴的なドレッドヘアと高校生離れした巨躯からは想像出来ないほどに纖細な料理を作る生徒だ。最も、彼の特徴はそこでは無いのだが、今はまあいい。

「こんな所でどうしたんだい？ 明日の課題的に寝るには早い時間だと思うけど

「アンタの基準だとそうかもなア。でも、生憎俺の個性^{スタイル}じやあ厨房に籠りっぱなしって訳にもいかないんでねエ」

「そうか、そうか。それで、その恰好は何かな？」

実はこの合宿で彼を見かけたのはこれが初めてではない。さつきの明日の課題説明の場でも目が合つたし、他の課題でも彼の料理を何度か食べる機会はあつた。でも、それ以外で自分から話しかけるのはこれが初めてだ。ヒトには一人一人趣味があり、料理人にはそれぞれの個性^{スタイル}がある。他人が不用意にそのテリトリリーに入つて邪魔するの

はあまり褒められた事では無い。ましてや今自分は一時的とはいえる。彼らを教え導く立場。邪魔をするなど言語道断だろう。

その上で、今回はあえて声を掛けさせてもらつたわけだが、

「ああ、これか？ 何事も入るなら格好からつてよく言うだろ？」

「ああ、言うよ？ 僕も潜入の時とかよくそうするけど、さ。だからつてそれは無いだろう……」

俺が声を掛けざるを得なかつた理由。それは彼の服装だった。

見ようによつてはボディビルダーや今回の合宿でお世話になつた運動部の一因にも見えなくも無い体付きの彼の身に纏つているのは女物の浴衣。明らかにサイズのあつていないそれの下はまさかノーパンぢやないだらうな？ 流石にそういう作法はいらないぞ。

と、言うか普通に犯罪だろこれ。ホテル側も何かしだしてんだよ。ちよつとガタイのいい女の子つてレベルじやねえよ！

「何かおかしなところがあつたか？ 着付けか？ 一応ビデオと上手練習したんだが……」

「知らねえよ！ 後、帯はもうちょい下で止めなさい。見えちやうから、色々見えちやうから！」

彼の個性について俺からとやかく言う事は基本的にはない。

どんな理由であれ、どんなやり方であれ、この学園で最も重要なのは誰よりもおいしい料理を作ること。究極の一皿に辿り着くための道は決して一つじやない。だから、俺は彼のやり方を否定しない。

だが、これだけは言わせてもらおう。

「こんな時間に出歩くのとその恰好を見るに、狙いはえりなちゃんかアリスちゃんあたりかな？ いや、確かアリスちゃんのアレは仕込みに少し時間のかかるものだつたはずだから、えりなちゃんか」「……どうかな。案外、アンタの知らない人間かも知れないぜ」

「まあ、それならそれでそんな逸材が居ると言う事を知れて俺的には満足だけど……一つだけ忠告としていてやる。彼女に手を出すのは止める。これは君の為でもある。今の君の実力じやあ、彼女に勝つ事は出来ない」

「それくらいは俺でもわかつてゐつもりだぜ？ まともにやつたら勝

ち目のない事くらい、情報を集めている内に気付くさ。——でもなア！」

美作昂の雰囲気が変わる。

身を潜めていた狩人から獰猛な猛獸の様に、獲物を食い殺す寸前と言つたその表情には自分が負けるとは微塵も思つちやいない強者の余裕ともいえるものがあつた。

「今回の課題はそうじゃねえ！ 別に食戟でどちらかが優れているか決める訳じやねえんだよ、センパイ！ 僕はただあの女より少し魅力的に見える料理を客の前に出せばいいだけだ！ それだけで僕は勝つ事が出来る！ これまでの課題のようになア！」

そう、それこそが彼の得意とする個性^{スタイル}。

相手の目の前で相手よりも優れた料理を繰り出す。たつたそれだけだ。たつたそれだけの事で彼はこれまで多くの食戟を勝ち抜いてきた。そして僕はそれだけの事がどれだけ難しいかと言う事もよく知つてている。

相手の目の前で相手と同じ料理を繰り出して勝つというのはそれだけ難しいのだ。

「確かに、アンタの在学時の戦績は殆どが引き分け同然の勝ちか負けだつたな。ストレートに審査員の票を全て取つて勝つたつて勝負は一度しかない。だが、僕は違う！ 相手の全てを研究し尽くしその手の内をすべて読んだうえで確実に勝つ！ レシピしか真似してこなかつたアンタとは違うんだよオ！」

「大した自信だな。課題前のくじ引きでえりなちゃんと違う会場になる自信があるのか？」

「ククク、どうだかな……。ただ、別に僕の相手は薙切えりなだけじゃないんでね。その時はその時さ」

恐らくどちらも本当の事だろう。

彼にはえりなちゃんと同じ会場になるという確信がある。それと同時に万が一にも外れた時の保険として複数の人物に当てを付けている。

一応、くじ引きと言うのにはいくつか勝筋があるので、一番簡単

なのはやはり運営側の買収だろう。いち高校生にそんな事が出来るとは思えないがその裏にいる相手によつては可能性はある。

そして残念な事にそう言つた事が得意な後輩を俺は一人知つている。

「叢山くんの差し金か。今の十傑でこういう根回しをするのは彼しかいない」

叢山枝津也。

現遠月十傑評議会の第九席にいる彼ならばその権力と人脈を使って、合宿内の会場の振り分けに手を加える事は可能だ。そして、彼は美作のような人間を使う事に長けている。

「よくわかつてんじゃねえか。あの男は難切えりなのが目障りらしくてな。色々他にも動いてるらしいぜ？」本来ならまだ俺が動く時じやねえんだが、丁度良い課題だしな。この年で十傑になつた天才がこの程度の課題で失格になるつて場面を想像するだけで笑えて来るだろう？」

「ああ、笑えるね。本当に笑わせてくれる。君達は彼女がその程度でその膝を穢すとでも思つてゐるのかい？　あまり、舐めない方がいい。難切えりなは天才だ。多くの天才をしてきた俺が保証する。今の君程度がどうにかできる相手じやない」

「ッ！　そうかい！　まあ、いいさ。どの道アンタには何も出来ない。もう遠月の人間じやねえアンタじやどうする事も出来ねえのさ！」

精々目の前でその天才が負ける様を見ていろよ、センパイ」

その言葉は確信を付いていた。どうしようもないほどに。

今の自分は遠月の学生ではない。それどころかこの学園の関係者でも無い。今ここにいるのは偶々この合宿の講師の一人として潜り込めたからであり、本来ならこの場にいる事すらできない人間なのだ。もう、あの頃とは何もかもが違う。好き勝手に暴れて、事態を有耶無耶にして誤魔化す事は出来ない。

遠ざかる美作昂の背中を見ながら、その事実を改めて実感する。

ああは言つていたが、彼がえりなちゃんと勝つ確率は極めて低いだろう。それは本人もよく理解しているはず。その上での男は挑も

うとしている。嘗ての自分の様に、勝ち目の薄い相手に向かつてワザと戦いを挑んでいる。そこに十傑である叡山枝津也の考えは恐らく関係ない。その証拠に彼はこの数日、えりなちゃん以外の複数名に対して勝負を挑んでいる。最初から命令通りえりなちゃんの権威を失墜させることが目的ならば、他の課題は独力でも十分に突破できるというのに。

以前、知り合いに中等部に俺とよく似た事をしている人間がいると言われたことがある。その時俺はこう答えた。「まるで似てない」と。それは今でも変わっていない。俺と彼とは根本的な所が違います。似ているだなんて間違つても言えない。

でも。

それでも、似ていると言える部分があるとしたらそれは……。
「ああ、クソ！ やっぱりこういうのって余計なおせつかいって言うんだよなあ！！」

携帯を取り出す。

着信は一件。奇しくもそれは今から掛けようと思つていた相手だった。

遠月地獄の宿泊研修四日目。

早朝六時から開始されるこの日の課題は過酷だったこの合宿の中でも最も多くの脱落者を出す事だろう。

『2時間以内に200食』。この遠月リゾートの新しいメニューを考えて審査員である生産者のプロと現場のプロに認められる。それが毎年行われるこの合宿における実質的な最終課題の合格基準だった。

例年よりも優秀な生徒が揃つたと言える今年も例外なくこの課題は行われる。

昨夜の事前説明会では合格基準についての言及は無かつたが、これ

については前年度の記録や講師達の動きを見て、いればいくらでも調べが付く。

『各自料理を出す準備は出来たな？　これより合格条件の説明に入る』

いつものように坊主頭のとてもガタイのいい男が壇上に上がり課題の説明を始める。審査員の紹介に始まり、合格基準の発表。いずれも抜かりは無かつた。問題となつた試験会場についても事前にトレースしていく数名と同じ場所に入れた。その中には雍切れりなの姿もある。後はいつも通りアレンジを一つ加えるだけだ。それだけで相手は試験に落ち、自分は次へと進める。なんて簡単な世界だろう。そう思うと、自然と口元から笑みが零れてくる。

『この課題の合格基準は二つ……生産者のプロと現場のプロ、彼らに認められる発想があるか否か。そして、もう一つは……今から2時間以内に100食達成する事だ!!』

「!?」

「ひや、100食?! ほぼ徹夜の状態で!?

「か……過酷……」

「で、でも、100食ならいけるかも！」

「そ、そうだよな。毎日それくらいの数は作ってるんだ！　今更どうつてことないぜ！」

生徒達の様々な反応。多くの者は驚き、口では過酷と言っているがここまで残ってきた猛者達にとつて100食程度なら決して不可能な数字ではない。

最初の内こそ審査員の貫禄と彼らに認められるという高いハードルに臆していたものの、これまでの合宿で築いてきた自信と寝不足による半ばやけくそ気味のテンションで乗り越えてやろうという熱気が不安を押し込め始めていた。そんな中、他の者達とは違い元々の課題内容を知っていた彼は思う。

「……100食だと？」

事前情報との僅かなズレ。

自分のリサーチが甘かつたのか？　それとも本当に直前になつて

課題内容が変更されたのか。どちらにせよ、まさか増えるでは無く逆に減るとは好都合だ。

初日から感じていた事だが、どうやら今年は随分と甘い合宿のようだ。

そう、壇上の男から次の二言が発せられるまでは本当に思つていった。この学園がそんなに優しいモノであるはずがないというのに。『ああ、これは合格基準とは直接の関係はないのだが……今年は面白い提案をするものが居てな。流石に当初考えていた数でやると合格者が殆どいないと思われたので俺と講師陣の判断で合格数を変えさせてもらつた』

「？」

『何、実戦形式と言つただろう？　ならば、敵役が居なくてはな。といふ訳で入つて来い！』

そう言つて、審査員達が入場してきたのとは反対側の扉が開く。そこにいたのはこの合宿で何度も見た顔ぶれ。その多くは面倒くさそうだつたり、自信満々だつたりと不安など微塵も感じさせない表情だつたが、約1名とても顔色が悪い男が混じつている。

「なあ、あの人達……」

「し、審査員の追加じゃないかしら？　ほ、ほら、なんだかんだ言つて私達もだいぶ残つてるし！　の方々も追加でやる事になつたとか！？」

会場内に再びどよめきが広がる中、彼はふとこの場所に入つてから僅かに感じていた違和感を思い出す。なぜ自分の隣の席は空席なのだろう。それどころかこの会場では一定間隔で誰もいない調理台がある。これが脱落者のモノだとすれば話はわかるが、今年の脱落者はせいぜい50人ほど。全体が約1000人ほどだから20人に1人分空席があればいい。それ以外はつめるか会場をいつその事まとめてしまつた方が審査する側としては好都合なはず。それなのに空席はまるで規則性もあるかのように等間隔で存在している。

額に嫌な汗が流れる。まるで、自分が罠に掛かつたような感覺。多くの者の期待とは反対に彼らは空席に吸い込まれるかのように

迷う事無く進んでいく。

『さて、改めて今回の課題だがこの遠月リゾートの新しい朝食メニューを考えてもらう。その為には既存のメニューも必要だと思つてな。用意させてもらつた。彼らに関しては気にしないでくれ、どのみちこの先この遠月を生き残つていくためにはこの程度の障害は乗り越えなければならないからな！』

そうして、全員が席に着き課題が開始される。

彼の隣にも当然、新たに席に着いた男が一人。見憶えの有り過ぎる顔だ。この数日後を付け回したが未だにその実態を掴みきれてはいない謎多き男。それでいて、美作のいる試験会場に尽く現れ本来なら落第していたはずのトレース元を様々な手を使つて救つてきたお人好し。この男が居なければ少なくとも今年の脱落者は全体の半数に上つていた事だろう。

そんな男が今、自分の目の前にいる。相変わらず訳が分からぬ。

「やあ、美作くん。また会つたね？」

そう言つて、その男は黙々と卵を割り出した。